

龍の背中を追いし竜【更新停止中】

Kurato

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2005年12月、神室町の一青年であった黒瀬竜也は昔からの馴染みである養護施設『ひまわり』からの連絡を受け同じ養護施設育ちである澤村遥を探すよう頼まれ見つけた先に遥と共にいたのは昔、自分のとつての道しるべでもあった『堂島の龍』桐生一馬であった。

龍が如くオリ主二次創作です。ストーリーに沿いに進めていきますのでもし良ければ見ていただけたら幸いです。

現在端末が変わってしまいそれにもない執筆が少し難しくなつてしまったのでその端末に戻るまで更新停止とさせていただきます。申し訳ございません。

目次

龍が如く

1話	神室町に住む竜	1
2話	サイの花屋	4
3話	地下闘技場での死闘	7
4話	秋山駿	14
5話	決着そして	23
6話	喧嘩葬儀	36
7話	運命の出会い	44
8話	母親探し	48
9話	協力	59
10話	嶋野の狂犬	71
11話	竜VS錦鯉	80
12話	父と子	87
13話	父と子	95
14話	遙の気持ち	106
15話	十年ぶりの対談	120
16話	カラーギャング	126
17話	準備 潜入	143
18話	奪還	151
19話	龍の怒り	157
20話	ニンベン師	166
21話	狂犬の本領	175
22話	真相	186
23話	四代目	198

24話	闘いの果て	211
龍が如く2		
龍と般若と死神		228
25話	近江連合	242
26話	力の無い人形	248
27話	蒼天堀	258
28話	近江連合の闇	270
29話	脱出	280
30話	近江四天王	290
31話	東京帰還そして	302
32話	トーナメント	313
33話	修羅	321
36話	過去と2人目	327
37話	身代わり	338

龍が如く

1話 神室町に住む竜

小さい頃一度だけ見たあのデカイ背中

あの背中に少しでも近づけるように眠らない町を歩いていく

眠らない町神室町

この町は自由だ。明らかに弱そうなやつから金を巻き上げるチンピラ、些細な事ですぐ喧嘩を起す酔っぱらいジジイそして職がなくとも心が暖かいホームレス達どれか一つでも抜けたら他の町と変わらないだろう。

そして俺もまた、この町の住民が作り出す空気が好きでよっぽどの事がない限りここにいます。

ただ、やつぱりこの町はすぐ絡んでくる

「おいおい、何すんだこの野郎。」

竜也「何がだ？」

「何がじゃねえんだよ。今肩が当たったろうがよ。」

竜也「悪かったな。考え事しててな」

「そうかよ、だったら慰謝料寄越せ50万だ。」

やつぱりカツアゲか。だったらもうやる事は決まってる

竜也「金が欲しいなら力づくで取ったら良いだろ。」

「んだと、てめえ今自分で言ったんだからなおい、お前ら袋叩きにしてやれ。」

三人か。特に苦勞することもないな。

竜也「ご託は良いから早くしろ。」

「てめえな、あんまり調子乗ってんじゃねえぞ!!お前らやつちまえ!!」
〈チンピラ三人組〉

さて、まずはどうしたものか。とりあえず右にいた男の顔面に強烈な一撃を食らわせた。

「ギヤアアア!?!鼻がああ!」

どうやら鼻が折れたらしい。避けられない方が悪い喧嘩とはそう

ゆう物だ。そうこう考えてる内に左にいた男が殴りに来たしかし、俺にとつてこの程度のパンチはパンチとは言えない。なぜなら余りにも遅すぎたからだ。もちろん一般人からすれば早いのだろうが、鍛えすぎた俺には鈍すぎるパンチだ。

しかし、ただかわすのではつまらないので、腕を掴んでやった

「何!？」

どうやら掴まれるとは思わなかったらしい。しかし掴んだだけでは終わらない。ついでに投げた

竜也「遅い!!」

そしてそのまま相手は吹っ飛んだ。右にいる男はすでに戦意を喪失しているのもはや戦えるのはリーダー格の男だけだ。

竜也「どうした。まだやるか?」

「うるせえ、てめえみたいな奴にやられたまんまで終われるかよお!!」

そう言う男は懐からナイフを取り出した

竜也「そんなもんか。」

喧嘩において冷静さを欠いた方が負けるそれは俺の今までの経験からだ。実際に今奴はただナイフを振り回してるだけだった。単調で攻撃とも言えない物だった。

しいて言うなら子供のただこねのような物だ。

とはいえ、奴を放つて置くわけにも行かず仕方ないから奴の相手をすることにした。

「死ねええ!!!」

俺は奴のナイフの攻撃モーションをよく見て俺に向かってくるナイフを蹴り飛ばした

「何!？」

そしてそのまま、俺はジャンプして奴の顔面を蹴った。

竜也「喧嘩売るなら、相手を選べ。まあ聞こえてねえだろうがな。」
久しぶりの良い運動になった。

そして俺は行き付けの店赤牛丸に足を運んだ

? 「変わらねえなこの町は」

そう言うとき男は静かに神室町へと足を踏み入れた

2話 サイの花屋

「ありがとうございます。」

赤牛丸で食事をとった俺はついでにいつもの場所に顔を出すことにした。

まずはそのためにコンビニによる必要があるので町のシンボルでもある神室町天下第一通りにあるポツポツ天下第一通りによった。

「いらつしやいませ。」

とりあえず適当にあの人達が好きそうなビール、そしてつまみを選んだ。ちなみに俺はまだ18だが180を越えている身長だからか、特に怪しまれない。

「ありがとうございます。」

これだけあれば足りるだろう。4000円という普通の高校生からすれば、あまり手を出さない値段だが、毎度の如くチンピラどもに絡まれているため金には困らない。

竜也「さて、行くか。」

公園に着いた俺は公園の奥に用事があるのだが、その為にはここにいるホームレスに物をあげる必要がある。

竜也「よう、じいさん。元気か？」

ホームレスA「全くもって今の世界には楽しい事がないからなあ、退屈だ。」

竜也「そう言うなってほれ、これあんたら好きだろ。」

そう言う俺は酒をホームレス達にあげた。

ホームレスB「おお、いつも気がきくのう。」

ホームレスC「あんたが来ると毎回酒が飲めるから嬉しいなあ。」

竜也「そうか。まああんたらの為になってるんだったら嬉しいぜ。

花屋は奥か?。」

ホームレスA「ああそうだぜ。」

竜也「サンキュー、じゃあ行ってくるわ。」

そう言う俺は中に入って行った。

中に入るとそこはホームレスだらけだ。

？「あ、大分久しぶりに来たな黒瀬。」

竜也「ああ、そうかもな、ほれ酒だぜ。」

？「ああありがとう。」

この人は秋山駿。昔は大手銀行会社に勤めてたらしいが、本人曰く同僚に嵌められたらしい。しかし、今はこのホームレスの生活でも満足してゐるらしく変な事を言うのは野暮と言う物だ。

秋山「しかし、ここら辺の連中も替わってきたな。」

酒を飲みながら秋山が言ってきた。

竜也「そうかもな。でもそれって落ち込む人もいるけど、起き上がった人もいるって事だろ。俺はそれを誇るべきだと思っただけだ。」
実際、ここ数年で多くの俺が知ってるホームレス達はどんどんいなくなっていく。しかしそれと同時にまた新しいホームレスが来ている。

竜也「そろそろ俺、花屋の所に行ってくるわ。」

秋山「そっか。じゃあな。」

俺は秋山と別れると、廃駅となった所へ足を踏み入れた。

しかし、そこは豪華絢爛な、素晴らしい裏カジノなどが広がっていた。しかし今日の俺はそんなのをするためにここに来た訳ではない。
一番奥にある龍が出てくるかのような派手な門の先に今日の俺の目当ての人がいるのだ。

竜也「花屋いるんだろ。」

？「お前が来るのは、お前がポツポに寄った時から分かっていた。」
俺の目の前にいる少し太ったふくよかな男これがサイの花屋だ。

サイの花屋は、自分が仕切っているホームレス達や各地所々にあるカメラで色々な人の情報を手に入れる。そしてそれを高額な金で売ってる男だ。

俺がこいつと出会ったのは、少し理由があるのだが、そこは省く。

竜也「どうだ、最近は何かあったか？」

花屋「全然だ。特にこれといって大事なのも…」

そこまで言うのと花屋は突然こちらを向き真剣な表情で話した。

花屋「ああそういえば、大ニユースがあるぞ。」

竜也「何だ？」

花屋「こいつは簡単に話す訳にはいかねえな。」

はあ、またこのパターンか。俺は少し気を落としながら話した。

竜也「また、地下闘技場か？」

花屋「ああそうだ。ちやんと全戦全勝だぞ。」

竜也「そこまですげえネタなのか？」

俺は驚いた、なぜならあの地下闘技場で全て勝たないと教えないネ
ただと言うからだ。

花屋「ああ、ネタの凄さは俺が保証する。」

竜也「わかったよ。要は勝てば良いんだろ。」

花屋「話が早くて助かる。」

そして、俺と花屋は地下闘技場へ歩き出した

3話 地下闘技場での死闘

地下闘技場 それは、サイの花屋が悪趣味な金持ち共の為に作った金を賭けるデスマッチリングだ。金に困ってる奴らを見つけては、こうして地下闘技場に出させて闘わせる訳だ。

ちなみに俺は4〜5回出てるが、それは全て情報が欲しい為であつて金の為では無い。それに花屋は俺を金目的では出さないつもりらしい。花屋曰く『お前を出したら試合全てが瞬殺で終わってしまうから出すにせせん。』との事らしい。まあ俺は金目的でこんな所には出ないが。

花屋「難しい顔をしてどうした。止めるなら今の内だぞ。」

竜也「うるせえよ。だいたい止めたらお前言わないだろ?」

花屋「まあそうだな。後、オツズの話だが。」

竜也「ああ、そういうのいいわ。汚ねえ金持ち共が俺にどの位賭けたとか、俺はあいつらの金の為に闘う訳じゃねえし。」

花屋「ふつ、そうか。じゃあネタの話だな。2つあるが、1つだけなら全部勝たなくても良いぞ。」

竜也「ふーん。まあどうせなら全部勝ってやるよ。」

花屋「そうか。ならば行ってこい。」

竜也「おう。行ってくるわ。」

司会「レディース&ジャントルメンさあ今回もこの時間がやって来ました。さて、ではまず今回の試合のルール説明と参りましょう。今回は我らが花屋様が直々に開催した試合でございます。それに伴い武器及び防具は全て禁止まさしく完全殴りあいとなります。」

なるほど。確かに相手が武器を取り出したら俺が加減出来るともわかんねえしな。

司会「それでは、選手のご紹介です。まずは今まで病院送りにした選手の数は数知れず。全ては自分の心の奥で眠ってる闘争本能の為に相田俊介!!!」

相田「う!!!さあ今日俺様の餌食になるのはどこのどいつだあ」

うるせえ奴だな。でもまあ普通の奴からすれば強えな。

司会「さて、皆さんこの選手を覚えていますでしょうか？僅か4回しか出ていませんがそれら全てが圧倒的な力でねじ伏せた伝説の漢黒瀬竜也!!!」

さて、行くか。

金持ちA「待ってたぞお！黒瀬竜也!!俺はお前に10万賭けてんだからなあ絶対勝てよ。」

うるせえな。たたくいつもだつたら殴りにいつてる所だ。やっぱりこう見ると多くの人間がいるな。

ん？あいつは？

相田「おい、早くしろよ。腰抜け野郎!!」

竜也「ああ、んだとこの野郎。」

まあいい。あいつの事はまた後だ。

司会「さあそれではいぎゴングです!!」

〈相田俊介〉

相田「うおおお！行くぞおお黒瀬!!」

奴は体格の割には素早い動きだった。ただしかし俺よりは少し遅い。

竜也「遅いぜ。」

相田「それはどうかな。」

竜也「何!?!」

そう言うとな奴はいきなり背後にいる俺に物凄い回し蹴りを放って来た。

竜也「つく!?!ぎけんなくぞが!!」

相田「どうした、おいお前そんなもんかよ。退屈しのぎにもなんねえよ。」

そんなやりとりの間にも奴は凄まじい足技を放っている。

気を抜けばすぐに吹っ飛ばされてしまう。

良いだろう奴の主技が足ならば俺が狙うのは腕だ。

相田「死ねえええ!!!」

竜也「そこだ。オラァァ!」

奴が足を振り上げた瞬間に肩に隙が出てるのを見た俺は奴の足技も遅いと感じるスピードで肩を蹴った。

バキツ!!

しかし、それで引く奴ではない。間違いなく骨にひびが入ったはずだが、その状態で俺の顔面に蹴りを入れて来た。

相田「ちっ、骨が。」

竜也「何て野郎だ。骨を折るつもりで蹴ったのに。」

硬い男だな。ならこっちだ。今までスピードとパワーを均等に分けていた力をパワーに全て込める

ライフルスタイル スピードは全くといっていいほど無いが、だがパワーはさっきの比ではない。

奴もライフルスタイルの怖さに気づいたのか。さっきまで直ぐそばにいたのにすぐさま避難した。

相田「何だ？そいつは？」

竜也「ふっ、何だろうな喰らえば分かるぜ。」

相田「誰が喰らうか。」

奴は俺の直ぐ後ろに回ったライフルスタイルの俺は後ろを向くのにも時間がかかる為そこで気合いを入れた。

竜也「はあ!!」

相田「オラアア！何!？」

奴は今全力で俺の腹を蹴ったはずだが、俺のライフルスタイルは防御も凄まじく高い為まともに喰らわない。

そして、その隙に後ろを振り向いた俺は奴の腕を掴み肩を外し全力で殴った。

ゴキツ!!ドゴツ!!

相田「ぐあああ!!!」

竜也「オラ、オラオラオラアア！」

形勢逆転。ここまで来ると奴に反撃する暇も無いはずだが、凄まじい膝蹴りが飛んで来た。

相田「負けるかよお!!」

竜也「ぐっ、何て威力だ。」

ライフルスタイルでさえ、まともに喰らうこの威力ベーススタイルで戦っていたら負けている。

竜也「おい、相田」

相田「何だよ。」

竜也「お互いもうギリギリだ。次で終わりにしようぜ。」

相田「ああ、良いだろう。恨みは無した。」

次の一撃で決まる。そう感じた俺はスタイルをベースに戻し気合を入れ直した。

くく相田視点くく

ふう、まさかこの俺がここまで追い詰められるとはな。

俺はあの人以外に負けないと決めたはずなのにまあいい。どっちにしろもうあまり戦えない。ならば一撃全力で打つだけだ。

相田「行くぞお!!!黒瀬!!!」

くく竜也視点くく

相田「行くぞお!!!黒瀬!!!」

竜也「来いや。相田!!!」

今さら小細工などはいらない。ただ全力でやるだけだ。

互いの足が互いの顔に当たる寸前に俺は周りの景色がスローモーションに見え、相田の隙を見つけ勝機を感じた。

竜也「うおお!!」

奴の蹴りが入る寸前に蹴りを入れた。

それきり相田が立ち上がる事はなかった。

司会「勝者、黒瀬竜也!!!」

竜也「ふう。」

強い相手だった。それにしても相田を蹴る時に感じたあの感じは何だったんだろう？

司会「さあ、それでは二回戦の選手の紹介です。毎回毎回懲りずに対戦相手の辛い所に攻撃を入れ挙げ句の果てには人を殺した事があるとか無いとか内藤大地!!!」

内藤「ヒヨヒヨヒヨ貴方が今回私の相手ですか。」

うん。こいつと話す気は無いから話さんが、皆さんには言つとく

わ。こいつ普通にメリケン着けてる。もちろん保護色で隠してるけどさ。花屋の野郎この試合終わったら覚えとけよ。

俺はチラッと花屋の方を見ると、呑気にシャンパン飲んでやがった。うん、絶対殴る。

司会「それでは参りましょう。二回戦スタートです!!!」

〈内藤大地〉

ゴングがなると同時に内藤は俺に殴りかかって来た。

まあ普通に避けるよねうん。

そして、そのまま殴った。小手調べだ。

はぁーやる気無くすわ。こいつ全身にプロテクター着けてやがる。もちろんライフルスタイルなら一撃でこんな柔なプロテクター壊せるが、ライフルスタイルは使わない。

何故かと言うと、ライフルスタイルは体への反動が半端無いから。

内藤「逃げてばかりでは勝てませんよ。ヒョヒョヒョ。」

竜也「言われなくてももう逃げねーよ。」

内藤「ふっ、そんなに逃げて僕が怖いのかと思いましたよ。ヒョヒョヒョ。」

うん。思ったよ。何処ぞの宇宙の帝王みたいなしやべり方してたら怖いよ。そりゃ。

体はダルいわ。こいつはめんどくさい。はぁーどっかに楽しい事無いかなあー(現実逃避)

さ、少しは落ち着いた所でやりますか。

こいつにベースのままじゃ勝てない。ならスピードで圧倒してやる。

マシンガンスタイル さっきのライフルスタイルがパワーでこちららスピードだ。それこそ全力を出せばさっきの相田の5倍は出せる。

内藤「おや、何ですかねえそれは。」

竜也「ん？お前を倒すための力だよ。」

内藤「おやおや、この私をたお、ぶは!?!」

話が長いから顔面に叩き込んだ。

そして奴の反撃が来る前にスウェイで回避。そして隙ができて、俺が殴る。もうこの流れの繰り返しだ。

もう、内藤の奴が気絶寸前なので、終わらせてやる事にした。

奴から離れ、足に力を込めて、内藤に急接近そしてそのまま奴の顔面を力の限り殴った。内藤は吹っ飛びリングの有利鉄線に当たった。

司会「え、しょ、勝者黒瀬竜也!!」

皆がぼけっとしてる時にいきなり花屋が自分に注意を向けさせた。何だろ？

花屋「えー、三回戦の前に二連勝してる黒瀬竜也の為に、15分間の休憩を挟む。」

おお、それは嬉しい。あいつも結構良いところあるな。

あ、でもあいつ武器着けてる奴普通に採用したんだよな。まあ殴るのは止めとこう。

そしてそのまま俺は一回リングから出てった。

ちなみに出るときにスゲー観客の金持ち共がうるさかったのは別の話。

そして、控え室に入ると花屋からの手紙とスタミナミンスパークが置いてあった。

飲みながら俺は、手紙を読んだ。

花屋『お疲れ様だったな。まあまだ終わって無いが、じゃあ一つだけ、情報を教えてやろう。それは東城会にある組の金の金100億が盗まれた。そして、それとついでに東城会3代目組長が死んだ。詳しい話は後だ。三回戦の敵は強いぞ。』

なるほど、ってことは東城会の連中は血眼になって探してる訳か。大方、3代目の側近の奴らが見つけた奴を4代目にするとも言ったんだろう。まあどっちにしる俺にとってあまり関係なかったな。

コンコン

扉のノックの音が鳴った。

竜也「どうぞ。」

? 「失礼します。あの、覚えてる?」

竜也「やっぱりお前だったか。」

くく？視点くく

？「とにかく今の東城会はヤバいんです。それにあの人もあそこま
で変わってしまうともうどうしようもないです。」

？「だとしても、俺は自分で見てくるさ。今、ここら辺がどうなっ
てるかな。」

？「分かりました。気を着けて。」

4話 秋山駿

竜也「今まで何処にいたんだ？」

？「ちよつと色々あつて。」

竜也「そうか。でも、本当に久しぶりだな心愛。4年ぶりくらいか？」

心愛「もうそんな経つたんだ。私も竜也くんにあえて嬉しい。」

南心愛。俺の小学生時代からの友人で、小中学と同じ学校で生活していた。ところが、心愛の親父さんの都合で、東京に行くとは聞いていたが、まさか神室町とは。

心愛「竜也くんこそ、どうしてここに？」

竜也「俺はまあちよつとな。」

心愛「竜也くん、あんな凄そうな人達に勝つなんて凄いね。」

竜也「そんな事ねえよ。一回戦のあいつにあそこまで苦戦させられる何て思つてなかつたからな。」

心愛「ううん、竜也くんは強いよ。竜也くん以外の人は勝てなかつたはずだよ。」

竜也「だと、良いけどな。」

無言が続いた。気まずい。何か、話題を振らなくては。

しかし、悲しい事に喧嘩に明け暮れた俺には女子相手に振る話など何一つ無い。

仕方ないので、相手から話が来るのを待つことにした。

〃〃心愛視点〃〃

どうしよう。せつかく竜也くんがそこにいるのに、何も話せないなんて、あの時竜也くんを見つけた瞬間に勇気を出して話しかける事にしたのに。昔と何も変わって無いや。

いや、話すつて決めたんだから話さなきや南心愛。目の前にあなたの思い人がいるんだからその気持ちを正直に伝えるのよ。

〃〃竜也視点〃〃

何も起きない。やっぱり俺が話した方が良いんだろうか？

今の時代はオラオラ系男子が良いって聞いた事もあるしな。

よし。行くぞ。

二人「あのさ。」

ん!?今、心愛が何か言ってきたよな。

竜也「どうした? いいぜ。先言って。」

心愛「え? いや、良いよ。竜也くんからで。」

竜也「レディーファーストって言葉があるだろ。」

心愛「わ、分かったよ。あのね、今度一緒に神室町回ろう。」

竜也「え?俺と一緒に?」

くく心愛視点くく

や、やっちゃったああ!!! どうしよう!? どうしよう!?

どうして、好きですって言おうとしたら、こんな言葉で出て来ちゃったの。竜也くんに変な女って思われたかも。

い、今からでも好きですって言おうかな。でもそんな事云ったら、竜也くんがどう思うんだろ。

竜也「いや、まあ俺で良いなら良いよ。」

え?いま、竜也くん何て言った?

竜也「心愛?それともやっぱり止めるか?」

心愛「ううん!止めない止めない絶対行こうね。」

これってもしかかしくなくても、デートだよね。
やったああ!!!嬉しくて、涙出そう。

くく竜也視点くく

ま、まさか心愛からそんな話になるなんて、ま、まあそれで心愛が喜ぶならいつか。

それにしても、どこに行こうかな。バスン辺りとか、そこらでいいかな。

心愛「竜也くん?どうしたの?」

竜也「ん!?あ、いや別に何でも無いよ。」

心愛「それで、竜也くんの話って?」

竜也「あ、ああえっと。」

やべえ、何言おう。さつきはノリで話かけちゃったしな。

これで何も言わないと頭おかしい奴だと思われるかもしんねーか

んな。どうすつかな。

くく心愛視点くく

な、何で竜也くん何も言わないんだろう。もしかして、言いづらい事なのかな。

ま、まあ私はさっきのだけでもう十分なんだけど。

心愛「竜也くん言いづらい事なら、無理に言わなくても良いよ。」

私は竜也くんを気遣ってそう言った。

くく竜也視点くく

うーむ困った。何が困るって心愛を気遣わせてることだ。

俺はやっぱり漢を目指してるからには女に気遣わせたらダメだ。やっぱり自分で決めるんだ。

竜也「悪い心愛。あのさ三回戦が終わったら言うことにするよ。」

心愛「うん。分かった。じゃあ頑張ってるね。」

竜也「ああ。そうだ。聞こうと思ってただけだよ。」

心愛「何？竜也くん？」

竜也「お前の親父さんってどんな仕事してんだ？確か前一回見たときは凄い優しそうな人だったよな。」

心愛「う、うんまあね。」

作り笑いだ。さっきまでの心愛の笑顔とは違う。何か、言いづらい事があるはずだが、それは聞いてはいけない気がする。

心愛「あのさ、竜也くん。私、竜也くんに言わなきゃいけない事が」
ドンドン ノックの音だ。

「竜也さん。準備が整いました。いつでもどうぞ。」

竜也「分かった。」

心愛「じゃあ頑張ってるね。」

竜也「お、おいさっきの話は？」

心愛「ごめん。竜也くん気にしないで。」

竜也「辛くなったら言えよ。」

心愛「うん。ありがとう。」

俺は右手を上げて心愛に手をふった。

しばらく一人にしていた方が良いと思い、近くにいた人に入口の前

に立ってもらった（もちろん信頼出来そうな女性）

くく心愛視点くく

心愛「竜也くんってば優しすぎるよ。可笑しいな、涙が止まんない。」

プルルル

あの人だと分かった。出たくないでも竜也くんに心配はかけられない。

心愛「もしもし。」

? 「今、何処だ? 勝手に離れるなど前から言ってるだろ!!」

心愛「ご、ごめんなさい。すぐ戻るから。」

? 「早くしてくれ。」

そう言うと彼は電話を切った。

私は部屋に書き置きを書いてそのまま出てった。

くく? 視点くく

花屋「久しぶりに出る気分はどうだ?」

? 「まあ、相手が相手だから、あまり気分は乗らないな。」

花屋「そうか。でも、気を抜いて勝てるほど甘くないぞ。」

? 「ああ。その点は抜かりは無いよ。全力であいつを倒すさ。」

花屋「さあ、そろそろ呼ばれるぞ。行ってこい秋山。」

司会「…秋山駿!!!」

ふう、行きますか!ね。

くくちよつと時間は戻って竜也視点くく

泣いている心愛を後にして、俺は闘技場のリングに立っていた。誰が来ても勝てる気がしている。

竜也「さーてどんな奴が来るのかな。」

こんな状況下でも楽しんでる自分をちよつと責めつつ相手を待った。

司会「さあ、いよいよ三回戦のスタートです。ですが、その前に選手の手紹介です。普段はこの上の公園でくつろいでいるが、前に一回花屋様に呼ばれた時はそれこそ、竜也選手よりも早いスピードで終わらせた。まさに生きる伝説 秋山駿!!!」

な、何!?!秋山だと。あいつそんな強い奴だったのか。そんな事を考えてる内に秋山はリングに入ってきた。

秋山「よっ、花屋に呼ばれてなお前を倒せば、酒と金が大量に貰えるらしいからな。まあ悪く思うな。」

竜也「おいおい、秋山お前俺を倒せるとでも?」

秋山「ああ。お前まだ弱いよ。少なくともこの神室町で喧嘩するなら、ヒート位は、いつでも出せない。」

竜也「ヒート?何だそれ?」

秋山「さあな、そろそろやるぞ。」

司会「それでは、ゴングです!」

〈秋山駿〉

ゴングがなると同時に俺は秋山を殴るつもりでいた。

でも、動く事が出来なかった。秋山の強烈な殺気に当てられたからだ。

秋山「おい、何ぼっとしてんだ。」

竜也「な!?!」

気が付けば秋山は俺の直ぐ目の前にいた。

俺は咄嗟にガードしたが、秋山はそれも知ってたかのようにガードを崩し攻撃してきた。

ドカツ!!!

竜也「ぐはっ。こんの野郎!!」

俺は奴にリングの端まで飛ばされた。反撃するべく、奴の所に行くこととしたが。

竜也「何処だ?」

奴は既に居なかった。

秋山「遅いな。」

奴は俺の知らない内に後ろに回り、背中を何度も蹴りつけられた。

竜也「ぐっ。」

秋山「弱いな。黒瀬。」

奴はわざと俺の前に立った。攻撃して来いといわんばかりに
竜也「オラァ!」

秋山「つく。攻撃力はあるな。」

竜也「当たんなきや意味ないだろうが！」
簡単に避けやがって。

ならこつちだ。スピードに集中させる

秋山「マシンガンスタイルか。なら俺も本気でやるか。」

そう言うのと、秋山は体から青い炎を出した。

竜也「何だよ。それ？」

秋山「これが、さつき言ってたヒートだ。さあやるか。」

秋山のヒートと言われる物は正直まだ良く分からないが、まだ少しは、闘えるはずだ。

くく秋山視点くく

マシンガンスタイル さつきの試合の映像を見たが、特に凄いとは感じられなかった。

竜也には恩があるが、それとこれは別だ。それに花屋にも頼まれてる事があるしな。

向かってくる竜也に向かって顔面に3発、肩に4発叩き込んだ。その反動を利用して蹴りを入れて来たのはいいがやはりパワーがない。

秋山「どうした？竜也！そんなものか？」

竜也に足を掛けて仰向けにさせて、頭に膝蹴りを入れた。

ガン!!!

追い討ちの極!!!!!!
終わりだな。!!!!!!

俺はここまでにして、花屋の所に戻るつもりだった。後ろからの殺気に気づかなければ。

竜也「オラア!!!」

ドコツ!!!

秋山「ぐはっ。」

腹に強烈なのを喰らって、膝をついた俺は竜也から目を離してしまった。

裏拳、掌底、鉄槌最後にだめ押しといわんばかりの正拳。

怒涛のラッシュを喰らった俺は少し弱めの蹴りを放つ事しか出来

なかったが、竜也もボロボロらしく、今ので吹っ飛んだ。

竜也「はあ…はあ…オラア!!!」

秋山「とりや!!!」

俺のが早く竜也に叩き込めた。

秋山「はあ…はあ…もう限界だろ。どうしてそこまで闘う?もうこれ以上やった所で意味なんかないだろ。」

くく竜也視点くく

意味なんか無いか。確かにそうかもしれない。

俺の頭の中にはもう花屋から貰える情報何てどうでも良いのかもしれない。

ただ

『頑張つてね。竜ちゃん。』

竜也「守りたいって思った奴が居るからだ。」

秋山「なるほどな。守りたい奴か。今、ここに居るのか?」

竜也「さあな、でも俺の大事な者を思い出せたおかげでスッキリした。」

ドンッ!

すぐさまにマシンガンスタイルの強みを活かして奴に懐に入り蹴ったが、そう簡単には決まらない。

やっぱりガードが硬いな。でもこの位置ならいける。

竜也「うおお!!!」

ラッシュが入った。この間にも秋山は俺に攻撃をしてくるが、今有利なのは俺には変わらない。

秋山からヒートが出た。

秋山「くそっ!!!」

一瞬の間をつかれ奴は逃げてしまった。

竜也「はあ…はあ…形勢逆転だな。」

秋山「かもな。でも、負けるとは言っていないぜ。」

右、左、そして上からの踵落とし全てギリギリでガードする事ができた。

無駄の無い右の蹴りを避け右アッパーを決めた。

俺は終わらせるべく、まだフラフラの秋山に向かってドロップキックを放った。

竜也「うおおお!!!」

秋山「喰らうかよ!!!」

ドコツ!!!

俺の体の中に浮いている間に力強い蹴りが来た。

肋骨にかなりきたようだが、そんだけで終わる俺ではない。

秋山「はあ：はあ：俺さ、花屋に頼まれてる事が有るんだけどさ。」

竜也「いきなり、何の話だよ。」

秋山「それはさ、お前にヒート覚えさせるっていうの何だけどさ。」

ヒートを覚えさせる？

竜也「待ってくれ。そんな簡単に出せる物なのか？ヒートって。」

秋山「いいや、覚悟がある奴には簡単に出せる。でも、覚悟が無い奴には一生出せない。だから、さつき闘う理由を聞いた訳。でもまあヒートは、出てこないけど。」

覚悟か。 そんなもん

竜也「…んだよ。」

秋山「ん？」

竜也「覚悟何か前から出来てんだよ!!!」

俺の周りから青い炎が出た。

秋山「やつとか。長かったな。」

秋山はため息をついた。

竜也「これがヒート。」

体の中から沸き上がる闘争心。今ならどんな技も出せるはずだ。

秋山「さて、その感覚を忘れるな。もうこれ以上長くやるのも面倒だ。終わらせよう。」

竜也「ああ。」

俺は、若干体勢を低くし、右手を構え

秋山は、腕を交差させ、ガードしながら、右足を曲げながら前に出してきた。

二人「うおおお!!!!!!」
「
お互いのヒートを混ぜた一撃が当たった。

5話 決着そして

くく秋山視点くく

俺のは竜也の顔面に、竜也のは俺の腹に互いの覚悟を乗せて、ぶつ
け合った一撃は案外早く決着を迎えた。

秋山「はあーしんど。」

司会「勝者 秋山駿!!!」

ここまで、ガチに闘ったのはいつぶりだろうな？それより竜也を運
ばなければ。

秋山「重つ、案外こいつ細マッチョだな。」

ちよつと前を向くと、見たことある黒人がこっちに来た。

G・B・ホームズ「モチマスヨ、アキヤマサン。」

秋山「ああ、ありがとう。」

ゲイリー・バスター・ホームズ 花屋にかなり信頼されているか
なり腕の立つ黒人で、前に俺も闘った事があるけど、苦戦したな。(負
けたとは言っていない。)

ホームズ「ソレデハ、ハナヤサマノトコロニ、イキマシヨウ。」

花屋「ご苦労だったな秋山。」

秋山「ほんとだよ。出来る事なら、もう二度と竜也とは、闘いたく
無いね。」

花屋「こいつの性格を忘れた訳じゃあるまい。復活したら、すぐに
また喧嘩を仕掛けて来るぞ。」

秋山「ああ。やだやだ。ヒートを纏う前ですら、こんな強いんだか
ら、ヒートを完全に自分の物にした今の竜也とは絶対に闘わないよ。
俺は。」

花屋「まあ、闘う、闘わないはお前らの自由だからな。俺は止めは
しない。ただ、闘うなら言えよ。だいたい今回の試合のおかげで儲けた
からな。」

秋山「へいへい。で、竜也はどうするの?」

花屋「ああ、そうだなそこら辺にでも、」

竜也「俺はゴミかよ、ったく。」

花屋「ああ、起きたか。気分はどうだ？」

もう起きたのかよ。俺、あの一撃今までで一番上手く決まったと思っただのに、こんな簡単に復活するか普通？やっぱりこいつ化け物だな。

竜也「最悪だよ。俺、負けたんだろ。秋山：さんもう一回。今度こそ勝ちます。だから、俺と勝負しましょう。」

へえ、こいつ敬語使えたんだ。花屋も驚いてるし。まあでも

秋山「わりいな。そう言ってくれるのは、ありがてえけど俺も、お前も全快してねえしな。やるとしたら全快してからだ。」

竜也「そ、そうですか。じゃあまた後日って事で。じゃ、俺修行してきます。」

そう言うと、竜也はここから出ていこうとした。

花屋「おいおい、ここに来た理由を忘れたのか？」

竜也「ん？理由？何かあったか？」

おいおい、竜也の野郎ちゃん脳みそ有るのか？

竜也「秋山さん、今変な事考えてませんか？」

何だこいつ？他人の頭の中でも覗けるのか？しかも、俺にだけ敬語なのな。

花屋「ネタの話だ。」

竜也「あ!!!そう言えばそうだったな。」

こいつ、やっぱ軽いな。

竜也「でも、俺は負けたんだから、聞いちゃダメなんじゃねえの？」

花屋「俺は、あそこまで血が騒いだバトルを見た事が無かったからな。サービスだ。」

へえ、こいつもこいつで良いところ有るじゃない。

秋山「で、どんな話なんだ？」

花屋「ああ、そうだな。ここで話すのもなんだから下で見よう。」

秋山「俺も見て良いの？」

花屋「秋山に見る気があるなら、良いぞ。」

秋山「じゃ、遠慮なく見させて貰えますよっと。」

花屋の部屋にある地下には約1万ものカメラで神室町全体を見れるという物だ。

竜也「ここは？」

花屋「スターダストという店だ。」

聞いた事もない店だ。(まあ最近の神室町を知らないからだろうけど。)こんな店に何か有るのだろうか？

花屋「こいつを見る。」

そう言うと、大きいモニターにホスト風の男2人 ヤクザ風のスキンヘッドとガタイの良い男達がいた。

秋山「こんなの見て、何になるのさ？」

花屋「竜也、お前は一番真ん中にいる男を知ってるはずだ。」

竜也「この人は!?!おい花屋この人、スターダストって店にいるんだな。どこに店があるんだ？」

花屋「落ち着け。急いだ所でこの人に会えるとは限らないだろうが、それにもうこの店は貸し切りにしてるから入れん。」

秋山「あのさ、俺だけこの人知らないんだけど何なのこの人？」

花屋「俺も詳しくは知らんが、名前は確か」

竜也「桐生一馬。」

桐生一馬？誰だそれ？それと竜也の顔が今まで見た中でかなりガチ何だがそんなに尊敬してるのか？

花屋「堂島の龍だっけか？俺は見た事が無いな。」

秋山「俺も花屋と同じ。」

竜也「じゃあこの中で見た事があるのは、俺だけか。」

秋山「あのさ、全然分かんないんだけどどんな人なの？」

竜也「あれは、10年前だから、俺が8歳の時です。」

くく 竜也視点くく

幼い頃から、愛と言える愛を貰って来なかった俺は、両親を信じる事が出来ず、友達の家に入り浸り、その頃から喧嘩ばっかだった俺は、中学生や、高校生何かと常日頃から喧嘩してきた。

今はもう何年も会ってないが、昔は親友と一緒にいた。

伊東広大『おい、竜也さすがに今日の相手は不味く無いか。』

幼い頃の竜也『何でだよ。何てこたあねえ。ただの暴走族じゃねえか。』

広大『でも、噂じゃああいつらはヤクザと繋がってるらしいじゃあねえかよ。』

幼い頃の竜也『関係ねえよ。あいつらがヤクザ出して来た所で不利だと思っただけだ。』

広大『そうか。まあ竜也がそう言うなら止めねえよ。』

竜也『サンキューな。』

広大『止せよ。別に何もしてねえよ。』

暴走族1『逃げ出さずに来たか。』

暴走族2『てめえホントに調子のんじやねえぞ。』

竜也『うるせえよ。早くしろよゴミ共が。』

暴走族3『ああん。なんだこの野郎。アニキお願いします。』

ヤクザ1『こいつか。お前らが言ってたのは。』

そこまで言うと、秋山さんが話を割って来た。

秋山「ち、ちよつと待った。竜也の過去壮絶過ぎない?」

竜也「そうっすか?秋山さんのが、もつと凄い気がしますけど。」

秋山「な訳ねえだろ。さすがに小学生の時から高校生と喧嘩するバカがいるか。普通。」

花屋「俺もここまで凄いやと思っただけだ。」

竜也「まあ、とにかく話を戻します。」

暴走族3『お願いします。ぶっ飛ばして下さい。』

まあ、分かるとうり喧嘩吹っ掛けて来たのは良いけど、ヤクザに頼る事しか出来ない連中だったんすよ。

で、とりあえず普通に闘おうと思った時。

?『何やってんだてめえら。』

あの人が来たんです。

ヤクザ1『き、桐生のアニキ。どうしてここに?』

桐生『シンジに聞いて来たんだ。てめえらもしかしくしくとも、相手はそっちの暴走族の野郎だろうな。元々極道が堅気の喧嘩に足を踏み入れるってのも可笑しいのにましてや、相手が小学生だ？なめてんのかてめえら。』

ヤクザ2『ち、違います。桐生のアニキ、ちよつとした見物ですよ。ま、まさかこんな、喧嘩に加わる訳無いじゃないですか。』

そう言うと、ヤクザ共は暴走族から離れて行った。

暴走族1『ちよつと、アニキ達話が違いますよ!?!』

竜也『早くしろよ。喧嘩すんのか、しねえのか。どっちだよ?』

暴走族達『『す、すいませんでしたああ!!!』』

全速力で暴走族達は帰って行った。

桐生『済まなかったな。こんな喧嘩をさせる前に来られて、良かった。』

竜也『いえ、ありがとうございました。』

俺は、さっきの会話の時点でこの人にはどう足掻いても勝てないとわかっていた。

桐生『それにしても、こんな時間に外に出てるとは感心しねえな。家は何処だ送ろう。』

竜也『いえ、大丈夫です。家に行った所で親父にぶん殴られるので普段から帰りませんし。』

桐生『お前、何かあったのか?』

竜也『まあ少し。』

桐生『そうか。ならお前、孤児院にはいんねえか?』

竜也『孤児院ですか?』

桐生『ああ、そうだ。俺の尊敬してる人が建てた施設だ。俺もそこで育ったんだ。』

竜也『分かりました。俺をそこにに入れて下さい。』

桐生『分かった。ついて来い。てめえらは後で話がある。先に事務所に行ってる。』

ヤクザ1『は、はい。』

桐生『ここだ。』

養護施設ひまわり

? 『桐生、何だそいつは?』

桐生『親っさん、新しくここに入る事になった男です。ええと名前前は。』

竜也『黒瀬竜也です。』

桐生『紹介するぜ。風間新太郎だ。』

竜也『宜しくお願いします。』

風間『そうか。それにしても一馬、どうしてこのガキを見つけて来たんだ?』

桐生『俺の部下共がこいつを叩こうとしたからです。』

風間『何だ?!?おい、今そいつらはどうしてる?』

桐生『取り敢えず事務所に向かわせました。』

竜也『あ、あのヤクザって言うのと、確かエンコ?でしたっけ。そう言うのは、止めて欲しいんですけど。』

桐生『驚いたな。どうして、そんな言葉知ってるんだ?』

まあ、もうその時から色々極道界のあれやこれや知ってたからなんですけどね。

風間『まあ、良いだろ。そいつがしてほしく無いって言うならさせないだけだ。それよりお前の部屋を案内しよう。』

風間『ここがお前の部屋だ。好きに使ってくれて構わない。』

竜也『有り難う御座います。』

? 『こんな所に居たのか。兄弟もいるのか。誰だそいつ?』

桐生『ああ、錦か。竜也紹介しよう、こいつは錦山彰、俺の兄弟分だ。』

錦山『宜しく、今日からここに入るのか。』

竜也『宜しくお願いします。黒瀬竜也です。』

錦山『おう、それよりも親父、堂島組長が呼んでるぜ。』

風間『そうか。分かった直ぐ行こう。とにかくここで過ごしなれ。』

竜也『は、はい。』

そう言うと、3人は出ていこうとしたんですが、俺は桐生さん呼び止めたんです。

竜也『あ、あの桐生さん。』

桐生『何だ？』

竜也『もし、俺が強くなったら桐生さんと闘っても良いですか？』

桐生さんは、少し悩んだ後

桐生『ああ、良いぜ。ただせめて10年後だな。』

竜也『わ、分かりました。ありがとうございます!!!』

錦山『兄弟、早くしろよ。』

桐生『ああ、今行く。』

桐生さんは行ってしまった。その時見た背中はどうなものであったかよかったです。

竜也「まあ、こんな感じですかね。」

俺は秋山さん達に10年前の事を話した。

花屋「ほお、そいつは凄いな。」

秋山「本当だねえ。俺も桐生さんつてのに会いたくなってみたよ。」

竜也「多分、秋山さんと桐生さんだったら良い勝負すると思いますよ。」

俺は、秋山さんと桐生さんが闘ってる所を創造してみた（とは言っても、桐生さんが闘った所を見た事がないが。）

秋山「やだやだ、俺は見るだけだよ。だいたい、竜也が見ただけで尊敬するとか俺以上だろ絶対。」

竜也「そんなもんすかねえ。」

花屋「まあそれは良いだろそれより、お前孤児院で育ったのか？」

竜也「まあな。あの時はいつ桐生さんが来るか毎回楽しみにしてたからな。まあでも結局あの人自分の組の所の組長を殺したらしく捕まったんだけどな。」

秋山「え？ってことはヤバくない？」

竜也「大丈夫ですよ。桐生さんがそんな事する訳無いんで。俺は誰

か、他の人がやったと思ってます。」

秋山「あ、そうなのね。なら安心だわ。」

花屋「まあ、堂島の龍が組長殺したとか、殺してないだとかはどうでもいい。どっちにしる竜也、お前が会えるのは明日か、明後日になるだろうから、取り敢えず今日の所は帰ることだな。」

竜也「じゃあそうさせて、貰うわ。」

秋山「ああ、この服ありがと。返すわ。」

そう言うと、秋山さんは服を脱ごうとしたが

花屋「気にするな。どうせ、お前にあげる為に渡した物だ。まあそんなに返したいと言うなら無理にはあげんが、どうする?」

秋山「今のあそこのにもこんな服は置いてられないしな。取り敢えず、今の所は良いや。」

秋山さんの言うあそことは、ホームレス達の家だ。

もちろん、同じホームレス同士が盗む事はないが、家のスペースを気にしてるのだろう。

花屋「取り敢えず、また今度だな。」

秋山「また、何かあったら言ってくれよな。」

竜也「うす、今日は有り難う御座いました。」

そう言うと、秋山さんと俺は上に、花屋はそのままこの部屋に残った。(おそろく心愛も、もう帰ってる為。)

俺の部屋 とは言ってもただちよつと前に知り合った中国風の女性(確か名前はマキムラマコトだったかな?)から、買った部屋だが、それなりに広い部屋(3LDK)、基本的な家具なら揃ってるこれで月25万で良いのだからかなり激安なはずだ。

竜也「ふう、疲れたなあ。何か色々濃い1日だったなあ。」

でも、後少しすれば桐生さんと闘えるのだからそれもそれで良いかもな。取り敢えず寝るか。

翌日

くく桐生視点くく

ふう、最後にここに来たのは17年前のあの時か。
やっぱりここには、何度来ても慣れるもんじゃねえな。

確かシンジの奴が言うには、『兄貴、良いですか？明日の葬儀には変に裏口から入ろうとするより、正門から堂々として入って来てください。奴らもさすがに少し顔を隠せば、兄貴とは気づかないでしょう。』だったよな。

そして、シンジの言った通り特に怪しまれる様子もなく、受付に来了れた。

受付「本日はお忙しい中有り難う御座います。失礼ですが、名前は？」

名前か。本名を使う訳にはいかんからな。偽名で行こう。

桐生「鈴木太一だ。」

受付「鈴木さんですね。失礼ですが、東城会とのご関係は？」

ふうむ、ここは風間組と言っておいた方が良い気がするが、もしこいつが風間組なら、言う訳には行かない。堂島組にいた事にしよう。

桐生「昔、堂島組にいた。」

受付「堂島組ですか。あそこは桐生一馬が堂島組長撃ち殺して、堂島の龍が噛みついたって一時期ホントに有名でしたよ。」

桐生「そうなのか。」

受付「東城会の大幹部の次は組長が死んでしまいましたからね。今後の東城会は、どうなるか分かりませんよ。」

ふうむ、やはりシンジが言った通り大分変わってしまったてるらしいな。

俺は、シンジの待つ裏口に入ろうとしたが。

運営「ちよ、ちよつと待った。君ここには、腕章がないと入れないよ。」

腕章か。今の俺はそんな物持って無いしな。探せばあるだろうか？

桐生「分かった。済まなかったな。あまりここら辺に来なかったもんで。」

運営「そうか。じゃあ式が始まるまで会場に入っていてください

い。」

中に入ると、運営側らしき男が慌ててるのを見かけた。

桐生「おい、あんたどうしたんだ？」

運営2「実はさつき大事な腕章を落としてしまつてね。あれが無いと、裏口に入れないんだ。確か受付近くの外に落としたはずなんだけどなあ。」

外か。まだ見つかっていなければ落ちているだろう。

桐生「そうか。見つかるといいな。」

俺の一言は聞こえていたのか、聞こえてないのか分からないが、より一層慌て始めた。

俺はそいつを後にして外に出た。

腕章は結構簡単に見つかった。

運営1「また、あんたか。中に入ってきてくださいと言つたでしよう。」

桐生「ああ、済まなかつたな。実は俺も運営側の人間なんだ。これが証拠だ。」

そう言つて腕章を見せると

運営1「何だそうだったのか。なら最初からそう言つてくれよ。」

桐生「中に入つても良いよな？」

運営1「ああ、良いよ。準備がまだ、不完全だからね。」

ふう、これでシンジの所に行けるな。

？「桐生一馬さんでんな。」

もう少しでシンジの所に着くという所で変な男に絡まれた。

桐生「何だ。お前は？」

？「挨拶が遅れました。自分 近江連合の神谷言います。」

桐生「近江連合だと？何で近江がここにいるんだ？」

神谷「錦山組の組長さんに言われましてね。この写真の男が今日来るから殺せつて。」

その写真に写っていたのは紛れもなく俺だった。

桐生「錦が俺を？」

あり得ない。そう言うとした時に神谷からアッパーをもらった。

桐生「つく!？」

神谷「何や、堂島の龍言うても、その程度かいな!!こりやあ組長さんの言うほど強くなさそうやな。」

奴はボクシングのような構えを取り始めた。

神谷「かかってこいや。堂島の龍こつから先進みたかったら俺を倒せや!!」

桐生「…錦 ホントにお前が俺を？」

俺は誰にも聞こえない位の声で囁いた。

桐生「神谷って言ったな。」

神谷「あ?そうですけど何か?」

桐生「もしかすると、俺は手加減できねえかもしんねえから闘うなら覚悟しろよ。」

神谷「へえ、ほんならじやあ気兼ねなく、やらせてもらいますよ。」

〈神谷〉

神谷「死ねやああ!!桐生!!」

奴のスピードはボクシングの構えどうりかなり早い動きで、俺に近づいたが、俺は特に慌てず奴の右ジャブに合わせて拳を打ち込んだ。

グキイ!!!

神谷「ぐああ!!!」

桐生「どうした。そんなもんか!!」

少しのやり取りの間にも神谷を殴って行く。

さっきの一撃でしゃがんだ奴の頭を掴み、後ろに後退しながら膝げり。浮いた奴の頭の下に入り、顎に強い掌底を叩き込む。

バキツ!!!

顎の折れる音を聞きながら奴が倒れるのを見た。

桐生「どうした。もう終わりか?」

奴はもう口が聞ける状態ではないのを確認すると、裏口に向かった。幸い直ぐ近くだったので、すぐシンジに会う事ができた。

シンジ「兄貴、お疲れ様です。遅かったですね。」

桐生「ああ、途中で近江連合の奴に絡まれたからな。」

シンジ「近江連合ですか？何で奴らがここに？」

桐生「分からん。奴らによれば、錦の奴に呼ばれて来たらしい。」

シンジ「何で、錦山さんが？」

桐生「さあな。取り敢えず今は親っさんに会う事の方が先決だ。」

シンジ「そうですね。こっちはです、ついて来て下さい。」

シンジ「ここです。しばらくお待ち下さい。」

ふう。ようやく一息つけるな。流石にここで闘うとは思って無かったしな。

俺は親っさんが来るまで、東城会の有名人物達が載っている額縁を見てる事にした。

東城会初代組長 東城真 今や、ここまで巨大化した東城会を最初に纏めた人間だ。俺も詳しくは知らないが、物凄い狂暴な人間だったと聞いている。

東城会直系風間組組長 風間新太郎 俺の尊敬する人で昔はそれこそ、どんな裏の人間でも知ってるほどのヒットマンだったらしいが、俺にとっては関係の無いことだ。

東城会三代目組長 世良勝 17年前俺が立華の所にいたときに一度だけ会ったが、それ以来あつてはいないな。何でも、錦から10億の話題が出てから死んだらしいが、錦が関係してるのか？

東城会直系錦山組組長 錦山彰 錦：お前は今何を思って東城会にいる？もし、俺らがやり直せるなら…

その時ドアが空いた

風間「一馬。」

桐生「親っさん。」

俺が言うより早く親っさんが話し始めた。

風間「10年だ。俺はお前に何もしてやれ無かった。」

桐生「そんな事は、無いです。」

風間「シンジの奴から聞いていると思うが錦は変わってしまった。」

桐生「親っさん、錦は何で？」

風間「分からん。それに今奴は近江連合をバックに多くの人間を引き連れている。下手に奴と戦争をしようとするとなら負けろぞ。」

桐生「そうですか。じゃあ由美は！今あいつはどうなったんです？」

風間「落ち着け一馬。今由美は」

パンツ!!

銃声と共に親っさんの腕が撃ち抜かれた。

桐生「親っさん!!!」

嶋野組構成員1「何や、今の銃声？」

嶋野組構成員2「お前、桐生!？」

？「桐生やお。」

後ろから出てきたのは、ガタイの良くスキンヘッドの男

東城会直系嶋野組組長 嶋野太

嶋野「何や、お前堂島の次は風間かいな!!」

弁解する前に嶋野組構成員達が俺を囲んでいく。

嶋野「お前らあ!!生きて帰すんやないで!!!」

そうして、嶋野組構成員との鬭いになった。

6話 喧嘩葬儀

〈嶋野組構成員〉

構成員1、2 「オラア!!」

構成員の二人が俺に殴りかかって来た。

桐生「ツチ」

俺は怪我をしてる親っさんを背にしているため、無理に動けないし、部屋のドアから逃げようにも嶋野がいるため逃げられない。

桐生「悪く思うんじゃないぞ。」

直ぐ側にある机を蹴り奴らから見えないようにすると構成員がいたであろう位置を殴った。

構成員1 「グハツ!?ば、バカな。」

構成員3 「今だ！机が付いてるあの腕じゃろくに殴れねえはずだ。やっちまえ!!」

構成員の残り4人が向かって来るが、腕を引き抜きそのまま机を振り回した。

桐生「オラア!!!」

幸い全員気絶したらしく今が逃げ出すチャンスだったのだが、また新しい構成員共が来てしまった。

もちろん、ここに居るのが俺と嶋野達だけなら良いのだが元から足が不自由で、尚且つさつき腕をやられた親っさんが一緒だと少々危険だ。

風間「か、一馬…逃げろ。」

桐生「親っさん!」

風間「俺なら…問題無い。早くしろ。」

そう言われるともう何も出来ないため、窓から逃げた。

構成員5 「桐生が逃げたぞ！追いかけて殺せ!!!」

また、この本部から逃げ出すはめになるとはな。

ここに長居する必要もないから、すぐさま逃げ出した

庭園に出ると10人が囲んでいた。

構成員5「へっへっへ、流石の堂島の龍もこの人数には勝てねえだろ。」

桐生「つまんねえ事言つてねえで来るなら来いよ。」

構成員5「上等だ！ぶっ殺してやる！」

この言葉が開戦の合図だった。

俺は殴りかかってくる二人をよけて近くにいた構成員の間接を無理やり外した。

バキッ！

そのまま奴を転ばして足で踏みつけた後はそいつを掴んで構成員共が多くいる所に投げた。

取り敢えず、投げた連中の所は何も出来ないはずなので意識を他に向けた。

残り6人

構成員9「バラバラに向かつてくな！纏まっていけ！」

後ろと前両方から合計4人が来た。その内の2人は木刀を持っている。

桐生「ちようどいいな。貰うぜそれ。」

木刀を持っている奴に向かつていき、顔、肩そして腹に強烈なものを入れた後は奴が落とした木刀を拾いながら後ろにいる敵の頭から振り下ろした。

その一撃で壊れてしまった木刀は持っていた所が鋭利になったので、少し怯えている奴の肩にさした。

ザクッ!!

構成員10「うぎやああ!？」

残り二人の頭を掴み、二人共庭園の側にある河に投げた。

その時だった。

ガシッ！

構成員9「掴まえたぜ！桐生!!やれ。」

構成員13「おう。死ねや！」

奴は手に持っていた石壺を振り下ろしてきた。だがやられるのを知っていて喰らう訳には行かない。

俺は押さえている構成員の足を踏みつけ、その痛みで少し押さええる力が弱まったのでその場で一本背負いをした。

ガシャン!!

奴の頭に当たった石壺は見事に割れていた。

構成員13「てめえ良くも!!」

桐生「やったのはお前だろうが。」

相手の頭を掴んで、そのまま床に叩き付けた。

桐生「悪いな。今捕まる訳には行かないんだ。」

先に進もうとすると急に襖が開きました新たな構成員達が現れた。

桐生「ツチ 次から次へと。しつこい奴らだ。」

構成員14「うるせえてめえが生きてるからだ!!」

男共の一人は拳銃を持っていた。流石に俺でも拳銃はどうにも出
来ない為、そいつを最初のターゲットに選んだ。

しかし、相手も俺が誰を狙ってるのかは分かっているらしく、木刀
を持った3人が前に後の奴らは拳銃を持っている奴を囲むようにし
て並んでいた。

おかしい。あの並びだと前列にいる奴にあたるはずだ。となると
あの銃はおそらくフェイク。そうすると今は、木刀共を先にやる。

前列にいた3人が、左右そして前から同時に攻撃して来た。

木刀二本を両手で押さえ、残り一本を頭突きでへし折った。

前にいる男を蹴り、膝が着いたのを確認すると左にいる男を握力一
つでぶん投げた。

投げられるのを知って銃を持つてる男は発砲した。

右にいる男を盾にして、盾にしたまま突撃。盾になっている男から
血が出ている所を見ると、実弾らしい。

桐生「よほど仲間に向てる自信が無かったらしいが、残念だった
な。」

弾丸を3発、2発一気に打ち出され後の1発を少し後に撃った。狙
いは両足と額なので足に来た弾丸を跳ねて回避額に来た奴は瞬時に
捻り回避した。そして、ジャンプする前に拾った石を拳銃持ちの奴に
投げた。幸いそれで、奴は気絶した。

すっかり萎縮しきってる奴らを睨み付けて、中に入った。

葬儀場に入り、組長の遺体が入っている場所に行く二人楽しそうにしながら俺の事を待っていた。

構成員18「俺がやるぞ。」

構成員19「構わない。親父はこいつさえ死ねば、何も欲しくは無いみたいだしな。」

桐生「二人一緒じゃ無いのか？」

構成員18「おいおい、俺はな、今までこの嶋野組に毒だと思っただけは全て自分の腕で倒してきたんだよ。」

構成員19「まあそう言うことだ。こいつ一人で良い喧嘩に二人して闘う必要も無いだろ？」

桐生「なるほどな。でもな、お前ら勘違いしてるぜ。今まで一人だけで倒して来たと言ったな。頑張っても絶対に越えられない壁つてのを教えてやるよ。」

ヒートを出し、二人に向けて臨戦態勢をとった。

自分の腕に自信を持っている男がタックルをしてきた。

当たるか、当たらないかのギリギリの距離で避け、素早く左手で顔を殴る。

良い音を出して、当たった一撃は奴の体制を少し崩しただけで終わった。

構成員「まだだ。フンツ！」

桐生「ぬおっ!？」

俺の腰を掴み、椅子が並んでいる所に放り投げてきた。

こいつには、もう何十年も使っている闘いの方が良いか。

壊し屋スタイル 適当に側にあった椅子を掴んだ。

構成員「何!？」

椅子は普通の椅子ではなく、長椅子なので常人なら掴むことは出来ないだろう。

そのまま、その椅子で右左そして上から振り下ろし、奴が起き上がる事はなかった。

桐生「はあ：はあ：」

連戦のせいか、疲れが溜まっていた。

構成員「フツ。」

桐生「くっ!？」

ぼろぼろの体のまま、一撃をかわした。

構成員「やりますね、流石は桐生さん。ですがその状態でどう闘う

つもりで？」

桐生「うるせえ、来るなら来い。」

構成員「なら、行きます。」

ジャンプしながら、膝げりそして拳が来た。

膝げりの方は右でガード、拳は左手で向かい合った。

ドンッ！ ゴンッ！

構成員「これを防ぎますか。実をいうとさっきの一撃かなり自信が

あつたんですがね。」

桐生「はあ：お前やるな。」

構成員「ちなみにですが、そこにいるは俺の兄弟分ですが、もう三桁位対人してますが、俺が負けた事は両手で数える位しかありません。」

桐生「!？」

俺が驚いている内に目前まで迫っていた。

まずい!! そう思ったがもう遅かった。

気付いたら吹っ飛ばされていた。

構成員「終わりですね。全力の貴方と闘えなかったのは残念ですが、後は嶋野の親父に任せます。」

奴は後ろを向いて外に出ようとしていた。

桐生「待てよ。」

構成員「!？あれを喰らって立てている事が不思議ですよ。でももうぼろぼろでしょう。これ以上立っている必要はありません。」

桐生「まだ、俺は負ける訳にはいかないんだ。」

もう意地で立っていると云ってもおかしくなかった。

桐生「うおおおお!!」

渾身のドロップキック これで決まらなかつたら俺の負けだ。
奴はもうガードの体制をとっていた。

俺は倒れ、そして奴は吹っ飛ばされ何も言わなかった。

俺は倒れている訳にもいかないの、立ち上がって先へ進もうとしたが、奴が話しかけて来た。

構成員「桐生さん。俺のポケットの中にスタミナンロイヤルが入ってます。それを飲んで早くここから出てください。」

桐生「お前、自分に使って俺を掴まえれば良いんじゃないのか。なのにどう」

そこまで言っただけ口を挟んできた。

構成員「俺はずっと前から嶋野の親父のやり方はずっと否定してきました。あの人はただ、暴力で制御すれば良いと思ってるからな。でもあんたは違う。あんたが俺の理念に一番沿っていて、あんたは俺の憧れなんだ。なのにここであんたが俺に負けたらあんたは死んでしまう。だから早く逃げて下さい。」

俺はそこにいる男の覚悟を感じた。

桐生「分かった。また会えたら会おう。」

フラフラの状態のまま奴からスタミナンロイヤルをもらい、一気に飲んだ。

溜まっていた疲労が一気に消え失せ、闘気がみなぎるのを確信して、先に進んだ。

外に出て、出口までもう少しだったその時

? 「待てや!! 桐生!!」

振り返ると嶋野が立っていた。

桐生「嶋野…」

バサッ

嶋野が上着を脱ぎ後ろにある桜と虎の刺青が出てきた。

嶋野「逃がさへんぞお!! おどれら、 囲め!」

嶋野組の連中が俺と嶋野を追い込むようにして囲んだ。

嶋野「これで逃げ場はないのう。三代目の遺体と一緒に綺麗に並べ

や!!!」

〈嶋野太〉

さっきの構成員のおかげで、闘気も回復している為さっきみたいにも無理に先走る必要も無いだろう。

嶋野「桐生!!!」

突進でそのまま馬乗りで殴る気らしいが、何分動きが単調だから分
かりやすい。

避けて、膝を入れて腹に拳を叩き続けた。

嶋野「つく　ガハツ　ブツ　クソ桐生!!!」

桐生「とりやあ。」

仕上げにアツパーを決めて嶋野を吹き飛ばした。

追い討ちにジャンプをして高い位置からの全力の一撃

ガバツ!!

喰らいながらも俺の体を掴みジャーマンスープレックスを決めて
きた。

嶋野は鼻血を出しながら、俺は頭から少し血を出しながらお互い息
を荒くしながら立っていた。

嶋野「はあ…はあ…桐生死に…さらせやあ!!!」

桐生「はあ…はあ…嶋野そこ…通させて貰うぜ。」

ヒートを出し嶋野を完全に倒す。

嶋野は普通のストレートを俺はハイキックをした。

メリメリメリ　ダンツ!!!

嶋野の頭に蹴りをいれ闘いを終わらせた。

間違いない骨にヒビが入った音がしたのだが、奴はそれでも他の連
中に指示を出した。

嶋野「何しとるんじやあ!今こそ掴まえるチャンスやろうがあ!!」

構成員達「うおおお!!!」

他の連中を避け出口に走り出している時にちよつと目を他に向け
るとそこには錦が微笑を浮かべ立っていた。

錦：　いや、今は考えている場合じゃない。

錦について考えすぎている場合じゃないので、俺はすぐさま出口に向

かった。

出口にはもう構成員達が集まっていた。後ろからも来ている為挟まれてしまった。

やるしかないか。そう思った時

ギョルルル キキー

車がここに急に止まった

? 「桐生乗れ!!」

桐生「あんたは?」

? 「早くしろ!!!」

車はもう動き出しているので窓から中に入った。

? 「相変わらず、無茶ばっかしてんだな。」

桐生「あ、あんたは!伊達さん!!」

伊達「桐生、はなしがある。行き付けのバーなら話を聞かれる事も

無いからな。問題無いか?」

桐生「あ、ああ。別にいいが。」

そして、俺らは神室町へと戻っていった。

~~~~?視点~~~~

ニユースキヤスター「本日未明 東城会本部で謎の男が暴れているというニユースが入っていました。この男についてくわ」

そこまで聞いて私は話を聞くのを止めた。こんなニユースを聞く為にこの町にきたわけでは無いから。

## 7話 運命の出会い

竜也「花屋いるか？」

花屋「俺ならここだ。どうした？」

竜也「ちよつと探して欲しい人がいる。」

花屋「お前が、依頼とは珍しいな。どういう風の吹き回しだ？」

竜也「まあ何でも良いだろ。それより探せるか？金ならあるぜ。」

連日 チンピラというチンピラから金を巻き上げていた為今、財布の中には大量の金がある。

花屋「金なら要らん。」

竜也「何？」

花屋「要らんと言っているんだ。お前とは結構長い付き合いだからな。サービスだ。しかしその依頼の経緯が知りたいな。」

竜也「ちよつと昔の知り合いにお願いされてな。」

お願いというのは、今日の朝アサガオの園長から電話がきたからだ。

竜也「はい。もしもし。」

園長「これは竜也くんの電話で合ってるよね。」

竜也「はい、そうですが誰でしょう？」

園長「僕だよ。アサガオの」

竜也「ああ、お久しぶりです。それで今日はどうして電話を？」

園長「実はね、遙ちゃんがアサガオから抜け出したんだ。」

竜也「遙ちゃんが？どうして？」

園長「遙ちゃんが親に会いたがっていたのは知ってるよね。」

竜也「ええ、でもそれは遙ちゃんのお母さんのお姉さんが来てて満足してたんじゃないんですか？」

園長「それがね、君がここを出てからお姉さんも来るのを止めてね、遙ちゃんも悲しかっただろうね。元から知らない母親の事を知ってる唯一無二の存在だったのに。」

竜也「そう：なんですか。それで俺に電話した理由は？」



園長『ああ、だいたい分かると思うけど探して欲しいんだ。』  
竜也『探す…ですか。』

園長『難しい事は重々承知してる。でも彼女は探すなら絶対育った  
神室町にいくはずなんだ。』

竜也『分かりました。全力を尽くします。』  
園長『ありがとう。』

ということで、取り敢えず花屋の所に来た訳だが。

花屋「そいつの容姿とか特長はわかるか。」

竜也「ああ、今は9才なはずだぜ。後は髪が長くてえーと、」

花屋「聞いという何だが、お前の情報は役にたたん。名前は分かる  
か？」

そんな風に言わなくても良いと思うが、まあいいや。

竜也「澤村遥。」

花屋「何だと？それは本当か？」

竜也「なんだ。何か知ってるのか？」

花屋「昨日だ。昨日お前が来る数時間前にその女を探してるって  
う女がここに来たな。」

竜也「間違いねえ。そいつが遥ちゃんの母親だ。」

花屋「とは言っても、ろくに顔も覚えちゃねえがな。」

竜也「へ？どうして？」

花屋「見るからにぼろぼろな服を着ていたからな。しかもフードを  
深く被っていたからどつちにしろ見れなかった。」

竜也「そつか。ならしやあねえな。」

花屋「一応こつちでも探すのは続けるつもりだ。」

竜也「サンキュー。」

花屋「ああ、ちよつと待ってろ。」

竜也「ん？」

出ていこうとすると、花屋が止めてきた。

少しすると花屋が、何かを持ちながらきた。

竜也「何？これ手紙？」

花屋「これはな、お前が昨日休憩していた所にあつた手紙だ。」  
手紙の送り主を見ると心愛からだつた。

花屋「安心しろ。中は見ていない。」

竜也「そつか。まあでも今は手紙より遙ちゃんを探す方が先だからな。預かつてくれ」

花屋「分かつた。見たい時には言つてくれ。誰にも見せる気はないし、見る気もないからな。」

この時竜也は気付いてなかつた。この手紙が事件の真実を知っている事を

竜也「さあて、どうすつかな？」

チンピラを倒しながら、話を聞くこと一時間

全く情報を得る事は出来なかつた。

竜也「取り敢えず、一回帰つてその内探すの開始するか。」

家に帰つて休もうとすると

竜也「あれは遙ちゃん？」

後ろ姿が、似ていた気がしたのだ。

直ぐに追いかけようとしたところ。

「おい、お前我が物顔でこの辺りを歩いてんじやねえよ」

急にチンピラに肩を掴まれた

竜也「あ？」

見ると最近力をつけてたギャングの衣装をした。

竜也「お前ら、その手を離せ。」

「んだよ。文句あんなら言つてみるよ。」

竜也「はあ。この程度か。」

「は？何だど？」

竜也「だから、今の殺気に気づかないようじゃ大して強くないって言つてんだよ。」

「上等だよ。喧嘩仕掛けてきたの ヴェ!？」

勝負とも言えないものだった。ハイキックを繰り出すと奴は直ぐに脳震盪を起こし倒れた。

竜也「だから言つたら。大して強くないって。」  
「て、てめえな！」

竜也「何だお前もやるのか？別にいいけど次からは手加減できるかはわかんねえぞ。」

「い、いえやりません。す、すぐ帰ります！」

2人係で倒れた奴を運んで行つた。

竜也「ツチ もう居なくなつたか。」

辺りを見回したが、もう居なかつた。

ただ、あまり離れていない事を祈り直ぐに探すのを再開した。

気づくともう夜になっていた。

竜也「今日はもう無理か。また明日探そう。」

ふと隣を見ると妙に人だかりが出来ていた。

竜也「あの、何かあつたんすか？」

「ああ、いや暴力関係だよ。1人の男相手にチンピラ共がよつてたかつてやつているんだけど。」

竜也「どうかしたんすか？」

「それがね。チンピラ共がやられてるんだ。」

竜也「へえ。強い奴がいるんですね。」

そこまで言つてると終わつたらしい。生々しい音が止んだ。

そして群衆が散ると誰がやっていたか。分かつてきた。

倒れているのが6人位そして、座っているのと立っているのは2人

そして2人共俺が知っている人間だつた。

1人は俺が探してる澤村遥

もう1人は俺が尊敬している桐生一馬だつた。

## 8話 母親探し

「桐生さん？」

「お前は…竜也か？」

「あまあはい。」

「どうした？」

久しぶりの桐生さんだというのに上手く言葉が出てこない。

不思議に思った遙ちゃんが声を掛けてきた。

「竜也くんどうしてここに？」

「あ、やべそうだった。」

本来の目的を忘れる所だった。

「知ってるのか？竜也。」

「え、ええまあちよつとこの子を探しに。でもどうして桐生さんと遙ちゃんが一緒に？」

「さつきそこにある店でこいつがいてな。一人だったもんで流れでついてきただけだ。」

「なるほど。これからどうするつもりですか？」

「いや、お前がこいつの知り合いならお前に預けよう。」

「待って。」

二人「え？」

「竜也くん。さつき私を探してるって言ってたよね。」

「う、うんそうだけど。」

「どうせあの人に言われたんでしょ。私はお母さんを見つけたら帰らない。」

「竜也それはどういう事だ。お前家は？」

桐生さんも口を挟む。

「家はない。孤児院黙って出てきたから。」

「家がないって。じゃあお前。」

「お前じゃない……」

「ん？」

「私は『遙』……お前じゃない。おじさんの名前は？」

「ああ……桐生、桐生一馬」だ。」

「ねえお願いこの子に何か食べさせて。竜也くんもお願い。」  
そこにいたのは犬だった。

「可哀想だが、今この子を助けた所でこの子が幸せになるとは到底思えない。仕方ねえことだ。」

「桐生さん。そこまで言わなくとも良いと思います。」

「竜也お前なあ。」

「竜也くん……」

桐生さんは呆れ顔で遙ちゃんは少しの期待を持ちながら俺を見上げていた。

「俺、買って来ますよ。待ってるよ。」

犬を撫でながら、行こうとすると。

「はあ。竜也ここでこいつらを見てろ。俺が買ってくる。」

桐生さんが行く気になったらしい。

「分かりました。ドンキホーテにあると思います。店の場所は前と変わってません。」

「ああ。すまないな。」

そう言っつて桐生さんは走って行った。

そして次は俺の問題だ。

「あのさ、遙ちゃん。」

「竜也くん。お願い私を戻さないで。」

遙ちゃんも何となく分かっているらしい。

「そうは言ってもね。お母さんの手掛かりとかもあるの?」

「少ししか無いけど……でも!絶対見つける。」

その手にはペンダントが握られていた。

俺は小さくため息をつきながら、院長に電話を掛けた。

『もしもし。竜也くん見つかったかい?』

遙ちゃんが下を向いたのが分かった。

「すみません。やっぱりここは広くて暫く見つからないと思います。なので見つかったらまた掛けます。」

『そうか。分かったじゃあまた』

「どうして、教えなかったの？」

「どうせ、また探すのに出ていくでしょ。それなら見つかるまでは俺も協力するよ。」

「ありがとう……」

桐生さんが戻ってきた。

「ほらよ。これで良いだろう。」

自分の持っていたドッグフードを渡した。

食べていたのだが途中で食うのを止めてしまった。

「どうしよう……全然食べないよ。」

「喉が乾いてるのかな？」

「なるほど。しかしまた買いに行くのか。辛い労働だな。」

「今度は俺が行きますよ。少し動きたい気分ですし。」

「頼む。」

適当なコンビニに寄り水を買ってきて直ぐに遙ちゃん達の所に戻ってきた。

「これでどうだ？」

「ありがとう。でも……」

「水を入れる皿が必要だな。」

「今度は質屋か。直ぐに飲ませてやるから。」

質屋で皿を買い戻ってきた。

「今度こそどうかな？」

皿に水を入れドッグフードの隣に置いた

そうすると犬は水とドッグフードを交互に食べ進めた

「やっぱりお腹減ってたんだ……この子。」

「そうみたいだな。……さつき孤児院に居ると言っていたが、本当にこの町に居るのか？」

「多分……手紙にはそう書いてあったから。」

「それは俺も保証しますよ。」

「?なぜお前が遙の手紙の事を知ってるんだ？」

「あれ？言ってませんでしたっけ？俺と遙ちゃんは一緒のヒマワリですよ。」

「そ、そうだったのか。だからお前達は知っていたんだな。まあそれなら良いが頼れる人は他にはいないのか？」

「うん：私にはお母さんと由美お姉ちゃんだけ。」

「由美お姉ちゃんだと？まさかお前の母親は美月って名前じゃないか？」

「うん：いつも由美お姉ちゃんが手紙持ってきてくれた。」

「そこまで言って遙ちゃんが倒れた。」

「おい、どうした！」

「熱が少しありますね。こんな状態になるまで一人で神室町を歩き回ったんだと思います。」

「そうか：取り敢えずどうする？」

「横になって上げられる場所無いですか？そこで目を覚ますまで待つのが一番いい気がします。」

「分かった。知り合いがやっている店がある。そこで休ませよう。」

桐生さんの知り合いの店に遙ちゃんを休ませて少したった。

今、桐生さんは刑事と電話中だ。

電話が終わり桐生さんが戻ってきた。

「竜也、遙の調子はどうだ？」

「悪そうには見えませんがね。もう少し寝てれば大丈夫かと。」

「そうか。麗奈何か作ってくれるか？」

「ええ。」

「おじさん？」

「起きたか。」

遙「……は？」

「私のお店 宜しくね遙ちゃん。」

「俺の知り合いで麗奈だ。」

「ねえ……あの子大丈夫かなあ？」

「え？」

「元気になったかなあ？」

「あの子ならちよつと待ってて。はい、遙ちゃん」

俺はさつきまで店の外に待たせていた犬を遙ちゃんに見せた。連れてきた良かった。

「あつ！良かった。もう会えないかと思ってた！」

「お前、待たせてたのか。」

「ええ、まあさすがにいきなり連れてくるのはちよつと失礼かなと。」

「あら、別に気にしなくて良かったのに。」

「遙、さつきの続きだが美月はな。」

「お母さん今どこにいるの!？」

「待ってくれ。今俺も探してるんだ……由美の事も。」

「あの、俺だけ事情知らないんで説明貰っても良いですか？」

「ああそうだな。」

桐生さんから大体の説明を受けて事情を知った俺はさつきの続きの話聞いた。

「ねえおじさん…おじさんも由美お姉ちゃん探してるんだよね。」

「ああ、そうだが。」

「私も一緒に…ついていっても良いかな？」

「だが、今は手掛かりも何も無いんだ。」

「私、お母さんがやってる店知ってるよ。アレスでしょ。」

「本当に!?遙ちゃん！」

「うん…だから一緒に…私だけじゃお母さんに会えない！ねえ良いでしよおじさん！」

桐生さんは少し悩みながら

「しようがねえな。」

「俺も行きますよ。」

「竜也!?(くん)」

「さつき遙ちゃんにも言ったけど協力するって言ったんで。」

「そうか。」

外に出て、遙ちゃんのナビに従いながらアレスへと向かってる途中



で遙ちゃんが桐生さんに話掛けた。

「おじさんはどうしてお母さんを探してるの？」

「ああ…さつきも言ったが俺は由美を探してる。ただその為には美月に由美の事を聞くのが早いからな。」

「そうなんだ。」

「ああ…遙はどうして美月を探してるんだ？」

「どうしてって…お母さんだよ！理由がなきゃ探しちゃ駄目なの？」

「ああ、いやそうじゃ無いんだが。」

桐生さんは歯切れが悪そうに言葉を濁した。

「まあまあ遙ちゃん 桐生さんも探すのに変わりはないから早くアレスに行こう。」

「うん…あつ！ここだよ。」

遙ちゃんが案内した場所はどうかやらミレニウムタワーの中にあるようだった。

いざ中に入ろうとすると警官に呼び止められた。

「ちよつとあなた達どういう関係？あなたはその二人のお父さんですか？」

「ああそうだが。」

「君たちもそれを認めるのかい？」

めんどくせえ。俺は声を掛けてきた瞬間にそういう顔になってしまった。

その顔を見たか、見てないかは分からないが、遙ちゃんがフオロ―を入れた。

「警察さんごめんなさい。お兄ちゃんとお父さんってば口べたで全然喋んなくてそれより、私達お母さんが働いてる店に家族皆で行こうって事になったの。通っても良いかな？」

「ああそうだったのかすいませんでした。最近この辺に誘拐犯が表れたもので。」

俺は遙ちゃんの演技に感心しながら中へと入っていった。

「ここが…アレス。」

「ずいぶん広いんだね。このフロア全体がそうなんじゃないか。これ一人で掃除やら何やらやってる訳お母さん？」

俺達はアレスの中へと入るとその部屋の広さそして、部屋の綺麗さを目を引かれた。確かにほんの最近開店したとはいえ、目を凝らさないとホコリ一つ満足に見つけられないのだ。これを一人でやっているのだから感激する。

「多分…由美お姉ちゃんも時々手伝ってたらしいけど…」

「竜也 遙その辺にしとけ。それより早くお前のお母さんの手掛かりを探そう。」

三人で別れて美月さんの手掛かりを探す事にした。

「あつーこれ…竜也くんおじさん!!」

遙ちゃんが何か見つけたらしく呼ぶ声が聞こえた。

そこには額縁が一枚あった。そして下には美月という名前。まず間違いなかった。

「これが…美月…」

「お母さん…」

ぼん

エレベーターの開いた音だった。そして数人の足音

「竜也…」

「分かってます。」

俺は咄嗟に遙ちゃんを後ろに下げた。

エレベーターの方を見るとゴツイ男共が来ていた。

？「あんた桐生さんでつか？…元堂島組の」

男共の中でもより一層ゴツイ男が話し掛けてきた。

？「お初にお目に掛かります。ワシ五代目・近江連合本部の“林”  
言いまんねん。噂はよう聞いてまっせ。」

「近江連合…って事は錦山に頼まれたのか？俺が狙いなんだろ。」

「いや…」

プルルル

桐生さんの電話がなり始めた。

「電話出なくても良いんですか？どうぞ気にせんとって下さい。」

「桐生だ。」

『伊達だ。桐生100億のホシが分かったぞ。〃由美〃だお前が追っている由美が100億について知っている。』

「何だって!?!」

『現場に〃指輪〃が落ちていた。』

「指輪?」

『ああ、あの時お前が俺に渡した指輪だ。』

『とにかく、東城会は由美と〃共犯の女〃を探してるらしい。』

「共犯の女…」

『そうだ：明日セレナで話したいどうだ?』

「ああ、問題ない。」

『分かった。』

電話が終わった。話を聞くと盗んだのは由美と美月らしい。

「そうか。お前らも由美と美月を…」

「いや：ワシらが追つとんのはそこのお嬢さんですわ。」

「えっ!?!」

「この子は関係無いだろ。」

「いや、それがかなり関係があるもんで。」

「桐生さんそれに君もその子渡したってねえな。」

「渡すと思うか?」

「右に同じ。」

「ほんならぶつちやけますわ。こないな所であんた程の男殺しとう無いんですわ。」

「あんた：ずいぶん気が早いな。」

「はあ!?!」

「俺も竜也もこんな所で死ぬ程やわねえんだよ。」

「ハツハツハ流石は桐生さんでんな。」

「しやあないなあ：おい!殺れやぶち殺したれや!!」

「桐生さん林つて男は頼みます。他は俺一人で大丈夫です。」

「ああ。」

〈近江連合構成員〉

「おい、お前らの相手は俺だぜ。」

俺は林以外の男共をエレベーター付近に呼び出した。

「揃いも揃ってノロそうな奴らばっかだな。」

「ああん!!」

俺は笑ってしまった。こんな簡単な挑発に乗るとは思ってたからだった。

「何笑うとんねん!」

「こいつらならこれで良いな。」

「答えろや!」

マシンガンスタイルになって改めて向かい合った。5人いるが、こいつらなら1人一分で済むだろう。

スウエイで男に近づき回し蹴りをやった。うずくまったのでとりあえず他に意識を向けた。

「とりゃあ!」

寸前に迫っていた一撃だったが体を捻り楽々回避そのまま掴み逆に殴り返した。

グキヤ!!

めり込む寸前だったので今起き上がるのは無理だし、起き上がっても極道をやろうとは思わないだろう。

「フンッ!」

うずくまっていた男は立ち上がり蹴り返した。

「グツギけんな!!」

マシンガンスタイルは耐久力はあまり無いいため喰らい過ぎると勝負に成らなくなる時がある。

その男の頭を踵落として踏んだ。

二人一緒に来たがそのまま後方宙返りして後ろから来た奴を蹴りで撃破その反動を使い、頭を一気に掴み地面に叩きつけた。その衝撃で地面に穴が開いてしまったが、多分大丈夫だろう。

「さあ、後はお前だけだぜ。」

通常のハンドガンスタイルに戻し向き会った。

「止めとくわ。」

「ん？やんねーの？」

「ああ、これ以上やっても無駄な血を流すだけやから。」

「そっか。近江って何か喧嘩ばっかしてるイメージばっかだから勝ち目ない勝負もするのかなって思ったんだけど。」

「勝ち目のない訳やない。ただこいつらを運ぶ必要もあるから。」  
「おう、じゃあな。」

すると奴は二人を一気に運んで行った。

桐生さんの方に戻ると決着がついていた。

くく時間が戻って桐生視点くく

「ほな俺らもやりましょか。桐生はん」

「遥隠れてろ。」

「うん…」

遥が隠れるのを確認した林はその身長からは考えられないスピードで間を詰めていた。

手刀で喉を狙っていた。

俺はその腕を掴み捻りながら突き飛ばし蹴りを入れる。

「ヌウウ…ハッ！」

飛ばされながら背面蹴りが向かってきた。

読めない程の蹴りでは無いためガードしかしそれが林の狙いだつた。左からの蹴りに夢中になり、右に視界を広げて無かった。あのデカイ体から来た右ストレート

倒されたが、直ぐに体勢を整え立ち上がり側にあった椅子を掴んで攻撃

椅子の攻撃で少し崩れた林の顔面めがけ膝蹴り

体が浮いた為に顔を叩き付けようとしたが、手刀で首を叩かれてしまった。

「グウウウ!!」

若干意識が飛びながらも叩き付ける事に正解した。

「はあ…はあ…」

林はもうギリギリらしく俺は頭を頭突きそして足で林を踏みつけた。

ガンツ!! ドンツ!!

林は起きなかった。

「はあ…はあ…遙…もうだ…大丈夫だ。」

遙は怯えながらこっちに来た。

「ねえおじさんどうして、どうして私が狙われるの!？」

「分からねえ…ただもう遅い。セレナに行こう。」

「うん…」

扉が開き中から来たのは竜也だった。

「終わったんすね。」

「ああ…電話を聞いていたら分かると思うが、明日セレナで待ち合わせしてる人がいるんだ。そこでお前も紹介したい。大丈夫か？」

「はい…じゃあ早いところ、ここを出しましょう。」

「あ、あのさ竜也くん…」

「どうかした？遙ちゃん？」

「遙いい。俺が言う。」

「あ、あの何すか？」

「竜也お前その服装で外に出る気か？」

竜也の服には上着には血が付いてない所を探す方が難しく、手は殆ど血で埋め尽くされていた。

「え？は?！」

「どうやらさっきまで気付いて無かったらしい。」

「どうしましょう、これ。」

「はあ、竜也それを脱いで帰るしか無いな。」

俺は上着を脱いで、帰るように促した。

「あ、はいじゃあ明日セレナですよね。また明日会いましょう。」

「ああ、じゃあな。」

竜也は直ぐに外に出ていき、俺と遙はゆっくりセレナへと向かって行った。

## 9話 協力

翌日 桐生さんに言われていたとおり俺はセレナに行こうとしていた矢先だった。

「誰だてめえら。」

変な連中数人で俺の事を待っていた。

「黒瀬竜也さんで宜しいでしょうか？」

「誰だつてきいんてんだらうが。」

「失礼しました。私日侠連の安堂剛と言います。」

「日侠連ね…聞いた事あるぜ。東城会の表立っては決してやれないような仕事をメインでやってる集団だつてな。」

「ほう、知つてていただけるとは恐縮です。」

「で？そんな裏専門の奴らが何の用だ？」

「そうですね。早速本題と行きましょう。南 心愛という女性ご存じですよね。」

「あ？何でてめえらが心愛を？」

「質問に質問で返さないで頂きたい。それで、今彼女がどこにいるかご存じでは？」

「確かに心愛は知り合いだけどよ。住んでる場所までは知らねーよ。」  
「成る程…とすれば連絡の手段くらいは持ってますよね。彼女に連絡して頂きたい。」

「断る！」

「何故？」

「俺は勝手に人の事を利用する奴らが大っ嫌いなんだよ！後はまあ心愛にも可哀想だからな。」

「ならば、交渉決裂ということに宜しいかな？」

「ああ…」

俺は言つてからいつでも襲われても良いように身構えた。何せ相手は殺しあいが基本的な連中なのだ。

「分かりました…ではこれで」

奴らは帰って行こうとしていた。

「ああですが、次会った時もこのような返事だった場合…容赦はしませんから。」

ゾワツ!?

とてつもない殺気に体全体が恐怖を覚えた。

これが東城会…俺は恐怖しながらもこいつと闘うのが楽しみにしている事に気付いた。

日侠連がいなくなった後、心愛に電話してみた。

『ただいま、この電話には電源が入っていないか、圏外にあります。』  
「でねえか。何したんだ心愛の奴…」

しかし、このまま立っていても仕方ないので、セレナへ向かった。

「来たか竜也。」

「すいません桐生さん遅れました。そっちの人は?」

セレナへ行くと桐生さんそして、俺の知らない人がいた。

「ああ、俺の知り合いの伊達さんだ。」

「伊達だ。宜しく頼む。」

「はい、黒瀬竜也です、宜しく申し上げます。」

「伊達さんは警察の人間でな。今回起こった100億事件並びに由美の捜査なんやらも協力して貰ってるんだ。」

「へえ…じゃあ人探しも得意なんすか?」

「おい、お前警察をあんまり利用すんなよ。警察なんてのは所詮事件があつて動いてんだからな。今回の桐生の奴が例外なだけなんだからな。」

「そ、そうっすか。」

「伊達さん、竜也そろそろ本題に移ろう。」

「ああそうだな。」

俺もすっかり話に夢中になってしまった。

「それで、桐生これからどうすんだ?」

「とりあえず、美月の情報を探そうと思う。由美も美月もホントに行方が分からないなら、遥の母親の美月を先に探そう。」

「そうか…しかし情報集めるのはどうする?流石にいくら有名ビルの



酒場でマスターやっているとはいえいちいち気にしてる人はいないだろう。」

「サイの花屋はどうでしょうか?」

「成る程…情報を神室町一握っているあいつか…確かに桐生、そいつなら知ってるかも知れんな。」

「そうか。なら場所はどこにある? 竜也分かるか?」

「はい、行きましょう。」

「伊達さん遥を見ていてくれ。」

「ああ、任せておけ。」

そのまま俺と桐生さんはセレナを出ていった。

「しかし竜也今日はどうして遅れたんだ?」

「ああそれが…」

俺は今朝起きた出来事を話した。(心愛の事は話してはいない。)

「そうか…日侠連か。」

「知ってるんですか?」

「ああ、昔世話になってな。三代目会長だった世良会長は元々日侠連だったんだ。」

「成る程…あーここです。」

話してる内に花屋がいる公園までついてしまった。

早速中に入ろうとすると。

「待て。竜也さんは良いがあんたはダメだ。」

「誰だ? こいつらは?」

はあ 俺はゆっくりりため息つくと桐生さんに説明を始めた

「花屋の手足ですよ…花屋! 見てんだろ通せ。」

そこまで言うのと少ししてリーダー格の男に電話が掛かった。

「はい、え? いやですが…分かりました。」

「こつちです桐生さん。」

「あ、ああ竜也お前サイの花屋と知り合いなのか?」

「ええまあ…それより早く行きましょう。」

俺はさっさと花屋の所へ向かおうと決めた。

「桐生一馬：17年前は堂島組の下らないカラの一坪事件に巻き込まれ、10年前は堂島射殺をした。極道界でその名を知らない奴は居ないほどだ。」

「花屋お前：桐生さんの事あおつてんのか？」

花屋の所へ行つたすぐさまこんな事を言われた。

「よせ。あんたがサイの花屋か…」

「ああそうだ：で竜也お前がこいつを誘つたんだ。後で何かしてもらうぞ。」

「わーってるよ。それより…」

「分かっている。欲しい情報はやろう：ただし条件だ。」

「条件？何だそれは？」

「ああ、ここに来る前に二つ豪華な扉があつただらう。」

「花屋お前！」

俺は花屋が言おうとしてる事を無意識に察知して話を切った。

「竜也、止めなくて良い。」

「桐生さん…？」

「確かにあつたな。しかしそれが何なんだ？」

「実は二つの内の一つは闘技場でな。お前さんにはそこで3勝してもらう。」

やっぱりか。

「それだけで良いのか？」

「ああ3勝すれば欲しい情報をやろう。」

「桐生さんやる必要は無いです。」

俺はこんな大変な事をしなくても普通に花屋に頼もうとした時

「良いだらう。」

「え？」

「さっさとその闘技場とやらへと俺を連れてけ。」

「こつちだ。竜也も来い。」

「あ、ああ。」

俺はあまり脳がついていかないまま花屋達の後について行つた。

「何で桐生さんをここに出した？」

「こいつを出せば多額の金の手にはいるからな。ここらで一気に金を稼いでおこうとな。それに奴も出所したてで、俺に以来するほど金を持つてないだろう。だからだ。」

「そりゃあそうだけど…」

俺は花屋の理由に納得して歯切れが悪くなった。

「そろそろ始まるぞ。」

「レディース&ジャントルメーン。ここで飛び入りのファイターが参戦です！」

「10年前堂島の龍と怖れられ自分の組の組長を手にかけて仁義なき男：桐生一馬!!!」

紹介と共に物凄い数の声援が飛んでくる。

「うっせなあ…これだから観客席で見んのはやなんだよ。」

「我慢しろ。」

「へいへい…」

「迎え撃つはここまで二人勝ち抜き米国第一級殺人逃亡犯！ ダニエル・フェルドマン!!!」

「さあ！時間無制限、ルール無し！いざゴングです！」

「さあ見るからにはお前にも掛けて貰うぞ。」

「はあ今言うか？それ…」

うんざりしつつ、桐生さんに20万かけた

「ほお…良いのか？」

「ああ、まあな。」

それに、と言いながら会場の方を見た。

「もう終わるしな。」

気付けば相手は肩で息をしてるが、桐生さんの方は息を乱すどころか、汗すら出てはいなかった。

最後に相手を金網に叩きつけて終わった。

あまりに早すぎる決着にみんなどんな反応をして良いのか分からないようだ。

「な？言つたら。もう終わるって。」

「フフフ：なるほど面白い。」

「さ、流石桐生一馬！極道の喧嘩殺法炸裂!!」

「さ、さあ続いての選手は、ムエタイ ミドル級元世界チャンピオン  
ガオワイヤン・プラムツク!!桐生一馬の初防衛戦！どんなファイトに  
なるんでしょうか？いざゴングです！」

ゴングと同時に飛び出したムエタイ野郎は、低い体勢から足払い続  
いて半回転しながら膝蹴り。

しかし足払いをくらいつつも咄嗟に右手で体全体を支え、膝蹴りを  
左手で防いだ。

そのままバックステップで後退しながら体勢を立て直す。

そして桐生さんがヒートを使ったのだが。

(何だ？あのヒート？)

そこには俺が知ってるヒートでは無かった。

普通ヒートは青色なのだが(俺も使い出したばかりなので詳しく  
は知らないが)、桐生さんが出したヒートは黄色だった。

そして、ムエタイ野郎へと、ゆったりした速度で向かう。

ムエタイ野郎も桐生さんを倒すべく力を溜めていた。

先手を撃つたのはムエタイ野郎だった。そして桐生さんも反撃を  
する。

(え？)

あり得ない事が起こった。まずムエタイ野郎の一撃は桐生さんは  
効いているのかという程涼しい顔をして受けたが、その後の桐生さん  
の一撃で金網を突き破り観客席までムエタイ野郎が飛ばされたのだ。  
誰も喋らない。当然だ。花屋から聞いた事があるがこの金網は観  
客に被害がいかない為に作ったのだが今回壊されたのだ。

観客に怪我は無かったが、これは今回でしばらく休業するしか無く  
なったな。

花屋を見るとさっきまでくわえていた葉巻を落としてしまった。  
観客も同様に皆空いた口が塞がらない様だった。

「司会、進めろ。」

桐生さんの言葉で司会がようやく喋り出した。

「へ？あ、はい…えー皆さん！落ち着いて下さい！それでは次の試合へと…え？」

ふと隣を見ると電話してやがった。

（誰を出して来る気だよ？）

桐生さんもこっち見てるし…

「おっと急に対戦相手が変わったようです！驚きです！あの負け知らずの男が帰って来ました！過去3年試合の成績は“全戦無敗”!!ベガスの元リングチャンピオン!!ゲリー・バスター・ホームズ!!!」  
「おい？あいつの何処が負け知らずだ？俺と秋山さんに負けてるだろうが。」

「リングでは、負け知らずだ。」

「屁理屈だろーがそれじゃ。」

「なら、お前がやるか？」

「止めとくわ。勝てねーし。」

リングを見るとホームズと桐生さんが話してた。

「無敵の極道vsリングの王者！注目の一戦です！今、ゴングです!!」  
桐生さんは先ほどまでのゆったりとした感じではなく、俺のマシンガンスタイルと同等もしくは少し早い位のスピードだった。

僅か数秒でホームズの懐に入り腹、膝、腕、最後に顎を叩いた。ホームズも両手を振り下ろしたが、俺の目ですら追いつかないスピードで背後に回った。

（またかよ、何なんだ、あのヒート？）

ヒートが出て、背後に回ったのが分かったのだが今回ののは、薄いピントだった。

そして、背中を怒涛のラツシュ！からの回し蹴り！

しかしホームズの一番の強みは何と言っても頑丈さだ。今のラツシュでも何食わぬ顔で立ち上がった。

（やっぱ頑丈だなあ。）

そしてお互いの均衡状態が続く。先に動いたのはホームズだった。真っ先に桐生さんへと特攻 右手を大きく振りかぶり叩き付けよ

うとしている。

対する桐生さんは右足をずらしながら徐々に体全体を低くしていく。

(掌底か。狙ってるのはおそろく…)

桐生さんが何処を狙っているのか分かった。狙って下さいと言わんばかりに顎が空いていたのだ。

そして振り下ろされるホームズの一撃！それを右手で掠めながら俺の知っている青いヒートでの掌底！追撃で浮き上がった奴の頭を裏拳で沈めた。

ホームズは最初は体をピクピクさせていたが少しするとその痙攣すら止まった。

「決まったあああ!!!今！三年間王者の座を守り続けてきた男に土をつけ、今新チャンピオンの誕生です!!!」

桐生さんがこっちに向かって来た。

「約束は果たしたぞ。次はお前の番だ。」

「安心しろ。約束は守る。俺はフェアだからな。」

(桐生さん負かす為にホームズ出して来た男の何処がフェアなんだ?)

俺は今の発言に疑問を覚えながら、後に続いた。

「で？欲しい情報は何だ？」

「東城会の100億、それに由美と美月って女の子の話だ。」

「成る程な…100億の方ならそいつにも話してるからな。直ぐに話せるが、女の方は少し待っててもらいたい。」

「なら、話せる方から頼む。」

「三代目は金が盗まれた事を隠していた。だが、それを錦山って直系組長が緊急幹部会でばらした。」

「って事は錦山はそれを知ってたのか？」

「ああ…そういう事になるな。話を戻そう。俺は三代目を殺したのは…錦山だと踏んでいる。奴の動きは四代目の椅子を狙っているはずだ。」

「…かもしれないな。」

「でも、ただでさえ分裂してる東城会をまとめる奴がいなくなったんだから他の奴も四代目は狙ってるだろ。」

「ああ…だから100億取り戻した奴が跡目のはずだ。錦山のたった一言で一気に泥沼とかした訳だ。次に女の方の話だが、100億盗んだのは由美と後もう一人いるらしい。こいつは匿名のたれ込みがあつてな。」

「何?…」

「東城会で裏とつてるうちに妹の美月が事件直後から店を閉めて行方をくらませてる。いよいよ本ボシ何だが二人共見つからねえつてんだからそれで…」

「美月の娘…遙か…」

「何だつて?」

「東城会は美月の娘を探してる。遙は今、俺と竜也の所にいる。」  
「成る程な…」

プルルルル

電話がなった。

「何だ?」

「そうか分かった。」

「お前らに『客』だ。」

「『客』?」

「見に行くぞ。足下に注意しとけ。」

「何?」

花屋の机から直径10cmくらいの場所が沈み始めた。

「こいつは?」

「驚いていいぞ。ここが『賽の河原』の本当の姿だ。五年前警視庁は50台のカメラを取り付けた。テロ防止って名目らしいが、実際は全く役にたつてない。ただし、俺はこの目できちんとみてんだ。一万台のカメラでな。」

桐生さんが不思議そうに周りを見渡してる。そりゃあそうだ。俺も初めて見た時は驚いた。

「おい、客の様子を見せろ。」

「へい」

「あれって…」

「伊達さん……！血か。何があったんだ？」

「奴の行動を辿るか。おい奴の映ってる他の映像を出せ。」

伊達さんの逆再生が始まった少し後に花屋が口を開いた。

「伊達か…なんとも落ちぶれたもんだ。」

「伊達さんを知ってるのか？」

桐生さんの質問には答えず、ただ伊達さんを哀れみの目で見てた。

「ボス！10分前の映像です。」

「ん？」

そこには町の外を歩いてる伊達さんと遙ちゃんがいた。

「何で外を？」

しばらくして黒いバンが表れ、伊達さんに傷を負わせ、遙ちゃんを

さらっていった。

「くそ…」

「ボス！トラブルです！」

「何だ？」

「ライブ映像に回します。」

ホームレス数人に囲まれる伊達さんがいた。

「くそっ！」

気付けば俺は飛び出していた。

「止めてくれ！この人は怪我をしてるんだ！」

俺は全速力で伊達さんの所へ駆け込んだ。

「竜也…すまない。遙が…」

「竜也君どいてくれるかい？」

「退くのはあんたらがその木刀を捨てた後でな。」

「竜也…そこをどけ。」

「桐生さん…」

「こいつらと仲良くしてるお前じゃあ手なんて出すこと出来ないだろ



う。」

「桐生さん…何する気ですか？」

「安心しろ。病院に行くほどまではやらねえよ。」

「……お願いします。」

俺は少し悩んだ後、桐生さんに後を任せた。

ホームレスの中でも一番近い奴を殴り飛ばした。

ドカツ！

「これ以上やるならこいつだけじゃ済まねえぞ。」

「くつ、くそ…」

そして段ボールの家に殴られた奴を抱えて向こうへ行った。

「呆れた強さだな。」

「あんたが…サイの花屋!？」

(そっか。伊達さんは花屋に会うのは初めてか。)

「久しぶりですね。伊達さん。」

(久しぶり? 会った事あるのか?)

「桐生、竜也例の子さらった車は『バッテリーセンター』に停まった。この情報はツケにしてやろう。」

「ああ」

「あいつは元警官だ。警察の情報を横流ししてたのを俺が告発したんだ。その後何してたのか、気になったが…こんな事やってたとはな。それよりお前ら、遙さらったのは『真島組』の奴らだ。」

「真島組か…」

(よりにもよって『狂犬』か。)

真島組の組長、真島吾朗その男につけられた異名は『鳴野の狂犬』その暴れ方からつけられたらしいが俺も詳しくは知らない。

桐生さんも心無しか嫌そうな顔をしている。

「よりによつて真島の兄さんか…」

公園の外に出た俺達はバッテリーセンターに行こうとした所。

「伊達さんはセレナで待っていてくれ。」

「だが、それじゃ……」

「その体じゃ、真島組と闘うのは辛いはずだ。それに麗奈も心配だ。一人にしないでやってくれ。」

「分かった…気を付けろよ。」

「行くぞ。竜也。」

「はい！」

伊達さんと別れバッテリーングセンターへと向かった。

## 10話 嶋野の狂犬

バッティングセンターへと向かう途中俺は真島さんがどんな人間なのか聞く事にした。

「あの人はな、ホントに読めないんだ。」

「読めないですか……」

「俺も何回か闘った事があるが、あの人とだけはなるべく闘いたくないな。」

「なるほど…なら真島さんとは俺が闘いますけど。」

俺も真島さんとは一回闘ってみたいのでこれはチャンスだと思った。

「ああ。兄さんが、遥の100億狙いなら頼む。」

「それ以外にあるんですか？」

「これは思いたく無いんだが…兄さんが俺と闘う為だけに遥をさらったという線もある。」

「そ、そんな事の為に遥ちゃんをさらうんですか？」

俺はそんなバカなのかと思ったが。

「まあ、頭の片隅にでも置いていってくれ。それより急ごう。遥が心配だ。」

「は、はあ。」

この時の俺はそこまで変な人じゃないだろうと思っていた。

「前からワシヤずつーと望んでいたんや。堂島の龍と直接やりあえる。この機会をのう！」

バッティングセンターに入って少したった後真島さんが来てこう言っていた。

桐生さんの言うとうり嶋野の狂犬は読めなくてバカな人でした。

くく桐生視点くく

(うーむ。やっぱりこの人はそういう事の為に遥をさらったのか。考えるだけで頭が痛くなってくるな。)

ほんの数分前の事

『会いたかったでえ!!桐生ちやああん!!』

『真島の兄さん：お久しぶりですね。』

『ええのう。見た感じムシヨ勤めでも体は鈍ってないよう野なあ。』

『兄さん、今はそんな話をするためにここに来た訳じゃ無いです。遥を返して貰えませんか?』

『別に：ええで。嬢ちゃんならそこに隠しとるわ。ワシやお前：』

言葉の途中でボールが兄さんの頭に当たった。

しばしの沈黙そして兄さんの爆笑それにつき組員も笑い出す。しかし、俺らを除く組員の中で笑っていないメンバーがいた。おそらく新しい組員だろう。

『笑いどころやないか!!』

ガツン!

バットが組員の頭に直撃してしまった。

『このドアホ!何で今の所で笑う事が出来るのや!』

バットを使い何回も組員を殴っていた。竜也の方を見ると不思議そうに見つめていた。確かに普通の人間の反応ならばそれなのかもしれない。

(これ以上はあの男が可哀想だな。)

『真島!止めろ!』

『あ?まあそうやな。ワシの楽しみが目の前にいるんや。』

兄さんは笑みを浮かべながらバットを握りしめていた。

『前からワシやずつーと望んでいたんや。堂島の龍と直接やりあえる。この機会をのう!』

こんな感じでいろいろと起こったのだ。

『桐生ちゃん。何ぼーつとしてんのや?これ以上ワシを焦らすなや!』

真島組の奴らもぞろぞろとバットを持ち始めた。

『竜也、周りの連中を頼む。』

『はい。』

『行くでえ：桐生ちやああん!!』

〈真島吾朗〉

俺が戦闘に意識を向けるより早く兄さんは攻撃を仕掛けてきた。バットを地面に叩きつけたかと思うと、バットの反動を生かしそのまま自分の体ごと、宙に浮かびバットで殴ってきた。

「!?くっ!」

右腕で急に受け止めたため、右腕が痺れた。しかしその程度で思考を止めていられるほど、兄さんは甘くはない。

すぐさま右手でバットを掴み反撃をしようとすると、逆に手を離し、手刀で喉元を狙ってきた。

バットを遠くに飛ばしながら左手で手刀を抑えて、何とか開始早々の死闘を凌げた。

お互いの距離が50cmちょいの距離感での組み合いが続く。

「やつぱりええなあ。桐生ちゃんとやつとると楽しくてしゃあない。お前もそうやろ?」

俺はそれには答えずこの人の隙を探した。

(ダメだ…この人は一見隙だらけに見えるが何処か突こうとすればすぐさま反撃が飛んでくる。)

「考えすぎやで。」

「どういう事だ?」

「これはただの喧嘩やない。命張った喧嘩…言わば殺し合いや。せやのに桐生ちゃんと来たらどこをどう動いたら勝てるとか、理屈で考えすぎや。」

「何が言いたい?」

「直感や。」

「何?」

「ワシは今から直感で桐生ちゃんの攻撃を避ける…全部や。」

「上等だ!」

お互いに一気に離れそのままラッシュスタイルへと移行。ラッシュ自慢のスピードで兄さんの顔面へと殴りに行く…がこれは囮本命は右の蹴り。

(いくらラッシュスタイルでも全力の蹴りなら、兄さんもきついはずだ!)

「うおおお!!」

兄さんは俺の上半身しか見ていない。

(決まりだ!)

右ストレートは背中をのけ反り回避。そして蹴りは……飛んで回避された。

「な!？」

いつの間にと取っていたのか、飛んでいる兄さんの手にはバットが握られていた。

そのまま腹へと突かれた

ドスツ!!

「くそっ何故?」

「甘いもう…桐生ちゃんアアアアア。そんなんじやすぐにやられて終わりやで。」

バットを器用に回しながら近づいてきた。

「そんな足に力溜めとつたらバレバレやで。一瞬で全ての情報を手に入れてそつから相手がどう来るか見分ける。」

俺の真ん前に立った兄さんに俺は攻撃を仕掛ける事が出来なかった。

「桐生ちゃん。鈍ったなあ…が、わるないで。」

「何?」

俺は言ってる意味が分からなかった。

「今の攻撃や。鈍ったちゆうのにあそこまで速く動けるんやから上出来や!」

「褒められてる気がしねえな。」

実際本心だった。あそこまで実力がついているのだ。

「何や、ワシは嬉しいんやで。ムシヨいっとなつても、この十年で変わったといえれば反応速度くらいや。むしろ攻撃は今のが凄いで。」

自分では違いに気づけないため、首を傾げるしかない。

「ええか。桐生ちゃん、戦いで悩み過ぎたらあかんで。それじゃそろそろ再開しようや!」

先ほどと同じく、バットでの突きが、バットを避け、足を踏み動き

を封じる。

「ほう…う…でも、まだやー!」

踏んでいないもう片方の足の蹴り。

「はあー!」

壊し屋スタイルになり、蹴りを防ぐ。

「オラア!」

ドスツ!

兄さんの腹をお返しと言わんばかりに殴り返す。そのまま、よろめいた兄さんの肩を掴み顔面を殴り続ける。最後に殴り飛ばした。

「ハア…ハア…どうだ?」

しばらく動かなかった兄さんだが、また動き出した。

「やるやないか…これなら本気でやっても問題ないな。」

バットを捨て、ドスを取り出した。そのドスには不思議な事にドスの刃にどす黒いヒートがついているのだ。しかし兄さん自身はヒートを出していないというあのドス自体が意思を持っているかのようなものだ。

あのドスを使い、兄さん一番の強みスピードで切り刻むスタイル”  
嶋野の狂犬スタイル”

(兄さんがあれを使うとなると、俺も本気でやるしかないか。)

昔ながらのスタイルを止めて、使うのは伝説と名付けられた”堂島の龍スタイル”

東城会本部から抜け出した時もこのスタイルだったが、あの時よりも動けるはずだ。

「何や、桐生ちゃんもようやく本気か。」

「ええ…まあブランクはありますけど、戦えない程じゃない。」

周りを見てみるともう戦いは終わっていた。

「なんや、桐生ちゃんが連れて来た若いのもやるやんけ。」

どうやら兄さんも周りを見ていたらしい。

「あいつとも楽しくやれそうやなあ。ヒツヒツヒ。」

「あいつはかなり強いですよ。」

「ほう…桐生ちゃんに強いと言わすとは何もんや、あいつ?」

「年齢的には高校三年かと。」

「高校?!ほんならあいつまだ成人してんのか!？」

俺も自分で言っていてびっくりする。確かに顔は若いが、実際いきなり高校生と言われれば驚くだろう。

「まあええわ。それより速く終わらせようか、この勝負。」

ドスを構えヒートを出す。

(いきなりか。まずはガードだな。)

「行くでえ。桐生うう!!」

ドスをのけ反りながら回避、裏拳でドスを持つてる手を叩くも、離す事は無かった。

ドスを真下に突き刺してくるが、余裕を持って兄さんの隣に立つ。全力の一撃。これは少し顔を動かすだけで終わる。

(まだだ!)

膝蹴り 手刀 アッパー 肘打ち

休む事なく、連続で攻撃し続ける。

「ぐっ!ぬう…」

兄さんの表情に焦りの顔が見えてきた。

顔を掴み、足を掛けて倒す…が、回避され背中に刺された。

グサツ!

「桐生さん!」

竜也の叫び声が聞こえた。

刺されたまま、取り敢えず兄さんから離れる。

「ぬ…ぬう…」

背中のドスを痛みを感じた所を頼りに抜く。

兄さんとは正反対の場所にドスを投げ、改めて兄さんと向き合う。

「どや、桐生ちゃん。久しぶりに喰らった感じは?」

当たり前だが、気持ちのいいものではない。

(あまり深く刺さらなかった事が、儲けものだな。)

兄さんから目を離し足元を見るとボールが落ちていた。

(これを使えば…)

「桐生ちゃんそんなものじゃワシに傷を付けることなんて出来へん



で。」

確かにそうかもしれない。ただ投げるだけでは。

(喰らうかどうかは喰らってから考えろ！)

ボールを兄さんに向けて全力で投げる。これをあまり気にかけない兄さんそれこそが俺の狙いだ。

超低空姿勢で兄さんとボールが直線上に並んだ所をアッパー元々強力な(自分で言うことでも無いが。)アッパーに硬球ボールの固さも入っている。肩を押し少し距離をとって空いた脇腹に蹴りを入れる。

バキツ!!

肋骨が折れる音が聞こえる。

(終わったか…遥を迎えに行かなくては、もう竜也が行ってるかも知れないが。)

ちょうど遥がいる所に兄さんが居てくれて助かったかも知れない。疲れた為目を閉じていて、開くと兄さんが目の前全体にいた。

「!?」

咄嗟の事だったが上手くガード出来た。これで俺と兄さんのたち位置が逆だったら兄さんの方を見ずにやられていた。

「ハア…ハア…流石に…強いなあ…今完全に…決まった思うたわ。」

「俺も…あんたがまだ…立ち上げられる事に…驚きだな。」

(流石にもう限界だぞ!)

体の状態を見ると、兄さんが顎、腹等喰らっている箇所は多い。逆に俺は辛い箇所は腹だけだがドスに刺された背中もある。もちろん端から見れば兄さんが辛いかも知れないが、俺は十年の内に体力が落ちたのだ。これ以上は俺の体力的に闘えない。

(悔やんでいても仕方ない。やれるだけやってやる!)

しかし勝負は意外な形で終わりを告げる。

「死ねええ!桐生うう!!」

竜也が気絶させた組員の一人が気がつき兄さんが使っていたドスを持って俺に向かってきた。

(くそっ…(こ)までか。)

その時真島の兄さんが俺の前に立ち、組員の攻撃を黙って受けた。

「お、親父！どうして…」

「こんのドアホ!!桐生ちゃんを…やんのわなあワシだけなんじゃああ!!」

そこまで言っただけで兄さんは倒れた。元々かなりお互いに無理した勝負だったのだ。あそこまでお互いやれたことが、誉めても良いだろう。

組員は兄さんの肩を掴みバツテイングセンターから出ていった。

そしてここには俺と竜也しかいなかった。

「おじさん！」

「遙…すまなかったな。」

「ううん…私こそごめんなさい。竜也くんも…」

「いや、俺の方は桐生さん程じゃないし…それより支えますよ。」

「いや…大丈夫だ。それより遙も無事助けられた事だ。セレナへ行く。」

「あ！そうだ竜也くん。」

「ん？どうかした？」

「あのね。竜也くんにすぐ知らせて欲しいって私の事を助けてくれた人が言ってたの。」

（竜也が助けた訳では無かったのか。）

「俺に…？」

「うん…何か手紙をすぐに見て欲しいだって。」

「手紙…？遙ちゃんを助けたのって女の人？」

「ううん。男の人。」

俺は全く話が分からないため、話しかける訳にもいかない。

「じゃ…じゃあ心当たりがある場所に行ってください。」

「ああ。ただ罫の可能性もある。気を付けろよ。」

「はい。」

竜也は俺達より先に出ていった。

「遙…俺達も行くぞ。」

「うん…」

「じゃあその謎の男は遥のペンダントを狙っていた訳ではねえんだな。」

俺達は竜也を待たずして伊達さんとさつきあつた事を話していた。

「うん。でもあの人…このペンダントには百億の価値があるんだよつて。」

「百億の価値だと！じゃあそいつは遥からペンダントを奪つたのか？」

「ううん。無くさないで持ってるだつて。」

「どんなペンダントなんだ？」

遥は俺らにペンダントを見せた。

「鍵付きかあ…壊すつてのは？」

（伊達さん流石にそれは…）

「駄目よ!!」

麗奈と遥に怒られていた。

「…冗談だ。」

「ただ今の状況で一つ分かった事がある…俺達はいつの間にか事件の中心に立たされていたつて事だ。」

しかしまだこの時の桐生は気づいていなかった。このペンダントが後に大切なものを壊す事になろうとは。

## 11話 竜VS錦鯉

「花屋あの手紙を返してくれ」

バツテイングセンターで真島組との死闘を終えて、遙ちゃんと言っていた変な男が手紙を見ろと言ったこと。それは恐らく俺の読みが当たってれば…

「まあそれで心愛の手紙の事だったらちよつとビビるけどな」

「ああホラよ」

心無しか元気が無いように聞こえた。

「何かあったのか？元気無いぞ」

「気にするな。ちよつと問題が起きただけだ」

花屋にこれ以上話しても話が聞ける訳無いので大人しく諦める事にした。

「そうか…何かあったら言えよ。別にそこまで面倒事じゃなきゃ手助けしてやる」

「ああそうさせて貰うよ。まあ暫く頼む事は無いだろうがな」

「そっか…じゃあな」

花屋はこちらを向かず、手を振るだけで終わった。

一回セレナに行く事も考えたが、家に帰り手紙を読む事にした。

「(これで心愛の手紙が違かったら後はもう無いな)」

少しの期待を持ちつつ俺は手紙の封を開けた。

『竜也くんへ。さつきはありがとう。いきなり押し掛けたのに…でもあんまり長い事話している時間も無いんです。私は今ある組織の人の事を匿っています。竜也くんの所にもその人の側にいなきやいけないので行くことが出来ません。なので一緒に入っている電話番号に電話してください。お願いします』

封筒の中には小さい手紙が入っていた。

「これか？」

手紙には知らない電話番号が書いてあった。

「(俺の知らない番号…悩んでいてもしやあねえ！)」

半ば強引に自分を納得させて、電話を掛けた。  
電話の主はワンコールで出てきた。

『良かった！竜也くん手紙読んでくれたんだね！』

その声は三日前に聞いた心愛の声だった。

「喜ぶのはお前じゃねえだろ…何でお前が東城会に追われてるんだよ？」

『そ、それは…』

「まあ良いや。それより…」

『手紙の事だよ』

「ああ…誰を匿ってんだよ」

『それも説明したいの。明日朝9時埠頭に来て』

「良いのか？手紙では動けないって…」

『それは神室町に行くのはって話。別に埠頭なら問題無いよ』

「そっか…じゃあ明日」

『うん』

「何か電話だけなのに疲れたなあ…まあ明日の為に寝るか」

普通に真島組の連中と闘ったからかも知れないが、死んだかの様に眠ってしまった。

---

翌日

時計を見ると8時50分だった。

「(来るとしたらそろそろか…)」

暫くすると心愛が来た。

「竜也くん。昨日はごめんなさい」

会ったと思っただらいきなり謝って来た。

「何で謝るんだよ？」

「だって昨日…竜也くんが知りたい事一つも教えて無いから…」

「気にすんなよ。別に今日教えてくれれば良いし、俺は」

「うん…」

「(はあ、女ってのはこれだから)」

「言いたくないなら別に良いぜ」

「べ、別にそんな事…無いよ…」

「ならそんな顔してんじやねえよ」

今の心愛はこれ以上責め続けたら泣いてしまうかの様な顔をしていた。

「…ごめんなさい」

「気にすんなっての…まあならいつか」

「…え？」

「別にお前が言いたくないなら帰るだけだし。じゃあな」

俺はそのまま帰ろうとすると、心愛が袖を掴んできた。

「…桐生一馬」

「…え…？」

突然出てきた桐生さんの名前に俺は首を傾げるしか無かった。

「私が今匿ってる人はその人を探しているの」

「ちよ、ちよつと待った。まずその人を教えてくれねえかな。言いつらいなら別にいいけど」

心愛は少し悩んだかと思うと、口を開き始めた。

「…私が今匿ってる人の名前はか」

パチパチパチ

何処かからか、拍手の音が聞こえた。

「ふう…探したぞ。心愛」

「!? 錦山…さん。どうしてここが？」

「何て事はない。ただしそれでも時間はかかったけどなあ」

「誰だ。あいつ？」

「東城会の直系の組長なの。でもまさか組ほとんどを連れて来るなんて」

「(何だ？あの人何処かで見た気が…)」

俺はあの錦山という人間を見た気がするのだが思い出せない。

「久しぶりですね。黒瀬竜也さん」

「お前…安堂…！どうして組が二つも仲良く埠頭にまできてんだよ」

そして錦山の隣にいたのは、昨日俺に話しかけてきた安堂剛だった。

「極道界にも色々あるんですよ。しかしまさか錦山さんから連絡が  
あり、いざ来てみれば君もいるとは」

「心愛…早くお前が持っている物を寄越せ」

「(心愛が持つてる物?)」

「嫌です…だってあなたにこれを渡したら…」

「早く渡せと…言ってるんだ!!」

俺は咄嗟に心愛の前に立っていた。

「竜也くん…」

「てめえら…恥ずかしく無いわけ?嫌がつてる人に対して無理矢理や  
るとかや」

「んだと!?!」

錦山組の後ろにいた連中が反応し出した。

「(良し。後は…)」

俺はこっそり心愛に耳打ちした。

「心愛。俺は今からお前が逃げられるだけの時間を稼ぐ。俺は連中に向  
かったら、すぐさま逃げろ」

「そうしたら、竜也くんが…」

「俺なら大丈夫だ。暫く会えないだろ。この調子だと」

「うん…」

「そつか…まあすぐに逃げろよ」

「分かった」

心愛はすぐに埠頭から出ていこうとした。

「女が逃げたぞ!」

「まあ待てよ。てめえらは俺が相手してやつから」

わざとらしく右手の指を曲げて挑発した。

「くそが!てめえ楽に死ねると思うなよ」

「さあて、ゲーム開始だ」

<錦山組組員>

俺は自分でも不思議に思うくらい笑いながら約150対1の勝負  
が始まった。

「オラァ!ハァ…ハァ…」

「こいつ!? こんだけやってんのにまだ倒れねえのかよ」

状況的に言えば、俺が40人位倒した位だろう。俺も息が上がってはいるが、まだやれる。ふと片隅にドラム缶が映った。

「(あれを使えば…やれる!)」

俺は昨日自分なりに桐生さんのヒートについて考えてみた。あの人の闘い方は俺と似ている所が会った、つまりだ。俺のライフルスタイルの状態ヒートを使えば。

「(来た!)」

黄色のヒートを纏ったライフルスタイルになるという訳だ。

「オラァ!」

ドラム缶を振り回しながら少しずつ敵の数を削っていく。

「ハァ…ハァ…もう…終わりかよ…」

「くそっ! こいつ…」

組員の数がようやく100人を切り、後少しというところで一人の男が入ってきた。

「お前はもう良い。後は俺がやる」

「お前……」

「親父!? あんたが出る必要はありません!」

「ほう、あなたが出るとはどういう風の吹き回しかな?」

俺、安堂、組員達が揃って声を出す。その相手とは錦山組組長 錦山彰だった。

「お前らじゃあいつまでたっても終わらない。俺がこいつを殺して終わらせてやる」

「……あんたが俺を倒せるっていう根拠は無いだろ?」

「倒せるさ…今のお前ならな」

「今の俺ってのはスタミナの面やか? それとも…」

俺の話は終わる前に奴が一步足を出してきた。闘い方をハンドガンスタイルに戻し、奴の動きをよく見る。

右、下、上、左、右、上、左、下、いくつものラッシュを直感で避け続ける。



「ハア…ハア…くそっ！」

「ふんっ!!」

ドンツ!!

一瞬の隙を突かれ、胸に掌底を喰らい吹っ飛ばされた。

「!?カハツ…」

たまらず咳き込んでしまう。

「終わりだな」

「ハア…ハア…ま、まだだ…」

錦山は俺を睨む様に見ると。

バキィ!

足の骨を折ってきた。

「!?て、てめえ！」

「もう何も出来ねえだろ。諦めろ」

「何で…こんだけで諦めなきやなんねえんだよ！」

「そうか……」

バキィ!

もう片方の足も折った。

「くそ……!!」

「次は手を折る。今の内に心愛に電話してあいつを呼び出せ」

「呼び出したら、どうすんだよ」

「お前が知る必要は無い」

「(この状態で逃げるには……)」

「分かった」

「ああ」

奴は俺に向けていた殺気を少し弱めた。

「(今だ!)」

折れた足で何とか立ち上がり錦山に頭突きをした。

「!?お前！」

「くそ…やっぱこれだけじゃダメか。でもじやあな」

奴には対して効いていなかったが、俺は笑いながら埠頭の海に飛び込んだ。

くく 錦山視点くく

「おい！早くハジキ持ってこい！」

逃がす訳にはいかなかった。このまま逃げられるなら今ここで殺した方が良い。

「ど、どうぞ親父」

バンバンバンバンカチツカチツ

暫く打ち続けていたら球切れになってしまった。

「錦山さん。もう黒瀬さんは死んでいるでしょう。埠頭を見てみて下さい」

安堂の言うとうり海を見ると、血が少し滲み出ていた。

「撤収するぞ。歩けない奴は他の奴らに担がせてもらえ」

「（あれだけは他の連中に渡すわけにはいかない。俺の野望の為に）」

俺は車に乗り車は事務所に向かい走り出した。

## 12話 父と子

目を覚ますとそこは見覚えのある場所だった。

「ここは…ッ！」

「まだ起き上がらない方がよいぜ」

「秋山さん…」

「何せ、両足の骨はバキバキに折られてて、腹や、その他色んな場所に銃弾喰らってんだから」

そう言えばそうだったと思い出す。

「ここは…？」

「俺の家、まあ家らしいもの何かほとんど無いけどね。花屋がいなかったら治療も出来なかった」

「でもありがとうございませう。でもあれから何時間位立っているんですか？」

「九時間」

「九時間……」

「(そんなに時間が立つなんて……)」

「竜也調子はどうか？」

「花屋か…」

「また随分とやられたもんだな」

「うっせ…でもどうやって俺の事を……」

「カメラの取り付け数を増やしておいて良かったな」

「勝手に自分で納得した言い方してんじやねえよ」

「まあまあ……でもこれからどうする訳？」

俺はあまり体を起こさず自分の状況を見てみた。

「とりあえず歩ける気はするんで、気分転換がてら散歩してきます」

ちよつと力を入れて立ち上がり二人を見ると、驚愕の顔でこつちを見ていた。

「どうした？」

「いやいやどうしたじやないでしょ！」

「ああ…俺もあまり歩く事は進めないが」

「まあ、あくまで気分転換ですよ」

俺は二人の注意もろくに聞かず外に出た。

「ふう…少しの痛みはあるけどこれくらいなら大丈夫かな」

「おい！竜也」

「秋山さん。どうしたんですか？」

「どうせ止めても散歩止めないだろうからってこれ花屋から」

秋山さんから貰ったのは松葉杖だった。

「花屋にありがとうって言っというて下さい」

「ああ分かったよ」

「(さあどこ行こうかな)」

何やかんやで俺がやって来たのはセレナだった。

「今、人いるかな？」

特に心配する必要もなく伊達さん以外の人はいた。

「竜也!?お前どうしたんだその足」

「まあちよつと…」

「(まあ普通そうだよな)」

「足の事は別に気にしないで下さい」

「そうか……」

俺は心配させない様に言ったが桐生さんは心配してるみたいだ。

「これから何処か行くんですか？」

「ああ、新しい情報を手に入れようと思ってな」

「俺も手伝いますよ」

「だが、その足では上手く動く事は無理だろう。気を付けろよ」

「はい」

俺と桐生さんは寝ている遙ちゃんを置いていき、セレナの外へと出た。

「とりあえずどうしますか？」

「そうだな……んん?あれは」

桐生さんが目をやった方を見ると、ホームレスの一人がこちらへ来ていた。

「桐生さん、竜也くんちよつと良いですかね？」

「確かあんたは…」

「モグサです。いつもはボスのモニターの管理をやっています」

「そんなあんたが俺達に何の用なんだ」

「実はですね、ボスの身内にトラブルらしくてずっと不機嫌なんですよ」

「あいつが？」

「ええ。それでそれとなくボスにどんな状況なのか聞いてくれませんかね」

「どうする？竜也？」

「別に良いんじゃないですか？ここらで花屋に恩を売つとくのも悪くないですし」

「そうか。竜也が良いなら俺も別に断る理由は無いしな。聞いてこよう」

「あ、ありがとうございます！」

「まあ俺も散歩つて言った以上一回はあつちに顔出さねーとな」

モグサさんは俺と桐生さんが見えなくなるまで頭を下げていた。

花屋の所に行くと、デカイモニターにはバッテリーングセンターの中  
にいる二人の男女が映っていた。

「これのどっちがお前の身内な訳？」

「竜也か…：男の方だ」

「あれがあんたの息子か」

「桐生もいたのか…お前ら何時からそこにいるんだ!？」

「いい女だなあ 趣味のいいガキだ」

「まあ 悪かあねえ。ただどこぞの組長の娘じゃなかったらな」

「この町の組な訳？」

「いや、浅草のケチな組さ。桐生お前が来るような情報は来てないぞ。  
無駄足だったな」

「そうか」

俺は花屋から少し離れた所で桐生さんに話しかけた。

「どうします?。」

「決まってる。花屋を助けるぞ」

「はい」

「竜也、お前その足で松葉杖ついているとはいえ、大丈夫なのか?」

桐生さんは俺の足の事を聞いてきた。

「ええ、まあ。でもおそらく『今日は』喧嘩出来ないですね」

「そうだよな………ん? お前今『今日は』って言ったか?」

「はい。どうしました? 桐生さん」

「いや………なんでもない」

「?………とりあえず、急ぎましょう」

「ああ……」

~~~~桐生視点~~~~

「こっから先は俺一人で行ってくる。お前はここら辺で休んでろ」

「はい」

「(何も無いとは思うが何かあったとき、こいつは喧嘩するだろうしな)」

バツティングセンターの中にはあのモニターに映っていた男女二人しか居なかった。話し掛けるべきか悩んだが、一度素通りする事にし、素通りすると

「うおおお!!」

「何の真似だ?」

花屋の息子の方が持っていたバットを手に殴りかかった。

「逃げろ! 京香!」

「うん!」

女の方に逃げられた。

「(あの女の方は竜也がどうにかするだろう。それよりも問題は……)」

「一人か?」

「待てよ。何か勘違い……」

「うるせえ！…組長に言っとくんだな。娘さんは…京香は俺が幸せにしますってなあ！」

「俺をあの子の組の一員だと思ってんのか？…誤解を解くのも面倒だ。少しお灸を据えろとするか！」

振りかざされたバットを掴み、そのまま無防備になった顔面に拳を入れた。

バキツ！

鼻が折れ、鼻血が止まらない様だが時期止まるだろう。

「ぐああ！」

「大人しくしろ。これ以上怪我をしたくなかったらな。俺はこう見えてもカタギだ！」

「…カタギ？あんたがか？」

「ああ。分かったら一回座れ！」

しばらくこっちを見つめていただけの息子は時期に座った。

「何でさっきは俺を襲ったんだ？」

「京香の親父の組かと思つて…！」

「何か追われるような訳でもあるのか？」

「ああ。実は俺と京香は逃げてきたんだ！」

「それは、その親父さんの組からか？」

「そうだ。…つてこんな事話してる時間は無いんだ。早く京香の所に行かなくちゃ！」

「俺の仲間が外にいるんだ。そいつが引き留めてるかもしれない！」

「本当か!?早く行こう！」

一度バツティングセンターから出て周りを見ると、そこにはジュースを飲んでる竜也しか居なかった。

「竜也…さっきここから出ていった女が居なかったか？」

「え？ああ確かにさっきここから出ていった女の人がいまいたけど…もしかしてさっきの人って…！」

「(こいつは数分前に見たモニターに映ってる人の顔すら一致しないのか…！)」

俺は竜也の記憶力に呆れつつ、息子に話を戻した。

「おい、あの女は何処に向かったんだ？」

「多分だけど：劇場前広場にある『デボラ』ってクラブのはずだ」

「よし、そこまで急ごう」

「ダメだ」

ふと、声の方向を見ると数人の人数で固まっていたギャングらしき奴らがいた。

「おい、タカシお前チーム抜けるって大事な事メールだけで済ますつてのはどういう事だ？」

「……後で：筋は通すつもりだったんだ」

「いいや、お前の事だからそのままトンスラだろ。そんなんだからよお：：パシリで鍛えてやったんだろうが」

「今いそいでんだよ」

「なめた事言ってるじゃねえぞ！」

「(らちが空かないな)」

「竜也、こいつ連れてデボラってクラブに行け」

「はい。お前早く行くぞ」

「あ、ああ」

「話はまだ終わってねえんだよ！」

ドスッ！

竜也が持っていた松葉杖で捕まえようとした奴の腹を刺した。

「てめえらの相手は俺だ」

「邪魔すんなよオッサン」

「俺が、オッサンか。笑えるな」

「あ？どうい事だよ」

「今からお前らはそのオッサンに負けるんだよ」

リーダーらしき奴を始め、さつき竜也に殴られダウンしてるやつ以外は全員笑い出した。

「あんたが俺らを倒すだって？あはは、笑わせんなよオッサン。タカシの奴が鼻血を出したたのはあんたがやったからかもしんねえけどあいつと俺らを一緒にすんなよ」

「(話を聞いているのも面倒だ)」

一番近くにいた、二人の意識を顎に一発放ち素早く刈り取った。おそらくやられた二人はやられた事にすら気づいてないだろう。

「あははは……は？」

他の奴らも仲間がやられた事に気づいたらしい。

「これでもまだやるか？」

「なめんじゃねえ！」

リーダーの男はやる気の様だが、他の連中はというと。

「リ、リーダーこいつヤバいですよ」

「う、うるせえ！やると言ったら殺るんだよ！」

「はあ……そう言うことならお前一人だけで来いよ」

「じよ、上等だ！ぶっ殺してやる!!」

「(フウ…自分と相手の実力差も分かんないのか)」

もちろん、分からないのは俺が殺気を出していないからなのかもしれないが。

「ふっ」

特に危険視する必要もジャブ。それだけで奴は吹っ飛んだ。しばらくは痙攣していたが、それすらも止まった。

「終わりだな。そこを開けろ」

「……ど、どうぞ」

「(確か劇場前広場にある『デボラ』だったな)」

中に入ると、既に事態は終了していた。

「あ、桐生さん少し遅かったですね」

「ああ。まさかとは思うが、ここに伸びている連中は竜也がやったのか？」

周りを見ると、ヤクザ風の男共が伸びていた。

「いや、少し松葉杖で殴っただけなんですけどね」

「何があったんだ？」

「はあ、それが……」

竜也の話によると、デボラに入ると既に女の組『跡部組』が中にいたらしく構成員共はタカシの奴を痛め付ける気だったようなので、そ

れにキレた竜也が全員ボコボコにしたらしい（松葉杖でこいつらを伸せる程殴るとは……）そしてその後にはタカシがエンコ詰めそうになったり、跡部組の組長からの伝言で二人共一緒に暮らせる様になっただけらしい。

「まあこんな所ですかね」

「なるほどな。しかし、松葉杖で喧嘩するとはな」

「これのおかげで、武器の良い使い方が分かった気がします」

「ふっ、そうか。一回花屋の所に行こうと思ってるんだがお前は どうする？」

「じゃあ、俺も」

「オッス、花屋」

「竜也と桐生か。ああ、そうだ。さっきタカシの連れの親父さんがあらんたら二人についてこれにくれたぞ」

花屋から貰ったのは木刀二本だった。

「京香って女の親父さんからか……ありがたく使わせてもらおう」

「ここで一緒に見ててな、お前らに感謝していた。俺からなんだが、竜也は知ってるがここにはカジノがあつてな。そこにお前ら二人共入れる様にしておいたぞ。暇な時にでも入ってやってみてくれ」

「ああ」

花屋の所から出てきた俺に竜也が話しかけてきた。

「桐生さんこれからどうします？」

「一回セレナに戻るつもりだ。竜也は？」

「まあ帰っても良いんですけど、どうせやることないですし、俺も行くかせてもらいます」

こうして俺達はセレナへと歩き出した。

13話

父と子

その二

セレナに戻ってきた俺と桐生さんは酔いつぶれてる伊達さんを見した。

「伊達さんどうしたんだ」

「何か酔ってる時にいっぱい言ってたわね。娘さんの事だった気がしたけど……」

「(また、親子絡みかよ……)」

何か嫌な胸騒ぎがした。とりあえず伊達さんを起こす事にした。

「伊達さんもう結構な時間ですよー」

呼んでみても特に反応は無く、とても酔いつぶれてる事がわかる。と、その時

プルルルプルルル

「電話?」

「伊達さんの所ね」

「沙耶って書いてありますけど……」

「それ、伊達さんの娘よ。さっき話してた時その名前を何回も口にしていたから」

「とりあえずこのままじゃダメだろ」

「桐生ちゃん代表して出してみてよ」

「何で俺が?」

「電話 このまま出なかったら可哀想でしょ」

「そ、それはそうだが……」

「往生際が悪いですよ。桐生さん」

俺もその場のノリで、桐生さんに電話に出せてみようと考えた。

「た、竜也までもか……分かった。出してみよう。も、もしもし」

桐生さんが出てみると、電話を取っていない俺まで聞こえる声の怒声が聞こえてきた。

「バカ! 何で直ぐに電話に出ないわけ!? 捨てた女の娘の事なんかやっぱりどうでも良いんだ! じゃあもうこっちも勝手にするから!」

ガチャ!

桐生さんが発言する前に電話は切れてしまった。

「何か：凄いキレてましたね」

「あ、ああ」

「桐生ちゃん直ぐにでないからよ」

「お、俺のせいなのか？」

「(まあ一概には桐生さんのせいとは言えないけど...)」

「ん、んうん：何だ：桐生と竜也じゃねえか」

「伊達さん起きたのか」

三人でさっきの電話の事を考えている内に伊達さんが起き出した。

「ああ、ちくしよう。飲みすぎたか」

「確かに俺らが来たときには潰れてましたね」

「伊達さん。さっきあんたの娘から電話がなつてな。俺が出てしまつたが良かったか？」

「沙耶からか：：：親子の見苦しい所を見させてしまったか？」

「いや、別にそんな事は：：：」

俺は必死に弁解しようとしたが。

「いや、気にすんな。さて、一回外の空気でも吸つてくらあ」

「伊達さん：：：」

「俺、ちよつと見てきます」

外に出ると伊達さんが悲しそうな顔をしていた。

「伊達さん。大丈夫ですか？」

「ん？ああ、こう言っちゃなんだが、もう慣れちゃまった」

伊達さんは微笑を浮かべながら俺に話し始めた。

「実はな、俺は前は一課に所属していたな」

「？：：：」

「ただし、桐生の事件の裏を探り続けたら四課に追い出されちゃった」

「そう、なんですか：：：」

「そして、その直後に家に帰ったらもう嫁と娘は居なかった」

「え：：：：？」

「まあ、あの時はろくに家になんか帰んなかったしな。あいつらも我慢の限界だったんだろ」

俺は何も言えなかった。伊達さんの悲しそうでもあり、少し笑っているような顔を見ると自然に口が止まってしまふ。

「何だよ。そんな顔すんじゃねえよ。さてと行くか」

「?…何処にですか?」

「沙耶の所だ。おそろくまだ『第三公園』にいるだろ」

「第三公園…」

「ああ。それじゃあな」

「伊達さんは休んでろ」

「桐生(さん)」

桐生さんがいつのまにか外に出ていた。

「伊達さんはまだ飲んでろ。俺が会いに行ってみよう」

「いや、これは俺の…」

「伊達さん。こう言っちゃなんだがあんたとあんたの娘が会った所でいまより関係が良くなるかどうかは不明だ。だったら俺たちから伊達さんの事について話した方が良いだろう」

「桐生…分かった。ただばれない様にはついて行くぞ」

「構わないさ。行くぞ竜也」

「は、はい」

「(それで良いのかな?)」

若干不安になりながら、桐生さんについて行った。

第三公園はセレナから数メートルしか離れておらず、すぐさまたどり着いた。(余談だが、伊達さんは曲がり角で隠れてるつもりだろうが、伊達さんの着ているロングコートや、少し猫背なのも加わり余計に目立っている。ちなみに俺は松葉杖を置いてきている)

俺と桐生さんは中に入ったが誰も居なかった。

「いませんね」

「しようがないな。伊達さんには謝るとしよう」

俺達はそのまま引き返そうとしたが。

「ねえ、お兄さん達暇?」

女子高生が二人立っていた。

「何だ?お前は?」

「まあまあそう言わないでさ、一人ずつで良いよね。条件は基本無し。だけど無茶過ぎるのはNG」

「(これって援交だよな。最近多いよな、それでいて通報するような女子もいるし)」

俺が一人で納得してると

「竜也、どうゆう事だ?」

一人だけ納得していない桐生さんがいた。

俺は女子高生に聞こえない声で話し出した。

「援交ですよ」

「援交?何だそれは?」

「簡単に言うとお金払う代わりに『やらせてくれる』ってシステムです」

「最近はその言うのが多いのか?」

「さあ、やった事ないので」

俺達で話を進めていると

「ねえどうすんの?やるの?やらないの?」

「あーごめん。実は俺達探してる人いてさ、そんな事してる暇無いんだ」

「そうなんだ、じゃあこの話は忘れて」

「(こんな夜中に援交なんかやりやがって、親の顔が見てみたいわ)」

「沙耶、やっぱり見つからないよ」

「大丈夫大丈夫、次行ってみよう」

「!?!」

突然の名前に二人して目を見開いてしまった。

桐生さんが沙耶という名前の女子高生の腕を掴む。

「沙耶?」

「ちよつと!」

「君さ、伊達さんの娘?」

女子二人を引き止めてベンチに座らせ、話を聞いた。

「この行為事態は伊達さん知ってる訳?」

「はあ?バカなの?知ってる訳ないじゃん」

「つまり勝手に自分を安く売ってる訳だね」

「あのさ、桐生さんの言い方は強いけど君たちホントに止めといた方が良いよ」

「あんたらが口出す必要無いじゃん」

「ホントそれ、チクリたきや勝手にチクってれば、私にはお金が必要なの！」

そう言うのと立ち上がり伊達さんがいる方に走り出してしまった。

「ヤバー！」

俺は急いで追いかけると何とか伊達さんはばれなかったらしい。

「……沙耶」

しかし、さっきの会話を聞いてしまい伊達さんはショックでうちひしがれていた。

「駄目ですね。完璧どっか行ってますね」

「そうか……止めてしまってますまなかったな」

「……お兄さん達沙耶の味方？」

「たぶんな」

「そっか……実は沙耶今変な男にはまっててさ、チャンピオン街の“シエラック”って店にいる正太郎って奴。そんでそいつ、金のかかる男らしくてそれでああいう事してお金を稼いでるの。ねえお兄さん達あの子ヤバイかも。何とかできないかな？」

「分かったからお前は帰ろよ」

俺が返事すると

「分かった」

返信をして帰って行った。

「さてと、シエラックでしたっけ？」

「ああ、だがあそこはバーしか無いしな。お前はまだ未成年だしな」

「まあ、外で待ってますよ」

チャンピオン街の外で待つこと数分間で桐生さんは出てきた。

「どうでしたか？」

「ああ、“スターダスト”にいるらしい。どうやら3ヶ月前から“翔

太”って名前で活動してるらしいな。スターダストには俺の顔馴染みもいる。行ってみよう」

「はい」

「あ！桐生さん。どうしたんすか？そっちの人は？」

「ああ、俺の昔の知り合いでな、最近また会ったんだ。で、こちらの用なんだが、翔太ってのはいるか？」

「翔太ですか？あいつならあそこに」

「(チャラ……)」

そこにいたのは金髪で髪型や、服の着方などだいぶチャラそうな人物だった。そしてそいつと話してるのはいつ着替えたのか制服からピンクのワンピースになっていた伊達さんの娘だった。

「あいつか……行くぞ」

「はい……」

俺と桐生さんがあいつに向かうと、それより先に伊達さんがあいつらに向かつていった。

「沙耶！」

「お父さん!？」

「お客さん困ります」

「うるせえ。帰るぞ沙耶」

翔太という奴は伊達さんに投げ飛ばされた。

「翔太！大丈夫？」

「沙耶……お前何でこんな所で」

「こんな所で？何よ？今さら父親顔？ふざけないでよ。今日だって約束忘れてた癖に！」

「それは……」

「お父さんはいつもそう。会ったって何も言わない。それでいていつもつまらそうにしてる。こんな時だけ父親ぶる」

「沙耶……」

「帰るね」

「沙耶ちゃん！」

ホストが止めるが娘は泣いたまま、スターダストを出ていく
「ちくしょう……」

伊達さんが項垂れていると、
「何よー! あんた達!」

さつきの娘の悲鳴じみた声が聞こえてきた。

「沙耶!」

伊達さんもあわてて追いかける。

「竜也」

「俺達も行きましょう」

俺達も追いかける。

〜伊達視点〜

「ちよつと! 離して!」

「うるせえ! いいから来いや」

外に出ると、沙耶を何人かの柄の悪い男達がいた。

「おい! 何やってんだ!」

「ああ? 何だよオツサン」

「その子から手を離せ」

「なんだよ? こいつは俺達の所で何十万も借金してんだよ」

「そうそう。だから俺らなりのやり方で借金返済してもらおうって
訳。わかつたら退きなよ」

「(沙耶……待ってる)」

俺は連中に一人で向かおうとしたが。

「警察で何年間も勤めてた人が一人で特攻ですか? そんなんじや懲戒
免職ですよ」

「竜也、伊達さんをからかうな。俺らで良かったら力になるぜ」

「竜也……桐生……」

桐生と竜也が立っていた。

「何だよ。てめえらもその親父の味方?」

「まあ、そんなとこだ。悪いが、その女は離してもらおうぜ」

「ぎげんな!」

沙耶を取り囲んでいた連中の一人が竜也に殴りかかったが

「?こんなもん?お返ししてやるよ」

ドンッ!!

竜也に効果は無く、殴り返された方が吹き飛ばされた。

「!?ヒ、ヒィー!」

他の連中も相手している強さを知り恐怖する。

「もつと来いよ。つまんねえな」

「ビビんな!全員でかかれ!」

他の連中も俺と桐生にかかって来るが特に脅威ではなかった。

全員が倒れてあと俺はリーダー格の男の髪をつかみ話した

「俺はあの子の父親だ。お前らのボスの所へ連れてけ」

くく 竜也視点くく

伊達さんが沙耶さんを襲った連中と一緒に行ってから数十分がたった。いまだに伊達さん達が来る様子はない。

「遅いつすねえ伊達さん。一人で行っちゃいましたけど…」

「……竜也」

「はい?」

「ちよつと出かけるか」

「そうですね」

俺は桐生さんの真意をくみ取り外に出ていこうとすると

「待つて…」

沙耶さんが俺らをひき止めた。

「翔太が言ったの。町金で借った金すぐ返さないといけないから…どうにかして金作れって」

「いつからやってたんだ?」

「ほんとに初めてだったの…でも来週までにお金作れなかったら翔太殺されるかもなんて言うから……」

「てめえの命惜しさに女頼った訳か。本当にてめえを大切にしてるならそんな事言わねえはずだが?」

「でも!私には翔太しかいないから……」

「伊達さんならお前を守る。自分がどんな目にあってもだ。てめえだって分かってるだろ。てめえを一番大事にしてるのは翔太じゃ

ねえ。伊達さんだ」

「ねえ桐生さん竜也さん、私お父さんが心配」

「その町金の場所分かるか？」

「〃ピンク通り〃の〃花形ビル〃そこがあいつらの事務所」

「行くぞ。沙耶 てめえも一緒に来るんだ」

「うん」

花形ビルに到着して、中の様子を見ると

ボコツ！ドガツ！

伊達さんが殴られ続けていた。

〃〃伊達視点〃〃

「あんたさあ、沙耶の親父さんなんですよ。だったらあんたが代わりに払ってよ。そうすりゃああの女には関わらないし」

「…………いくらなんだ？」

「店のつけが20 俺が立て替えたから利子つけて：400」

「翔太はよお俺らの系列で金借りたのよ。その利子が乗ってんだよ」

「!?…バカな？」

「払えないならさあ、沙耶ちゃんしようがないよね」

その言葉にキレ頭突きを喰らわすと

「翔太!? てめえ何すんだ!」

殴られると同時に警察手帳が落ちる

「コイツ〃サツ〃だ!」

「へえ〃 四課〃マル暴〃じゃねえか」

「マジか!? やべえじゃねえか」

「まあ待てよ。ねえおじさん〃マル暴〃って事はさヤクザ集団から押収した〃チャカ〃もあるよね?」

「…………どうゆう事だ?」

「押収したそいつらを俺らに横流ししてくれたら許してやるよ。悪い条件じゃないと思うけど?」

「……………けんな」

「何？」

「ふぎけんなんて言ったんだ」

「へえー良いんだ。アンタの所の娘がどうなっても」

「俺あ腐つても警察だ。汚職になんか手を染める気はねえよ」

「……じゃあ死ねよ」

俺は殴られる事を覚悟したが、いつまで経っても殴られる事は無かった。

前を見ると桐生と竜也が立っていた。

「てめえらが死ねよ」

「……竜也視点」

「あ？」

「しよ、翔太！こいつらだ」

「へえーアンタらが邪魔してくれた張本人なんだ」

「御託は良い。さっさと掛かって来いよ」

「（?もしかして桐生さん怒ってる?）」

俺は桐生さんの口調から察した。

「じゃあ行くぞー！こいつらぶっ殺しちまえ！」

翔太がナイフを構え他の連中も我流の構えを取り始める。

桐生さんが黄色のヒートの壊し屋スタイル俺はマシンガンスタイルになり連中に改めて向かい直した。

「オラア！」

ジャブの様なパンチを躲し逆に反対側の空いた所に向けてローキックを放つ。

「グハッ！」

「!?ちくしょう！」

「遅せえよ！」

仲間のやられている姿を見て他の奴が攻撃してくるが、遅いため回避するのは余裕があり、逆に反撃出来る程だった。

そして桐生さんの方を向いた頃には終わっていた。

「……桐生視点」

「（ナイフを持った奴が1人に奴の仲間か……）」

俺は近くにあったテーブルを即座に掴み翔太の仲間の方に叩きつける。

「死ねー！」

翔太の方が刺してくるが対した問題では無い。

背中を刺されながらも奴の襟を掴み投げ飛ばした。

俺はそのまま投げ飛ばした翔太に近ずき

「2度と伊達さんとあの娘には近かすくじやねえぞ」

その言葉を放ち俺らで外に出た。

場所を最初の公園に移し、伊達さんと沙弥をお互いを見つめるよう

に立ち、俺と竜也が少し離れた所で見守っていた

「お父さん…私」

パァン！

伊達さんの頬を叩く音が響く。

「沙弥…済まなかった。俺は悪い父親だ。お前に何か言うなんて事は本当はあっちゃいけない事だでもそんな俺でもお前に守って欲しい事がある。俺はお前自身の幸せのために暮らしてくれ。もし何かあった時には俺が守ってやる。守ってやるから……………」

「お父さん…分かったから泣かないでよ」

沙弥が伊達さんに抱きつく。

「後は2人きりにしますか」

「ああそうだな」

俺たちは2人の方を向かずに右手を挙げてそのまま帰って行った。

14話

遥の気持ち

くく伊達視点くく

昨日の騒動も実に良く考えると呆気なかったなと思いつつ警察署を歩いていると

「おはよう伊達君」

「課長……何か？」

「ちよつと話がね。今いいかね？」

「構いません」

急に署長室に連れられた

「話とは何でしょうか？」

「十年前君は独断で捜査を進め、その後のキャリアを滞らせた。分かつているとは思うが二度目は無いよ」

「ええまあ……」

「単刀直入に言う。今調べている件からすぐに手を引きなさい」

「どの件でしょうか？」

「交渉は無いんだよ。今すぐに引くように」

「……失礼します」

「おい！伊達君！」

課長が呼び止めるが無視して署長室から出ていく。

くく竜也視点くく

「おい、二人共こいつを見てくれ」

そう言つて伊達さんが出したのは一枚の刺青をメインとした写真だった。

「これは？」

「今朝東京湾であがった女の水死体だ」

「あの桐生さんこれって」

「ああ間違いなくあれだろうな」

「死因は頭部挫傷および出血多量によるショック死で死体にはコンクリートの重石をつけられ沈んでいた。それでいてかなりの拷問を受

けていた」

「これって『美月』なんですか？」

「何とも言えないが……しかしこの刺青は美月の入れてた模様と一緒だろうか？」

三人共に沈黙が続いている

「これは!？」

「どうした？」

「この辺りを見てくれ」

桐生さんが指した部分には刺青の少し下の部分だった

「小さく『歌』って文字が見えないか？」

「確かに見えますね」

「こいつは『二代目 歌彫』の仕事だ……この彫師は必ず自分の『銘』を入れる」

「って事はこの刺青も彫師が入れたのか？」

「ああ俺の背中を彫ったのも歌彫だ。千両通りとピンク通りの間にある『龍神会館』にいるはずだ。もし写真の女が美月なら……：遙には酷だ。遙には伏せておく」

遙ちゃんを置いていき、三人でセレナを後にした

途中で伊達さんとは別れ二人だけで龍神会館に入る事になった

「お前まで来る必要はあったのか？」

「ああいやまあ、どっちでも良かったんですけど何となく付いて行くことがなってる」

「フツ、まあ良いそれより行くぞ」

龍神会館の中に入ると白髪を後ろで束ねている一人の老人がいた

「お久しぶりです」

「おお桐生か。隣のそいつは?」

「少し前に出所しまして、こいつは最近俺と一緒に行動している奴です」

「どうも」

「ああ、でお前はお前で世良の葬式で大暴れか。どうした? 墨でも入

れ直しにきたのか？それともそいつが入れるのか？」

「いえ…こいつはあなたが入れたものかと思ひ」

そう言つて桐生さんはさつき伊達さんから貰つた写真を見せる

「この文様は… 〃月下美人〃だな。一年に一晩しか咲かねえ花だ。で、こいつは俺が入れたのかつて話だが… 俺あ彫つた刺青は全て覚えてる… 〃こいつは俺じゃねえよ〃

「そうですか…」

直後 電話が鳴り出した

「もしもし…おうお前か…ああ…いるぜ。錦山からだ」

「え…!!？」

「桐生だ…」

「どうして俺がここにいと」

「何!？」

どうやら電話が終わつたらしく桐生さんの声しか聞こえなかつたが何かやるつもりなんだろう

「桐生、背中の〃龍〃色入れ直してやる。弱つちい〃龍〃じゃあ今の錦山には勝てないぜ」

「もう十何年も前か…お前は〃龍〃を… 錦山は〃鯉〃を背中に入れた。刺青つてのはそいつ自身が光らせるもんだ。今の錦山の背中はすげえ色に輝いている。これで奴はやつとおめえと対等に張り合えるんだ」

「俺と？」

「黄河を泳ぐ鯉はいつしか龍門に入る。龍門を泳ぎきつた鯉はな龍へと生まれ変わるんだ。奴は龍門を登りきろうとしてるんだ。龍へとなる前にはお前という相手が必要なんだろうな」

色を入れ直しが終わり龍神会館を後にした

「一度セレナへ戻ろう」

「はい、さつきどんな電話だったんですか？」

「…セレナで話そう」

「?…分かりました」

セレナへと戻り伊達さんとも合流し、今度は奥での部屋では無くカウターで麗奈さんもいれ4人での話し合いとなった

「明日の夜10時にセレナで錦とサシで話す事になった。麗奈、その時だけ外して貰っても構わないか？」

「ええ大丈夫よ」

「しかし錦山がその約束を破り大人数で来た時はどうする？」

「問題は無い」

桐生さんはどこからその自信が来るのか伊達さんの問に即答した

「そ、そうか…となるとここで遙を見ておくのは危険だな。どこか安全な場所に隠しておいた方が良いんじゃないか？」

「確かにな…どこか安全な場所か……」

「賽の河原……」

「何？」

「あそこなら警察も簡単には入れませんし、何よりあそこに興味本意で近づくとやつもいません」

「そうだな…桐生問題無いんじゃないか？」

「ああ、今の内に移動しておこう」

「行かないよ。私」

「遙ちゃん？」

「おじさん達…さっきお母さんの事調べてたんでしょ」

「「!?!?」」

どうやらあの時気付いていたらしい。

「なのに…なんで連れていつてくれないの？私はここに遊びに来たんじゃないのー!」

「遙ちゃん…あのね」

俺の言葉も聞かずに桐生さんに近づく。

「このペンダントでしょ。これが皆欲しいんですよ！私なんて皆どうでもいい……」

「おじさんだって100億円欲しいからきつと…」はるk」

パンッ

俺が説明する前に桐生さんが遙ちゃんの頬を叩く。すかさず、気ま
ずい空気が流れる。

「……すまん」

「お母さんの事教えてよ…何か知ってるんでしょ。教えないよ！何と
か行つてよ！」

「遙…桐生はな、お前のお母さんが「うるせえ！言うな！」

また空気が重くなった。

「遙……今は俺たちを信じてくれ。それしか言えないんだ……」

「私だつて信じたいよ……でも……私にはお母さんしかないから。
おじさんが勝手にするなら私もそうする……」

遙ちゃんはペンダントをカウンターに置き出ていった。

「二遙（ちゃん）！二」

「桐生さん！早く遙ちゃん探しに行きましょう！」

「ああ、分かっている。伊達さんも来てくれ」

「ああ、わかった」

俺達はすぐさま後を追いかけて始めた。

映画館前の広場にやってきた。

「（とは言つてもかなり適当でここまで来たんだけど）」

「あ、桐生さん！やっぱりご無事だったんですね」

俺と伊達さんの知らない人がいた。

「あれ、でもさっき例のお嬢ちゃん見かけたんですけどね」

「!?本当か！」

「ハイ、直ぐその「ゲームセンター」に入つて行きました。ああ、後
凄く寂しそうに歩いてましたね」

「そうか。助かる」

ゲームセンターに入り、すぐさま周りを見渡す。

「いなさそうですけど、一応他の人に聞いてみますか？」

「ああそうだな」

そこら辺に居る女子高生に話しかけてみる。

「君たち、小さい子ども見なかった？」

「ああ、さつきまでいたよ。でも酔っ払った怪しい人に連れられてた」
「!?何処につれてかれてたの?」

「〃七福通り〃の駐車場」

「わかった!ありがとうね」

「急ぎましょう」

「ああ」

駐車場に着くと酔っばらいが倒れていた。

「おい、あんた、少女を見なかつたか?」

「ウイー、酒持ってこい!酒!」

こんな奴に時間を取られてる暇はない。

俺は酔っばらいの頭を掴むと

「おい!いいから質問にだけ答えろ!少女見てねえのかよ?」

どうやら今ので酔いが覚めたらしく

「す、すみません!さつきまでいたんですが、スーツの男がさらっていききました」

「何処につれてって行ったんだ?」

「ど、〃何処かの公園〃としか知らないです。ごめんなさい」

しらみ潰しに公園を探し回り、ようやく〃第3公園〃でスーツを着て、電話をしている男を見つけた。

「遥は何処だ?」

「桐生さんに伊達刑事、それに黒瀬竜也君ですね。こちらもお迎えする準備が出来ました。ご案内します」

連れてこられた場所は

「ここは…スターダストじゃないか!」

「どうゆうことだ?」

「お入りになれば、分かりますよ」

入ってみると中に人はいなく、照明がただ輝いていただけだった。

「(どうなってんだ。)」

「お待たせしました。桐生さん」

上から見知らぬ声が聞こえてくる。

「遥は無事なんだろうな?」

その言葉を待っていたかのように遥ちゃんをこちらに見せてくる。

「遥(ちゃん)ー!」

俺達はすぐに上に行こうとすると、拳銃をこちらに向けてきた。

「一輝達はどうした!」

「別室にいますよ。縛るくらいはしていますが……別段命に問題は無いです」

「何者だ!お前ら?」

「それは止めておきましょう。お互いの為です」

「じゃあなんで遥ちゃんを拉致った?遥ちゃん自身か?それとも……」

「それは答えなくてもわかっているのでは?」

「(恐らく、奴等の狙いはペンダント……あんまり渡したくねえけどこれで遥ちゃんが自由になるなら……)」

「ペンダントお渡し頂けますか?」

「(やっぱりか……)」

「渡せば遥を返すんだな」

「勿論です」

そう言つて奴は部下に拳銃をおろさせ、遥ちゃんを下に行かせた。

桐生さんも直ぐにはペンダントを渡さない。硬直するなか、遥ちゃんの階段を下りる音だけが響く。

そして、遥ちゃんの位置が俺達と相手のそれぞれ半分位の位置に着いた所で

「ストップ、そこで止まってください。ペンダントをこちらに投げてください」

「……遥! すまない!」

桐生さんがペンダントを投げる。

その瞬間、俺と伊達さんが同時にスタート

伊達さんが遥ちゃんを救出し、階段から飛び降りる。それを見ている間に俺が近づく。

「オラァ！」

ドガツ！

拳銃を持っている奴が吹っ飛ぶ

そしてリーダーらしき奴が反撃しようとするが、俺は回避して、下に降りる。

「すみません！ペンダント取り損ねました！」

「嫌、大丈夫だ！伊達さん無事か！」

「俺は大丈夫なんだが、遥が！腕を撃たれた」

「クソ！」

後ろを見ると10人近くの敵が来ていた。

「桐生さん、伊達さんちよつと遥ちゃん見ていて貰ってて良いですか？」

「お前一人でやる気か？」

「久しぶりに体動かしたいですし、だいぶ腹立ってるんで」

「わかった。気を付けろよ」

「はい」

〈謎の男達〉

1人がいきなり発砲してくる。

俺はそれを体を捻りながら避け、近くにいた奴を蹴りで伸した。

「あめえんだよ！」

体の低い体制を維持しながら、相手の一人を転ばせ、そのまま足を掴み回して、ついでに他のやつも倒す。

これだけで残り上に居るやつも合わせて、7人になった。

「（一気に全員やる必要はねえ。一人一人確実に倒す！）」

マシンガンスタイルに変えて、すかさず1人をストレートで倒した。

他の奴が迫ってくるが、特に慌てず、腕を引いて顔に拳を叩き込んだ。

「どうした？群れてるだけかよ。拍子抜けだな」

「ああ！」

「（本当、頭が弱いとやり易くてたまんねえよ）」

多分自分でもびつくりするくらい悪い顔をしながら、ハイキックで特攻してきた奴を蹴り飛ばし、その飛ばした先にいた奴も潰せた。

残り3人の内の2人が銃を同時に発砲、

「(しゃあねえ、一発喰らってやるよ)」

1人を確実に潰す事にし、腕に一発喰らう。そのままその腕でもう1人をぶん殴る。

それに恐怖したもう1人を蹴りで潰す

「もうあんだだけになつたな」

「……………」

「(黙るか……まあいいや……ツツ!)」

急にきた拳を掴む。

すると下段蹴りがとてつもないスピードできた。

「ンツ!」

桐生さん達には普通に見えるかも知れないが流石にやはりあの時の勝負のせいで足には余計なダメージが入っている。出来ることならあまり食らいたくないし、攻撃に使う訳にも行かない。

「フウ…フウ…」

「足を怪我でもしてるですか?」

「るっせえ、てめえに関係ねえだろうが!」

「確かにその通り、なので遠慮なく、いかせてもらいます」

ドンツ!

「グハツ!」

腹に強烈な一撃、思わず沈んでしまう。すると

グキツ!

鼻に膝蹴り

「て、てめえ…」

鼻を素早く元に戻す。

「オラア!」

大振りな攻撃、相手が攻撃してくる。

「分かっただよ。こんな攻撃したら反撃する事くらい」

さっきのお返しと言わんばかりの腹に蹴り

「グッ！」

「(チャンス!)」

「オラァ！」

空手の正拳突き。相手はしばらくよろめいていたが、

バタン!

倒れた。

ペンダントを相手が拾おうとするが

ガンツ!

「ウツ！」

桐生さんが足で踏む。

「お前ら、何処の組織のもんだ? 極道じゃねえな。なんでペンダントの事を知ってる?」

答えない相手

「おい! 答えろ!」

「…………俺達はじ、じん」

言葉は途中で区切られた。

パンツ!

さっきの奴がこいつの頭を撃つたのだ。

「クソツ！」

「遥、大丈夫か?」

「出血の割には傷は浅い。大丈夫だろう」

「おじさん……………助けにきてくれたの?」

「ああ」

「…………ごめんね 私が勝手な事するから」

「遥…………俺もお前に謝らなくちゃいけないことがあるんだ。 ちや

んと聞いてくれるか?」

「うん…………」

「美月…………お前の母さんな、もう……………死んでいたんだ」

遥ちゃんの悲しい顔が自然と目に入ってくる。

「すまない 俺は…助ける事が出来なかった………… ごめん……………ごめんなあ、遥」

遙ちゃんの手が桐生さんの頬に伸びる。

ドンッ！ドンッ！

俺達は音の方へと目を向ける。するとそこから出てきたのは、一輝達だった。

「撃たれた男からこのバッジが現れた。俺はこの線から調べてみる」

「ああ、頼む」

「すまない、こんな騒動に巻き込んでしまった」

「いえ、そんな事ないっすよ！」

「ええ、俺らの方こそ銃向けられたっつきり……」

「おう、この嬢ちゃんが例の子か？」

「ああ……」

遙ちゃんは桐生さんの後ろに隠れている。

「嫌われちゃったかな？」

「まあお前の顔じゃあな」

「竜也、そりやどうゆうことだ？」

「おい、この子をしばらく、かくまいたいんだが……」

「分かってるよ。だが、しかしあんたに頼み事されるとはな……妙な気分だ」

「ああ……俺もだ」

翌日

〳〳桐生視点〳〳

「桐生、まだ約束の時間まではたっぷりある。今のうちにどこか出かけて来たらどうだ？遙は俺が見ておこう」

「ああ、甘えさせてもらおう」

竜也は誰かと電話しているらしい。

「竜也、お前は何か用事あるのか？ないなら一緒に何処か回らないか？」

「いえ……今日用事入っちゃって……なんでまた今度」

「ああ……」

「すいません」

「いや、大丈夫だ」

仕方ない。1人で回るか。

外に出ようとすると

「桐生さんお暇なんですか？」

一人のホームレスが話しかけてきた。

「ああ、まあな」

「ならいい場所がありますぜ。ミレニアムタワーの横に宝くじを売ってる場所がありますね、そこのばあさんに『十万円バラで十枚』と言ってみてください」

「？　　そこでなにが出来るんだ？」

「まあまあそこは行ってみてのお楽しみですよ」

俺は不思議に思いながら行ってみる事にした。

真相を言うとそこは賭博場だった。

花屋の所にいたような人物や、それとは逆に良い身ぶりの人物合わせて10数人いた。

「さあさあ！　丁か半か？　張った張った！」

「丁！」

「半！」

さまざまな声が響きわたるなか、静かに腰を下ろす。

「あんたは？」

「丁だ」

「さあ！　丁、半揃いました」

賽子の目が隠され振られた後から出てきたのは

「グサンの丁ー！」

その後、しばらく当て続けていると

「すいません　ちつと…」

そういつて出ていってしまった。数分すると

「すいませんねえ。この年になると近くなってしまって。さて、今度はっ！」

「丁！」

「半！」

「俺も半だ」

「さあ、丁半揃いました」

今度は

「ピンゾロの丁！」

初めて外れてしまったが変な違和感を感じた。

「今度は？」

「半だ！」

「丁！」

「……丁だ」

「さあ、丁半揃いました」

今度も賽子を隠し、開けるその瞬間、手をつかんだ。

その手から賽子を離し開けてみると、機械的に動いていた。

「おい！イカサマジやねえか！」

「…ツチ！騙される奴がわりいんだよ！」

「悪いが今のやつと前のやつの掛け分は返させてもらうぞ」

「……おい！この客を追い出せ！」

すると襖から5、6人の男達が後ろから出てきた。

数分してその場にいたのは倒れた男達と肩で息すらしていない俺だった。

「こんなもんじや用心棒としても意味がねえな」

「く、くそが……」

「誠に失礼しました」

新たに襖の奥から出てきたのは白髪はかなり年をとっているじいさんだった。

「あんたは？」

「このオーナーをやらせてもらっています。先程は大変失礼しました」

「別にかわまない」

「お詫びと言ってはなんですすがこれを」

十万円を受け取り外に出ると暗くなっていたのでセレナへと向かった。

15話

十年ぶりの対談

セレナに着くと、麗奈がいた。

「麗奈!? どうしてここに?」

「貴方達2人だけにしたら殺し会いでも始めるかもしれないじゃない?」

「それは……………そうだが…」

「安心して、別にいちいち口を挟むつもりは無いから」

「そうか……………すまない…」

「別にいいわよ」

数十分くらいすると錦が入ってきた。

「錦……………」

「久しぶりだな…桐生……………」

錦は俺と2席分離れた席に座ると麗奈に酒を頼んだ。

「十年ぶりか…お前とこうして飲むのも……………」

「ああ」

「面会にも行かなくて悪かったな…こっちも色々忙しくてな……………」

「そうだろうな」

「俺は……………どうしても100億を手に入れたい。お前の連れているガキとペンダントを渡せ」

「その前に答えろ…何故美月を殺した?」

「……………殺す気は無かったんだ…由美の妹を……………殺すつもりなんてな……………」

錦がその時の状況を説明する。

「十年間……………俺は由美の行方を追い続けた。由美の妹がセレナで働いていると知り、俺はずっと彼女をマークしていた。いつかそこに、由美が現れるんじゃないかなってな」

「遥の事もそれで知ったのか?」

「巡り合わせだよなあ……………あの娘は“ヒマワリ”にいたんだ。俺達が育った、あの孤児院にな…美月はその後“アレス”を持ち、そして

姿を消した……ヒマワリにいた娘も、そして東城会の100億が抜かれる……」

そこまで言つて、錦が何かを取り出す。

「だがな……！」

「それは……!?!」

「そうだ。由美の指輪だよ……これが現場で見つかったんだ。由美はいる……近くに……必ずな」

「桐生……これは東城会の戦争だ、お前1人でどうなるもんでもねえ……悪いようにはしねえ……ペンダントを渡してくれ」

「あれは遥にとつてたつた一つ残された母親との大事な繋がりだ。お前らの戦争なんて関係ねえ」

「変わらねえな……だから由美もお前に魅かれただろう。皆お前の味方をする……昔からだ……」

「お前……俺の事を憎んでるのか？」

「分からねえ……俺自身お前をどう思ってるのか……だが、結局俺はお前を裏切つた。風間の親父もな、もう後戻りは出来ねえ……」

「まさか……風間の親つさんを撃つたのは!?!」

錦は微妙な笑みを浮かべながら

「流石にあん時は手が震えた」

我慢の限界だった。席を立ち錦を殴る。

「止めて！止めてよ2人共！」

麗奈が止めるが俺は気にしない

「てめえ！親つさんに世話になつた恩はねえのか！」

「まだ、くたばつちやねえだろ！それに今はシンジも一緒だしな……」

そう言つて錦は胸からトランシーバーを取り出した

『親つさん、着きました』

「!?!お前……シンジを盗聴して……」

「10年前のあの日から俺は誰も信用しちやいない！俺は俺のやり方で東城会の『頂点』に立つ！どうしても美月の娘寄越さないつて言うならお前でも容赦はしない」

「好きにしろ……だが、遥は渡さない。お前の道具になんか……させや

しねえ」

錦が出口に向かって歩き出す。

「今さらだが、お前とはもう一度やり直したかった…だが、それももう終わりだ。もう今日限り兄弟じゃねえ」

錦が出ていく。

「何でこんな事になっちゃったの？ねえ………なんで？」

くく 錦山視点くく

「(桐生…何故だ)」

考えていると、あいつらが来た。

「親父…手筈通りで？」

「………ああ………やっつけてくれ………」

「はい……」

「(桐生…悪く思うなよ。ここで死ぬならお前はそこまでだ)」

くく 桐生視点くく

しばらく、その場に立っていたら、突如入口、裏口から木刀を持った奴等が入ってきた。

「錦の組か？」

相手は答えず、仕掛けてくる。

振り下ろされた木刀を避け、そのまま蹴る。

「(全員木刀か…なら)」

「麗奈、すまん！」

麗奈に一言謝ってから壊し屋スタイルになり、そばの机を掴み振り回し全員倒した。

どんなに刀の使い方が上手くても攻撃のリーチ外からやっつけてしまえば関係ないのだ。

「ふう…すまなかつたな机を壊してしまつて」

「大丈夫よ…そこまで被害は出てないから…むしろこの位ですんで、良かったくらいよ」

「そうか……」

会話をしているとセレナの裏口側から段々騒がしくなってきた。

相手側に先制の意味も込めて、すぐ側に倒れていた奴の首を掴み、

裏口側に放り投げた。

ガンッ！

ゆっくりと裏口に向かって歩みを進めると下にはかなりの人数が居て、後ろの方から一人の男が出てきた。

「お久しぶりです。桐生の叔父貴」

そこには錦の若頭の奴が居た。

「親父の命令です。恨まんでください…殺れ！」

その言葉が開戦の合図だった。

すぐさま下に飛び降りる。

<錦山組構成員>

改めて周りを見ると若頭の奴は日本刀、他の奴らはドスや木刀を持っていた。

「(これだけの数となると流石に動きの遅い壊し屋だと辛いかな…なら…)」

ラッシュスタイルにして、何処から来てもいいように構えた瞬間に二、三人から一斉に攻撃が来る。

二人の攻撃を躲し、残り一人を喰らう前に倒し、そのままその持つていたドスで別の敵の腹を刺す。

「(ふう…多いな…次は…)」

ラッシュスタイル特有の速い手数で一人を後ろに仰け反らせる。すると、周りの奴らの行動が遅くなる。その瞬間に仰け反らせた奴ごと吹き飛ばす。

そのまま堂島の龍スタイルに切り替え、一人を掴み投げる。壊し屋スタイルで突進する様にして一人を抱きつくようにして、背骨を折る。そいつを投げ飛ばし、別に狙いをつけ頭を掴み蹴る。

チンピラスタイルになり木刀を掴んだその瞬間若頭の奴が襲いかかってくる

すぐさま木刀でガードするが、相手は日本刀なので綺麗に切断されてしまう。

「!?クソっ！」

顔に一発しかし、相手も仰け反ったため掠る程度で終わってしまった

う。

その直後に感じる背中への重み、他の連中に木刀で殴られたのだ。

「オラァー！」

痛みに苦しむ暇はない。瞬時に壊し屋スタイルになり他の連中を飛ばす。

「(はあ：仕方ない。少し喰らうか)」

それを考えた瞬間、俺は腰を低くし気合いを入れた構えをとった。すると連中は何かしてくると思っただのか、木刀を持った連中が一齐に向かい掛かってきた。すると他の連中は攻撃する素振りを辞めた。

傍から見ると約十人対一人、ボロボロなのは俺だと攻撃してない連中は思っているかもしれないが、実際は疲れているのは錦の組の方だった。

『レジストガード』

壊し屋スタイル特有の攻撃力や安定感を防御に振る事で並大抵の攻撃ではビクともしないという事だ。

「はあ：はあ：クソなんだよこいつ！」

そう一人が言った時だった。その言葉と同時に皆の攻撃が止む。

「(今だ！)」

そう思った時にはもう身体はすぐさま狙いを決めていた若頭の奴に近付いていた。

「何?!」

急いで日本刀を振るが

「遅い！」

振ってくる日本刀を白刃取りで取ってしまい、全力の蹴り

ドゴツ!!

鈍い音と共に奴の身体は壁に激突した

「あ、アニキ！」

「もう：終わりだな。そいつを連れてきつさと病院にでも行くんだな」

「うおおおお！桐生うう！」

「オラァー！」

後ろから襲ってきた奴を吹き飛ばす。周りを見るともう戦意を持っている奴は居なかった。

「ふう……これ以上襲って来なくて正解だったな。皆来ていたら俺は全員叩き潰さないとイケない。そうすると少なくともそいつはかなり危ないぞ」

そう言っただけで俺は若頭を指した。

「錦に言っつけ。何人お前の組の奴を使ってもいいが、俺を倒したいなら……」

俺はそこまで言っただけで止まった。だが、

「お前が来いってな」

もう腹は決まった。

そして裏路地を抜けて、賽の河原へと向かう。

桐生が賽の河原へ向かった時賽の河原方面に大きな煙が立ち込めていた。

16話

カラーギャング

桐生さんと遙ちゃんとの仲直りを上手く果たし、セレナと同じ様に賽の河原を第2のアジトにした翌日

俺は朝早くから電話を掛けていた。

掛けている番号は前に心愛から受け取ったあの電話番号

俺は不安な感じを胸に抱きながら電話を掛けた。

着信音がなる中、ふと桐生さん達の方を見ると何か話している様だ。何を話しているのかと気になったがそんなのはすぐに消えた。電話が繋がった。

「もしもし…誰だ？アンタ」

電話に出たのは男だった

「(なんだ？心愛自身の携帯じゃねえのか?)」

不思議に思ったがそのまま続けた。

「俺は黒瀬竜也、南心愛に用があるんだ」

「……………ちよつと待ってろ」

「ああ…」

そして2分くらい過ぎただろうか？今度は聞き覚えのある声が聞こえた。

「もしもし！竜也くん！」

電話越しだと言うのに大きい声で俺はかなりビビった。それになり焦ってるように感じた、しかし何故か安心した。

「もしもし、心愛か？」

「うん。良かった無事だったんだね」

なるほど、心愛が電話に出たとき少し焦ったふうだったのはあの時俺がどうなったかを知らないからか。

「ああ、ぜんぜん問題ないぜ」

「(まあ気がついた半日くらいは顔しかめるほど痛かったがもう今は何ともないしな)」

「良かったあ」

「まあ俺の心配は良いとして」

「うん…あの話の続きだよ。今日空いてる？」

「ああ、また港か？」

「うん、大体10時位に、来てくれると」

「OK、じゃあまた」

「うん」

そうして電話は終わった。終わった少し後に桐生さんが話しかけ
てきた。

「竜也、お前は何か用事あるのか？ないなら一緒に何処か回らないか
？」

「いえ、今日用事入っちゃって…なんでまた今度」

「ああ…」

「すいません」

「いや、大丈夫だ」

そう言っただけで桐生さんは行ってしまった。

「(桐生さんホントにすいません)」

心の中で何回も謝罪した

「(さて、港に10時って事はもうちょいだけゆっくり出来るな)」

携帯で時刻を確認してみると8時ちょいだったので、タクシーは公
園の近くにあるので、そんなに急ぐ必要はない

「伊達さん、俺もうちょいしたら一回出掛けて来ますね」

「分かった。時間掛かりそうか？」

「多分、そんなには掛かんないと思います。もしかして伊達さんの方
も何かありますか？」

「一応聞いてみただけだ。俺の方は何もねえよ」

「分かりました」

港に着いて時間を確認してみると9時40分くらいだった。

「(意外とまだ余裕あったな)」

周りを見回したが心愛の姿はおろか俺以外の人は一人も居なかつ
た。

「(じゃあ来る前に頭ん中整理しとくか)」

俺の感だと桐生さんを探してる人は遙ちやんが身に付けているペンダント並びに100億とも関係しているはずだ。

「(この事の始まりは東城会三代目会長の消えた100億から始まったんだ。そうだ、そしたら桐生さんが神室町に戻ってきて遙ちやんもこっちに來て:)」

「えっ……」

俺は自然と声が出てしまった。だからだろう丁度今來た彼女に氣付いたのは

「ごめん、竜也くん待った?」

恐らく急いで來たのだろう。息が少し荒かった。

「ああ、いや大丈夫だ」

「良かった:」

「悪い、今すぐ聞きたい事があるんだ」

「うん、前の話の続きだよね」

「いや、違えんだ」

「え?」

「あのさ、確かその人桐生さんを探してるって言ってたよな」

「うん:それがどうかしたの?」

「お前ら、なんか隠してね?」

「え?隠してるって何を」

「俺さ、お前が来る前にちよつと頭ん中整理してたんだわ。そしたら100億事件が始まった途端に桐生さんが神室町に來たっていう事が分かった」

そう、俺の疑問点はそんな事件が起きた瞬間に(もしくは少し後に)來たという事。

「もし、それらが何も関係ないなら謝る。でも俺には仕組まれてる様にしか思えねえんだ」

ふと心愛を見ると下を向いていた。そしてか細い声で静かに言った。

「ごめんなさい、それは:知らないの:」

「そうか…悪いな俺も聞いちゃって」

「ううん、竜也くんのせいじゃないよ。たまたま計画してから実行するまでに時間かかってたからだと思う」

そう言っただけでまた心愛は顔を下げってしまった。

「顔上げろって、別に大した理由じゃねえならそれでいいよ」

別にこの件に関してはある程度裏がとれたらそれで良いと思っただけでもうこれ以上気にしない事にした。

「う、うん…ごめん…なさい…」

「(あ、あれ？心愛？泣いてる?)」

声がちよつと止まり止まりなのを聞いて、そう思った。

「……」
暫く心愛が泣き止まなかつたので、10分くらいだろうかと、一人にしとくのは色々と危ない気がしたので傍にいて落ち着くまで待つことにした。(本当は飲むと心が落ち着いたりする紅茶などを飲ませたかったのだが、手持ちも何もないこの状態ではどうすることも出来なかつた)

「もう、大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

「良かった。じゃあ急かす様で悪いんだけど」

「うん、桐生一馬さんを探してる人は風間新太郎さん」

「風間新太郎さんね…え!?風間さん、その人って確か…」

「東城会直系風間組組長…今私はその人に匿ってもらってるの。もしかして竜也くん知ってるの？」

「一応ね」

流石に東城会直系の組に匿ってもらってるという情報には驚いたが神室町を歩いている人なら風間組の優しさなどは嫌でも耳に入ってくる。

例えば、風間組のシマでシノギをやってるホストやキャバなどももちろんあるが、みかじめをあまりとらないなど、他には俺もお世話になった養護施設ひまわりの設立者でもある。

「そうか、あの人が…」

確かにあの人なら桐生さんとも接点があるし、心愛を匿っていてもおかしくはない（あの人の優しさは俺も分かっているため）

「ありがとな、言ってくれて」

「ううん、大丈夫だよ。それより…」

「ん？」

「その、竜也くんは大丈夫なの？」

「この前のやつ？」

「それもあるけど、こんなヤクザ間のいざこざに巻き込まれて」

「ああ、なるほど」

そんな事か

「別に、俺的には何も思っちゃ居ねえよ。ただ俺は…」

「俺は？」

「…いや、何でもねえ」

自分でも何が言いたいのか分からなかった。

「（まあ、大した事じゃねえんだろうな）」

「変な竜也くん」

「まあ、いや。これからどうすんだ？」

「竜也くんが桐生一馬さんに連絡とれたら言っただけでも、風間さんと私の都合で今神室町に居る『シンジ』って男を探して欲しいの」

「シンジ？」

「うん、私と一緒に風間さんを匿ってる人」

「分かった。今はあの人と行動共にしてっから、言うのは直ぐに出来る」

「分かった。じゃあね」

「おう、じゃあな」

神室町に戻ってきて時間をしてみるとお昼時だったので、天下一通りの近くにある寿司屋により、賽の河原へと戻った。

「伊達さん、戻りました」

「ああ、竜也か。意外と遅かったな」

「まあ結構経ちましたね。遥ちゃんは？」

「今寝てるよ。まあ子供はちよつと寝すぎ位が良いんじゃないかねえか」
「ですね。花屋は奥ですか？」

「ああ、居ると思うぜ」

『『思うぜ』って事は会ってないんですか？』

「まあ、奴はずつと引きこもってるしな」

「(引きこもってるって…まあそんな感じだけど)」

「分かりました。とりあえず行ってみます」

「花屋、いるか？」

「どうした？」

「神室町の情報何かねえ？」

「どうゆう風の吹き回しだ？急に情報何か求めだして、情報屋にでもなるつもりか？」

「全然、ただ知りてえただだよ。まあ情報つってもどっかの組が動いたとかさうゆうのな」

「なるほどな…だが、生憎まったく言っていないほどないな」

「そっか、じゃあ寝るわ。何かあったら起こしてくれ。あ、桐生さん来た時も起こしてくれ」

「ああ、分かった」

そう言つて外に出た。しかし問題点が一つあった。

「さーて、しかし何処で寝よつかな？遙ちやんと一緒に部屋なんてのはいくら何でも可哀想だし…」

そう、寝床だ。流石に河原の一部スペースをアジトにしたのは良いが、現在そこでは遙ちやんが寝ている。生憎俺にロリコンなんて趣味は無いので、とても困ってしまった。

「あ！そうだ、あの人の家があったじゃん」

そうして俺はすぐさま移動した。

「お邪魔します…あれ？居ないんですか？秋山さん？」

そう、俺が言った部屋とは秋山さんの家だ。しかし中を見ると人の気配は無かった。

「うーん、まあいつか。その内帰ってくるだろうし、帰ってきて起こさ

れたら理由を説明すればいいし。」

そう思つて俺は眠りについた。何故だか猛烈に体が疲れていたように直ぐに眠れた

不意に目が覚めた。

「うーん、今何時だ？」

携帯で確認してみると18時近くだった。

「(秋山さんは…まだ帰ってないか。結構頭も冴えたしもう十分かな。桐生さんもう帰つてきたかな?)」

そして外に出ようとした瞬間

ドオン!!

河原の入口が吹き飛んだ。

「なっ!」

そこから赤、青、白のジャージを来た集団がゾロゾロと出てきた。

「ヒヤッハー!!」

「やつちまえ!」

入口を爆破させ、ゾロゾロと入ってきた集団は、近くにいたホームレスを襲い始めた。

その光景を見た俺は怒りを抑えられなかった。

「てめえら…何してんだ!!」

そう言つて俺はすぐさま近くにいた奴を蹴り飛ばす。しかしそのまま気絶だけではすまさない。足を掴みアスファルトに叩き付ける。

「一人も、逃がすかよ!」

他の連中を見つけ、そのまま後ろ回し蹴りで全員飛ばす。その中でも直撃喰らつた奴はもう白目を向いていた。

「なんだてめえ!」

青いジャージを着た奴が殴りかかってきたが

「遅せえんだよ!」

腕を掴み引きつつぶん殴る。普段ならそれで終わりだが、今日だけは違った。

腕を離さず、そのまま殴り続ける

ドカツ！ドゴツ！ドゴツ！

鈍い音が響き続ける。

改めて見ると最早顔の形をちゃんとしているのか怪しいくらいになっっていた。

「次…」

そう言った直後頭への衝撃

「グッー！」

直ぐに後ろを振り向くと、金属バットを持った奴一人、素手で構える奴が三人居た。

「ふう…ふう…んなもんで簡単に倒れるかよ！」

痛みを伴っている頭で金属バットを持っている奴に頭突き、すると奴は堪らず、金属バットを離す。そのまま踏みつけ無効化

「個別で行くな！全員でやれ！」

そう一人が言うのと三人全員で襲ってきた。

「はあ…はあ…サンキュ、助かったわ」

「なn」

一人が反応しようとしたが、出来なかった。もう三人共やられたからだ。

通常、三対一となると一人は何も出来ない。しかし、それは囲まれた場合や例外のケースの時だけだ。

今回の場合、俺の向こうに三人が並んでいる状態で三人が一斉に向かって来た。そうすると全員一斉に攻撃が当てられる訳は無いので、自然とタイムラグが生じる。その瞬間にマシンガンスタイルに切り替え、真ん中に居る奴をアッパーで吹き飛ばし、中心に居たまま自分を軸に回転蹴りを行った。

頭に金属バットを受けたせいなのかは分からないが怒りが剥き出しになるのは収まってきた。

「(さっきも無駄な怒りで気配感じられなかったしな。少し落ち着こう)」

そうして落ち着いた状態で周りを見てみると目の前に一人、ジャージ等ではなく、スーツに似た服装をしてる奴がいた。

「(こいつは…怒りに身を任せて勝てる相手じゃねえな)」

直感がこいつの実力を分かっていた。

「オマエカ、ヒトリダケツバヌケテ強いヤツが居るとイツテイタガ」

「カタコトにしては随分喋れんだな」

どうやら日本人では無いらしい。

「なんでここ襲った？」

「ナゼ、ワタシにキク？」

「おめえだろ、この襲撃の犯人。まあてめえじゃねえとしてもあのジャージの奴ら仕切ってるのは間違いないでめえだ」

「ホウ…」

「狙いは花屋か？それとも河原自体か？」

すると男は冷静に答えた。

「100オク」

俺は、全部分かった。今この場所に100億なんて大金はない。しかし、それに通ずる少女が一人いる。俺の最後に話聞いた位置からすると河原の入り口近くに

「てめえ！遙ちゃんに何かしたら殺すじゃ済まさねえぞ！」

<白スーツの男>

一歩踏み出す。すると奴も早いスピードで俺に近づく。しかし、拳一個分は俺のが早かった。

ドゴツ！

「(くそ、パワー足んねえし！)」

やはり、威力が低い為か吹き飛んだにも関わらず、改めて体制を立て直し、こちらへ向かってくる。

「おいおい、嘘だろ」

だが、嘆くのすら遅かった。

ビキッ！

奴の回し蹴りにより、俺の体も宙に浮く。それだけならまだしも明らかに肋骨にヒビが入っている。

「ったく…もうちよいだけ本気出すか」

肋骨部分を擦りながらそう呟くと、俺はハンドガンスタイルに戻

し、ヒートを出した。

「……」

すると奴もそれに呼応するかのようにならぬでヒートを出す。だが、お互いのその拳が交わる事は無かった。

「様、オワリマシタ」

「イマイク。スマナイガコレ終わりダ」

「おい、あんだだけ暴れてはい、そうですね返す訳ねえだろ。もしくはほかの奴らを……んだよ、そうゆう事かよ」

気が付けばあんだだけ騒がしかった周りはまったく無く、ジャージ姿の奴らは一人も見当たらない。

「足止めって事か」

「モチロン」

「じゃあ簡単だよ。てめえは潰す」

「悪いがヨウジがアルノデナ」

そう言っただ奴は俺に針のような物を投げしてきた。回避して、奴が居た方を確認したが、既に奴の姿は無かった。

「クソっ！」

俺は近場にあったダンボール箱を蹴り飛ばす。しかしそんな暇が無い事も思い出した。

「そうだ！ 遙ちゃん！」

俺は急いでアジトへと戻った。

—————

〳〳桐生視点〳〳

河原に近付くにつれて嫌な予感がした俺は、急いで河原に向かった。すると、嫌な予感は的中していた。

「これは……」

河原から黒煙が舞い上がっていた。恐らく火事か何かがあったのだろう。既に鎮火していた為、直ぐに中に入れた。そして目に入って来たのはホームレスの巣窟とも言えるべき河原がボロボロになっていた光景だった。

「(一体、何が……)」

そんな事を思っていると伊達さんに竜也、花屋が居た。

「(とにかく、まずは情報集めないと…)」

「伊達さん！一体何が…」

「桐生！戻って来たのか」

「桐生、来たか…」

「桐生さん…」

伊達さん、花屋、竜也の順で話し掛けてくる。竜也だけが罰が悪そうにしている。

「皆、何があつたんだ？この状況は…」

しかし、誰も話そうとしない。

「俺が話そう…」

伊達さんがようやく口を開いた。

くく伊達視点くく

「まずは、あれから話した方が良さだろうな」

最初は遥が河原から出ようとしていたんだ。

「遥、どうしたんだ？」

「私…やっぱりここに居ちゃいけない気がする。私、桐生のおじちゃん好き。それに竜也くんも、でも私がここにいたら、おじさん達の迷惑になっちゃう。何度も危ない目になっちゃう」

「遥……」

「だから、私は居ない方がいいの…お母さんももう居ないし、本当はおじさん達ともっと一緒にいたいけど…」

その瞬間だった。突然河原の入口が爆発したんだ。

「遥！」

くく桐生視点くく

「俺は遥を守ろうとしたがダメだった…」

俺が錦と話してる間にそんな事が…

「すまねえ桐生、奴ら『ギャング』の連中だ」

「ギャング？」

「簡単に言えば愚連隊だ。ヤクザに頼まれた事なんかも簡単にやっちゃまう。普段は『赤、青、白』の三つに分かれてるんだが、今回は一氣に来やがった」

「東城会に頼まれたのか？」

「恐らくそうだろうな」

「…多分、東城会じゃないです」

「何？どうゆう事だ」

今まで聞いていただけだった竜也が突然言った。その言葉に花屋が反応する。

「どっかの国の奴です。その中の幹部も一緒に居ました」

「って事は竜也、お前ギャングに頼んだのがマフィアだって言いたいのか？」

「ええ多分、ほとんど確定で良いと思います」

「（東城会じゃねえ奴が遥攫つただと…だが、とにかく今は…）」

「遥攫つたのは何色なんだ？」

「河原のシステムがダウンしている。分からねえんだ」

「なら、シラミ潰ししかねえな。行くぞ竜也」

「……はい」

河原の外に出た時竜也が話しかけてきた。

「すみません！」

「何？」

「あん時桐生さんは居なかったから、俺が守んなきゃいけなかった筈なのに、俺のせいで」

「ふっ、何だそんな事か」

「えっ？」

「別に誰のせいでもねえさ。まあ強いて挙げるならギャングのせいだな」

「どうやら、竜也はまだ良く、理解出来ていないらしい。」

「とにかく、行くぞ。急いで遥を助けるんだ」

「あ、それなんです俺白色のギャングのアジトなら知ってます」

「本当か？」

「前に一回聞いた事があつて。多分変わってないと思います」

「よし、なら最初は白だな」

――――
竜也が案内してくれた場所には白色のジャージを着た集団がゴロゴロと居た。

「どうやら、変わってなかったみたいだな」

「ええ、ですね」

「何だてめえら？ここになんか用かよ？」

「雑魚に用はねえ。このボスはどいつだ？」

「おい、おっさんいい加減に」

「させるかよ」

俺の裾を掴もうとした奴の腕をキリキリと竜也が締め上げた。

「いつー」

どうやらそのまま気絶してしまったらしい。

「お前ら何者だ？」

「お前がボスか？」

「質問に答えろ」

「年輩の質問に、答えるのが先だと思うけどな」

「……やれ」

他にここに居た連中が襲つてこようとするが

「ストップ、悪いな。ちょっと寝てろ」

さて、竜也が相手するという事は

「俺はこっちか」

何時の間にか持っていたナイフで俺の喉を切るつもりだったのだろうが、余りにも遅すぎた為直ぐに掴んでナイフを折ってしまった。

「さて、まだやるか？」

気付けば竜也の方も終わっているらしい。リーダーの男はこんなに早くに決着が付くとは思っていなかったのか、困惑し続けている。

「一発殴つとききます？」

「そうだな、このままだと喋りそうにないしな」

竜也が拳を振りかざした瞬間

「赤だ！」

「ん？」

「今回の一件俺らも青も全部赤に言われてやった事なんだ。赤のアジトは劇場前のデボラってクラブ。俺が知ってんのはこんくらいだ」

「信じます？桐生さん？」

「まあ嘘を付くメリットは無いな」

「ですよ。しゃあねえからほら、もう行けよ。これに懲りたら二度とギャングなんかやんじゃねえぞ」

そうして竜也が歩き出した途端、奴が襲ってきた。鉄パイプを持って、ちなみに俺も竜也もため息しか出ていない。

「俺がやろう」

鉄パイプを振りかざした時にストレートを顔面に入れる。

ボキボキッ！

骨が碎ける音を立て男は崩れ落ちた。

「馬鹿だな。お前」

竜也が憐れみの言葉を掛けた。

「さて、劇場前のデボラ」だったな。行くか」

デボラに着くと下の階が閉まっていたのでとりあえず上の階に行く事にした。

「桐生さん、下にいる奴ら」

「全員赤か…」

この前花屋の一件の時は様々な人が居たデボラだが、今回は赤のジャージを着た連中しか居なかった。

「どうします？」

「待つのは嫌いなタチでな」

「…俺もです」

そうやって俺らは下に行き、ドアを蹴り破った。

「んだ！てめえら！」

下っ端に分類されそうな連中が一気に吠える。

「遥は何処だ？」

「あ？何だよおっさん」

「遥は何処だつて聞いてんだ」

「あんた、何もんだ？」

音楽機器の近くに細身と太い奴の細身のほうが言ってきた。恐らくあいつら二人がリーダーなのだろう。

「俺の事は関係ねえ」

「…人のアジトに勝手に入ってきてそれはねえだろう」

「はあ…ダル」

竜也が不意にそう呟いた。

「めんどいのは嫌いだからよ。どうせ話し合う気ねえなら…やろうぜ」

「上等だ。てめえら…このおっさん共に喰らわせてやれ！」

恐らく3分位しか経っていないだろうか。もうこの場に立っているのは俺と竜也、そしてリーダー格の二人だった。

「後はお前らだけだ」

「しゃあねえ。やるぞ兄弟」

「ああ」

「どつちがどつちとやります？」

「俺は細身の奴をやる。異論はあるか？竜也」

「いや、俺はあのデブの方やろうと思つたので大丈夫です」

「どうやら随分と舐められてる様だな」

「御託は良いから来いよ」

竜也がわざとらしく人差し指で挑発する。すると太い男の方がその体格からは想像出来ないスピードで近づいた。

「さて、俺らもそろそろやるか」

「あいつ、死ぬぞ」

「ふっ、人の心配なんてしてる場合か？」

「まあ、良い。まずはアンタだ」

〈赤ギヤング〉

やはり細身の見た目通り軽いフットワークで翻弄しているが、
「確かに早いな。俺たち以外だったら見えてないだろうな」

意外と遅かったので目で追うことが容易に出来てしまった。

「行くぞー!」

「遅い…」

バキッ!

勝負は一瞬だった。先程までのフットワークを生かしたスピードで来るが、パンチのスピードも見えていたので躲し顎に正確に蹴りを入れて顎が碎ける音を聞きながら終わった。

竜也の方もあの巨体を背負い投げして終わった。

「はあ…しんど」

「良く投げ飛ばせたな」

「まあ、桐生さんを参考にしたというか」

「俺を?」

「それは置いといて、今は…」

「ああ…さて、改めて聞こうか。遥は何処だ?」

「クツ…誰が…」

胸倉を掴み持ち上げる。

「お前が喋っていいのは、遥の居場所か、遥攫った連中の名前だけだ」
「…:もう、ここには…居ねえよ…」

「何処にいんだ?」

「俺らは『蛇華』に渡しただけだ。そっから先は知らねえんだ」

「『蛇華』だと?」

「知ってるんですか?桐生さん?」

竜也が聞いてくる。恐らく今の俺の顔はとても驚いた表情になっている筈だ。

「ああ、昔お前に知り合う前に一悶着あってな」

「そんな奴がなんで急に?」

「分からん。だが、『蛇華』は横浜に居る。伊達さんに頼んで横浜に行こう」

「分かりました」

出ようとしましたが時、俺は静かに呟いた

「劉 家龍か……」

親っさんに助けて貰った過去を思い出しながら俺は竜也の後を追った。

17話

準備 潜入

くく竜也視点くく

アジトに戻った俺達は伊達さんに遥ちゃんが横浜に居ること、やはり東城会ではなく、「蛇華」という組織が関わっている事を伝えた。「(つて事はあいつは蛇華の幹部つて事か…恐らく乗り込めば奴も居るはずだ…)」

「桐生、どうする?もう横浜に行くのか?」

「いや、少し用意をしよう。流星に蛇華の日本支部に向かうのに何も無しつてのは辛いからな」

「分かった。俺の方は準備は出来てるから用意が出来たら俺に声を掛けてくれ」

「だ、そうだ。竜也の方も何か準備する事があるならしておいてくれ」

「分かりました」

桐生さんが出口に向かったと同時に俺は河原の奥へと向かった。

「?何処に行くんだ?」

桐生さんと同じ様に神室町に行くと思っていた伊達さんが俺に話し掛ける。

「ちよつと向こうに用事があるんで」

「そうか…用事やら用意を済ませるなら早い方が良いぞ。蛇華の連中も遥をどうするのか分からない以上、早いに越したことは無いからな」

「分かってます…」

伊達さんの忠告を聞きながら奥へと向かった。河原の地上の中心には大きく開けた場所がある。

その端の方に用のある男が居た。

「よう、あんたが無事だったようで安心したわ。…まあてめえがやられるなんて思っただけだ」

「……誰かと思えば黒瀬か……何の用だ?」

「武器が欲しい」

「必要無いだろう」

「ぶちのめしたい奴が居てな、そいつやるのに必要なんだわ」

「お前が必要になるほどの奴なんてな…まあ良いさ。余り過激すぎるのは無いが、ある程度ならあるぞ」

そこまで言っただけ裏に置いてある風呂敷を広げるとそこには傘やバットなど日常的に使う物もあれば、スタングレネードなど普通使わない物すら置いてある。

「(十分過激だと思っただけ…まあいいや)」

「……………これで良いや」

そう言っただけ俺が選んだメリケンサック一つだった

「これだけで良いのか？」

「そんなに持てねえし、傘とかよりは簡単にしまえる物のがいいしな」

「……………一応言っておくが、耐久性はあまり無いぞ」

「全然良いさ。無いよりはマシだし」

「お前がそう言うなら別に良いが…」

「いくら？」

「まあ500円ってところか」

「やつす…まあいいや。とりまサンキューな」

「ああ…」

急いで伊達さんの所に戻るともう桐生さんも居た。

「すいません！」

「遅かったな」

「もう竜也も準備出来たのか？」

「……………言い難いんですけどこっから薬局に行きたいんですけど…」

そう言っただけ二人の反応を見ると、特にこれといって怒っている感じはしなかった。

「そうか。じゃあタクシーは止めて俺の車で行くか」

「伊達さんのですか？」

「ああ、そうすりやお前達二人を『天下一通り』で拾えるからな。桐生は先に行っただけ。そして竜也は薬局に行っただけだからこっちに来ればいいからな」

「そうさせて貰おう」

「分かりました」

そう言つて伊達さんと桐生さんは動き出す。

「俺も急がねえと」

「いらつしやいませ」

薬局に着いた俺は急いで買い物を終わらせる

「んーと、スタミナミンXX三本くれ」

「7500円になります」

「(ま、しゃあねえ出費だな)」

「ありがとうございます」

「よし……行くか……」

気合いを入れ直し桐生さん達が待つ天下一通りへと向かった。

「竜也のが早かったか」

天下一通りに着き、桐生さんを発見して周りを見ると、伊達さんはまだのようだった。

「もう準備は万端か？」

「はい、大丈夫です」

「後、10分位したら伊達さんも来るだろう。ちなみに何を買ったんだ？」

「一応、河原襲つた奴との闘いに備えてのメリケンと、薬局で買ったスタミナミンXX3本ですね。桐生さんは？」

「俺も薬局で自分局のやつを2本だな」

「すまねえ、遅くなった。もう二人共来てるみたいだな」

「ああ、行こう」

もうすぐで横浜に着くという時に伊達さんが口を開いた。

「劉 家龍」に「蛇華」か……厄介な連中まで絡んできちまうとは」

「ああ……」

「大体だ。桐生、ペンダントはともかく、連中が遙をどうこうする理由はねえからな」

「……竜也は知ってるかも知れねえが、伊達さん…遥は見たこともねえ母親探しにたった一人であの街に乗り込んできた。9歳の女の子がだ。ただ母親に会いたい」その一心でだ」

「です」

「遥が俺らから離れようとしたって聞いた時、俺は…10年前の事を思い出した。」

「何より大事なものを守りたい一心で自分のしたことをしんじてた時の気持ちを…だが、今おもえば俺は知らない内に逃げていたんだろ。」

「その人間が背負うべき運命を見てられなくて…俺は見届ける勇氣すら無くて、奴の人生を曲げてしまった。」

「だが、こうも思ってしまうだ。『運命に逆らった自分は正しかったはずだ』 大事なものを守るために必死になった人間はどんな壁だって乗り越えるんだ』ってな…」

俺は後部座席に座ってるため桐生さんの表情を確認する事は出来ないが、声のトーンなどから恐らく悲しい顔をしているんだろう。「美月が死んで、遥はあの小さい体で必死に歯食いしばってる。あいつが運命と闘うなら…俺はあいつの為に命張ってやろうと思うんだ…」

—————

横浜に着いた俺達は中心部にある『翠蓮桜』という見に来ていた。「ここが、蛇華のアジトなんですか？」

「そうだ。伊達さんは例の捜査を探ってくれないか？悪いが今の伊達さんは足手まといになる」

「ハッキリ言いやがる。……まあお前ら二人なら問題無いだろう」

「さて、行くか」

桐生さんを追う形で行こうとしたその時

「おい、お前ら！」

「伊達さん…？」

「死ぬなよ…」

「んな簡単に死にませんよ」

そこまで言って店内に入ってしまった

「お客様、お二人様でしょうか？」

「〃劉 家龍〃に伝えろ。桐生一馬が会いに来たと」

「あいにくですが、当店にはそのような者はおりませんが…」

「桐生さん、カウンターの方…」

俺の言葉に釣られ、桐生さんもカウンターを見る。そこには必死に何処かに電話を掛けている男が居た。そして目があった瞬間、アサルトライフルを乱射してきた。

「!?くっ!」

「嘘だろ!」

俺は瞬時に近くにあったテーブルを蹴りあげそれに隠れる。

桐生さんの方は本来なら絶対しない行為だが、本能が生きる為をやったのだろう。俺らに話し掛けてきたウェイターを盾にした。

リロードのタイミングを逃さず一気に近ずき顎を正確に狙い脳震盪させる。

「ふう…いきなり熱烈ですね」

「ああ、だがまだまだ序の口らしい」

桐生さんの目線の先を見ると青竜刀や、ピストルを持った連中がぞろぞろ居た。

「(ツチ、流石にあの数まともに相手すんのはキツすぎる…ん?あれ使えば…)」

「桐生さん、青竜刀持ってるヤツらだけでもいいんでこっちに連れて来れますか?」

「何をするのかは知らないが…問題無いぜ」

「ありがとうございます」

「(俺が急がねえと…)」

リロードの途中だった銃を急いでリロードさせる。

「※※※※※※※※※※」

聞き取れない言語を発しながら一目散にこちらに向かって来る。

「待ってましたよっ!」

ガガガガ!!バキン!

店の上にあるシャンデリアを吊るしていた金具を狙い撃つ。
シャンデリアが外れ、向かって来た連中全員巻き込まれた。

「ふう…ギリギリ…!？」

安堵している隙に撃ってきたであろう弾を避ける。

「つぶね…次行くか…」

桐生さんの方を見ると、既に銃を持っている連中を壊滅目前まで追い込んでた。

「(これ…俺居るか…?)」

持っている銃を下ろし、桐生さんの居る階段に向かう。

「なるほどな、シャンデリアを落としたのか」

「ええ、なかなかの数だったんで、一気に減らそうかなと」

「(まあ、半數位減らせたなら良いなって思ってたんだけど…バカ過ぎるだろ)」

「さて、次行くぞ」

「はい…」

二階のドアを開けると調理場だった。そこには普通の蛇華の兵隊が4、5人と料理長らしき人物がいるだけだった。

「桐生さん、あの料理長みてえなの俺に任せてもらっても良いですか？」

「……………ああ、良いぜ。じゃあ他の連中は俺に任せとけ」

「すいません。助かります」

「(さて、あーあー中華包丁なんか武器にしちやって…勿体な)」

指を曲げ挑発する。

「言葉分かんなくてもこのくらいは分かんדר？」

「※※※※※※」

<蛇華構成員>

菜切を投げってくるが特に動かず回避、直ぐに中華包丁を振り回してきた。

「遅え…」

バックステップで避け少しジャンプして蹴りで一本折る。

回避が足りず薄く斬られてしまうが気にしない。

「※※※※!!!」

「折られて怒ってんのか？ハッ!?笑わせんなよ…じゃあ使うなよ」
パンっ!

マシンガンスタイルで目の前に移動し猫騙しをする。簡単に包丁を落としてしまった。

「下、向いてる暇なんかねえぞ」

ドゴツ!

鳩尾に思いつき蹴りを入れる。

「※※!?……」

「だから…俯いてる暇すらねえよ……」

グキっ!

顔を踏み潰す勢いで踏む。

「あーしんど」

スタミナミンXXを1本飲みながら呟く。

「相変わらず強いな」

「いやいや、桐生さんが言うど嫌味にしかなんないですよw」

「い、嫌味?そんなつもりは無かったんだが…」

「(あ、桐生さんがチ凹みしてる。……まあ実際俺とか伊達さんからしたら桐生さんとか化け物レベルだからな。まあこれくらいは良いよな)」

「かなり怒っていたようだが、何が癪に触ったんだ?」

「いや、その恥ずかしいんですけど…包丁なんですよね」

「包丁?」

「ええ、まあ俺も料理をする身としてはあんな風にめっちゃめっちゃいい調理器具があるのにそれを凶器に使うのが許せなくて…」

「なるほどな…しかし竜也の料理か…食べてみたい気もするな」

「今度機会があれば作りますよ。とにかく、次の部屋へと行きましょう」

次の部屋への扉を開こうとした時

ビュッ!

少し開けた隙間から針が飛んできた。

「!?!」

ドンッ!

驚いている隙に近付かれ掌底で吹き飛ばされる。

「カハッ………て、てめえ!」

「こいつは……」

吹き飛ばしてきた相手は数時間前河原を襲ったリーダー格の男だった。

「サキホドリダナ。ソレに〃桐生一馬〃ダナ」

「俺の姿を知ってるという事は劉家龍に近い存在という事か?」

「ワタシのコトハドウデモイイ。劉様のメイレイダ。オマエらをコロス」

桐生さんに向かっていったが届く前に俺が殴った。

「おい……てめえの相手は俺だろ……」

「キサマ……!」

「桐生さん、先に行ってください。こいつだけは俺がやるんで」

「竜也……大丈夫なのか?胸の傷もあるし……俺がやるが……」

「大丈夫ですよ。そこまで深いやつではないですし、ある程度因縁あるんで」

「……分かった。そいつは頼んだぞ……」

「……イカセナイ」

幹部が向かっていくが

「だから、俺が相手だよ」

邪魔をする。

「キサマ……!!」

そうこうしてる間に桐生さんはドアの向こう側へ行ってしまった。

「ふう……さて、今回は止める野郎は誰一人居ねえ。思う存分……殺り合おうぜ」

俺はメリケンサックを拳に着けた。

「……シカタナイ。〃桐生〃は劉様にマカセルトシヨウ」

そこまで言うのと鉤爪を腕に着けた。

お互いにヒートを出し、お互いに向けて拳を突き出した。

<蛇華幹部>

キンツ!

鉤爪とメリケンがぶつかる音と共にお互いに下がる。

「(どう考えてもリーチ勝負はあっちのもんだ。それにヒートである程度加工してもただのメリケンじゃ直ぐに壊れちまう。何とか懐に入んねえと!?!クソっ!)」

距離を離れ過ぎると針を投げて来てそれに気を取られると鉤爪が目前までできてしまう。

腕を掴み膝蹴りを腹に入れる。

「グッ……」

「はあ……はあ……悪いけどその邪魔なもん壊させて貰うぜ」

ザクツ!

嫌な音に脇腹に熱い痛み

「ツ……」

叫び声をあげないように声を押し殺す。

「オラア!」

蹴り飛ばし俺も後ろに下がる。脇腹を触ると赤いものが手に付いた。

「後……すう……センチ奥だったら……ヤバかったぜ……」

「ソレをウケテモ、マダタツカ」

「ちよつと頑丈なのが……俺の特徴なん……でな……」

「(やべえ……周り霞んできやがった……立ってんのかすら怪しいぜ)」

ただ抑えているだけで血が止まる筈もなく、明らかに血が出過ぎている。

「ふう……ふう……飛ばすしかねえよな……」

マシンガンスタイルになり、ヒートを出す。

が、遅すぎた。

グググッ

「カツ……」

首を締められ声すら出せなかった。

蹴りを入れ抵抗するが奴の手が緩む事は無い。

「(や、ヤロオ……)」

その場で掴んでいるだけだったのだが、急に何処かに移動し始めた。

「(何だ…何処に……!?嘘だろ……!)」

あまり動かない首を動かしてみた先、そこにはコンロがあった。

「(あんなのに焼かれたら…火傷じゃすまねえぞ……!)」

炎が出ているコンロの前に立ち、凄まじい勢いで振り下ろされる。
ガッ!

キツチンの壁に持てる力の全てを使い、壁にしがみつく。

「……ムダなコトを」

ドコッ!

今みたいな状況じゃなければ直ぐに気絶してしまう程の拳を受ける。

「ツツ!カハツ……!」

「オワリダナ。『桐生』のホウモスグにカタガツクダロウ」

息が出来ず肺から空気が出るだけ。大きな出血と首絞めにより意識を保つので精一杯だった。

「ド……ドツラア!」

それはある種の賭けだった。しがみついていた手を離し足で奴の腰に巻き付く。

自由になった上半身で頭突きで仰け反った所を手刀を縦に降る。

「ウグ……」

奴も堪らず手を離す。

「まだだ!」

ライフルスタイルになり、抱きつくように手を腰に回し持ち上げ調理場からホールまで猛ダッシュで壁にぶつける

「グハッ!」

これは先程よりも効いているらしい。

しかしこれで辞めるつもりも無い。遠心力を利用し、下のシャンデ

リアが落ちている場所まで投げ飛ばす。

「フウ……オラァー！」

メリケンナライフルのパワーをフルに使い二階へと上がる階段を中心、両端を殴り壊す。

その代償として1つメリケンが壊れてしまうが特に気にしない。

「さて、次…グッ！」

脇腹が主張するように痛みを出すのが止まれない。

調理場に急いで戻り今度は扉に様々な棚等を置き直ぐに入つて来れないようにする。

そしてコンロに目を向ける。

「ツクソ……やるしかねえよな」

上着を全て脱ぎスタミナミンXXを口に入れるだけ入れて直ぐには飲まず空き瓶となったそれを手で力強く抑える。

ジュウ!!

「ンン!?!」

変な声を出しながら様々な形で全力で声を我慢する。

ちびちびと口の中にある飲み物を胃に入れながら耐える。

ビキッ!

今の音的に手で抑えていた瓶が割れたのだろう。

それすらもどうでも良くなる痛みのせいで何も考えられなくなつてくる。

段々と目の前が潤んでくる。

「(痛みで泣くのなんか何時ぶりだよ!…の野郎ぜってえ許さねえ!)」

その瞬間扉が開く音がした。

「キサマ、ナニヲ…!? ヤイタノカ」

「おかげさんでな! ……まあいいや、完全に血は止まったし…こっからはてめえが泣く番だからな」

左手に付けていたメリケンを右手に付け替えマシンガンのスピードで顎に一発入れる。

「!?」

理解が追い付いていないらしい。

「まだまだ行くぜ」

鼻、足、肩、腰、胸その他の場所を四肢を存分に使い致命傷に至らせる。

「グ、グオオオ！」

しかし河原の時と同様体を捻り体制を立て直そうとするが

「自由に動かすかよ」

捻っている間に近づきストレートを放つ。が、それは腕で相殺し強引に回避される

「ツチ、あれで終わらすつもりだったんだけどな。お前やっぱ強ええな」

先程までとは信じられない程俺が優勢になっていた。が、こいつを見くびる訳にはいかない。

「(油断はしねえ。全力で潰す!)」

「フツ！」

ハイキックからの鉤爪の振り下ろし

蹴りを腕で止め、鉤爪はメリケンで壊し、回転しつつ裏拳を使っても片方も壊しそこまでの攻防でまた距離をとる。見るとメリケンが壊れている。奴は壊れた鉤爪を見ながら俺に話しかけて来た。

「……ナントイウ？」

「あ？」

「ナマエをキイテイル」

「黒瀬、黒瀬竜也だよ」

「クロセか……」

「てめえは？」

「☒……ソコダケでイイダロウ」

「☒ね……かっけえ名前。結構回復したんじゃねえの？」

「ソんなツモリハナカッタガナ」

「ま、どっちでも良かったから何でも良いんだけどな」

ハンドガンに戻しヒートを出す。

「ぶっ飛ばす事に変わりはねえし」

「イイダロウ」

☒も同じくヒートを出す。河原の時と何ら変わらぬ光景しかし今度は止める奴はいない。

「ウオオオ!!」

俺は飛んで上からのパンチ、対して☒は顎に膝蹴り

ドカツ!

二人同時に喰らう。

「うっ!」

「ガッ!」

お互い直ぐには倒れない。

先に動き出した☒が足元がおぼつかない状態で俺に近付いてくる。

「大人しく…た、倒れとけよ…」

「……………」

☒は喋らない。無駄なエネルギーを極力無くしているのだろう。

俺はまだ立ち上がるだけで動けない、その間に側頭部に的確な蹴り、からの焼いた所にフックどちらも大した威力ではないが、場所が場所だけになかなかダメージがある。

「グッ…な、めんな!」

反撃のボディブローを決める。

「フーン!」

「オラア!」

そっからはお互いノーガードのただの殴り合い。

殴られては殴り返し、殴ったら殴り返される。

満身創痍すら通り越した状態が続く。

蹴ろうとした時に足がふらつき体制を崩す。

「しまっ…!」

正面からのストレートを喰らい倒れる。

くく☒視点くく

「……………ココマデトハナ」

しばらく寄り掛かりたい気分だが、念には念を〃劉様の元に行かなくては

ガシッ

「!?キサマー!」

「こ…これで…：…終わりだああ!!」

ドンッ!!

未だかつて味わった事の無い重みを感じながら意識が切れた。

くく竜也視点くく

「や、やってやったぜ…：…こんちくしょうが…：…き、桐生さんのほう」
ドサッ

「(これ、やべえ…：立ち上がる所か、体の何処にも力入んねえ…：)」

意識が薄れていく中、最後に目と耳に入ったのは武装した集団とその足音だった。

19話

龍の怒り

くく伊達視点くく

桐生と竜也が翠蓮桜に潜入してからかなりの時間が経った。結果としては最悪と普通の間といった所だろう。

まず一課の連中に誰かがけしかけ桐生が遥の誘拐犯という形にされた。

竜也の方は傷がひでえって事でまず治療が先になり、話すら出来なかった。

「(ようやく見つけたぜ。これがありや…ま、考えても仕方ねえ)」

桐生の檻の鍵を取った。もちろん極秘に。

「(だが、まずは竜也だな。あいつはただ事情聴取だけだからな。話せば直ぐ出してくれるだろう)」

「済まない。警視庁の伊達だ。黒瀬竜也を出して貰えるか？」

「え？彼なら治療が終わった数分後に彼の保護者代わりって名乗った人が引き取りに来ましたけど……」

「何!?本当か!」

「は、はい……」

「(こんな時に竜也の保護者代わりだと…?普通に竜也の知り合いだと良いが仮に東城会関係だとしたら……まずいぞ)」

「……そうか。ありがとう……桐生一馬の檻は確かしばらく先だったな」

「はい、もし会うならお気をつけて」

「ああ」

「(一応念の為竜也の件も桐生に言わなくては)」

急いで桐生の檻へと急いだ。

くく竜也視点くく

「う……(、)……(は)……」

目が覚めるとそこには黒のスーツを着た連中が大勢居てそして目の前に白いスーツを着た何度か見た男が居た。

「お目覚めですか。黒瀬さん」

「安堂……車か」

外の様子が見えないため推測でしかないが時たま来る振動から車だと予想した。

「ええ、あまりこの車好きでは無いんですがね……さて、そろそろ本題に入らせてもらいますよ」

「心愛か？」

「ええ、もちろん彼女だけでは無いですがね……これは私の感なんです……もしかしてかなり黒瀬さんは真相を知っているのでは？」

「ある程度は予想出来るけど正直全部なんて分かんねえよ」

「フフ、素晴らしいですね」

「悪いけどぜってえに口は開かねえぞ。心愛と風間さんの事は喋らねえ」

「……もちろんそう言うと思っていましたよ。ですがもう良いでしょう。ただ喧嘩が強い高校生が入っていい所はどうに過ぎましたよ。」

「……かしんねえ。けどここまで来てそれはねえだろ」

ドスツ！

「ウグツ！」

☒よりも数倍は重いであろう一撃。反撃しようとするが括られていて何も出来ない。

髪を掴まれ引き寄せられる。

「舐めんなよ。ガキが……前にも言いましたよ。容赦はしないと。大人しく場所を言った方が身のためですよ」

「……知らねえって言ったら？」

「心当たりがある場所を一つずつ言ってもらいます」

「(錦山の時とはまた状況が違い……あの時は逃げる手段は幾らでもあった。けど今回は……一つもねえ)」

絶望

その一言に尽きる。

沈黙が続く。

「ある程度待ちました。決まりま「言わねえ」

安堂の言葉を裂き俺の意見を伝える。

「どんだけ脅されようとな、心愛は俺の大事なダチだし、風間さんは恩人だ。てめえの脅迫受けたところで変わりはしねえんだよ」

「そうですねか…なら、死ぬしか無いですね」

ドスツ！

「ウツ！」

腹から頭その二撃で俺の意識はまた沈んでしまった。

ふと鼻に入る変な匂い、そこに時折混ざる酒の匂いによって目が覚めた。

「(どうやら生きてはいるみてえだな…この入り組んだ感じ…チャンピオン街か?)」

目に入るバーや風景からチャンピオン街だと予想した。

「(なんで奴は俺は殺さなかったんだ?)」

ふと思った疑問。奴なら確かに俺を殺しても可笑しくは無いはずなのに。

「(まあ生きてるならそれで良い…一旦河原に行こう。桐生さん達の行方がわかんねえ以上、アジトに行くのが最適だな)」

—————

河原に着き急いで花屋の所へ行く。

「花屋居るか?」

しかし花屋は居なく、花屋のテーブル付近が無くなっていている事から観察場(俺が勝手にそう呼んでいる)に居ることが分かった。

「観察場か。しゃあねえちよつと待つか」

タイミングを見計らったように地響きが鳴る。

「お?ラツキー」

出て来た人は花屋だけじゃなく、桐生さんに伊達さんも居た。

「皆さん此処に来たんですね」

「竜也：保護者代わりの奴が引き取ったと聞いたがどうだったんだ?」

伊達さんが聞いてくる。俺は安堂と話した事、チャンピオン街に降ろされた事を話した。

「そうか…どうやら東城会もなりふり構わなくなってきたようだな」
「見たいですね…所でさつきはなんで三人揃って出て来たんですか？」

「そうだ！桐生、急がねえと」

「ああ」

「ちよ、ちよつと待つてください。俺にも状況を教えてください。後、俺も桐生さんに言わなきゃならない事もあるんで」

「…………分かった。だが、移動しながらで良いか？悪いが本当に一刻を争うんだ」

「分かりました」

桐生さんの話によると麗奈さんが錦山に俺らの行動を言っていたらしい。

「そんな事が…」

「ああ、それで竜也、おまえの方は何なんだ？」

「桐生さん、シンジって人知ってますか？」

「心当たりはある。だが、何故竜也は知ってるんだ？」

「風間さんが桐生さんに会いたいそうです」

「!?おやつさんが…」

「はい。それでシンジって人を探すしか無くて」

「分かった。麗奈に話を聞いたら直ぐにでもシンジに連絡しよう」
そんな話をしている内に着いた。

しかし入った俺らの目に広がったのは椅子や花瓶が倒れているセ
レナだった。

「これは…?」

「桐生さん、テーブルに手紙が」

そこには麗奈さんの懺悔にも似た手紙が置いてあった。

「麗奈……」

その時桐生さんの携帯が鳴る

「シンジか？お前、どうした!？」

「ああ、俺もさつき知った」

「何!？」

「シンジ!今何処だ!？」

「シンジ、待つてろ。直ぐに行く。それまで絶対に死ぬな!」

「桐生、どうした?」

「麗奈の奴が錦を撃とうとしたらしい。それで今シンジと逃げているようだ」

「俺も行きます」

「済まない。伊達さんは遙を見ていてくれ」

「分かった!任せとけ」

こうして俺と桐生さんは外に出た。

「血の跡が…!?桐生さんこれは」

「急ごう…」

血の跡を追い、辿り着いた場所は雑居ビルだった。

中に入り、シンジを探す。

中に入ると電話が来た。

「分かった。屋上だな、直ぐに行く!」

「屋上ですね。急ぎましょう」

階段を上がると組員らしき人物が電話をしていた。

「……ああ、昔キャバクラがあつた雑居ビルに居る。田中の叔父貴は女連れて屋上に逃げてるぜ」

「今、叔父貴を探してた連中集めてる所だ。お前らも大至急来い!!」

「……なんだと?荒瀬の兄貴?…そいつはマズイ。兄貴が来たら、ビル中蜂の巣になるぞ!」

「兄貴が来る前になんとかして終わらすぞ!とにかく来い!」

電話が終わると同時に俺らも出る。

「て、ためえ桐生!おい!桐生がいるぞ!殺れ!」

ぞろぞろと集まってくる。

「邪魔くさ…」

マシングンの最大速で全員一発で終わらす。

「行きましよう。止まってる暇は無いですから」

「ああ…」

所々から出てくる連中を来る度倒し、やっと屋上に、辿り着いた。
「まだ居んのかよ」

が、まだまだ構成員はいる様で流石にしんどい…
それを言い訳に止まる訳にもいかないの

近場の鉄パイプを広い叩き付ける反動により体を浮かして上から蹴り下ろす。

あの真島さんの技術を真似する。

「竜也、次行くぞ」

三人いたが俺があれをしている間に二人を倒したらしい。

「まさか真島の兄さんの真似が出来るなんてな」

どうやら見ていたらしい。

「実際こうやってやってみると真島さんがいかに人間離れしてるかわかりますよ…俺のはあくまで応用ですもん。普通あそこまで飛ばないっすよ」

「…まああの人は『凄い』なんて言葉じゃ表現出来ないからな」

「ほんと桐生さんといい、真島さんといいバケモンクラスか、それなりのレベルしか居ないからな。神室町…あれ？そう考えると桐生さんも普通じゃ無いよな」

ちなみにここまで俺が少しあまり効かないのを三発喰らっただけで、桐生さんはノーダメージだ。2人共息が荒れている様子も無い。

「…竜也？何をボーツとしている？行くぞ」

「あーすいません！今行きますー！」

桐生さんの跡を急いで追うと日本刀、ショットガン、その他諸々武器を持った連中が7、8人居た。

「うっわあ…これは…」

「流石に喰らわれないってキツそうだな…」

「まあ最低限でいきましょう…」

「ああ…」

俺はライフル、桐生さんは堂島の龍になり、各々の構えをとる。

振りかざされる日本刀の柄の部分を掴み拳を握り潰す。

「ぎゃあああ!!」

「ついでに寝とけ!」

殴って沈める

桐生さんの方とはいうとハンマーを持った奴を蹴飛ばしハンマーを逆に奪い殴っている。そのままハンマーを回し3人同時に倒している

ドンツ!!

反射神経と身体センスをフルにつかい下に伏せる。

目の前にはショットガンを持った男が立っていた。

「(つぶな…あんなん喰らったら死ぬって…)」

ドンツ!!ドンツ!!

続けて二発、転がる形で回避する。

「フウ……」発で終わらす……

起き上がり突進。撃たれるが斜めに回避して膝蹴りでダウンさせる。

「キツツ……集中しすぎて目いてえ……」

「あまり危険な事はするなよ……」

全員倒した所で桐生さんが話しかけて来る。

「大丈夫ですよ…集中が続くと視界がやけにクリアになるんですよ。だからさつきも弾のバラつき方も分かりましたし」

「そ、そうか……まあ行くか」

開けた所に出ると腹を抑え倒れてるボウズ頭と銃を構えてる男がいた

「兄貴……」

「桐生さん……邪魔しないでください」

「黙れ」

桐生さんはかなりきいているようだ。

「近付かんでください!これ以上あなたに組荒らされたくないんだ!」

「お前シンジに銃向けて恥ずかしくないのか?お前らの兄貴分だろ」

「悪いのは田中の叔父貴です。親に背え向けて…組裏切つて！」

「錦は東城会裏切ってる…本当の裏切り者はどっちだ？」

「うるせえ！」

桐生さんの首元に向けて撃つが外す。

「俺たちは『親』が絶対なんだ！『親殺し』が口挟むんじやねえ！」

「…撃ちたきや撃てよ…シンジは撃てて俺は撃てねえのか!？」

「なあにチンタラやってんだ馬鹿野郎」

後ろを見るとガタイの良い奴ら3人いて赤いコートを着たりー

ダー格は銃を持っている。

「(こいつが『荒瀬』って奴か…)」

荒瀬が顎で合図すると組員の1人が女をこちらに向ける。

「麗奈(さん)!？」

「さつさと弾いて終わらせろや！」

桐生さんは勿論だが、俺ももう限界だった

「うおおお!!」

「……殺す…!!」

〈荒瀬和人〉

「竜也…」

「分かってます…あいつは頼みますよ」

正直俺も奴を殺してやりたい程だが、桐生さんの怒りに比べたら大

したもので無い。

「遅せえよ！」

ハンドガンになり、銃を持つてる手を引き手刀で腕を折る。

その腕を離さずライフルに切り替え振り回す。

俺を狙いずらくする為の行動

「もういいや…てめえら全員…死ねよ……」

「なっ!？」

急に振り回すのを止め動きが硬直する瞬間に倒した。

桐生さんの方を見ると荒瀬の銃は全部肩とかを擦る位でまともに

当たっていなかった。

そしてどうやら口が動いているのを見ると何か喋っているらしい。

恐らく恐怖から生まれる言葉だろうが

「自業自得か……」

桐生さんの強烈な一撃を喰らいピクピクと動くだけだった。

「麗奈……」

桐生さんは麗奈さんの目を閉じてあげた。そしてシンジの所へ向かった。

「兄貴……すみません……最後まで……」

「シンジ……!」

「その……ガキは……知ってるかも、知れないですが……風間の親っさんは「アケミ」って女に預けました……俺の……女です……」

「分かった、「アケミ」だな」

「兄貴……これを……」

「シンジ、お前!」

ガクツ!

首が自然と下がる。

「シンジ……シンジイイイ!!」

桐生さんの声が木霊した……

20話

ニンベン師

〳〳桐生視点〳〳

2人をあそこに置いてとく訳にもいかず俺は急遽河原へと移動してきた。竜也を伊達さん達の方へ行かせ俺は花屋と話している。

「残念だったな。シンジと麗奈は」

「…ここ以外に頼れる所が無かったんだ」

「分かってる…出来るだけ手厚く葬ろう」

「ああ、すまん…」

—————

〳〳竜也視点〳〳

河原でのアジトで伊達さん、俺、花屋、桐生さん、遥ちゃん皆で話をしている。

「アケミ?」

「そうだ、シンジは確かにそう言っていた」

「しかし、そんな名前の女幾らでもいるぞ」

「それだけじゃなあ…」

「…桐生さん、シンジ〳〳さん〳〳の特徴とかなかったんですか?」

「…風俗が好きだったな…」

「花屋……」

「なるほどな、もう分かった」

「(ちよつと俺が言ったただけだぞ?なんでもう分かんだよ)」

少しは頭の回転も良くなきや情報屋なんて出来ないと言っていたがその通りらしい。

「ここ何年か奴が通ってる店がある。〳桃源郷〳ってソープだ。そこ

のナンバーワンが確か……〳アケミ〳」

「なるほどな」

「ただし、そこは普通の店じゃない。ビル一軒丸々ソープだが、看板はねえしパツと見じゃ分かんねえ。しかも一回100万と来たもんだ」

「100万!?!」

伊達さんが驚く。俺も隠してはいるがかなり驚いている。

「現役タレントやモデルなんかがやってるからな。『選ばれた人間の遊び場』ってやつさ」

「ここで今まで聞いていただけだった遙ちゃんが口を開いた。

「おじさん、ソープって何？」

「その、まあ…風呂屋だ。いや、サウナか？」

「お、俺に降るな！」

「俺も答えんぞ」

桐生さんが伊達さん、花屋にヘルプを求めるが2人共上手く（伊達さんはあれだが）避ける。

「銭湯って事？」

「いや、それとも違って…その…」

「おじさんは行ったことあるの？」

「ん？ああ…ん？いやその…」

桐生さんがしどろもどろしてる内に遙ちゃんが笑い出す。

「ウソ、私どんなところか知ってるよ何日も歩いたんだから」

花屋、伊達さんは笑い、桐生さんはへこんでいる。

「こりゃあ1本取られたなあ」

「（いや、笑い事じゃなくね…流石にこの年の女の子が知っていい事じゃねえよ）」

外に出て花屋に入り方を聞く。

「桃源郷に入るには…『桃源郷の会員証』が必要なんだ」

「じゃあ行けなくねえか？」

「諦めるにはまだ早い。昔シンメイという女性が桃源郷で働いてた。今はピンク通りの『シャイン』とか言うキャバで働いている筈だ。シンメイに会うのが1番かもな」

「ピンク通りの『シャイン』だな。竜也行くぞ」

「はい」

「さて、着いた訳だが…流石に2人で行く訳にも行かないしな」
「俺、この付近で待ってれば良いですか？」

「流石に年齢的にもそつちのが良いだろうな」

「じゃあ待つてます」

そこまで言うのと桐生さんはシャインに入っただけだった。

「さて、暇だ…そんな直ぐには終わんないよな。腹減ったからコンビニで弁当でも買ってこよ」

「ありがとうございます」

近くのコンビニで弁当と麦茶を買いシャイン付近に戻ってくる。

「何処で食おう？店の近くはまずいしな…まあこら辺でいつか」

座るスペースを見つけ買っておいした新聞を下に引き改めて弁当と向き合う。

「うまそー、やっぱり悩んだ時はとんかつ弁当だよな」

とんかつに付いていた中濃ソースをかけようやく食べる準備が整った。

「さて、頂きます」

割り箸を割りとんかつに箸を伸ばしとんかつと白米を口に入れた

瞬間

「竜也、何してんだ？」

「ゴフっ!？」

桐生さんが居た。

「ゲホッ！ゲホッ！き、桐生さん、早かったですね？もう貰えたんですか？」

「お、おい大丈夫か？いや、こつから『ジュエル』に向かわなきゃ行けなくなっちゃった」

「ジュエルですか？なんでまた？」

「シンメイに頼まれて『ニンベン師』という人に会わなくては行けなくなっちゃった」

「分かりました。ちよつと待つてください。弁当しまうんで」

「ああ」

ジュエルに着き桐生さんが入っていくのを確認すると、またフタを

開き弁当を食べ始める。

「さつきは全然味噛み締める暇無かったからな。今度こそ」

とんかつを食べポテトサラダを食べた所で麦茶を飲んだその時
ガシツ

弁当を踏まれた。

「あ?」

「ホームレスがこんな所で飯なんか食ってんじゃねえぞ」

チャラそうな感じや服装からこの付近のホストだろう。

4人いるが大した実力じゃ無いだろう。普段だったら絡まれても無視するが、弁当を踏まれた事で許すつもりは無かった。

頭を掴み叩き付ける。

「……フゴッ!」

数秒のタイムラグがあつてやつと叩き付けられた事が分かったのだろう。変な声を出している。

「う、うわあああ」

他のホストが逃げようとするが

「いや、許すなんて言っていないから」

腰が抜けて這って逃げている奴を踏み気絶させる。それをチャン
スとみたのか2人で残り2人を置いていき逃げる。

「あ、しまった…ま、いつか。とんかつ踏んだ奴はもうやったし。食べ物
の恨みは怖いからな、しゃあないな」

自己解決をし、もう動く気は無かったので桐生さんの戻りを大人し
く待つことにした。

それから三分くらいだろうか?桐生さんが出て来た。

「ニンベン師は分かったんですか?」

「いや、やはり簡単には会わせてくれないらしい。一回シンメイの所
に戻ろうと思う」

「分かりました」

シャインに戻ろうとすると

「ここか?」

「ああ。あのオカマ野郎…タダじやおかねえぞ」

「よし…行くか」

「桐生さん、さっきの2人組…」

「気になるな。一応行ってみるか」

「了解です」

店に入ると椅子に腰掛けてる女にさっきの2人組が問い詰めていた。

「いい加減白状したらどうだ？」

「あの日お前が公園でパスポート渡してるところ目撃されてんだよ」

「だから！その時は彼氏と待ち合わせしてただけだって言ってるでしよー！」

「ガタガタ言ってるじゃねえ！」

青龍刀を持っていたらしく酒瓶を切る。

「正直に言え…『ニンベン師』って奴は何処だ？」

その時酒瓶で2人を一斉にママらしき人が殴る

「アヤカちゃん、早く！」

「はい！」

俺と桐生さんには気付いていないのか横をすり抜けるように外に出していく。

「桐生さん、どうします？」

「…まずはこいつらに話でも聞くとするか。おい、あんたら」

「なんだ？てめえ」

「さっきの2人組なんだか分かってんのか？」

「『ニンベン師』に通ずる奴らって事しか知らねえよ…逃げるとしたら第三公園だ。そこがいつもの取引場所だからな」

「ふーん…第三公園ね…」

「あいつら、切り刻んでやる…」

かなり怒っているらしい。

「桐生さん先行っててください。俺も直ぐに行きます」

「ああ…」

桐生さんは出ていく。

「さて、ウェイターさん」

「は、はい…」

「外出てくれますか？外出て人寄り付かないようにして欲しいです」

「わ、分かりました…」

そう言つて外に出ていく。

「悪いな…別に特に俺がやる必要は無いんだけどさ、危ないじゃんお前ら」

「何？」

ドゴッ！

蹴りで吹っ飛ばす。青龍刀を持っていた奴の方に近づく。

こいつに関してはまだ意識がハッキリしていないようだ。念の為青龍刀だけ折っておき、近くにある駐車場に捨てる。

「こんなもんか…急ぐ…」

第三公園に着くとそこには桐生さんとさっきの2人が居た。

「……………試させてもらったわ」

どうやら話の途中らしい。

「桐生さん、遅れました」

「貴方は？」

「俺はあんまり気にしないでもらつて大丈夫です。それより」

「シンメイに偽造パスポートを作つてやつてくれ。あいつが、しばらくこの街で働けるように」

「分かったわ。ママ、お願いして良いよね」

「何？つて事はまさか…」

「あはは、その通りよ。さっきの店で待ってます」

「(店で待つてるって…俺壊しちやつたけど…多分大丈夫だよな…?)」

「はい、これがお望みの品よ。シンメイに届けてあげて。……………桐生さん、貴方の事は知ってます。……………風間さん、撃たれたみたいですね」「何？」

「何で貴方達が……？」

「その事と関係あるかは分かりませんが…実は5年前、風間さんから依頼があったんです」

「どういう事だ？」

「ある1人の人間を偽造してくれて。……出生記録に住民登録、卒業証書、免許、医療記録、パスポート…公共機関にも捏造した記録をしこんでね……記録の中でのみ、実在する人を作り上げたんです」

「!?それは……」

「私が話せるのはここまでです。…私達はこれで」

外に出るともう日が出ていた。

「桐生さん…さっきのニンベン師が言ってた人って……」

「…とりあえず、シンメイにこれを渡しに行こう」

「じゃあ俺ここで待ってます」

「ああ、直ぐに戻る」

「(ふう…一息つくのも一苦労だぜ。完全な“紙でのみ生きている人間”か…多分俺と桐生さんは同じ人を考えてる筈だ…)」

「竜也、待たせたな」

「あ、大丈夫です。それで会員証は？」

「シンメイが昔一緒に暮らしていたという“水野さん”という人に渡してしまってたらしい。今からそれを取りに行くしかない」

「なるほど……それでその人が居る場所は？」

「七福通りのMEBだ」

「また、七福通りですか……今回はやけに往復しますね」

ジュエルも七福通りにある為、物凄く行ったり来たりをしている。

「ああ……だが、止まる訳にも行かない。早く済ませよう……」

桐生さんも若干うんざりしてるらしい…2人して足取り重くMEBに向かう事になった。

足取りが重い中なんとか着いた。

「さっさと済ませてくる…待っててくれ」

俺の返事すら聞かず中に入っていた。

「ようやく、手に入れたぞ…」

2分位で出て来た。

「お疲れ様です…」

「ああ、1度花屋の所へ戻ろう」

かなりの時間をつかい、ようやく会員証を手に入れた。

「おお！桐生、竜也戻ったか！」

「ああ、色々あったが、なんとか手に入れた」

「どうすんだ桐生？もう桃源郷行くのか？」

「いや、夜になってから行く事にしよう」

「じゃあ行く時になったら起こしてください。ちよつと仮眠します」

流星に色々ありすぎて眠気と疲れがピークだ。

「分かった。今の内にゆっくり休んでおけ」

桐生さんのその一言により、眠る事にした。

「…や！…つや！竜也！」

「は、はい…!?あ、伊達さんですか…」

目の前には伊達さんの顔が目いっぱい広がっていた。

「そろそろ桐生が行く準備をしておいてくれだとき」

「あ、了解です」

「(とは言っても特に準備なんてないんだよな)」

「竜也、調子はどうだ？」

「…大丈夫です。もう俺の方はOKです」

桐生さんの問いに答えながら何があっても大丈夫なように体を動かせるようにしておく。

「桐生、俺は本庁から呼び出しが掛かってる。まあ、9歳と18連れて桃源郷行くってのはおかしな話だが、遥達連れて桃源郷向かってくれ」

「ああ。遥行こう」

こうして俺と桐生さんそれに遥ちゃんの3人で桃源郷へ向かう事

となった。

21話

狂犬の本領

桃源郷に着いた。

「ここか…『桃源郷』あまり時間をかける訳にも行かない。早く行こう。」

恐らく会員証を確認する為に配属されているであろう。ボーイに会員証を見せる。

「桃源郷の会員証をお持ちですね。どうぞ、いらつしやいませ」

中に入るとカウンターに居たボーイに止められた。

「あのーお客様、子連れはちよつと…」

「社会見学の一環だ。大目に見てくれ」

「(流石に無理ありません…)」

「申し訳ございませんが、他のお客様のご迷惑になりますので…」

近場の像を壊す。

「(あ、俺もう知らね)」

「絶対に迷惑はかけない。良いよな？」

「かしこまりました…」

渋々ボーイが退く。

「ナンバーワンって事は最上階ですかね？」

「その可能性は高いな。最初に行っておくか」

4階の1番奥

「おじさん、ここじゃない？」

遙ちゃんが確認をとる。

「そうみたいだな」

ガチャ

ドアを開けると見るからに高級感伝わるベットの前で土下座しながら待つている女がい居た。

「いらつしやいませ。アケミです」

「桐生だ。シンジから…何か聞いてないか？」

「桐生…貴方が？」

「ああ…」

「それじゃ、シンちゃんはもう……」

桐生さんは俯く。それは肯定以外の何者でも無かった。

「そう…最後に会った時、彼言ってたの。自分にもしもの事があつたら貴方が訪ねてくるかもしれないって。いつもふざけてたあの人が急に真剣になってね、そっか…シンちゃん死んじやったんだ…：おかしいと思つた。だってあの人の、急に今やつてる事片付いたら結婚しようなんて言つて…」

声が段々と細くなつていく。

「すまない…」

「いいの…：私の方こそごめんなさい」

ライターを付ける音だけが響く。

「風間さんね…：確かにここにいたけどシンちゃんの知り合いが来て、連れて行っちゃつたの」

「それって…：女の子？」

俺が口を挟む。

「2人で来たわ…：1人は近江連合の『寺田』さん。もう1人は確かに女の子だったわ。名前は心愛って言つてたわね」

「近江連合!?!」

「桐生さん…：近江連合の寺田つて人は知らないですが、心愛は俺の知り合いです。俺が風間さんの事を知つたのも心愛経由です」

桐生さんに分かるように説明していく。

「そ、そうか…：なら安心だが…：近江連合だとな…：」

「(俺も気持ちは分かりますけどね)」

「それで場所は？」

「『芝浦』よ。埠頭に止めた船に連れて行くつて言つてたわ」

「そうか…：」

「それと…：シンちゃんこうも言つてたわ。『錦山組は100億の他に、世良会長の遺言状を探してる』それに次の『四代目』が指名されてるんだつて」

「遺言状…：そんなのが…：それじゃあ錦はそいつを潰そうと…：」

「シンちゃんはそう言ってたわ…」

ドンッ!

大きな衝撃

「何!?!」

「桐生さん、この部屋じゃ様子が分かりません。一旦外に出ましょう!」

「分かった!」

外に出ると、ぞろぞろと人が集まってきた。

「こいつらか…やるぞ竜也」

「はい…」

突っ込んでくる奴をスウェイで避け腹に一発、後ろに蹴りで2人瞬時にやる。

桐生さんはラッシュの手数を押し切るようだ。

スーツの裾を掴み引き寄せ殴る。

回し蹴りで気絶させる。

「……ここは一通り片付いたな。下に降りよう」

「はい…」

階段の近くに椅子を持った巨漢の男1人

「俺が行こう」

椅子を振り回される前に蹴り体制が崩れ椅子を離れた所でその椅子で攻撃。

一撃でダウンする。

階段の奥から3人飛び出てくる。

腹から頭に登るように蹴る。側の1人を腕で叩き付ける

「つたく…ん?桐生さん!こいつら……」

ふと服を良く見てみると真島組のバッジが付いていた。

「真島組だと…どうして此処が……?」

「今は下に急ぎましょう」

「(動きを止める訳にはいかねえ……組員が集まる前に真島さんの所へ急ぐのが1番だな)」

階段を降りるともう2、3人しか居なかった。

「まだそんなに組員居なくて助かりましたね」

「竜也……少し休んでおけ。少し疲れてるだろ？」

「ハハハ……バレてました？」

向かって来ているが桐生さんはそちらには見向きもせず俺の方を見ている。

「流石に少し休んだとはいえ、連戦の続きだからな」

今の一言の内に3人共やってしまった。

「(ヤツバ……!!尊敬しかねえ……)」

「下に行くぞ」

「分かりました……」

悲鳴が木霊している。どうやら下にはかなりの数が居たらしい。

「助けてえ！」

助けを求めた女が首を掴まれる。

「レイコちゃん！」

「よおう、探したでえ……」

「真島の兄さん。あんた……」

「助けて！お願い、助けて!!」

「おおーよしよし……静かにせんかあ！」

ドスを構える。

「よせ」

すかさず桐生さんが止めに入る。

「お？なんや、あんたべつびんさんやないか！どや？俺の女にならんか？」

女の方は声が出ていなかった。

「どやねん？ええ？」

「嫌です……私他に好きな人が……ごめんなさい！」

「真島！やめろ！」

「そうか……正直な子や……ええ！それでええ！」

そこまで言って真島さんは腕を離す。

「ほれ！ここ危ないで！早よ行き」

「読めねえな……あんただけは……」

「俺は正直モンが好きだけや、人の顔色うかがったりせん、俺がそ
うやからなあ」

「そうかい」

「この間はええ所で邪魔が入りよった。ココで『決着』つけようやな
いのー!」

「上等だ……」

「2人共もうちよい上に上がって」

純度の高い殺気が2人から出る。安全の為に上げる。しかし真
島さんの殺気が消える。

「…………と、言いたいとこなんやけどな」

「何?」

「ワシヤ今ここにもう1人やりおうたい奴がおるんや!」

「…………あんたまさか…………?」

真島さんの指が真っ直ぐに俺の方に向く。

「お前や。お前」

「マジかよ…………」

「おい!あんたの相手は俺だろ!」

「なんや桐生ちゃん、忘れたんか?『あいつとも楽しくやれそう』言
うたの。ワシヤ楽しく喧嘩出来ればそれでええんじや!」

「(行くか…………勝てるか知らねえけど)」

ゆっくり桐生さんの隣に行く。

「竜也…………」

「良いぜ…………真島さん。やろうぜ……」

「ヒツヒツヒツしつかり分かつとるやないか!」

何時来ても良いように構える。桐生さんが移動する足音だけが聞
こえる。

「ええ目や、名前聞いてもええか?」

「黒瀬竜也」

「よし…………じゃあ行くで…………黒瀬えええ!!!」

<真島吾朗>

蹴り、フック、ドス、アッパー全部弾いたり躲したりして防ぐ。そ

ここらのちよつとの足払い。効果は的面でよろめく。その際に全力ストレート

「(やべえ!)」

ドゴツ!

「竜也(くん)！」

手を拳と頬の間に置き直撃を避ける。ボディブローをすぐさま入れ、離れる。

「とりあえず、先手必勝……って訳でもないか……」

平然と立ち上がる真島さん

「……やるやないか! やっぱ俺の目に狂いはないっちゅう事やな!」

「いや……なんでそんな普通なんだよ……こちとら全力出してんのに!」
小言で聞こえないように呟く。

「おもろくなってきたでえ!」

真島さんはドスをしまいダンサーの様な構えをする。

「なんだ……この構え? でも不容易に近付いちゃいけない気がする!」

「止まってる暇無いで!」

距離を詰められアッパーからのブレイクダンスを喰らう。

ガッ! ガッ! ガッ!

ブレイクダンスの足さばきを全部喰らう。上から蹴りで踏み潰される。

「ゴフッ! ガハッ! クソッ」

踏まれている足を掴み膝を壊すように捻る。

「ヌオッ!」

堪らず足を離す。またボディブローからの頭にフック。吹き飛ばすつもりでやった攻撃は真島さんの上半身を揺らすだけで終わる。

「バケモンかよ……ッ!」

左肩に掌底、足で頭を掴まれ、締めあげられる。

「(またかよ!)」

肘で真島さんの脇腹を攻撃し続ける。少し緩まる所で逃れふくら

はぎを殴りはなれる。

「カハッ！カハッ！……の野郎……」

腕、顔、そして腹と連続でやられる。

「ゴフッ！」

「なんや、この程度かいな……ガツカリやわ」

「あ……？」

「うちの奴らボコボコしてたからどんなもんか思ったけど、肩透かしもええ所やわ。もう終わらせたるわ」

ドスを取り出す。体は完全には起き上がってない。

「真島！」

ピク

寸前まで来てたドスが止まる。

「ま、ええわ。さっきまでのが前座って事にしよか。第2ラウンド始めたるか」

桐生さんも真島さんも構えだす。

「(……どいつもこいつも……)」

両者の拳が当たる寸前

「おい……てめえの相手は俺だろ……！」

「……なんや、やっぱり強いやないか……!!」

「桐生さん、こいつは俺がやります……」

「ああ……任せたぞ……」

桐生さんは階段へと戻る。

「その状態でのお前がどんなもんか、見せてもらうわ」

今度は普通の構えをしだした。

ジャブ程度の一撃。腕を掴み顔に全力で一発入れる。蹴りで吹っ飛ばし、少し浮いた体を殴って叩き付ける。

「……グッ……」

どうやらまだ立てるらしい。

蹴り、拳、肘、どちらかが殴ればガードし、もう片方が殴ればガードする。

その連続

グラッ！

このビルが崩れてきてるようだ。

「行つたるでえー!!」

飛んで俺の上に乗る。

「(これは喰らえねえ!)」

文字通り全体重を載せた一撃。避けるが床が崩れる。

「逃がさへんで!」

腕をロックされていた。お互いの体が上下目まぐるしく変化する。

地面まで後少し

「オラッ!」

下の状態で膝蹴りで真島さんの体制を崩させその間に上になる。

ドンッ!

大きな音と共に真島さんが落ちる。体制を立て直してるうちに逃げられる。

「(こんなんであの人が倒れるとは思えねえ。こつからだ、でもこれは……)」

暗闇により、全く見えない。

「……ほんま見くびつてたわ。こつちも本気で行かせてもらうで」
ふと見えた。ドスの光

その瞬間上に乗られドスを喉元に刺されそうになっている。

「グッ!……」

「甘いで!」

ボコッ!

ストレートを肋骨にモロに喰らう。力を抜くと刺されるため力すら抜けない。

こちらも膝蹴りで対抗しているが、真島さんの力が抜ける様子はない。

「(クソっ…イチかバチか!)」

左手だけでドスを抑え右手で鳩尾に入れる。

「オウッ!」

「今!」

ドスの位置をずらし鼻に拳を叩き込む。
ゴキヤ!

普通ならならない音が響いた。

「ど、どうだ…?」

ぬるりと立ち上がる影

「こ、この人ガチに人間辞めてんじやねえの…」

スパツ!

肩の服が綺麗に切れる。

ゴリツ!

頬にジャストミート。直ぐに血を吐き不快感を取り除く。

「ふう……やっぱええな!ほんまごっつ楽しいわ。お前もそう思うやろ?」

「俺はあんた程喧嘩に飢えてないですよ」

「ま、それすら置いといてや……行くで……」

直線に伸びたドスを避けほぼ置いてくるに近い形でストレートを放つ。

それに逆に頭突きをかましてきた。

左手で髪を掴み右で連打。

「又オオオ!」

足払いを再度やられ目にストレート。

ドカツ!

「舐めんな!」

ハイキックからのボディブロー

真島さんはドスでの横一文字

真島さんは全て直撃に対し、俺の方は3センチ程度で済む。

「(☒にやられた時のがひでえ!)」

止まらずにアッパー

ゴキツ!

顎の碎ける音

「もういつ……!?!」

今度はドスを壊そうとするが、既に真島さんの手にドスは無く両手

を振り下ろされた。

ゴンッ!

堪らず膝をつく。真島さんも同様になっている。

「ぶ、ぶっ飛ばす…ぜったい…」

真島さんは終始無言。その状態のままドスと自身に紫色のヒートを出す。

「はぁ……はぁ……」

俺もヒートを出す。

真島さんの最高速からのジャンプしてのドス振りかざし。俺は顔一点狙いのハイキック。

ドゴオ!

今までよりも鈍い音。しかし真島さんは止まらない。ドスの距離は顔まで1センチ

「(死ぬのか…いや、まだだろ!)」

顔を横にして避けヒートを全開で先程蹴った場所を殴る。

ドゴオ!!

真島さんはフラつきながら倒れた。

「黒瀬……お前も充分……ゴツイわ……」

ドサツ

気絶して意識が無くなる前にそれだけ言って気絶してしまった。

「はぁ……はぁ……か、勝てた……」

「竜也…」

桐生さんが降りてくる。

「き、桐生さん…」

「待ってろ…タクシー呼ぶからな」

—————

タクシーで河原に着いて桐生さん達は伊達さんと話していた。

俺は……

「痛てえ!もうちよい優しく出来ない?」

「我慢してよ…これでも十分優しくしてる方なんだから」
遙ちゃんに治療してもらっていた。

「はい！こんな所かな？」

「ありがと。一回話だけ聞いてこなきや」

伊達さん達の方へ合流する。

「桐生さん、伊達さん！遅くなりました」

「おお！竜也、治療は済んだか！」

「ええ、まあそんな重症だらけてて訳じゃないんで。……それでもう行くんですか？」

「ああ…本来なら竜也は置いていこうと思ったんだが…」

「行きます……！」

「そう言うと分かった。だから待ってたんだ」

「どうやら俺のせいで出発が遅れたらしい」

「あ、すいません…」

「いや、謝る事じゃない。よし行こう」

「竜也には詳しく言っただねえが俺は『神宮』の方を調べる」

「『神宮』？誰ですか？」

「埠頭に行く時に伝える」

「分かりました」

埠頭に着く間に神宮の事についてきいた。

スターダストを襲った連中あれが“MIA”という組織らしく、それを束ねてるのが神宮らしい。

埠頭にはコンテナが多くある中開けた場所の先に大きな船があった。

周りにはスーツ姿のやり手そうな連中がいた。

「竜也？恐らく船の中だろう。行くぞ」

船のデッキ部分に1人立っていた。かなりの大男だ。

「あの人…多分バッテリーセンターで助けてくれた人。ペンダントの事も教えてくれた」

「…行くぞ遥、竜也」

「うん」

「はい」

あの大男の入った先に行くときつきの奴が立って待っていた。

「五代目近江連合…寺田と申します」

「近江連合がなぜ風間のおやつさんを？」

「桐生さんや黒瀬くんと同じですよ。俺も風間さんには返しきれない恩が…風間さんがお待ちです。こちらへ」

桐生さん、遥ちゃんと部屋へと入る。俺も行くこうとすると

「竜也くん…」

心愛が話しかけてきた。

「寺田さん。すいません…竜也くんと話してきます。風間さんには言っております」

「分かりました…」

「竜也くん。こつち」

誘導されるまま着いていく。

甲板に着くとようやくやく足を止めた。

「傷多いね…」

「まあ結構な野郎と闘ってきたからな…」

自然と頭に☒と真島さんの顔が浮かぶ。

「……………あのね、神室町に来て2年くらいかな？」

心愛が喋り出す。

「お父さんの仕事の都合でここにきて……………最初は普通の仕事だと思っ
てた。でも違かった……………」

「……………」

俺は口を挟まない。しっかりと話を聞く。

「新型の麻薬……………その密売人だったの。お父さんはそれが気づかれ
る前にいっつも転々としてた。あの街の時は全然バレなかったんだ
ろうね……………」

「そして神室町に来たのは良いんだけど簡単にバレたらしくって……………
三次団体の組が家に来たのもホント直ぐ……………」

「で、もう身寄りがお父さんしか居なかった私をどうするかってなっ
た時に手を差し伸べたのが錦山さんだったの……………」

「あいつが……………」

「まだ、あの時はこの前竜也くんが会ったような人じゃ無かったの
……………私に優しくしてくれた。けど……………急に変わってしまった……………」

「……………変わらねえよ」

「え……………」

「人の本質がそんな簡単に変わってたまるか……………俺は錦山がどんな風に
心愛に接してたかは知らねえけど、見た目が変わろうと心を変えよう
としても……………変わらねえもんなんだよ……………」

桐生さんに出会う前の地獄を思い出す。

「そう……………だよね……………」

お互い暗くなってしまう。

「あ……………そうだ。日挟連の安堂の事知ってるか？」

「うん……………けど何で？」

最初会った時に心愛について教えるように言われた事、そして最近
再度接触してきたを伝える。

「あの人……………！錦山さんと本格的に話をするようになったのは100
億が言われた後なの……………」

「なるほどな……幹部会で言った錦山とつるめば直ぐに場所が分かる
とでも思ってたんだろうな」

「多分私を狙ったのも、錦山さんが言ったからだと思う」

「なるほどな………かなり分かったわ。サンキューな」

「………うん！」

俺がお礼を言うとき少し後に最高の笑顔で返された。

「あ、これだけ言っておかなきや！」

「ん？」

「遙ちゃんだよね！あの子のお母さんの美月さん」

「美月さん……なあ、もしかして……美月さんって本当は由美さんなん
じゃねえの？」

ニンベン師が言った。紙でのみ生きている人物。俺の予想は
由美さんこそが美月さんなのではないかという予想。

「え!?何で分かったの?」

「(やつぱ合ってたか……話聞いてた時からそんな気はしたけど
……)」

「ほとんど『感』なんだけどな。ニンベン師の話し方的にどうしても
匿わなきやいけない人物、それでいて隠し通さなきやならねえ。で、
風間さんが直々に頼んだってなると由美さん位のもんだ」

一息ついて心愛を見ると目が点になっていた。

「竜也くんってとつきどき！鋭いよね……」

「時々は余計だ。………普通に悲しいから止めてくんね？」

流石に堂々と言われると心にくるものがある。

「あ！ごめん……」

「気にすんな」

「あのさ？闘技場で会った時言ってた事あるじゃない？」

「おう。それがどうした？」

「実は……それじゃn」

車が何台も押し寄せてくる。

「何だ？」

車から出てきたのは様々なスーツを着た男達。後から赤いスーツ

を着たスキンヘッドの男。そしてロングで目にまでかかっている男
2人

「嘘でしょ……!?!」

「知ってんのか?」

「赤いスーツを着てる人は『東城会直系鳴野組組長』の鳴野たまさか
鳴野組が来るなんて……」

心愛のその言葉に続くように島野組が何かを船に投げる。

ドオオン!

「な!?!」

それに続き様々な戦闘員が船に上がってきたり風間組か近江連合
だろう。船の至る所から出てきてる。

「心愛、俺の後ろに居ろ」

「うん……」

きた奴を船にぶつける

「まず1人……」

「居たぞ。桐生だ!」

桐生さんも出てきたらしい。

「おい……全員注目してんなよ……待ってもらえるなんて思っ
てんじゃねえよ……」

ドゴツ!

5人位一気に吹っ飛ばす。

空いている左手で裾を掴み海に放り投げる。

「(ヤツバ……キツいなこれ)」

後ろを絶対に空けないようにしながら闘う。

「竜也くん……こつち!」

「遙ちゃん!」

さつき入ろうとしていた部屋付近に行くと遙ちゃんが声を掛けて
きた。

「黒瀬くん!心愛さんだけ引き取ります」

「すいません!助かります!」

寺田さんに言われ心愛を部屋の中に入れる。

「さて……もうこれ以上喧嘩で頭を使わなくても良いよな……」
後ろに回り込み首を捻って無効化させる。

「まだまだ行くぜ……」

ライフルになり、ガスボンベを持ち全員吹き飛ばす。

「後は向こうの甲板か……」

向こう側に行くと

「竜也！……どうやらそっち側は終わったらしいな」

桐生さんが全員倒した所だった。

「桐生さん！はい……こっちは終わりました」

「よし……俺らも降りるぞ」

「おうーお前ら！どっかんどっかん投げ込んだれや！」

物凄く凶太い声が聞こえてきてかなりの数の手榴弾が一斉に投げ込まれる。急いでダッシュして海に飛び降りる。

「うおおお!!」

直ぐ後ろで爆風がした。

船を見ると火で無残な事になっている。

「……間一髪でしたね……」

「ああ……出来る事ならこんな体験は二度としたくないな」

「同感です……」

「桐生さん！」

寺田さんの声と同時に遙ちゃんがこっちに来る。

「大丈夫？おじさん、竜也くん！」

「ああ……少しヒヤツとしたがな」

「俺も大丈夫だよ」

「久しぶりだな……竜也……」

「風間さん……久しぶりです……」

風間さんの所へ行こうとするとライトで俺ら全員照らされる。

「ハッハッハっ！やっと会えたなあ桐生！それと……風間！へへへ……」

コソコソしやがって」

「嶋野……！」

「寺田はん、あんた……錦山裏切ってワシにつくフリ見せてたけど」

なあそんなん全部裏の裏まで全部お見通しや。ずっと…見晴らしてもろうてましたわ」

「クッ……」

「お前らといい…錦山といい……ホンマ脇が甘いわ。ガキは貰ってくでえお前らはここで終いやけどなあ」

「……嶋野さん……あいつは俺が貰いますよオ……」

さつきまで喋らなかつたロングの男が俺を指さす。

「あいつは……日挟連に喧嘩売ったんだ……」

最後の方は小さすぎて恐らく嶋野位しか聞こえてないだろう。

「分かっとるわ！……ったく…何で幹部がお前しかおらんのや……」

「嶋野よ……」

「何や……」

「お前さんも相当脇が甘いぜ」

風間さんが視線を嶋野から逸らすとそこからトラックが二台来た。

「何や！」

「親父！」

「遅せえぞ。柏木」

「へへ、もうすぐクリスマスですしね。屈強なプレゼントをお持ちしましたよ」

風間組らしい。トラック二台分となると結構な数だ。

「桐生！ずいぶん苦労したみてえだな」

「柏木さんこそ」

「フフ、何や？風間組はやる気みたいやなあ。よっしゃあ！血の雨降らしたるわあ!!」

「寺田さん…皆を下げといてください」

「柏木さん…嶋野組や日挟連の連中は頼んだ」

「桐生さん（竜也）」

「嶋野は任せましたよ（そのロングは任せるぞ）」

2人して同じ事を言い、苦笑しながら改めて向こうを見る。

「来いよ、ロング……俺が目的なんだろう？」

「……」

ブツブツ言いながら俺が移動した方へ来る。正直怖い…

「お願いします！」

「アリガトオ……」

日挟連の男がロンゲにある物を渡す。

ロンゲに渡されたのは厳つすぎるチェーンソーだった。

「!?」

「さて……じゃあアやろうかア……!」

「(真島さんよりやべえんじゃねえのか……!!こいつ……!?)」

「フッ！」

<日挟連幹部>

チェーンソーを避けハイキックを入れる。

蹴った感触では軽かった。

真島さんや☒、今回の件でやりあつた幹部クラスの中では1番軽い。

「アハハハハッ！楽しいなあ！」

「こ、こいつ……!?!」

チェーンソーでの突進

どこからその力が出るのかフラつく様子も無く避けられた直ぐに横に振る。

ブウン！

「はあ……はあ……」

ただ避けただけなのに汗の量が尋常じゃなかった。もちろん喰らえば即死というものはいっているのだろうがその後だった。

「あれえ…避けられたア……!」

物凄く不快な笑みを浮かべられる。

ゾクゾク！

背中には悪寒しか漂わない。

「ありえねえ……!キモすぎ……!」

「アハア！」

縦での振り下ろし。これも避けて蹴りで吹っ飛ばすのだがまた何も無いように立ち上がる。

「(落ち着け……ちゃんと血は出てんだ。だから野郎も1人の人間なんだ……多分……)」

その時、日挟連の1人が援護に入る形で俺に向かう。

「(っクソ!あいつ1人でキツいつてのに……!!)」

ジャギジャギジャギ!!

その1人の援護に入った奴が横に切られた。

「ギヤアアア!!」

「なっ!？」

「あれえ……邪魔だよオ……あいつだと思つたのにさあ……」

「す、すいません!」

謝罪に入った奴も切られる。

「もういいからさあ……入ってこないでよオ……」

顔をぶつ壊す勢いでぶん殴る。

「……おい!いつもよ、あいつがやりだすとあんな感じなのか?」

古参らしき奴が口を開く。

「……ああ……あの人の鬨いに入ると何しても切られちゃう。いつとも安堂さんも注意するんだが……」

「リョーかい……ああ、そだ。日挟連、俺が潰すから今の内に組替わりしといた方がいいぞ」

「何だと……!？」

「例えば……人が良い風間組とかな」

ロンゲを吹っ飛ばした方を見るとかなり顔を怒りで歪ませていた。

「行けよ……殺されるぞ。死にたく無かったら俺から離れとけ」

古参が組員を全員連れていく。

「もう怖くねえわ、お前」

話してる内にも突進で向かってくる。

「……恐怖よりも怒りののが勝ってるからな!」

メキメキメキ!

脇腹にフックを入れる。感触的にかなり骨に來ているだろう。

「……人を殺す事だけ楽しんでる奴なんか……!」

バキッ!ゴリッ!

膝を砕き、右手の甲を蹴る。

「うああああー！」

チェーンソーを振り回す。

避けハイキックで蹴り下ろしアッパーでぶっ飛ばす。ダメ押しで顔を踏み付ける。

「……ッ！嫌な事思い出したな…桐生さんの方行くか…」

急ぎ足で桐生さんの所へ行く。俺のが先に終わったらしく桐生さん含め風間組の人達はまだ闘っている。

「風間さん！」

「竜也！そっちは終わったみてえだな」

「ええ…まだこっちは乱闘って事で時間掛かってるみたいですね。もう一仕事行つてきます」

「風間さん！危ない！」

寺田さんと心愛の視線の先にはさっきのロンゲが風間さんに向けてチェーンソーを構えていた。

「死ねええ!!」

傍にあつたドラム缶をチェーンソーと風間さんの間にねじ込む様に投げる。チェーンソーはドラム缶から取るのに時間が掛かった。

「自慢の武器取り上げられちゃあ怖くねえな」

「ミシミシミシ!!」

逆にこっちの手が悲鳴をあげそうな音を立てまたロンゲは沈んだ。

「ったく……くそゾンビが、大人しく倒れとけてんだ…風間さん大丈夫ですか？」

「俺は大丈夫だ。むしろお前のが大丈夫か？」

「ああ、全然なんて事無いです」

「そこまで言つて心愛と寺田さんの方へ行く。」

「寺田さん、ありがとうございました。あん時言ってくれなかったらと思うと……」

「いや…こっちこそ直ぐに手が出せませんでした……」

「竜也くん！ホントに大丈夫……？」

「ああ…数時間前に闘った。真島さんの方が断然ヤバかった…」

「あの真島さんと……黒瀬くんは強いすな」

「まだまだですよ……もっかいやれって言われたら今度は勝てると思えません」

「フグオ！」

桐生さん達も決着が着いたらしい。嶋野が吹っ飛ばされていた。

「これまでだ嶋野」

風間さんが桐生さんを見て優しい笑みを零す。

「（この2人はすげえ良いな……信頼しあってるっていうか……）」

「でやあああつ!!」

嶋野が叫ぶ。その手の中には手榴弾

「風間さん！離れてー！」

寺田さんが嶋野を撃つがもう手からは離れていた。

「遙、親つさん！」

ドオン！

「風間さん！」

「一馬……」

「親つさん！」

「遙は無事だぜ……」

「風間のおじさん！」

「親つさん！」

「100億の……話を……」

「寺田さん！救急車！」

「分かってる!!」

「一馬……金を盗んだのは……由美と俺……そして世良なんだ……」

「えっ……」

「100億は神宮のだ……奴は、東城会使って……闇の金を洗ってた」

「『マネーロンダリング』……」

「そうだ……俺は奴を失脚させるために……その100億をそして由美は、その計画に志願したんだ。」

「由美が……?」

「アレスに急げ……一馬。由美が危ねえ……!」

「アレス……アレスに由美が!？」

「そうだ。それから……」

風間さんは封筒を取り出した。

「これは……?」

「三代目の……『遺言状』だ。東城会の……未来が、ここにある……」

「はい……!」

「一馬……俺はお前に、謝らなきゃならない事がある……許してくれ。一馬……お前の……『肉親』殺したのは……俺なんだ。」

「ヒマワリは……俺が『肉親』殺した……子供の為の……施設……」

風間さんの手が桐生さんに伸びていく。

「いいんだ……いいんだ親っさん。俺にとっちや親っさんが本当の……」

風間さんの手が落ちる。

「本当の……親父でした……!!」

桐生さんの目から大粒の涙が出てくる。だが、桐生さんは分かっている。これで止まっては行けないのを……

「竜也……神室町に急ぐぞ……」

「はい……!」

「私も行く!」

遙ちゃんがハッキリと言った。

「ああ、勿論そのつもりだ。竜也も問題無いだろ」

「ええ、ようやく『お母さん』と『娘』として会える瞬間が来たってのに、会わせないのは酷いですからね」

「あ、あの!私も……行つていいですか?」

「心愛……」

「竜也の知り合いだったな……神室町は危険だ。俺と竜也が直ぐ助けられるかどうか分からない。そんな状態で連れてく訳には……」

「分かっています……でも、連れてって欲しいです」

「……竜也」

「はい……?」

「お前に任せる。ある程度信念はあるみたいだからな」

「良いよ…何かあったら俺が守るから」
「ありがとう…！」

23話

四代目

急いで神室町に戻ってきた。その時桐生さんの携帯が鳴る。

「伊達さん」

「ああ」

「アレスに向かう。由美がいるかもしれないんだ」

「何だど? どういう事だ?」

「分かった…感謝する。伊達さん」

「伊達さんは何て?」

「一輝やユウヤに頼んで色々揃えて貰ったらしい。だからスターダストに行こうと思う」

急いでスターダストに向かうと一輝さんとユウヤさんが待っていた。

「桐生さん、こつちです」

「ああ…最後まで世話になっちまって、済まないな」

「そんな事は良いですから…：…なにかと必要かと思って…：…これ、ホスト仲間の気持ちです」

俺と桐生さん2人ずつに30万もくれた。

「い、いや!? 桐生さんはともかく! 俺は大丈夫です!」

流石にこんだけの大金は受け取れない。

「竜也くんも貰ってください」

「…：…一輝さんがそう言うなら…：…ありがとうございます」

しつかり頭を下げ、受け取る。

「竜也、もう行くか?」

「少し欲しい感がありますね」

「…：…確かにそうだな。行くか…」

ことぶき薬局に行き、一輝さん達から貰った30万を使い、スタミナミンロイヤルを1人当たり4本使う計算として8本買ってスターダストに戻ってきた。

「もう、準備は整いましたか?」

「ああ、もう大丈夫だ」

「分かりました……桐生さん、もう俺達に出来る事はありません。月並みな事しか言えませんが、頑張ってください」

「ああ、分かった。ありがとうな」

「なんだか、外の様子がいつもと違う感じがします。気を付けてください」

ミレニアムタワーを見て遙ちゃんが口を開く。

「あそこにお母さんが？」

「そうだね」

「やつと会えるな」

「……私、なんて呼べばいいんだろう」

「由美お姉ちゃんって呼ぶのか？」

「お母さん」で良いと思うよ。遙ちゃん

「うん」

「桐生さん……」

「……やな感じだ……」

俺ら4人以外通りには人が居なくなっていた。

ぞろぞろと前から後ろからゴロツキが集まる。

「桐生う……あんた殺せば東城会の“四代目”から直々の褒美が出る」

「四代目だと？」

「金も地位も女もだ！何年ぶち込まれても釣りが来るぜ！」

「汚え野郎共……反吐しか出ねえな」

「今夜は熱いぜえ。なんせ殺しのお墨付きだ。次期会長……錦山さんのなあ!!」

「遙、南……心配するな。俺らで何があっても守る。信じてくれるな」

「うん、やっつけておじさん」

「お願いします」

「手加減はしねえ……死にてえ奴だけ掛かって来い!!!」

「……来いよ……!!」

くゴロツキく

手始めに蹴りあげで顎を蹴り気絶される。蹴りあげの反動を生かし回転して隣の奴の側頭部を蹴る。

「まず2人……」

桐生さんの方はもう5人目に突入していた。

「(早すぎじゃないですか……?)」

心の中で突っ込んでいる間に来た奴のバットを捻り、奴の手を離させる様にし、バットのグリップ部分で吹っ飛ばす。

ドゴツ!

重々しい音が響く。バットを素早く前から後ろへ送り今度はバットで突く。

「ウグッ!」

「竜也!」

見ると桐生さんが俺に向けて拳を向ける。俺も桐生さんに向けて殴る。

バキッ!

お互い数センチ左右にいる敵に向けて放っていた。

「良く分かったな」

「なんとなく分かりますよ。オラァ!」

たわいない会話中も体は止まらない。

マシンガンになり、心愛と遙ちゃんを狙ってる奴をすぐさま潰す。

「俺らに来いよ……俺ら潰せないからってそっち狙うのは悪手だろ」

「竜也……2人を見てろ!」

桐生さんは大型バイクを振り回していた。壊し屋の本領発揮だろう。

残り30人位。桐生さんがバイクが完全に壊れ武器にすらならない所まで使用した所で今度は俺がマシンガンの全力

余談だが、桐生さんと俺のバトルスタイルは基本的似ているが所々違う。例えば俺はベース、スピード、パワーの三つだけだが、桐生さんはそれに加え全てのスタイルの総合となる「堂島の龍」なるスタイルがある。その他に桐生さんはパワー型、俺はスピード型である。

これがどうゆう事を表すかというところ

「は、速え!!ウガッ!」

「ウゲエ!」

悲鳴の音が止まらない。

本気でないマシンガンでさえ攻撃が当たらないのに全力だと恐らく俺の姿をまともに視認出来ないだろう。だからといって緩める気は無い。元々多数なのはあちらだ。

アッパー、裏拳、ストレート、フックみるみるうちに最後の1人となっっている。

「く、クソツ……!」

「逃がすかよ!」

ゴキッ!バタッ

「ふう……!終わり!行きましょう。また援軍が来るかもしれませんが」

「あ、ああ……そうだな」

「ね、ねえ心愛ちゃん」

「ど、どうしたの?遥ちゃん?」

「前からの知り合いなんだよね。竜也くんって前からあんな強かったの?」

「ううん……小学校で初めて竜也くんの喧嘩見た時から小学生レベルじゃないとは思ってたけど……」

「(何かすげえ貶されてる気がする……気のせいにして)」

心愛と遥ちゃんの会話を聞き流し、アレスに向かう。

—————

ミレニアムタワーの中はMIAでいっぱいだった。

「遥ちゃん、心愛と一緒に隠れてて」

「行こう。遥ちゃん」

心愛が遥ちゃんを連れていく。

「12月も末だつてのに……運ないっすね。俺ら……」

ため息を吐きながら愚痴を零す。

「運の無さはもう受け止めてる。竜也も悪運強いからな。認めた方がいっぞ」

「俺は死んでも認めませんよ……ま、いいや。さっさとめえらは来

いよ……」

黒服の銃器を持った連中がぞろぞろ出てくる。

「M I Aだか何だか知らねえけどよ……殺される覚悟はしろよ……!!」

< M I A >

「(銃を持った奴が6人、ナイフ持ったのが3人か……)」

急いで銃持ちの懐に入り、蹴りでのして銃を奪う。流れるように銃弾で銃持ち全員とナイフ持ち1人を撃って無力化。残りは桐生さんが始末済み。

「しんど……こっから先こんなのばつかですか?」

「M I Aだからな……恐らく……というか絶対そうだろうな。上の階のもやるぞ」

エスカレーターで上に登る。が、途中で無理矢理上の階の手すりに捕まり、傍に居た3人一気にやる。地を這う様に移動し4人一気に吹っ飛ばす。普通にエスカレーターで来た桐生さん。

「相変わらず無茶をするな」

「のんきに待ってるあいつらが悪いですし。俺らはあくまで正当防衛ですよ」

リーダーらしきナイフを構えた奴も登場する。

「あいつは任せとけ。二発で終わらせてくる」

「(名前も知らねえけど……なんつうかドンマイ)」

ナイフ縦ぶりに対しカウンター。しかし普通のカウンターとはちよつと違う。鳩尾にとてつもないスピードで放つカウンター。

小牧流奥義虎落とし

河原に居る小牧さん。あの人に教わったのだろう

「(俺も前に伝授ついでに何故か喰らったけどあれ、ヤベえんだよな…言葉に出来ない重みっていうか……)」

顔を蹴り飛ばし本当に二発で終わらせた。

「小牧さんと会ったことあるんですね」

「まあ、あのじいさんに無理矢理教えてもらったという言い方が近いがな」

「あの人あんな感じなんですよ。先行きましょう」

下の階に行き、エレベーターへ向かう。

「竜也くん、終わったの？」

「ああ、もう出てきても大丈夫だぜ」

「分かった。呼んでくるね」

心愛が遙ちゃんを呼び、改めてエレベーターでアレスの階に向かう。

—————

エレベーターが開き、アレスの中に入る。

そこには美月さん……もとい由美さんが立っていた

「由美……」

「一馬……遥！」

階段を降り、由美さんの所へ行く。

「遥……」

「うん、分かってる」

「遥……」

「お、お母さん……”お母さん”なんだよね？」

「遥！ごめんね……辛い思いさせてごめんね！」

「お母さん！」

遙ちゃんと由美さんが抱き合う。

「私……お母さんね、本当はあなたと一緒にいたかった。でもね、自分がお母さんだって言うことが出来なかったの」

「いいよ。お母さん。私、分かっているから。私、嬉しいよ」

俺達も遙ちゃんに続く形で後ろから行く。

「良かったね、遙ちゃん」

「久しぶりね、竜也くんそれに心愛ちゃん。……おかえりなさい、一馬……」

「ああ、遅くなって悪かったな。由美」

しばらくの静寂からの振動

「ん？何だ!？」

「きつと彼が来たのよ。奪われたものを取り返しに……」

バルコニーに出るとヘリコプターが今まさに着陸しようとしている所だった。

多くのMIAが出てきた後

「久しぶりじゃないか、由美。それに遥……」

「お前が……神宮……」

「てめえか……神宮ってのは」

「こうして会うのは初めてだね、桐生一馬君。それに黒瀬竜也君。初めましてと言うべきか、さよならと言うべきか……フッフ、君には……正確に言うとは君達には苦勞させられたよ」

「100億を取り返しに来たのね」

「ああそうさ。元々私の金なんだから。それに他にも処分してきたのさ」

「何!？」

神宮が遥ちゃんに銃を構える。

「遥!」

「おじさん!黒瀬くん!」

瞬間的に俺と桐生さんが弾が逸れるように身代わりに入る。

「(こいつ……!!)」

「神宮!……お前!」

俺も桐生さんも平然と遥ちゃんに銃を向けた事に対する怒り。

「馬鹿な男だ。まあヤクザ崩れなど皆こんなものか」

「……てめえ……何でこんな事しといて普通にしてんだコラア!」

「仕方ない事さ。その子供は私にとって『邪魔者』でしか無い。私の今後……いや、この国の今後の為には必要のないものなのだよ」

「(……今こいつはなんて言った……? 必要の無いものだ……!)」

桐生さん達が話すが何も耳に残らない。残っているのはさっきの神宮の言葉のみ。

「(……意味わかんねえ……ものってなんだよ……!)」

「……人を人として見ねえクズが!」

「何?今なんて言ったかね?」

「あ?だから、人としてすら見れねえクズ野郎がって言ってんだよ!!」

「どうやら、余程死にたいらしいな…」

「来いよ…ぶっ殺してやるよ…!」

「待て!」

「無駄よ! 竜也くん、この人は所詮感情も無ければ信念すら無いの」

由美さんがそれを言った後、口を動かすだけで『抑えて』と言っていた。仕方なく抑える。

「ふざけるな! お前や世良ごときに何が分かるというのだ!」

神宮が発砲。しかし由美さんは動じない。

「あなたには何を言っても無駄ね。自分が恥ずかしくないの?」

「ハハハ! 随分な言いようじゃないか。でももうそんな事はどうでもいい。ここでお前らは終わりなんだからなあ」

MIAも銃を構え出す

「そうかなあ。まだ終わってへんのちゃうか?」

「寺田!」

「これで『力』は五分五分や。風間さんの『意思』は生きとんで

追い詰められた筈なのに神宮は動じない。

「フツ、ハハハハ!」

「何やねん!」

「これだから頭の無い極道は困る。…やれ!」

寺田さんが連れてきた連中が寺田さんを抑える。

「どういう事や! お前ら…!」

「あなた、まさか!」

「そうだよ。私は東城会から近江連合に『鞍替え』したんだ。バックの組織をな」

「何だと?」

「私は着々と進めていたんだ。東城会を捨てて近江連合と協力関係を築く計画をな」

「そんな話、俺は知らんぞ!」

「当たり前だ! …お前は近江連合の五代目に踊らされていただけなんだから。もう一年前から進んでいた話だ。五代目と私の間でねえ」

寺田さんが気絶される。

「私は、世良が私を裏切る事は分かっていた。彼は融通の利かない男だったからねえ。理想を求め、ずっと私を支援してきてくれたが結局は現実の前に挫けたんだ」

「現実だと?」

「ああ、そうさ! 君達程度には政治の話なんて分からないだろうが、国を動かすには“金”と“力”が必要なんだよ。私にとって彼は“力”だった。だが彼は変な信念の為に私の理想から離れていったのだ。数年前、殺してくれたと思っていた由美が生きているのを知った私は……。」

「世良、いや東城会を捨てる心算でいた」

「それでお前は近江連合に擦り寄った訳か」

「そうだ。私は近江に話を持ち込んだ。近江連合からすれば私の政治力は魅力だ!“政治と裏社会”この二つを牛耳れば日本を操る事など造作もない事だからなあ」

「もしかして、この100億は……」

「近江への贈り物だよ。私からすれば東城会も潰れて正に一石二鳥だ」

「じゃあ錦も踊らされたって言うのか?」

「そうだよ! 彼に話を吹き込んだのは私だ。出世欲に取り憑かれた若造にエサを与えただけさ。彼は見事に役目を果たしたよ。世良暗殺、内部抗争…他にも嬉しい誤算…君達2人だ! もはや東城会は崩壊寸前だ。本当にお礼を言いたい気分だよ!」

「神宮う……貴様ア!!」

「悔しいだろ? 私は近江とくみ日本国の“頂点”に立つ。近江連合は裏社会統一、全ての“力”は私のものだ! 私の理想が叶うのだ!」

「…………アホくさ……」

今まで黙っていたが、また喋り出す。

「てめえの話聞いているだけで眠くなってくるわ……要は誰も逆らえない程度の力が欲しいってだけだろ? ……それを言葉をいちいち大きくくしゃがって……バカらしくて、うぜえよ……!」

「確かにそうね…神宮、終わらせてあげる」

「何をしている!」

由美さんは持つているアタツシユケースを開ける。

その中には爆弾が入っていた。

「な、何!?!」

「これであなたはもう私は撃てないわ。これが爆発すれば店の中の100億も消えるわよ。100億をあなたなんかには絶対に渡さないわ」

「馬鹿な事を言ってるな!そんな事をして何のメリットがあるんだ!?!」

「分かってないのはあなたよ。人間は損得勘定じゃ動かないの。熱い……強い気持ちがあつて初めて動くものなの」

「うるさい!今更何を……何を言っている!」

「一馬……遥をこつちに」

「心愛も一緒に行つてこい。こつから先は俺らの仕事だ」

「うん……」

由美さん、遥ちゃん、心愛の順でアレスに入っていく。

「これで由美達には手出し出来ねえな……神宮。なあ神宮……世良会長は、あんたが何を考えているかなんてお見通しだぜ」

「何だと!?!」

「会長はあんたに気づいて欲しかったんだよ……強い信念があつた昔のあんたをな……だから自分の命を危険にさらしてまで100億を盗んだんだ……あんたから取り上げたんだ」

「馬鹿を言うな!何を根拠にそんな事!」

桐生さんは遺言状を取り出す。

「ゆ、遺言状だと!?!」

「あんたは錦に遺言状の存在をチラつかせた。適当だろうが、本当にあつたんだよ……会長と親つさんが命がけで残したもんだ」

「うるさい!世良ごときがあ……私を舐めるような真似をしおつて!今となつてはただの紙切れだ!!」

「俺が死ねば……な、だが、そうはいかねえ。俺は……あの2人が残してくれたもんを守る!」

遺言状を見せる

「俺は『東城会四代目』……桐生一馬だ!!」

「グググ……ここ、殺せ!」

<神宮京平>

1番近くの奴から3人一気に潰す。そのまま拳を振り下ろし1人、残り2人。

ローキックで1人、桐生さんが1人やり残りは向こう側の神宮達のみとなった。

「な、何?!」

「おい、神宮……覚悟しろよ……!」

流石にこんな早くに近江の連中が倒されると思っていなかったのか。かなり動揺している。

「……四代目ですか……俺はめちやくちやありだと思えますよ」

向こう側に行くための橋を渡りながら会話する。

「……………」

「?……桐生さん?どうしました?」

「いや、ちよつとな。まとまったら話す」

上から武装した連中が5人降りてくる。

「ツチーめんど!」

ナイフを手で動かさせ、軌道をずらす。

顎に掌底。そのまま腰に装備していた銃で2人。残りは桐生さんが始末済み。

「大した事ないですけど……数がしんどいですね……」

「ああ」

『それに』と言って上を見た桐生さん。

「まだ来るようだぞ」

「めんどくせえなあ。もう!」

別のへりも来る。

「(どんだけ来んだよ!)」

心の中で悪態をつく

「無事か?桐生!竜也!」

「伊達さん！」

伊達さんだった。

「神宮京平！今四課が逮捕状をだした！贈収賄、銃刀法違反、殺人教唆……お前はもう終わりだ！」

「証拠は無い！ハツタリだ！」

「やめろ！」

伊達さんのへりが離れていく。

「伊達さん!!」

「こうなった以上、全員死んでもらうしか無い！覚悟はいいね？」

「おい……何ボサつとしてんだ？」

簡単だった。

全員の視線が伊達さん達のへりに注目している以上、神宮達の所に行くのは簡単だった。

「もう3人やったぞ……後6人ってどこか……」

神宮が上に逃げる。盾になるように塞ぐ。

「別にいいよ……全員吹っ飛ばすだけだ！」

ローキックで2人。ストレート、裏拳……瞬殺だった。

「竜也！」

桐生さんも来る。

「……桐生さん、お願いがあります。神宮は任せてもらって良いですか？」

「………分かった……ボディーガードの2人は任せとけ」

「すいません……あいつらのが強いとは思うんですけど……」

「気にするな。それより一旦疲れを殺そう」

そう言ってスタミナミンロイヤルを一本取り出す。

「竜也も飲んで……飲むか飲まないかでまた変わってくるぞ」

「そうですね。俺も少し疲れました」

お互いに飲みながら屋上に向かう。

「殺れ！」

神宮の言葉と共にボディーガードの2人が銃を撃つが特に危機とせず回避

2人は桐生さんに託し、俺は真っ直ぐ神宮に向かっていく。
「やつと殴れる!」

メキメキ!バキツ!

今までに見た事ないような吹っ飛び方をした。

「おい…寝てる暇なんてねえだろ」

何発も何発も顔をぶん殴る。次第に拳の感覚すら無くなってくる。

「てめえがなんて言おうともよ…遙ちゃんからしたら父親なんだよ

…それを〴〵もの〴〵って何だよ!」

グシャ!グシャ!グシャ!

だんだん気持ち悪い擬音に変わって来ていた。

「死ねよ」

全力で殴ろうとした所

ガシツ!

桐生さんに止められた。

「落ち着け…俺達は〴〵神宮を殺す〴〵為にここに来た訳じゃない。お前の気持ちも分かっている…だが、抑えてくれ」

「……………周り全然見えなくなっていました……すいません…」

周りを見るときもう俺と桐生さんしか立っていないなかった。

「いや、いいんだ…アレスに戻ろう。由美達が待ってる」

「はい…………」

「……………そうだ。一つ決めた事があつてな」

「?…なんですか?」

「恐らく、ミレニアムタワーから出てしばらくしたら四代目としての就任式があるだろう。そこで俺は————をしようと思う」

「…………ハハっ!いいすつね、それ。俺は賛成ですよ」

「フツ…………さあ行くぞ。もしかしたら居るかもしれないしな」

ある程度の会話をしてアレスに戻って行った。

24話 闘いの果て

アレスに戻って由美さん達の所に行くエレベーターから出てくる2人が居た。

「錦山君……」

「安堂……!」

「終わったか……ようやく落ち着けるな」

「錦……」

「何だそりや……爆弾か? 由美……馬鹿な事はやめとけ」

「だめよ! 100億はあなた達にも渡さない!」

「どうやら私も入ってるようですね。まああなたと一緒にいれば当然か」

「当然だろうな……俺の事が憎いか由美……」

「諦めてないのか……錦……」

「当たり前だ! どんだけ犠牲払おうとも跡目になるんだ……」

「なあ、錦……神宮に踊らされてたんだ。奴の本当の目的は……」

「んな事ア分かってる! 分かってて行動したんだよ俺あ……」

「えっ!? どういう事?」

「そんな話、聞いた事ありませんでしたが……」

由美さん、安堂の順で口を開く。

「言ったはずだぞ桐生。俺は10年前、お前裏切った時から誰も信用しちやいねえってな! 神宮が話持ち出した時から信用なんかしちやいねえよ」

「じゃあ、お前は全てをしって……?」

「ああ、そうだ! 俺は負けたくなかったんだ!……お前にな」

煙草に火を点けアレスにある、ソファアに腰掛ける錦山

「てめえ……今の聞いても錦山と「知ってましたよ」

錦山に聞こえない程度で安堂と会話する

「……そうかよ」

簡単に引き下がる。元々味方でも無い人物だ。が、安堂は続ける。

「別に私からすればお互い目的がある程度一緒の方向にあれば問題無

「いいと思いますがね？」

「それで良いのかよ……ちっちゃい子供じゃねえんだぞ……」

「何と言われようとも結構……私も錦山さんも既に遅すぎた……」

「……？」

俺は安堂の言ってる事が分からず、首を傾げる。

「少し頭がきれると言っても流石にまだ分かりませんか……さ、話を終わらしましょう」

「俺は100億を手に入れ東城会を継ぐ。由美を奪う……それで俺の運命が変えられるんだ！」

錦山の声が耳に入る

「錦山さん……あなたは分かかってないと思います」

「何だど？」

心愛が錦山に言う。

「そんなのは……運命なんて言いません。ただの逃げです……運命は変わらないんです……」

「言わせておけば！」

心愛に殴りかかろうとするがそれは俺が抑える。

「おい……何してんだ……」

「お前は……港の時のやつか……てめえは安堂にでも相手してもらえ」

強引に俺の手を振りほどく。

「……まあいい……そろそろ決着をつけよう……」

「ああ、俺達の闘いとお互いの運命にな……」

「待った（待ってください）」

俺と安堂が同時に待ったをかける。

「メインディッシュより先に前菜からやんないとな」

「先ずは私達2人でしようね」

「……遙、由美、南後ろに下がろう」

桐生さんが3人を後ろに下げ、錦山は何も言わず下がる。

<安堂剛>

「思えば……あの時君が断った時からこうなる予定だったのかもしれないま

せんね」

「さあな……別に俺にとつちや関係ねえよ」

お互いがゆっくり近づき俺の先手によりアツパー、ローキック、蹴り飛ばしでバルコニーまで飛ばす。

「こんなもんで倒れてくれたら、あんなだけの殺気は出せねえよな」
低い体制での接近。ローキックで当たらずとも動きを止めようとしたが、止まらずそのままアツパー、ローキック、蹴り飛ばしとさつきと同じ順でやり返された。

「ガハッ…の野郎…!」

「ふう……お互い準備運動は終わりですかね」

「……上等!」

フック気味のストレート。なんなく躲されハイキックが来るがガードで対処。左膝を腹に入れる。意識が一瞬向いた時に真島さんにやった時と同様に頭にフック

ドゴツ!

鈍い音と共に吹き飛ぶ。

「まだこんなもんじゃねえだろ……!」

「やってくれる……!」

ローキック

余裕でガードするが

ドゴツ!

ローキックなどではなく本当は下から上にいくブラジリアンキックにより頭に直撃。そのまま蹴られた状態で足を掴みボディープローを入れる。

膝から崩れ落ちるその隙に足を離し腕を掴み締め上げる。

「……!」

「お…落ちろやコラア!」

一切緩めず失神するまで締め続ける

つもりだった。

「!?」

俺の身体が持ち上げられていたのだ。

振り下ろしにより背中を強く打つ。

「ガハッ!」

両足を掴まれジャイアントスイングによりソファアールがある場所に吹き飛ばされる。

即座に起き上がれずそのまま腹に一撃

ドゴツ!

と同時に俺も頭に蹴りを入れる。

それにより安堂が離れる。

「(つくソ……強ええな……でも勝てないって事はねえ)」

マシンガンスタイルになる。

地面を強く踏み急接近からの蹴りあげ顔が上を向き勝手に無防備になった腹に回転をつけ威力が上がるようにしたストレートを入れる。

メリメリメリ!

「グオー!」

「(つぶね……これならマシンガンのままでもハンドガン並の威力は出てそうだな)」

☒との時に思った、マシンガンだと威力が低すぎて大したダメージを与えてなかったのがこのやり方だと解消されたようだ。

「(後、もうちよいか……ツ!よりによってこんな時に!)」

ガクツ!

ある程度時折休んでいたとはいえ、蛇華の時から連戦続き、頭ではどんなに思っても身体がついてこず膝から下が管理下から離れたように落ちる。

これを逃すはずもなく頭を蹴られる。

ドゴツ!

追撃で腹にも喰らう。

フラフラな状態ながらも立つ。

「さて…終わらせるとしましようか」

ゆっくりと安堂が近づいてきてストレートを放つ。

ドゴオ!!

「!?グホオ!!」

「……小牧流奥義…虎落とし…」

俺の虎落としにより安堂が5mは吹き飛んだ事により多くの酒が置いてあるカウンターまで移動する。

「さあ、仕切り直しか…?」

「グッ……!」

「立てんのかよ…それが凄えよ……今までの中で一番の手応えだったのによ……」

おぼつかない足どりながら行く。

アッパ―

バキッ!!

浮いた身体を頭を鷲掴みしてカウンター席に叩き付ける。

ドタッ

「うおっ、もうちよい持てよ……」

ガクガクの膝を抑えながら立ち上がる。

「やつ…やつぱり…違い、ますね… “俺ら” みてえな、もんとは……」

「何が言いてえのか…分かんねえな……」

「そのまんま、ですよ…良くも悪くも… “半端モン” とはちがうってことですよ……」

「……俺からすりゃあてめえも、変わんねえけどな…」

「つまらない話をしてしまいましたね……」

喰らった威力、受けている箇所全て安堂のが上回っているはずだが、何事も無いように構え直す。

「続き、行きましようか…」

何も言わず俺も構え直す。

アッパ―を膝で相殺、ハイキックからの飛んでもう片方の足でも頭

に蹴り。

グリッ！ゴキッ！

「ッ!!」

右肩を殴られ肩が碎ける音もなる。

気にせず右で殴る。

ズキッ!!

「(つてえ!もういっちよ!)」

腹を蹴飛ばす。スーツを引き込み頭突き。

ゴンッ!

「……オラァ!」

「フンッ!」

ドゴオ!

2人一緒に吹っ飛ぶ。

「あー、これやべえな……ひでえのが肩と頭……それと疲れた下半身かあ……」

独り言を呟く。

吹っ飛ばされた状態のまま上を向き続ける。

「やるだけやるか……」

反動を使い身体を起こす。

安堂は既に接近していて距離はかなり近い。

「来いよ……受け止めてやるよ」

人差し指で挑発する。

「……そちら……こそ、来てもらって……構わないですよ」

安堂は反応せず、逆に俺を誘う。

「じゃあ、遠慮なく!」

ゴリッ!

殴って下がろうとするが

「!?……グホッ!」

足を踏まれ腹に喰らう。膝、顔、腕続けざまに喰らう。

ドゴッ!!

蹴り下ろしによりアスファルトすら碎け、そこに寝る形になる。

「やられた、フリですか……うらしくない……」

「グツ………そんな、つもり……ねえよ……!!」

「(や、やべえ………力全く入んねえ………!!)」

既に足はおろか、腕にすら力が入らなくなっていた。

「……お終い、ですかね………」

最後の方は聞き取れなかった。

「さて、では……」

ガンツ!

拳を頭で受け止める。

「ツ!!ハツ!!」

直ぐに蹴られるが、その蹴られ浮いたのを利用し立ち上がる。

「さ………サン………キューな………ハハツ………おかげで………起きれたわ」

「………そこまでして立ち上がらなくても、良いんですけどね………!」

「つ………つれねえこと………言うなよ………っクソ………もう、立ってんの

しんどいから………終わらせようぜ………!!」

身体はボロボロ、まっすぐ立つことすら出来ていない。

対して安堂の方は終始安堂の方が優勢だったように立っている。

しかし、所々の傷の様子では俺より酷いようだ。

「……良いでしょう………!!」

先程と同じく俺と安堂の距離はかなり近く、拳1つ分位だろう。

「っしやあ………行くぜ………」

太ももを叩き、最後に備え動ける様にする。

「黒瀬ええええ!!」

「安堂ううう!!」

ボコツ!!

吹っ飛んだ時と同じ2人同時に殴る。

「(負けるかよ!)」

今度は吹っ飛ばず左で殴る。そのまま自然に身体を落とし左手だけで全身支え上から蹴り下ろす。

ドゴオ!!

蹴り下ろしはしたが、安堂は立ち往生俺は先程以上支え切れず背中

を丸め倒れる。

「(ど、どうだ……?もう無理だぜ……限界……超えた先の限界だ……)」

ドタッ!

人が倒れる音がする。間違いなく安堂だろうが、俺も顔すら動かさず確認出来ない。

少ししてようやく顔を動かし音の方を見る。

安堂が大の字で倒れていた。起き上がる気配は無い。

「はあ……はあ……」

俺は何とか立ち上がる。安堂は俺が上に立ってもまだ気付いていない。

「これは……俺の……勝ちって事で……いいよな……」

安堂を抱え、ホールへと向かう扉を開けた。

くく桐生視点くく

壮絶と言ってもいい程の音が止んだ。

「(終わったか……どっちだ?)」

扉から出てきたのは鬨っていた奴を背負った竜也だった。

「竜也ー!」

俺は竜也達の方へ急ぐ。

「き、桐生さん……ちよつと、こいつ持ってもらっても……いいですか……?結構……自分だけで……精一杯です……」

「ああ、分かった。肩貸すか?」

「だい……大丈夫です……ソファアームまでなら全然……行けます……」

竜也と奴をソファアームまで運ぶ。

南が竜也に話し掛けている。竜也の方は任せて良いだろう。

「あー……桐生さんー!」

竜也に呼び止められる。

「?どうした竜也?」

「俺の方は……しっかり、やりましたよ……そっちは任せますよ……」
笑顔とピースをしながらそんな事を言ってきた。

「フツ……任せておけ!」

改めて錦と向き合う。

「呆れた前座だったな…桐生」

「俺はそんな事は無かったがな。無駄話は良いだろ…来い、錦…!」
錦は上着を脱ぐ。俺も脱ぐ。

錦の鯉と俺の龍が表れる。俺は一瞬目を瞑り考える。

「(なあ錦…その目は何を思ってた…10年前なら分かったかもしれないねえが…今はもう分かんねえよ。それは暫く会ってなかったからか…?それとも…)」

目を開く。

<錦山彰>

「ウオオオ!!」

2人同時に殴り掛かる。お互い半身ずらし腕だけが交わる。

ドゴツ!ドゴツ!ドゴツ!

お互い脇腹を殴り続ける。

「桐生うう!!」

ドンツ!!

錦が腕を捻り俺を叩き付ける。そのままストレートが来るが手で軌道をずらす。

膝で顔をずらさせ急いで立ち上がる。

壊し屋になり抱きついて背中を折る勢いでやり、そのまま地面に投げ捨てる。

立たせ錦の意識が朦朧としている間にラッシュのコンボでダメージを与える。

反撃される前に蹴っ飛ばす。

「どうしたア…そんなもんかア!!」

あえての挑発

すつと錦が立ち上がる。向かってくるのを避け、避けた方にも蹴りが来ているがそれはラッシュのスピードを生かし、ガードする。

腹に膝を喰らい、拳を叩き降ろされる。その時に髪を掴みギリギリ投げ飛ばす。

ガシャン!!

ガラスの割れる音と共に先程まで竜也と奴がやり合っていたカウンター席まで移動する。

「どうやら大したダメージではないらしく平然と錦は立っていた。」

「お前の方こそそんなもんか？なまったなあお前も」

堂島の龍スタイルになる。

「御託はいい…来るなら来い…」

実際、錦はかなり強い。余裕なんてものは最初から無かった。

「そうか……」

蹴りが来る。特に気にせずガードするが

「!?」

先程よりも格段に威力が上がっておりガードした左腕が痺れている。

さらによく見ると藍色のヒートを纏いスピードも竜也のラツシユに匹敵する程だ。

蹴りだけで一気に5箇所喰らう。

ドゴツ！ドゴツ！ビキツ！ゴリツ！ドゴツ！

「(足、腕、胸、顔、肩か…音的に肋骨はヒビが入っているかもしれない)」

考えつつもヒートを最大限出す。

ストレートをスウェイで回避、そこから無理やりスウェイをキャンセルし拳を顔に入れる。

「ガッ!!オラ!!」

ストレートが来るが捌きで受け流し、蹴りで奥のプールらしき場所まで飛ばす。

「(やはり、小牧流を使うなら堂島の龍スタイルの方が良いな)」

小牧のじいさんに教わった時に使っていたスタイルが堂島の龍スタイルなのもあり他のスタイルで使うよりはこっちのがしっくりくる。

「桐生ううう!!」

錦が拳を構えながら来る。

ドゴオ!!

竜也使っていた虎落とし。かなり入っているはずだが錦は上から腕を振り下ろしてきた。

「グッー」

直ぐに起き上がりそこからノーガードで殴り合う。

その時、急に錦との過去が走馬灯の様に浮かんできた。

堂島組長の件、世良会長の葬儀、セレナでの会話

「う、ウオオオ!!」

錦をホールまで飛ばす。

錦が膝を着く。

俺は両手で頭を抑え膝に叩き付けた。

ドゴオ!!

「ツ…そんな…そんなもんで倒れると思ってるのかあ!!」

マウントポジションを取られ殴られる。

ドゴツ!ドゴツ!ドゴツ!ドゴツ!

本当にヤバくなる前に抜け出せた。

「もつと来いよ!桐生う!!」

その言葉につられ構えまたノーガードで殴り合う。

今度も浮かんでくる。

〃カラの一坪〃の起こった。裏切り、共闘全て一気に来た。

「何だ!そのパンチは!?!」

『行こうぜ!桐生う!』

「!錦いいい!!」

吹っ飛び、ゆっくり倒れる。

「はあ…はあ…」

俺も堪らず膝を着く。

「(真島の兄さん、嶋野、劉家龍…色んな奴とやったが錦以上は居なかった…)」

ペンダントを錦の服から取る。後ろを見ると皆待っていた。

「一馬ー」

由美と抱き合う。

暫くして由美が鍵のようなものを取り出しペンダントを開けた。

中に入っていたのは「俺の写真」だった。

「由美、これは……？」

「ごめんなさい……私、あなたの事ずっと忘れられなかったの。記憶を取り戻した後もこうしてあなたの事を……私、弱い女だった……。」

「記憶を失っても本当はあなたの事だけは、うつすらと覚えていたの……名前は思い出せない。でも、あなたの笑顔や仕草が浮かんでたの。」
「でも誰だか分からない。全てを思い出せない。そんなあなたの事を……待ち続ける事が……出来なかった……！」

崩れ落ちるのを支えてやる。

涙も浮かんでいる。

「だから神宮を……でもね、遥は何もかも失った私にとって……たったひとつの宝物だった」

遥には竜也が肩を置いている。

「だから……遥とお別れに行った時思わずこのペンダントをあげてしまったの。私の一番大切なものを持っていて欲しかったから……遥……私のせいで恐い思いさせてごめんね……！」

遥は首を横に振る。

「一馬……私、まだやらなきゃいけない事があるの」

由美はペンダントを不自然に空いてある箇所に入れた。
ゆっくりと開いた隠し扉からはかなりの金が出てきた。

神宮の100億だろう……

「このお金は、あっちゃやいけない……だからもう消すわ……」

「由美……」

由美がアタッシユケースの爆弾を始動させた。

俺が由美の方へ行こうとすると

バンツ！

「うっ！」

足に激痛。

「桐生う!!」

後ろを見ると神宮が銃を構えて立っていた。

「て、てめえ……!!」

「お前は近づくな!!」

竜也が声をだしたのに反応し竜也に向けて二発撃つ。

「クソっ……!!」

「竜也くん!」

南が直ぐに確認する。

どちらも急所ではなさそうだが、あのままでは危険だ。

神宮は俺に銃を構え直した。後少して発砲するだろう。

「(ここまでか……せめて俺以外が助かれば……!)」

その時、遥が間に入る。

「遥!」

神宮が発砲する。

「遥……!!」

遥には傷一つついていなかった。遥の先に由美が立っていたからだ。

「由美い!」

「お母さん!」

俺と遥が直ぐによる。

「由美………しっかりしろ!大丈夫か!」

「お母さん!」

目を開いているがまだ分からない。

「フハハハやっと思つけたあ。私の金だア」

神宮がまた俺に構え直す。

「どうしたあ何も出来まい。お前等は終わりだあ」

「うあああ!!」

「錦!」

錦がナイフを神宮に刺す。

「こんな奴に好きにさせて……た、たまるかよ……!」

錦は神宮の持っていた銃を爆弾に構える。

「最後のケジメくらい……俺につけさせろや……」

「やめろお!錦!」

錦は前まで見ていた笑顔を浮かべ銃の引き金を引いた。

ドオオン!!

くく竜也視点くく

錦山が爆発を起こしてからどれ位経っただろうか…

撃たれたせいでろくに動けずちよつと離れた所に居る桐生さん達の声が聞こえる。

だが、俺らの方までは上手く聞こえてこなかった。

爆発音のせいで耳が遠くなっているのもあるだろうが。

「結局……呆気ない幕引きですね……」

「安堂……気がついたかよ」

「錦山さんがナイフをあいつに刺すホント直前ですよ」

「そうか……」

「………ひとつ錦山さんから伝言あります」

「俺に？桐生さんにじゃなくてか？」

「ええ、『兄弟を頼んだ』だ、そうです。では私はこれで……」

「何処行くんだ？」

「どう考えても、こんだけの爆発事件……犯人がいないとおかしいでしょう……東城会ともサラバですね」

「おい……お前それで『日挟連を潰す』そう言ったんでしよう。なら有限実行してください」

安堂の言葉により詰まる。

その隙に安堂は行ってしまった。

「………心愛」

「どうしたの……竜也くん」

心愛は軽く放心状態らしい。仕方ないだろうが。

「あの人……錦山、いい人過ぎるだろ……」

「………そう、だね……」

「お母さあん!!」

「っクソ……!!」

遙ちゃんの由美さんへの悲痛な叫びを聞き俺まで涙が出る。

伊達さんと1人の刑事が入ってきた。

「竜也！お前、その銃痕どうしたんだ！それに、桐生も！」

「ははは、俺より桐生さんの方を……」

桐生さんは立ち尽くしたまま動いて無かった。

「桐生、大丈夫か？」

「伊達さん……もういいんだ。由美も錦も風間の親っさんも……皆居ないんだ。ほっといってくれ……」

「ふざ」「バカ言わないでください!!」

伊達さんの言葉を遮り俺が喋る。

「皆居ないからってなんですか！それが何でもかんでも投げ捨てていい理由になる訳ないじゃないですか!!」

俺は何とか桐生さんの肩を掴む。

「何の為に由美さんが2人の前に立ったと思っただ！風間さんにしてもそうでしょ！命捨てて……！死者冒瀆すんな!!」

「……そうだ。それにお前にはまだかけがえのないものが残ってるはずだ。それから逃げるな」

「かけがえの……無い？」

そう言っただけ桐生さんは遙ちゃんを見る。

「全部逃げようとしなくてください……ちゃんといるんですから……」

「伊達さん……竜也……すまなかつた……」

「伊達さん、冬なのにこの車暑いんです……何とかしてください……」

「うるせえ！文句言うとは何事だ！しよっぴくぞ！」

「うーわっ職権乱用ですよ」

伊達さんの車に乗りながら1人待っている人が居る。

「会長！待ってください！」

「来やがったな」

桐生さんが全力疾走で「東城会本部」から来ていた。

「桐生さん……こっちです！」

伊達さんが開けた所を指示する。

「じゃあ、お前等しつかりやれよ」

「行くぜ」

「頼む」

ミラーをみて構成員が追ってこないのをみて一息ついている。

「終わったのか？ 『襲名式』と『引退式』は？」

「これが神宮との鬪いで言っていた事だ。」

「ああ、義理は果たしたつもりだ」

「竜也、聞いた事あるか？ 組長の『襲名披露』と『引退式』が同時な
んて」

「まあ、普通聞かないですね。しかも東のトップと言っても良いよう
な組ですからね。余計珍しいですよ」

「五代目は誰にしたんだ？」

あの鬪いの中で桐生さんは全て決めていたので俺はもう聞いてい
る。

「まあ世良会長や親っさんに恥ずかしくない奴にはしたさ」

「ん？ 誰だよ？」

「意外な奴だな」

「ここで伊達さんがミラーを見る。

「おい、元会長。尾けられてるぞ」

「え？」

寺田さんが礼をして抜いて行った。

「東城会五代目会長 『寺田行雄』」

「ここで俺が待っていたかの様に口を開く。

「な、何い！ ホントか？ 桐生!？」

「ああ、奴ならしつかり東城会を立て直すさ」

「つていうか、竜也知ってたのか！」

「先に聞いてました」

――
劇場前広場に着いてようやく車から降りる。

「お前等どうすんだ？ これから」

「俺は遥となんとかやってくさ…竜也の方は？」

「俺も似たような感じですね。心愛と一緒に暮らします」

「ああ、あの時一緒にいた彼女か」

「いや、違います…普通に友達ですよ」

俺は否定するが

「俺らの時代なんて、高三で一緒に住むなんてなあ…」

「居なかったな」

「(全く聞いてねえ…まあ別にいいけど)」

「…もうお前等神室町には来ねえのか？」

「俺は全然来ますよ。どっかの店でバイトしてます」

「俺らは…：…どうだろうな。また伊達さんから呼ばれる事があれば来るかもな」

「そうか…残念だなあ。無いと思うぜそんな事。俺は暫く沙耶と暮らしてみるよ。今まで無かった『家庭』を楽しむさ」

「フツ…じゃあ俺らは居ない方がいいな」
「ですね」

「これで胃が痛い毎日とはおさらばさ」

伊達さんはふざけた調子で言う。

そして3人で硬い握手をかわす。

「じゃあな、お前等。桐生、警察の世話になんかなんじゃねえぞ。竜也、バイト始めたら連絡しろよ。遊びに行つてやるから」

「大丈夫さ。あいつと一緒になんだからな」

「営業妨害は辞めてくださいね」

桐生さんは遙ちゃんと犬の所へ。

伊達さんは車を発車させる。

俺は心愛の方へ移動した。

「竜也くん！終わったの？」

「ああ、さて…こっから忙しいな。まず心愛の荷物纏めてバイト探して…：…まあ行くか」

「うん」

綺麗な青空を見ながら俺の家へ向かい始めた。

龍が如く2 龍と般若と死神

（…柏木視点…）

「……真島の奴来てねえな。殆どいつもの事だが…」

カチャ

軽そうな音を立てながら五代目が入ってくる。

皆頭を下げるような事をしない。

五代目が座ると共に他の幹部が口を開く。

「五代目！ワシら……汚えシノギなんぞする気ないんですわ！」

「東城会には東城会なりのやり方があるんだ！昔いた近江とは違うんだ！正直ついてけねえ！」

「東城会改革か何だか知らねえが、近江みてえに金の亡者になる気はねえんだ！」

「雑魚がピーチクパーチクうるさいんじゃあ!!意見言うなら結果納めてから言えや、ボケがア！」

最近幹部になった植松が黙らせる。

「何だと！五代目に気に入られたからっていい気になりやがって！ちよつと前まで三次のペーペーだった新参が！」

「新参かそうじゃないかなんて、もう重要じゃないんですよ」

これまた最近幹部になった、飯渕が喋る。

「数字を残した人間を幹部に登用し、そうで無いのは排除。実力主義の『血の入れ替え』施策。それが五代目の『東城会改革』です。」

「結果が出ているなら新参だろうが古参だろうが力を貰えるんだ。つまり……結果を残せてる我々が口を出す権利はある。という事です」

「んだとオ！」

「てめえ！」

皆一斉に騒ぎ出す。

「お静かに願いたい！………よろしいですか。ではこれより緊急幹部会を始めます」

「五代目、今日はどういう案件です？……また今日も『東城会改革』ですか？」

俺が口を挟む。

「そう。その続きです。現在空白の……若頭を決めたいと思うとります。若頭は東城会で実質私に続くポジション。誰にするかで、今後の組の命運が決まると思うております……ですが、外様出身の私にその判断は難しい……」

「そこで、私の進めている『東城会改革』のルールによって適任者を選ぶ事にしました」

「ルール？」

「東城会改革は、結果を残せる人材を積極登用する施策。結果は稼ぎ……ですから『本部への上納金』を最も多く納めた組……その組長を、東城会次期若頭に任命します」

「!?ツク……」

植松と飯渕以外は皆同様に苦い顔をする。

「では……各組織の上納金の確認をしましょうか。……飯渕」

「はい。ではこちらを」

飯渕の手の先にはモニターが表示されていた。

「おいおい……」

「こんなに差が出てるのか……」

そこのモニターには確実な差が出ていた。

「ご覧の通り、古くからの皆様の額はどんぐりの背比べ……まあ、柏木さんの風間組が健闘してるって所ですかね？」

「ですが、その風間組ですらダブルスコア付けられている。そう……植松組と飯渕組……つまり私と植松さんです。あんた達の毛嫌いな新参者ですよ……この結果なら、次期若頭は植松さんですかね？」

「ふざけんな！お前等が稼ぎ良いのは汚いシノギに手染めとるからやろが！」

これは前から言われている事で法ギリギリのシノギで額を稼いでるという噂だ。

「東城会には……美学つてもんがあんだよ。五代目が認めても俺は認

めねえぞ……………!」

「金に目エくらんで極道の魂無くしちまつとるんちやいますか!」

「雑魚がじゃかしいわああ!!……………誰のおかげでメシが食えとると思つとんじゃ!ワシらかてボランティアちゃうぞ……………しつかり〃親に貢献しとんや。相応の地位は当たり前前やろが!文句あるやつはワシら位稼いでから言えや!!」

また黙り始める。

「フツ……………異論は無いようですね。では、次期若頭は植松組の植松さんということ……………」

ふんふんふん

謎のリズムが扉の奥から聞こえ始める。

「来たか……………今更だが……………」

この幹部連中の中で呑気ともいえるやつは一人しかいない。それでいて今現在居ない人間だ。

「ふんふんふん。でえーん」

「あ……………」

バーン

扉からは〃東城会直径真島組組長 真島吾朗〃が出てきた。

そして奴は何時もの席の俺の右側ではなく、俺の左側……………若頭の席に座った。

「どっころせつと」

「おい?そこはアンタの席じゃねえだろう?」

「黙つて見とけや」

パンパン

真島が手拍子を鳴らすと、キコキコという古臭い音がした。

「西田さん!金落ちてないですよね!」

「だ、大丈夫だ!」

「落ちたら拾ってくださいよ!大事な金なんですから!」

扉を開けるとリアカーで組員が金を運んでいた。

「(あいつは……………)」

その中で1人リアカーを前で引っ張っている奴に目を引かれた。

去年、埠頭で嶋野とやりあった時に桐生と一緒にいた奴だ。中々の実力だったので覚えていた。

「(真島組に入ったのか……?)」

真島を見ると

「話聞いときや分かるで」

リアカーを俺らの前まで持つてくるとリアカーを置き植松の方を向き話し始めた。

「どうも。〃期間限定〃 真島組の黒瀬です。一応外で話聞いてたのである程度わかる上にこうして金額を用意したので話します。………てめえ程度の器じゃ東城会に合わねえから大人しく真島さんか、柏木さんに譲れよ……以上です！それじゃ〃親父〃失礼します」

最後に五代目の方を見て他の組員と一緒に外に出てった。真島は手を上げて返事をする。

「(かなりの覇気だな……他の組員ですら唾を飲み込む程恐怖してるのにあの覇気を直接喰らった植松は何が何だか分かってないってツラだな)」

「真島さん……その金は？」

ザワつく周りを無視し五代目は真島に話を聞く。周りも話を聞くため黙る。植松も座っている、むしろ腰を抜かしたという表現のがあっているかもしれないが。

「俺な……草野球がしたくてのう……金貸した時の担保に、神室町近くの空き地をちいとばかり手に入れとったんや。」

「そしたらなんや、でかい企業がそこにビル建てたいから土地を譲れ、言うてきてのう。適当にふっかけたらこんだけの金になった訳や」

「ふむ………」

「ま、俺がちいとばかし本気になればこんなもんや。しかし困ったのう……稼いだ額で決める言うんやったら俺が若頭になってまうのう………」

「五代目はあんたや……人事でもなんでも好きにしたらええが………東城会舐めとると、飼い犬に手え噛まれるで？」

「……五代目どうしますっ。」

「(確定だな……今の飯渕ので分かったが……今はこの人の出方次第か)」

「……一度本件は持ち帰りとする。次回幹部会にて改めて方針を決定する」

「……ん？なんや……座り心地は変わらんやないか……」

くく竜也視点くく

東城会本部での幹部会が終わり俺は真島組と真島さんに神室町に送ってもらっていた。

「いやー、今日はほんまありがとな。黒ちゃん」

「……さつき聞いた時から思ってたんですけど、『黒ちゃん』ってなんですか？」

「……までの経緯を思い出しながら話を聞く。」

「……心愛、ちよつと待ってて」

「え？竜也君？」

家の外から感じる嫌な気配を確かめる為、外に出た。

そこには黒スーツの連中に囲まれていた。

「何だてめえら？人の家そんな物騒に囲みやがって……」

「どけや、お前ら。俺が話すわ」

そこまでバラバラに散るようにしていた連中が一気に真ん中を空ける。

「よう！黒ちゃん！」

「ま、真島さん!?!…なんでここに？」

「ちよつと用あってここに来たんや。なかなか黒ちゃんの家探すの苦労したんやで」

しみじみしながら真島さんが話す。

「それで用事っていうのは？」

「話すより見てもらったほうがええやろ。おい！持ってこいやー！」

「……………!?!」

キコキコと古臭い音を立てて組員がリアカーを運んでくる。驚い

たのは、リアカーの中にあるこれでもかという程の金

「これは……?」

「急用でな、こいつを東城会本部まで運ばなあかんのや」

「真島組だけじゃダメなんですか?」

「こいつらフラフラしよって、直ぐポロポロ落ちるもんでの。それなりに力あるやつに運んで貰った方がええからの。しっかし桐生ちゃんは見つからなくての。」

「あかんかのう、と思つとつたら黒ちゃんを思い出してそれでこつち来たつて訳や。どや?力貸して貰えるか?」

「……分かりました。スーツ着てくるんでちよつと待つててください」

「なんや黒ちゃん、スーツなんかどうするんや?それに買ったんか?」

「一応東城会本部に行くのにジャージってのは不味いでしょう?それに最近バイト始めまして、面接の時に買ったんです」

「ほーお、なるほどのう。ま、待つとるで」

このような経緯で真島さんの着いていくことになったのだ。

「なんや、別にええやないか。それにこれやと俺が呼んだつてわかりやすいやろが」

「それはそうですけど……ん?」

物凄い人だかりにより進めなくなっていた。

「なんや?はよ進めや?何をチンタラしとんねん!」

「真島さん。なんか変です、いくら人通りが多いこの道でもこんな人だかりは……」

【久しぶりだな】

【?!?】

【(なんだ……この殺気!?)】

俺も真島さんも強烈過ぎる殺気に後ろに下がる。

真島さんの方は下がっただけで平然としてるが、俺の方は冷や汗が止まらない。

「い、今のは……!?!」

「……分かんなくても知りたかったら……行くしか無いみたいやな」
気付けば先程までの人だかりが嘘のように道が開いていた。
そこには人だかりの原因になっていたであろう、チンピラが倒れて
いた。

しかし、身体には火傷の跡が全身、左半身は骨が砕けて立てない状
態になっていた。

「(これが原因か……!)」

いくら喧嘩が日常茶飯事の神室町とはいえ、殺し同然ともなると変
わってくる。

「誰か知らんが……だいたいヤバい奴って事やな……」

さつきから放たれ続けている殺気を辿りその人物の所まで行く。

そして劇場前広場に“ソイツ”はいた。

「来たか……久しぶりだな、真島吾朗」

黒のワイシャツに黒コート、そしてサングラスという正に黒ずくめ
の姿をしていた。それにどうやら真島さんを知ってるらしい。

「こうして会うのは17年ぶりか……」

「……誰やお前？」

真島さんはポケーっとした顔で黒ずくめに尋ねた。

「え!?知ってるんじゃないんですか？」

「覚えとらんわ。名前聞いてもええか？」

「殺す!!」

ドゴッ!

「真島さん!」

かなり早い蹴りにより、真島さんが吹っ飛ぶが

「おー痛、あんまり上手いかんろう」

「何!？」

「(全然負ってないな……成程、”受け流した”のか)」

「ほな、改めて名前聞こか？」

「グッ……!……亜門……亜門丈……!!」

「(亜門……聞いた事ねえな……)」

「ほう……亜門……亜門……」

先程までとは違い、疑惑の目を向ける。

「やつぱ知ってたんですか？」

「いや、知らんわ……それより、ウチのシマでこれ以上やられんのは見過ごせんのう……！」

「(濃すぎるだろ……!)」

俺や桐生さんに向けた時以上の殺気を亜門に向ける。

「真島吾朗……やはり衰えてはいないようだな……それでこそ挑む価値があるというもの」

「……来るなら来いや……追い払ったるわ」

「(流石にこの2人に割って入るのは無理だな……レベルが違いすぎる……秋山さんでも厳しいだろ、これは……)」

「そのの『軟弱』は、まだ居たのか」

「あ……!?もつかい言ってみろよ……」

「軟弱者が……」ドゴッ!!

ハイキックをガードされ、頭を左腕でぶん殴る。

「誰が軟弱だと……!!」

「ヒツヒツヒツ何や、黒ちゃんもやる気やないか」

「止めてください。俺の場合はやる気とは言わないですよ……キレなきや良かった……」

「もう手遅れやな。あいつ、かなり『キてる』様やで」

「はあ……まあいいや、真島さんk」ガシッ!

「ん?何言おうとしたんや?」

「く……くれぐれも……!変な事……しないで…………ください……!言おうとしたんですけどね!」

ドゴッ!

真島さんが、俺にドスを刺してきたので腕を掴み腹を蹴り、距離をとる。

「……なんで、俺にドス向けたんですか?」

「2対1はアカンやろ。せやから俺も黒ちゃんの敵に回ったろと思っ
てな」

「ホントその気まぐれにも似たやつやめて欲しいわ……!……!……!ホント

ふざけんな…この2人相手かよ…！」

ボソボソ声で呟く。

「何をしているー！」

「ッ！ガハッ!!」

「甘いわー！」

2人一気に相手にしてきた亜門に俺はガードをするが、甘く身体が浮いてしまう。真島さんは逆にドスを向ける事で亜門を踏みとどませる。おかげで俺の方もそこまで酷い状態ではなかった。

そのまま真島さんがバットを高速で俺の方に、ドスを亜門に刺そうとする。バットを殴る事で当たる事は無かったが受け身がとれずそのまま落ちるように地面に着く。

真島さんと亜門が1m半くらい、俺が2人から3mくらい離れてる状態で固まる。

「黒ちゃん、なんでそんな所まで離れとるんや？」

「いや…：アンタと違って攻撃喰らったんですよ」

「そのわりには意外と平気そうやな」

「全然力入れてないって事ですよ…：だろ。亜門」

「……………」

「(無視かよ…：それより…：あんま思いたくねえけど、まだこの2人とちゃんとやり合う程強くねえ。今回だけは、全部後手で致命傷だけ避ける事にしよう)」

真島さんが攻撃してきても可笑しくないとこののに、亜門が俺から目を離さずずっと睨んでる。

「お前…：なんだよ。さっきの一撃まだ持つてるわけ？流石にそれはt

「来てみろ」

「あ？なんだと？」

「改めてお前が軟弱だという事を証明してやろう」

「……………後悔すんなよ」

真島さんも少し離れて今後の動きを予測しているようだ。

ドゴオ!!ガッ！ボコッ!!

戦車で顔をフルパワーで殴る。吹っ飛ぶのを足を掴んで投げ飛ば

しマシンガンでかかと落としをする。真島さんも背面蹴りで吹っ飛ばす。

ムクッ

「……ターミネーターかよ……まあ別に大して効いてないと思ってたから予想通りだけど」

「この程度か」

「ああ。正直今のが全力だ」

「つまらんな」

顔を沈めたまま亜門が近付くのを待つ。

ドゴッ!

「!?ウグオッ!」

バキッ!!

虎落としを決め、肋骨にヒビを入れる。

後ろからくるドスを直感で避け離れる。

「やっぱ黒ちゃん強いのか!桐生ちゃんと一緒に居ただけはあるのか!」

「なんで嬉しそうにしてんですか……真島さんに全く関係ないし」

「……桐生だど?」

「なんやお前?桐生ちゃん知つとるんか?」

「……いや、知らない……」

「どう見ても知らないってツラじゃないけどな」

「……まあええやろ。続きしよか」

真島さんがドスを上に投げ亜門に掌底からの首を捻る。

俺に膝が来るが回避、そこから上に投げてきたドスが俺の腹に刺さる。

「!?ッ!」

ドスを抜き今度は肩に刺す。

柄を捻るように押し柄の一部まで入る。

「なっ!めんなコリア!!」

ドスを持つ腕を逆にこちらに引き寄せ骨を砕き、膝を崩し倒す。今度は仰向けになる様に投げる。

「グッ……！！」

ドスを抜いた所を見ると出血が酷すぎて傷の具合すら見れない程だった。

「ホントやってくれるぜ……っクソ……肩よりも腹だな……」

腹の方は腰の辺りまで血が滲み出ていた。

「(2人はどうだ……？どうだつってもこれ以上殺り合うのは出血量的にアウトだけだな)」

真島さんは俺にやられた腕だけが酷そうで亜門に至っては五体満足と言っても差し支え無かった。

その時亜門が俺と真島さんに小さな正方形の物を投げた。

「(何だ？これ……ドオン!!)」

投げて来たのは爆弾であまり近づかなかったおかげで死ぬ迄は行かなかったが爆風で劇場前のSEG A内まで大きく吹き飛ばされる。

「カハッ……やっろう……ま……まじ……まさんは、どうなった……？」

「な、何だーアンタ!?ひ、酷いケガじゃないか!!」

先程まで店前で傷だらけの奴が吹っ飛んできたおかげでSEG A内にいる連中もゴロゴロ集まってくる。

「……く、来んな……」

「何を言ってるんだ!？」

「い、良いから……そこで大人しくしてろ……店の中に……いる……れ、連中外出すなよ……」

おぼつかない足どりで外にいる亜門の元まで行く。

「(流石に店内に入れる訳にはいかねえ……街中で爆弾ぶっ飛ばす程イカれた奴だ……)」

「良く生きてたな……」

「おかげさまで……身体中、ボロボロだよ……」

顎を殴られすぐさまガードに入るが右、上、右、左、下連続でラッシュを喰らい倒れた後、両腕を踏まれる。

「やはりつまらなかったな。お前如き殺す程も無い」

俺が立ち上がらないのを確認すると真島さんの方へ向かった。

寝返りをして適当なゴミを拾い亜門の後頭部にぶつける。

亜門は不思議そうにこつちを見る。

「これ……投げた事すら、気付かねんじや……そりや駄目だな……殺す程ってどうか……殺せないの間違いだろ……?」

「……………何?」

「普通に殴り合ってたら……勝てねえんだろ?……それに……桐生さんに負けたから……あん時、変な反応……したんだろ?……へっ……その……顔は当たり前で事で良いよな……?」

分かりやすい程の挑発。亜門もそんな事は分かつてはいるだろうが、強者だからこそたった一言。『負けた』という言葉に余計に反応してしまう。

「クソガキが……!!」

「来いよ……!」

ここまでのやり取りは時間にすれば数十秒、俺もフラフラながらも立ち上がるには十分な時間だった。

そして

ドスツ!!

真島吾朗がこちらに戻って来るにも十分過ぎる時間だった。

「ガッ……グハツ!!……ま、真島ア!」

「まだまだ楽しめそうやないか!!」

真島さんのドスが亜門の肋骨付近に深々と刺さる。

こちらに切先が2cm以上見えることを考えるとかなり深い様だ。

「ウオオオーりやアア!!」

バキツ!!ドタッ!

なんとかまた一撃入れる事に成功する。しかしその1発でまた俺は倒れてしまう。

「グッ！……っクソ…しんど過ぎるぜ……！」

「……」

「ハアツ……！ハアツ……！お前ら如きが……!!」

身体にムチを打ちまた立ち上がる。最早3人共起きてられる傷ではないが、今なおも起きているのは「負けなたくない」という意地だろう。

ポタ、ポタ、ポタポタポタ……ザー！

急に雨が降り始めあつという間に豪雨になってしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

3人共無言で見つめ合う。しかしその目に闘志はほとんど無かった。

実際には竜也のみが闘志を含んでいるが残りの2人は観察するようで見ているだけだ。

やがて亜門は後ろを向き痛みを感じさせないような歩きで七福通り西へと向かいだした。

「お、おい……逃げん……の、かよ……」

呼び止めるが全く気に停めず亜門は進んで行った。

「……俺らもさっさと離れようか。ぎょうさん来る前にのう……」

「えっ？」

真島さんの声を皮切りに豪雨の中に潜むパトランプの音を聞く。

「……………確かに……色々、起きましたからね……」

—————

場所は変わり、中道通りの喫茶アルプス

店内には店員と竜也と真島しか居ない。

何故なら既に真島組が包囲して、人払いを済ませなおかつ人を来させないようになっているからだ。

「しっかし大変やったのう」

「ホントあいつ何もんだったんですかね？……桐生さんと真島さん知ってるって事は相当なやつですよね」

いくら桐生さんが東城会四代目とはいえ、少し前までは無名もいい所の人だ。

「……あん時も言うたけどワシは知らん」

「分かりました……とりあえず俺はもう帰ります。長い時間家開けてるんで」

真島さんがなにかを隠してるのは明白だが本人が言う気が無いのなら別に聞きはしない。

「おう！今度また遊ぼうな黒ちゃん」

「良いですけど……」

命の危険を感じながら返事をした。

ケータイを開き時間を確認すると2時15分だった。

「とりあえず心愛に連絡入れるか……」

『竜也君？どうしたの？』

「要件が全部終わったから今から帰るよ」

『分かった。待ってるね』

「うん……じゃあまた」

今日の晩飯は何かと考えながら家へと向かった。

25話

近江連合

くく 桐生視点くく

100億事件から丁度1年が経ち、親っさんや由美、錦の墓参りに行く事になっていた。

「遙、準備はいいか？」

「うん。大丈夫だよおじさん」

「よし、行こう」

タクシーで墓場まで着くと既に竜也と心愛が着いていた。

「あ、桐生さん！久しぶりです！遙ちゃんも！」

「久しぶりだな竜也、南」

「竜也君、心愛ちゃん！久しぶり」

「お久しぶりです。桐生さん、遙ちゃん」

どうやら2人は既に墓参りを済ませているらしくもう帰り仕舞いをしてる。

「もう行くのか？」

「そのつもりだったんですけど……2人が丁度来たならちよつと待ってますかね。心愛も別にいいよな」

「うん、私は大丈夫だよ」

「そうか。じゃあなるべく早く済ますとしよう」

遙と共に親っさんの墓から手を合わす。

「最近の神室町はどんな感じなんだ？」

墓参りを済ませ、俺と竜也、南と遙で近況を話し合っている。

「特に変化はないですね。ただ東城会は色々ゴタゴタですけどね」

「?どういう意味だ?」

「若頭決めたりそこらでてんやわんやだそうです」

「寺田が居るだろう。あいつに限って人選ミスは無いだろう」

「すんませんなあ。どうにもこうにも外様のあつしには見分けが出来ませんでしたわ。一応柏木さんにしたんですがね」

「寺田、お前も来たのか」

「お久しぶりです。桐生さん、いや四代目」

「その呼び名はやめてくれ」

「……なんで来たんですか……?」

竜也が物凄く不機嫌そうに言う。何故なのかは分からないが竜也が東城会の内情を知っているのと関係しているんだろう。

「黒瀬くん……あなた方と一緒にですよ……私も風間さんの墓参りで
す」

「……………」

竜也は返事を返さない。正直知りたい気持ちはあるが、この件に踏み込むのは竜也に迷惑を掛けるのは分かるので口を挟まない。

「そうか。それにしても1人とは不用心だな」

「……………」それとは別にどうしても、四代目に知らせておきた
い事があるんです」

「なんだ?」

「実は、近江連合の郷田会長と盃を交わそうと思っております」

「盃だと……?」

「ええ。近江との戦争避けるにはそれしか方法が……」

「東城会がそこまで追い詰められるとは……」

寺田を五代目にする事で近江と揉めるのは予感していた。しかし親っさんの意思を継いでいるのも寺田だ。俺が抜けて託すのには寺

田しか考えられなかった。

「1年前の事件もあり、内部はガタガタです。戦争が起これば多くの血が流れそしたら東城会は乗っ取られるでしょう。それだけは何とか避けたいと……」

「お前と郷田会長じゃ格が違う。向こうがその話を飲むとは思えない」

何時の間にかこつちに来ていた遙の手を繋ぎ帰ろうとする。

「十二分に承知しております。しかし……」

「寺田、五代目はお前だ。堅気の俺が口を挟む事じゃねえ」

「先代なら東城会のこの危機をどう乗り越えるか……是非ともご意見を願います」

バン！

1発の銃声が響く。俺は遙を竜也は南を避難させる。打たれたのは寺田の腕だ。

「お前ら……何の用だ？」

「寺田はんの首、頂きにきたんや」

「関西の鉄砲玉つてところか……」

近江の組員がドスや銃なんかを落とす。

「東城会のボディガードは脇が甘いですなあ」

「ウチの組員の……」

「後は穴掘って埋めるだけです……ここは墓地。運ぶ手間省けて丁度ええんとちやいますか？」

「寺田……遙達と逃げろ」

「しかし……！」

「その体に東城会の未来がかかってんだ！……分かったら早く行け！」

「……………後は頼みます」

「お前らに極道の礼儀つてもんを教えてやるぜ！」

「……………やんねえ訳にはいかねえしな……来いよ……！」

銃を持っている5人の内、1人の腕を掴み締め上げるようにして銃を手放す様にする。銃を蹴飛ばし腹に一発入れて沈める。

「死ねえ！」

別の奴が銃を構えるがその発言を聞いた瞬間に裏拳を入れ結局撃たれず3人目を俺と竜也で同時に顔を殴る事で終わらせる。

「寺田!!大丈夫か?……」

「かすり傷ですわ……」

バァン!!

「桐生さん！」

気絶してた奴が目を覚ましすぐさま銃を撃ってきた。

俺目掛けて放たれた銃弾は

寺田の心臓部分に直撃した。

「っクソやろう!!」

ドゴツ!!

竜也が銃を撃った奴を殴り飛ばす。
その間に俺は寺田を支える。

「寺田!!」

「こ、これを持って……近江連合の郷田会長の元へ……」

「お前!」

「ワシと桐生さんじゃ器が違う……東城会の明日には……これでええんです。桐生さん……頼みます……」

そこまで言つて寺田の首は下がってしまった。

南の手配によりすぐさま救急車が来たが寺田の状態は全く良くなかった。

流石に竜也も南も人が入りきれず2人は帰った。

「寺田!しつかりしろ!!」

ピーー

無機質な音と共に心電図が真っ直ぐになった。

「残念ですが……出血多量です……」

俺の手元にある寺田の血で汚れた手紙。

だが、これを渡すには大阪へと飛ばなければ行けない。

「(無理だ……遥を置いていく訳には……竜也や南も巻き込めない。あの二人も最近生活が安定してきたばかりと言っていたし……)」

「私、しばらくひまわりに行くね……大切なお仕事なんですよ?でも……終わったら迎えに来てね」

「勿論だ…」

手紙に目を送りながら俺は遙にそう答えた。

26話

力の無い人形

救急車から降りた俺はすぐさま東城会本部へと行き、姐さんに寺田の手紙を渡した。

「まさかこの書状を関西に持っていくつもりですか!?代行!…」

「落ち着け!…」

「親の命殺った連中相手に盃交わして下さいなんて…笑い話にもなりませんよ!…」

「じゃあお前は五代目の仇を取るといふのか…?…」

「殺られたら殺り返す…それが極道と違いますか!…」

「兄弟…勝手に動くのはいいが俺らがとばかり受けるのは御免だ!…」

「ケツまくつてのか!?!…」

「戦争すんにも金が必要だろうが!…」

「金だあ…?…?それじゃ極道のメンツがねえだろうが!!…」

「お黙り!…」

騒ぐ幹部連中を姐さんが黙らせる。

「…関西へ行くつもりだね!…」

「五代目との約束です…姐さん…この一件、自分に任せて貰えませんか?…」

「あんたも…全面戦争は避けるべきだと思っただね?…」

「はい!…」

「桐生…向こうが話を飲むとは思えないぞ…!…」

「柏木さん…これは寺田の遺言です!…」

「下手したら殺されるよ!…」

「覚悟は出来ています!…」

「まさかとは思うけど…郷田会長と刺し違える気じゃないだろうね!…」

「…出方次第です!…」

元々重い空気が更に沈む。

「11年前の堂島殺し……まだ引きずってるね」

顔を背けてしまう。

「あれは錦山がやったことだろう？あんたの責任じゃないよ」

「錦とは……ガキの頃から一緒でした……血なんか繋がってなくてもそこらの兄弟よりずっと深い……錦の借りは自分のものです……」

「無駄そうだね……。この件あんたに任せるよ」

「姐さん！本当ですか！」

「考え直した方が……桐生は東城会のために命賭けるって言うてんだ！。」

「文句がある奴は……前に出な……どうせ盃が割れたら後戻りは出来ない……東と西の全面戦争だよ！」

「これでいいね……」

「はい……ですが……」つだけ頼みがあります」

「何だい……？」

「関西に行く前にどうしても……堂島大吾に合わせてください」
「……どうしてあいつを……？」

「寺田は死に、東城会は柱を無くしました。今、東城会建て直せるのは奴以外にはいません……暴力や権力に屈しない男……そうゆう男が今の東城会には必要です。」

「そしてそいつを……大吾は持っています。どうしても大吾には会っておきたいんです」

「…………やめときな」

「何故ですか？」

「昔のあの子じゃないからだよ」

「一体何が……？」

外を見つめる姐さんの表情は暗いものだった。

神室町に戻ってきた。

「(変わり映えしねえ街だ…)」

姐さんの話を思い出す。

「大吾が刑務所に入ったのは知ってるね」

「はい。5年前と聞きました」

「あんたがムシヨに居た頃の話さ。父親があんたに殺されたと思って荒れたのさ……それで馬鹿やってね」

「馬鹿とは……？」

「関西さ…手え出したんだよ。それで捕まってるね。」

「今は出所してこっちに帰ってるけどね、浴びるように酒呑んで馬鹿やって暮らしてる。」

「もう力の入らない人形さ……」

「(大吾が変わっただと……とにかく探さなくては…)」

「おい！大吾さんが荒れてるってマジかよ！」

「ああ…今大吾さんと一緒にいる奴から連絡が来てな…とにかく人集めろだってよ！」

「(大吾だと…？念の為聞いておくか)」

「すまない。ちよつと良いか？」

「あ!?!なんだよおっさん!?!」

「たまたま会話が聞こえたんだが、大吾というのは「堂島大吾」で合ってるか？」

「ツ！なんで大吾さんの事知ってるんだよ!!」

「俺も大吾に用事があったな。会わせてくれるか？」

「なんででめえなんか大吾さんの場所教えなきやいけねえんだよ

！」

そう言って大吾の手下であろうチンピラ1は構え出す。

「はあ仕方ねえな……1回大人しくさせてやるか……」

台詞を言い終わるのが早いかどうかチンピラが殴り掛かってくる。それに頭突きをする形で相手の指を2本折る。

「うぎやあ!!」

折られた事に気付くとチンピラは手を押さえ、踞る。

「これ以上やると言うならまだやるが……どうする？お前も来ると言うなら相手になるが？」

「つくソ……」

「……辞めとくぜ……」

チンピラが睨みを効かせるがそれを流す。もう1人のチンピラは闘う気すら無いようだ。

「話を戻すぞ……大吾の居場所は何処だ……？」

「……ピンク通りのSHINEって所だ……」

「理解が早くて助かる」

チンピラを置いていき、SHINEへ向かおうとすると

「ま、待て！おっさん何もんなんだよ!？」

「……堂島大吾の関係者だ……今の俺にそれを名乗る価値があるかは知らんがな……」

「いらつしやいませ。ご指名でしょうか？フリーでの入店でしょうか？」

「すまない。堂島大吾が陣取っている席に案内して欲しいんだが」

ウェイターの挨拶を無視しこちらが質問する。

「ど、堂島様ですか…？あの人に今近づくのはお客様に危険が分かった。自分で行く」

「あ、お客様!!」

ウェイターを手で退けて大吾を探す。

SHINEの奥の広いソファがある席に大吾は座っていた。

「荒れてると聞いていたが…：…外面は普通そうだな」

「あん？なんだあおっさん？」

大吾に媚を売っていた奴が俺の肩を押しながら素性を聞こうとする。

「悪いがお前らに用は無い。俺は奥のアイツに話があるんだ」

「兄貴に向かってアイツだと…：…!!」

「少しの間席を外してもらっただけで良いんだ…」

「ふざけんな！」

先程まで喋ってた奴に同意するように他の奴も立ち上がる。

「席外すのはてめえのほうだろうか!!」

「ここじゃ店に迷惑がかかる。…：…表に出ろ」

「(これ以上は時間の無駄だ…さっさと終わらせて大吾と話さなくては…)」

俺の周りを7、8人で囲んでいる。

ドサツ！グキッ！

後ろにいた奴が殴ってくるが躲して足をだし転ばせて背中を踏んでしばらく身動きが出来ない様にする。

「おめえらみてえなのがまだこの街に居たとはな…」

「何が言いてえ？」

「身の程知らず……って事だ」

「くそオヤジが……そんな口直ぐにきけなくしてやるよ…殺れ!!」

堂島の龍スタイル最大のスピードの回し蹴りで後ろの3人を直ぐに吹っ飛ばす。

「グハツ!!」

1人の頭を掴み膝蹴りで潰す。後ろから1人に捕まれ、頭クラスの奴が殴るが塞がれてない足で顔を蹴り飛ばしつつそのままの勢いで半回転して掴んでいた奴を地面に叩き付ける。

「ガッ!……っクソ!」

「お前らに恨みはねえ…これ以上怪我させたくねえ」

「うるせえ!!!」

そう言つてポケットナイフを取り出す。

「そんなもんチラつかせたら、遊びなんかじゃ済まなくなるぞ…」

「止めろ」

「あ、兄貴…」

「お前らじゃ話になんねえ。店に戻ってろ」

「しかし、こいつは…」「聞こえねえのか？…戻ってろつつたんだ！言う通りにしろ！」 ツツ…行くぞ」

「躰が足らねえんじやねえのか？」

「奴等は舎弟じやねえ。兄貴、兄貴と勝手に着いてくる連中だ」

「…相変わらず若いやつからの人望はあるな」

「…興味ねえよ」

「東城会に…戻ってくれ」

戻ろうとする大吾の足を止める。

「お前が必要なんだ」

「俺には必要ねえ場所だ…」

「話は姉さんから聞いた」

「それで？聞いたなら分かってんだろ。放つといってくれ」

「組の存亡が掛かってんだ。簡単には引けねえ」

「あんな所がどうなろうと俺には関係ねえんだよ」

「東城会に恩があるだろう…！今のお前が居るのは組と堂島組長のおかげだ…」

「アンタがそんな事言えた義理かよ…？桐生さん、俺はなアンタだけは信用してたんだ。ずっと憧れの存在だった。」

「今はもう違う。親父が殺されて、徐々に組はおかしくなった…」

体張る価値はあの組にはねえよ…」

「よく分かってるじやねえか」

「あ？」

「お前の言う通りだ…今の東城会にはそんな価値は微塵もねえ。」

幹部連中は金勘定、昔の威光なんかありはしねえ。」

「でも…俺はまだ信じてんだよ」

「…何をだよ」

「風間の親っさんや、嶋野…そしてお前の親父さんが居た頃の強い東城会をな…」

「もう一度あの頃の東城会に戻るには……お前が必要なんだ」

「勝手な事言いやがって……1年前、組めちやくちやにしたのはアンタと、アンタと一緒に居たガキじゃねえか!!」

「確かにそうだ。だから俺は……責任を取りに来た!!」

「何g」ドゴツ!ドサツ!

「何しやがる!?!」

「目は覚めたか?」

「変わらねえなあ……昔から力づくで事を動かそうとする」

「そうした生き方しかできなかったからな」

「俺もだよ……力で来る奴には力で向かってくだけだ!」

肩を掴もうとしたのを逆に掴み締め上げ軽い掌底で距離をとる。

<堂島大吾>

大吾は直ぐに構え出すが俺は動じず意識だけを大吾に向ける。

「なんの真似だ?ああ?」

「今のお前に言う義理はねえな。分かりたかったら来たらどうだ?」

「舐めてんじゃねえぞ!!桐生う!!」

挑発をまともに受けたおかげでとても読みやすいパンチになっていたのじゃがんでそこからアッパーの形で鳩尾に叩き込む。

「グホツ!?!」

蹲ったのを確認し、ローキックを全力で顔に入れる。

それだけで大吾は九州一番星に打ち付けられる。

「グッ………いな、舐め………やがって………」

「……………」

「黙ってん……ドタッ!「っクソ………」」

「直ぐには起き上がれず何度か壁に寄りかかりながらようやく起きる。」

「もう辞めとけ…死ぬぞ」

「ツ！……うるせえ！桐生、てめえなんか……！悟ら……される義理なんて…ねえよ!!。」

「てめえが……あん時！錦山を…グツ！止めとけば！親父は死ななかつた！」

「……それは違う」

「…あ？」

「あん時は錦が先に聞いていて、俺が止める側として聞いたから向かつたがもしかしたら俺が堂島組長を殺していたかも知れない。」

「それを理解していたから錦を逃がした。」

「だが、結局は錦を変える原因の一角になったし、由美も神宮なんていうクソ野郎と出会うきっかけになった。」

「結局は俺にしても錦にしても変わらなかつた…2人を失つた今更言つても遅すぎるがな」

「桐生……」

「話は終わりだ。来い、大吾」

「……はあ、そんな顔してるやつなんか殴つても意味ねえ。アンタ気づいてるか知らねえが酷い顔してるぜ」

「……」

自分では分からないが余程酷いのだろう。

実際に先程まで大吾にあった殺気が消えており立っているどころか座ってしまっている。

それを再確認した俺は寺田の書状を見せる。

「東城会の運命は、全てこいつに詰まっている」

場所を第3公園に移して今は大吾が書状を読んでいる。

「(読んでいる今なら言っても良いかもしれない)」

「俺は明日関西へ行く。無傷じゃ帰って来れないかもしれない。」

「だからお前に留守を任せたいんだ」

「ふざけんな。自分だけカッコつけてじゃねえぞ」

「東城会を…頼む」

「俺も行くぞ」

「…何？」

「関西には借りがあるんだ」

「借りだと？」

「5年前、毘に嵌められた。そこからだ、俺の人生が曲がったのは。」

「借り返すまでは極道に戻れねえんだよ。一応言っとくが何言っても無駄だぜ。たとえアンタが行かなくても…俺は行くぜ」

大吾は俺に書状を返すと第3公園から出ようとする。

「明日、駅のホームで待ってる…じゃあな」

大吾が帰った後しばらくそこに立っていた。

ブルブル

携帯のバイブレーションがなった

中を確認するとそれは信頼を寄せている男からのメールだった。

「こいつも来るのか…大吾とは馬が合わなさそうだな」

「明日あの二人を会うのを考え荒れそうだなと思いつながら明日の準備を兼ねて帰路を歩み始めた。」

27話

蒼天堀

くく竜也視点くく

「(ちよつと早く来すぎたか？まあでも桐生さんより遅れるのは良くねえから別にいつか)」

昨日桐生さんにメールを送って「明日、駅で待っていてくれ。」とメールが返されたので今は改札前で桐生さんを待っている状態なのだ

「(んだあいつ？さつきから嫌なオーラ全開でこっち見てきやがって……)」

ガラの悪いチンピラがずっとこっちを見続けているのだ。
流石にずっとさされてくると頭にくる

「おい、さつきから見えてんじやねえよ」

「あ？別に俺の勝手だろうが」

「はあ……てめえみてえなのになんと見られるこっちの気持ちにもなってみろよ」

「あんま人の事舐めてんじやねえぞガキ」

チンピラが嫌なオーラから殺気に変わり出す。

「年下に負けるほど最悪な事はねえんだから辞めとけよ」

俺もイラついでるので引く気は無い。

「……ここは駅前だ。こっち来い」

「上等だよ」

俺とチンピラが改札前から移動しようとした時

「済まない。遅くなった」

「桐生（さん）、あ？」

このチンピラも桐生さんを知っていて俺は困惑する。

「竜也も大吾も来ていたか。……………」

後半は何を言っているのか聞き取れなかったが、とにかくこのチンピラの事を桐生さんに聞かなくては。

「桐生さん、こいつって？」

「おい、ガキにこいつ呼ばわりされる筋合いはねえよ」

「ツチ……………今俺が桐生さんに聞いてんだから邪魔すんなよ」

流石にこうも毎回突つかかってこられると本当に面倒だ。

「いい加減にしろ」

本格的に俺とチンピラが殺り始める前に桐生さんに止められる。

「大吾、お前は知っているだろう……………竜也、こいつは堂島大吾。今回俺達と一緒に大阪に同行する1人だ」

「そ、そうだったんですね……………」

こいつが同行するというのは少し不満が貯まるがそれを表に出す訳にもいかず堪える。

「これからどんな状況になるかも分からないのにいちいちそこでいがみ合ってる場合か？」

「そうは言ってもよ。こいつが役立つとは到底思えねえぜ」

大吾と呼ばれた奴が桐生さんに言う。
少しイラツとするが抑え込む。

「竜也は自分の意思で来てくれた。それを否定する気は俺には無い。」

「もし竜也が嫌なら……お前は残れ」

「……ツチ！分かったよ……」

「決まりだな。そろそろ電車が出る時間だ。乗るぞ」

「大吾……お前、5年前誰に喧嘩吹っ掛けたんだ？」

桐生さんはトイレから戻った後窓を開けて外を眺めている堂島大吾に話し掛けた。ちなみにこいつとはろくに話せていない状態だった。

「……近江連合直参、郷龍会二代目 郷田龍司……今から会いに

いく連合会長の息子だよ」

「会長の息子……」

「バカだった……俺はそいつの罠に嵌った」

「罠ってなんだよ」

「5年前、郷龍会が神室町にちよくちよく顔出す様になってやがった。狙いは東城会の幹部」

つい聞いてしまったが話してくれるらしい

「それって……向こうに連れていこうとしたのか？」

「だろうな……荒れてた俺はそいつの挑発にまんまと乗っちゃまった」

「関西に乗り込んだのか？」

「1人でな。郷田龍司と一体^{サッ}の勝負だつて言うから関西に飛んだが……」

堂島はそこで区切る。

「待ってたのは警察だった。」

「銃刀法違反で5年パクられた。……まあ桐生、アンタの10年に比べりゃ短い方だが。」

「悪いけど郷田龍司に借りを返さねえと、東城会背負って立つなんて出来ねえんだよ……」

「そうか……」

「一応てめえら2人に言つといてやるがあいつらは半端じゃねえ。裏でどんな罫仕掛けてるか分かんねえ。用心はしておくんだな……」

「ああ……」

「少し寝る……どうせまだ関西までは遠いしな」

そう言つて堂島は寝る体勢に入ってしまった。

「竜也」

不意に桐生さんが呼ぶ。

「なんですか?」

「今回の件、お前や南に俺は謝らなければならぬな」

「どうしてですか?」

「近江が危ないというのは俺も大吾も承知していた……だが、お前はあくまで俺に付いて来てもらっただけだ。」

「もしあれだったら……俺は行きますよ」

言葉をささき、意志を伝える。

「別に近江が危険だとか、極道関係でも無いとか、そんな理由で降りるくらいだったら最初から桐生さんに着いてくなんて言いませんから」

「……そういえばお前はそういう奴だったな」

桐生さんが苦笑しながら言う。

「俺も寝ます。おやすみなさい」

「ああ」

「なあ、あんたら？もう直ぐにでも宿に行くのか？」

蒼天堀に着いてしばらく歩き、大吾が質問する。

「俺は特に何も考えてないが」

「俺は少し飯がどんなもんか知りたいから、遅く宿に行くつもりだったけど？」

「そうか。新幹線でも言ったがここには嫌な思い出があるもんだからな。悪いけど街をぶらつく気分じゃねえんだ」

三者三様に答える。

「じゃあ大吾はホテルで休んでろ。俺と竜也は街を歩く事にする」

「そうさせてもらうぜ。おめエら2人共深酒すんなよ……じゃあな」

大吾はスタスタと歩き出していった。

「竜也もホテルの場所とかは覚えているな」

「はい、分かっています」

「じゃあ問題は無いな。またホテルで会おう」

「分かりました」

「(と言って見たものの、何処に食いに行こうかなあ?)」

考えてなかった竜也は道の傍に止まり考え込む。

「(やつぱこれぞ大阪! って感じのが食べてえけど…たこ焼き、お好み焼き、フグ、串かつ…串かつで決まりだな)」

少し考え決めると大阪駅に着いた時に取っておいた蒼天堀の地図を広げ店を探し出す。

「(招福町の細い道の所に店あるな…ここでいっか)」

特に悩む事も無く決めて黒瀬は店に向かいます。

「いらっしやいませー」

「(おお…美味そうな匂いだ。アタリだな)」

「何にするっ？」

「とりあえず適当に4、5本お願いします」

「へい」

「(店自体はそんなにデカくはねえのに結構人来てんだな…やつぱここに正解)」

5分くらいしてようやく串が出始める。

「いただきます」

ソースを付けて食べる。二度付けは禁止なのを竜也は知ってる為1本1度に抑えて食べる。

少し食べたらキャベツも口に入れる。

それを繰り返ししばらくするとスーツ姿の集団が来た。

「(2、3人…近江だつたりしてなw)」

「おい、とりあえず10本くらい持ってこい」

「へい」

「まったく…俺も郷田さんに付いていけば良かったぜ」

「無理や無理。今回はあの人すら行つとらんのにワシらが行ける訳ないやん」

「だよなあ…そうや。知つとるか？」

「なんや？」

「あの裏切りモンが死んだらしいで」

「ホンマかいな？まーた嘘と違うんか？」

「ほんまや。あの人と言つとんやで」

「あの人…なら東城会からの報復も計画しとかんとアカンな」

「(はっwビンゴー)」

「(ご馳走様でした)」

確信を得た竜也は会計を済ませ、スーツの連中へ話し掛ける。

「すいません」

「ああ？なんやガキ」

「あんたら…近江連合って事で良いんだな？」

「だとしたらなんやちゆうねん」

「いやまあ…話し合いみてえな？」

「何言うてんねん。お前みたいなガキに構つてられるかいな」

「別に良いだろうが。どんだけ心狭いんだよ」

「あ？あんま舐めた事言つとんじゃねえぞクソガキ」

立ち上がり竜也を威嚇しだすヤクザ達。

「俺はまんまの事言ってるだけだろうが」

店には嫌な空気が流れ始める。

「表でろや」

「てめえらのが出口ちけえんだからてめえらから行けよ」

「(少しでも熱くなつてて貰った方がやりやすいからな。ある程度は煽らせてもらうぜ)」

ヤクザ達の間には竜也を挟むようにして店の裏まで出ていく。

店の方にヤクザ2人その後ろに1人が座っている。

「今更謝っても意味無いで」

「来んならさっさと来いよ」

1人が突進してくる。

そのまま竜也を掴み柱まで激突させる。

「ッ！邪魔っ！」

その背中を殴り離させる。

ドゴッ！

その隙に近付いていたもう1人に殴られる。

そのまま馬乗りになれるが、瞬時に足を間にいれ回避する。

それでも殴ろうとするヤクザに空いている片方の足で蹴り飛ばす。

「あつぶな……後はアンタだけだぜ？」

「……………ナニモンや？」

「ただのコンビニでバイトしてる人間だよ」

「普通の一般人がヤクザ相手にそんな出来るかい」
「さあな。とりあえず続きやろうぜ」

話を切り上げまた構え直す。

「何しとんや、篤」

「ツ！お、お疲れ様です!!」

ふと謎の男が先程まで座っていたヤクザに話しかける。

「誰だてめえ？」

「何や、篤。なんでコイツら倒れてるんや？」

黒瀬の話を無視してヤクザに話を聞き続ける。

「そ、ソイツにやられました」

「…てめえも近江なのか？」

「そうって言ったら？」

「ソイツの代わりにやろうぜ」

「……………後悔すんなよ」

「あ？……………グホツ!!」

いきなり目の前に現れボディーブローとハイキックを喰らう。

「ガハツ!!」

そのまま投げ飛ばされず腕を引かれまた殴られる。

「(…………コイツ…………アイツらなんかとは…………か、格が……………違い……………)」

「!…の、の野郎…………!?!」

ドゴツ!!バサツ!!

ようやく立ち上がったと思ったたらドロップキックを直撃してしま
いゴミ置き場まで蹴り飛ばされた。

「ま、まだだ……ま、負けらん…ねえ………ツクソ………」

そして竜也の視界は暗転していった。

〃〃桐生視点〃〃

「郷田龍司の件があったとはいえ遅くなってしまった。」

「(もう竜也も、来ているかもしれないな)」

ガチャ

「すまない。遅くなってしまった」

「おせえぞテメエら。さっさと風呂でも入ってこい」

「ん？竜也は居ないのか？」

「あ？あいつなら来てねえぞ。お前と一緒にじゃないのか？」

「いや、俺とあいつはお前と別れて直ぐに別れたから、その後は会って
ないんだ。」

「あいつがホテルの場所を忘れるとは思えないが……」

「とにかく、お前は風呂入ってこいよ。いくらガキとはいえそんなす
ぐ面倒事に首突っ込むタイプでもねえだろ」

「……分かった」

「(心配なのは事実だが一番信頼できるのも竜也だ。あいつを信じよ
う)」

ピンポーン

「つ……う、今何時だ？」

急に部屋のインターホンがなり目が覚める。
時刻を確認すると午前2時だった。

「なんだよ。こんな時間によ」

大吾も起き、ドアを開ける。

「ツ！てめえ」

「竜也……！」

そこにはボロボロの状態で立ち尽くす竜也の姿があった。

「てめえ、今何時だと思ってるんだ」

「……」

「おい、聞いてんのかよ」

「………悪かったな」

「……!?!」

大吾も黒瀬が素直に返事すると思っていなかったのか、桐生と共に驚く。

「竜也、とりあえず風呂入れ」

「………うす」

全くの生気が感じられない調子で2人の間を通り竜也は風呂場に向かった。

「大吾、寝るぞ。どうせ竜也もシャワー浴びたら直ぐ寝るだろうしな」

「あいつ大丈夫なのかよ?」

大吾が桐生に竜也の事を聞く。

「……あいつなら乗り越えるさ。それよりあいつがあんなにやられるなんて事は近江の幹部だろう。」

「俺らも気合いを入れないとな」

「……………分かったよ。アンタがそこまで言う奴だ。信用してやるさ。」

「つたく、あいつの性で変に目が覚めたじゃねえか」

そうしてまた直ぐ大吾は寝てしまった。

「(竜也をやった奴が何処なのか知らないがもし郷龍会なら……………)」

そうして桐生も考えながらまた眠りにつくのだった。

28話

近江連合の闇

「(今何時だ……まだ全然時間的には余裕がありそうだな。竜也はベッドには居ないか……テーブルに居るのか)」

ベッドから起き上がった桐生は寝室を出てテーブルに座っている竜也に声を掛けだした。

「竜也…昨日は…」

「すみませんでした!」

謝ってくると思っていなかった桐生は困惑する。

「まあ分かってると思うんで普通に言います。」

「近江の奴にやられました」

「強いのか?」

「まだ俺が弱いのもありますけど…強さはかなりのものかと」

「そう「俺が倒します。二度と負けるつもりは無いっす」

桐生の言葉を早めに切り上げ竜也が答える。

その顔には何の迷いも感じられなかった。

「(フツ……元からこういう奴だったな。心配した俺がバカだったな)」

「そうか。なら任せるぞ」

「はい」

「うっせえな。朝っぱらから何騒いでやがる」

明らかに寝不足気味で不機嫌な顔をした大吾が寝室から出てきた。

「こっちはてめえの性で寝不足なんだよ。もう少し寝させようって気はねえのか」

大吾が黒瀬を見ながら文句を呟く。

「そいつは悪かったな。じゃあここで永眠させてやろうか？」

それに乗った竜也が挑発を掛ける。

「クソガキが。表出ろよ」

「はア……そこまでだ。お前たち、これ以上喧嘩を続けるなら……俺が相手するぞ」

「……」

桐生の本気の殺意を受けて、大吾も竜也も黙る。

「よし、静かになったようだな。まだ朝飯までは時間があるから、寝るなら寝とけ大吾。竜也も少し声を落とせ」

「そ、そうだな。そうさせてもらうぜ」

「は、はい。全然周りを気にしてませんでした。すいません」

大吾は早々と寝室に戻り、竜也も縮こまる風な素振りを見せる。

「(はア……この2人は本当に水と油だな。もう少しまともに話し合えばまた何か変わるかもしれんが……今はまだ難しそうだな)」

昨日から続く早朝のゴタゴタは桐生の怒気によって収まった。

「……ここが近江の本部ですか……デカイですね」

あれから暫くして朝飯を取った3人は直ぐに近江連合の本部へと向かったのだった。

「関西のトップだからな。流石の規模だ」

「お前ら、そんな所でボサつとしてんな。早く行くぞ」

「そうだな。行くぞ竜也」

「分かりました」

何人もの近江連合の集団が頭を下げる中、大吾と竜也は少し戸惑いながら、桐生は堂々と進んでいく。

中に入り目の前にエレベーターに乗ろうとするが

「すいません、このエレベーターは会長専用です」

「そうか。悪かったな」

近江の人間に止められる。

直ぐに隣にある階段を登り始める。

「(侵入者を惑わせる為か大分入り組んだ構造になっているな)」

やがて最上階に着き、突き当たりの部屋に組員が立っていて案内される3人。

右から竜也、桐生、大吾の順に座りその前には近江連合の幹部達が座っていた。

幹部集団の横の襖が開き、そこから新たに幹部連中と車椅子に乗っている会長らしき人物が入ってきた。

「遠方から、ようこそお越しくださいました。」

「五代目近江連合、会長の郷田仁と申します。桐生四代目の噂はかねがね」

「ご丁寧な挨拶、痛み入ります。」

「東城会四代目：桐生一馬です」

「堅苦しいのは終わりにして、近江連合の執行部を紹介しましょう。」
「私の横が総本部長の高島です。寺田の後任になります」

郷田に紹介され黒のスーツでオールバックにサングラスをかけた高島は会釈する。

「よろしくお願いします」

「寺田の……」

「寺田……いえ、東城会五代目とは兄弟分でした。この度は誠に……残念でした……」

「次に……ちよつと待った!」

郷田の紹介に大吾がストップを掛ける。

「おい、そのあんた……今なんて言った？残念だと？……寝ぼけた事言ってるじゃねえよ。お前等が殺ったんだろうが!」

立ち上がる大吾を桐生が止める。

「寺田を殺したのは……確かに近江の系列です。ですが、本部の命令ではありません」

「ふざけんな!そんな言い逃れが通用するか!」

「ギャーギャー騒ぐなや!兄ちゃん!」

高島のいる位置から反対側から扇子が大吾の前に投げられる。

「ああ?」

「ええか?こういう会合には“格”つちゆうもんがあるんや。兄ちや

んみたいな人間が来るとこちやうんや」

薄緑色のスーツを着た男が大吾に言う。

「違うか？東城会の四代目はん？」

「やめろ。千石…失礼だろう」

高島が止めに入る。

「すみません…こちらが無礼を致しました」

桐生もすかさず謝罪する。

「…………寺田の一件に関しては、ホンマに申し訳ない。」

「上座からですがお詫び申し上げます…」

「ちよつと待った！謝る必要なんてあらへん！」

「元々寺田はウチの人間や…組織裏切った人間なんかどうしようとかつちの勝手でっしやる？」

「クサイ芝居は止めろ」

「あ？」

「アンタら全員悪いと思ってんのかよ？郷田さんよ…。」

「1年前、寺田の背後で神宮とつるんで東城会乗っ取ろうとしたじゃねえか。知らねえとは言わせねえぞ…！」

「確かに…ですがあれは私や執行部の仕業ではありまへん」

「お前…今更何言ってるんだ！」

大吾に言い寄られ下を向く郷田。

「桐生さん、堂島さん、黒瀬さん。」

「郷田の口からは申し上げ難いので私の方から説明致します。」

「1年前の件、実は直参郷龍会会長がやった事なんです」

「何!？」

「(郷田龍司……)」

「郷田龍司……彼は親父の実子です。親の心子知らずとは正にこの事……奴は近江の代紋使つて勝手な行動を次々……」

「寺田襲撃を実行したのも、郷龍会によるものかと……」

「では……龍司が寺田殺しを……」

「恐らくは……」

「そんな奴ならしつかり収めとけよ……」

「……」
ここまで一切喋らなかつた竜也が口を開く。

「テメエらがそんな奴に直参の組とか与えんのが悪いんだろ？」

「竜也……!」

「面目ない……」

「アホくさ……後は勝手にやってください」

「千石……!」

そう言つて千石は勝手に立ち去つてしまった。

「黒瀬さん……これが近江連合の現状です。直参120、構成員3万5千……巨大になりすぎた組織を統制するのは至難の業です……」

「この高島は若うて器量もある……寺田もそうやった。」

「ですが……今の千石や龍司……他の若いヤツらは言う事聞かへん」

「郷田さん……」

「……」

「……桐生さん……寺田失うたんは、東西両方の痛手や……今こそ2つを均衡させる事で争いの種を取り除きたいと、私は思つてる」

「東と西の……ですか」

「そうです。桐生さん、貴方ならそれが出来る。是非、東城会を建て直してください。」

「その為に近江連合の力が必要なら私は喜んで力になります」

桐生は郷田の手が届く距離まで近付き、血塗られた書状を渡す。

「これは…」

「寺田から預かった書状です…。」

「あいつは郷田会長との盃を願ってました。」

「東城会としては、寺田の願いに従い近江との五分の盃を望んでいます。……………受けて頂けますか？」

「……………お受けします」

「そうですね…では直ぐにでも、東城会五代目代行の堂島弥生をこちらに向かわせます」

「そうは行きまへん。今度はコチラから出向く番です…神室町へ行きましょう」

「はい……………有難う御座います……………」

ガラッ！

四方の襖から様々な武器を所持した構成員が入ってくる。

そして人が二分され、そこから人が来る。

「やっぱりアンタ。本物の堂島の龍やったんや……………桐生はん」

「龍司…」

「近江と東城が五分の盃やと？八体二……………いや、九対一の間違いちゃうんか？」

「何しに来たんや！お前は執行部の人間やない!!」

桐生へ近付く龍司に大吾が前に立つ。

「何や？」

「俺を覚えてるだろ？」

「知らんわ」

「お前に5年前ハメられた堂島宗兵の息子……大吾だよ」

「知らんちゆうとるやろうが」

「盃なんて関係ねえ。俺はお前に……借り返さなきゃなんねえだよ!!」

殴り掛かるが持っていたトスの柄で鳩をやられる。

「雑魚なんぞ覚ええられるか……邪魔やねん。寝とけや……」

「どないする気や……」

「やれや！」

龍司の掛け声により構成員が幹部集団に銃を突き付ける。

「お前……ここを何処だと思ってるんだ」

「何言うてまんねん」

「近江連合の本部だぞ……!」

「そんなん知つとりますわ」

ここで龍司がトスを抜く。

「ワシ等クーデター起こしに来とんのやから……」

「何……」

「今、東城会にウチの親父と話させる訳には行きませんねん。盃なんぞ交わしたしもたらワシの計画がパアや……秀!」

龍司に呼ばれ更に1人出てくる。

「親父連れてけや」

「へい。龍さん……親父、失礼します。お前らも行くぞ」

秀と呼ばれた男は直ぐに郷田の後ろに立ち他の幹部集団に銃を突き付けてる連中を引き連れ外に出てしまった。

出る前に竜也を見ながら

「秀人！止めんかい!!」

郷田は止めるよう言うが、無視してそのまま部屋の外へ出る。

「竜也…龍司は俺が相手する。お前は周りを……竜也？」

「………逃がすかよ…！待てやてめえ!!」

竜也は自分一人しか聞こえない距離で呟きながら、急に立ち上がり郷田と秀人なる人物を追いかける。

「待てや！」

「邪魔だよ!!」

竜也の近くに居た、郷龍会組員が立ちはだかるが簡単に吹っ飛ばしてしまふ。

そのままそいつには見向きもせず部屋の外に出る。

「竜也！待て！」

桐生が呼び止めるが竜也の耳には全く入る気配は無かった。

「(クソっ！竜也のあの反応……アイツが竜也を倒した奴なのか？……だが今は……)」

「龍司…お前の狙いは…やはり戦争なのか？」

「そや…西と東の大戦争…それにもう一つ…」

そこまで言つて首を桐生へと出す。

「俺か…」

「その通り。アンタの首や…悪いがその価値あるか…試させてもらいまっせ！お前ら！いっちょやっただれや!!」

29話

脱出

くく竜也視点くく

時間は数分前に遡る。

「ワシ等クーデター起こしに来とんのやから……」

「何……?」

「(あいつが郷田会長の息子、郷田龍司…強さ自体は分かんねえけど、やべえ感じがする……それにこの組員の数……こりや骨が折れそうだな)」

「……………秀!」

「(増援か…まあどうでも良いけど……………)」

「…失礼します。お前らも行くぞ」

止めようとして立ち上がる寸前、秀人と顔が合う。
その顔を見た瞬間竜也の体は瞬時に固まった。

「(コイツ……………!!)」

昨日の今日で受けた屈辱が込み上げてくる。

「んだよその顔…簡単に吹っ飛ばした奴には興味もねえってか……………逃がすかよ!…待てやてめえ!!」

すぐさま立ち上がり追いかける。

「待てや!」

「邪魔だよ!!」

何も無かったかのように部屋の外に出て追いかける。

直ぐに出た為、まだ部屋からそんなに出てない場所で見つける。

「てめえ!!」

「あん？昨日の奴やんけ。なんでここにおんねん？」

「ふざけた事言ってるじゃねえよ!!さっき俺の事見てきたろうが!」

「…流石に分かるか。で？また俺に吹っ飛ばされにでも来たんか？」

「殺す!」

竜也は郷田が居ることすら忘れ、怒りのまま向かっていく。

「オイオイ…お前ら」

ガシツ!

いつの間に傍に居たのか3人くらいの組員に止められる竜也。

「そいつ親父に近づけんや」

「ハイ!アニキ!」

「ツ!待て!テメエええ!!」

竜也の叫びを無視し会長専用のエレベーターへ乗り込んだ。

「アニキの命令や。悪く思うなや」

竜也から離れた組員がニヤケながら構え出す。

「……………ゴチャゴチャうるせえよ……」

「あ?」

「来るなら来いよ…全員ぶつ殺してやるよ!!」

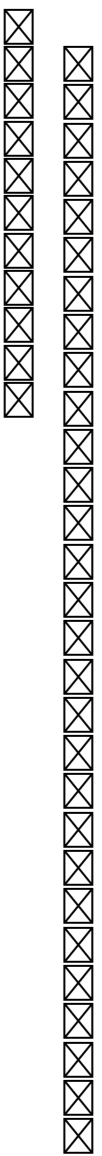
竜也が構えると同時に掴んでいた1人が横から殴ってくる。それを腕を出してガードする。ガードの体制から相手の拳と腕を滑らせて横に回り込みブローを入れる。

「ウグッ！」

蹲った組員を無視し後ろに居た男を回し蹴り、そのまま足を戻し前にいる奴を蹴り飛ばす。

「邪魔すんな……俺はアイツに用があんだよ……」

周りを一瞥し竜也は下に降りていった。



「おい！アイツや！囲め!!」

下に降りると待ち伏せしていたのか組員達が集まり出す。

その先には郷田を連れた秀人。

こちらには目を向けず入口を出ていく。

「ツチ……めんどくせえな……」

無言で構える。

「(全員相手しても勝てる……でもそれじゃアイツには間に合わねえ……だったら!)」

ズザアアア!!

走り出すのと同時に滑り込み4、5人を抜かすと前にいる奴を押し

のけて入口横にある銅像を倒して後ろの連中を来させず本部を抜ける。

正門と本部入口の真ん中の位置にある広場の様な場所に秀人は居た。

「てめえ!!」

「あん?意外と早く来やがったな」

「殺すつつたろ!」

ドンツ!!

すぐさま殴り掛かり、それに対応する様に秀人も蹴りを出す。お互いに直撃し吹っ飛ぶ。

竜也は素早くローリングして立ち上がり秀人に蹴りを入れる。

「……………立てよ。…こんなもんじゃっ!?!」

竜也が近づいた瞬間に立ち上がる反動を使い足を蹴り上げる秀人。ギリギリで避け少し顎に傷が入る。

「意外とやんじゃねえか…でも……悪いな。タイムアップだ」

「あ?」

バンツ!

「竜也!」

「桐生さん!」

「……………初めまして。一応龍さんには右腕認定されとります。梅澤秀人言います。おおきに」

「龍司の右腕……………つまりお前が郷龍会No. 2なんだな」

「そうなります。『堂島の龍』ともやりおうてみたいもんですが、そ

ろそろ自分はこの場を離れないと行けないのでとりあえず挨拶で済ませときますわ」

そう言つて秀人は正門に向かい帰つていく。

「会長連れるゆうのにアンタ相手にしとつたら手が足りん。」

「龍さんには搾られるかもしれんが今回はこの辺で、ほな」

「……………梅澤！」

「なんですか？桐生さん」

「俺とやりたいと言つていたがそいつは無理な話だ」

「……………どういう事ですか？」

「お前は竜也に負ける」

「……………」

桐生の言葉に何も返さず秀人は帰つていった。

「……………桐生さん、そういえば堂島の奴は…………？」

「ああ、アイツなら……………バンツ!!」

「グツ……………!!ガハツ！」

「大吾！」

「桐生さん……………やっぱアイツただもんじゃねえ……………」

「勝負はまだついとらんやろうが……………」

龍司が大吾を投げ飛ばし竜也達の前に現れる。

「龍司……………。竜也、大吾と一緒に郷田会長を連れて東城会へ行つてくれ」

「待て！そいつとのケリは俺が！」

「行くぞ」

無理矢理大吾を立たせ連れていく竜也。

「おいー！」

「今回の要は郷田会長と東城会が盃を交わすことだろ。」

「ツ！……」

「ああ…その為に少しでも急ぐんだ」

「……………っクソ!!」

そうして大吾が郷田の車椅子を引きこの場を離れる。

「竜也」

「はい？」

「この先は任せるぞ」

「……………うっす……………！」

「後、1人で暴れるなよ」

「ウツ……………分かりました…」

先程の節を思い出し顔を歪ませる竜也

桐生との会話を終え、大吾に追い付くように走る。

「遅せえぞ」

「おう、悪いな。このまま大阪駅に向かうのか？」

「ああ。あんまりこの状況を見られたくはねえしな」

「すいません。ワシが動けんばかりに」

「気にすんなよ。そう思うんだったら東京着いて東城会の役にたつてくれ」

「おい！居たぞ!!」

前や後ろからスーツ集団が現れ始める。

ゆっくり歩いていく3人に不穏な空気が流れる。

「おい堂島……」

「んだよ」

「俺が全体的にカバーすつからお前は郷田会長に近いやつだけ頼むわ。」

「どうせさつき郷田龍司とやったばつかならまともに動けねえだろ？」

「……………うるせえよ。そこまで言うなら任せるぞ」

「……………バカだよなあ俺。桐生さんに何か言われたのを無視して突っ走って…自分の勝手で動いちつた……………だから今だけは……」

大吾の発言を最後まで聞き終え竜也は殺気を全方位に張り巡らせる。

その瞬間に郷龍会の連中は勿論、大吾や郷田ですら飲み込まれた。

「(コイツ……………!!?)」

「(ここまでの人間がおるとは……………)」

「……………来ねえのか?……………ならこつちから行くぞ!!」

ドンツ!バキバキツ!!

跳躍し、目の前の組員達に蹴りを入れる。ガードする組員だが、骨が碎ける音が鳴り、後ろにいる連中も吹っ飛ぶ。

そいつらに目も向けず身体を捻らせ、殴り掛かる。

「(まず何十人か……………数数えてる場合じゃねえな……)」

「オラア!」

ガシツ!ドスツ!

バットを振り下ろす組員に近付き腕を抑え肘を入れる。
くの字に曲がり倒れ込んだ奴を無視して、落としたバットを逆方向
にいる敵に投げる。

ほとんどが避ける中、反応が遅れた1人が直撃する。
すぐさま二分された方の右側に近付き膝蹴りを入れて吹っ飛ばす。

「囲め！」

二分された左側が竜也を囲む。

「(ツチ……まだまだ数は居んの……!!)」

反対側の連中が郷田へと向かう。

「やらせるかよ！」

しかしそれは大吾はカバーする。

「オラァ!!」

気を取られた隙目の前の1人が殴り掛かる。

「(!!閃いた!!!)」

腕を引き伸ばし、無力化させリアットの要領で首を狙い、そのま
ま回転するようにして周りの連中を蹴りながら昇り、足で叩きつけ
る。

「次!!」

一気にマシンガンスタイルになり、大吾の方へと加勢する。

「結局こつちまで来てんじゃねえか！」

「あ？うるせえよ！近い奴は任せるって言ったろうが！」

マシンガン特有の手数の多さと時折混ぜる小牧流で1人、1人と素早く倒す竜也と荒々しい拳の重さでゆっくり仕留めていく大吾。

少しでも大吾が不利になれば速さで押す竜也がカバーに入り、その速さを止めようと人数を多く竜也に割けば、フリーになった大吾が背後から敵を倒す。

いがみ合いをしつつも、それを感じさせない連携でちやくちやくと数を減らす2人。

気付けば残り2人となっていた。

「黒瀬！」

大吾が向かい合ってる1人を倒し、まだ闘ってる竜也を呼ぶ。

「んな騒がなくても分かってるっつもの！」

大吾の方へ敵を投げる竜也。ラリアットを繰り出し気絶した。

「終わったか……」

「ああ…早く行くぞ。まだ来ないとは限らねえからな」

「そうだな………堂島、てめえだけで東京向かってくれ」

「あ？…何言つて………いいんだな？」

竜也達の目の前には郷龍会の増援が来ていた。

「幸い駅の方から増援は来てねえ…。なら、俺が少しでも時間稼ぐのが最適だろ。」

「いちいち全部対応してたらそれこそ桐生さんが残った意味が無くなる」

「…先行ってるぞ」

「！待てコラ！！」

ゴリッ！

大吾を先に行かせ、それを見て追いかけた組員を蹴り飛ばす。

「こっから先行ってえなら…殺ってから行けよ」

ニヤリと笑みを浮かべながら近江連合の前に立つ。

30話

近江四天王

「はあ……はあ……辛……」

竜也が壁に背を預けながらゆっくりと立ち上がる。既に日が暮れていた。

その周りには近江連合と思われる多くの人数。

プルルルル　ガチャ

『竜也か？どうした？』

「もしもし……桐生さんつすか……郷田会長なら……堂島の奴が連れてきました……流石に……大阪出たはずですが……」

『お前、今何処にいる！』

竜也の話し方から危機を感じた桐生が声色を変えて聞いてくる。

「……ちよつと分かんないつす」

周りを見ながら答える竜也。

『蒼天堀には来れるか？』

「今……向かおうと思つてました。」

「すぐ行きます……」

『分かった。着いたらまた俺に連絡してくれ』

「了解つす」

「桐生さん、着きました」

先程迄とは違い、息を整えた竜也が桐生に連絡する。

『そうか。悪いが巖橋まで来てくれないか？俺も少し離れた位置にいるから直ぐにそつちに向かう』

「はい」

「すまない。待たせたな……ずいぶん酷い格好だな」

桐生の目の前には上半身のスーツが所々破け、側頭部から出血していたであろう傷が出来てる竜也が居た。

「堂島が行ったあと、1人で近江と戦ってたらこうなりました……それより桐生さんの方は……？」

「それもちゃんと話すつもりだった。移動しながら話そう。少し急を要する自体もあるしな」

そう言う桐生には薬局屋のロゴが貼り付いているレジ袋を持っていた。

「……分かりました」

桐生の話は

- ・ 郷田龍司の狙いは東西の戦争、及び自分との事
- ・ 東城会の代弁者として来た自身の保護として府警四科の「狭山薫」がついており、今は大阪から出れないとの事、またその狭山薫が怪我してをしまいある場所に匿つてるとの事
- ・ 堂島大吾の方は竜也に連絡する前に連絡して

「……とりあえず今はそんなとこだな。ここだ「スナツク葵」ここに狭山が居る。」

「うっす……分かりました」

ガチャ

「待たせたな。買ってきたぞ」

「わざわざすまんなあ…助かったわ。ん？そいつ誰や？」

「こいつは俺の知り合いの竜也だ」

「黒瀬竜也です。よろしくお願いします」

「まああんたの知り合いならええやろ、私は民代よ。あんたも治療しようか？」

「俺は大丈夫です。もう動けるんで」

「竜也の怪我を見た民代が確認するがわざとらしく動けるアピールする竜也。」

「ならええわ。2人とも座りや」

言われた通り座る2人。

「何飲む？」

「何でもいい」

「俺はソフトで」

「はいよ」

桐生に酒、竜也に麦茶を出す民代。

「病院に居たのか？随分慣れた手つきだったな」

「かなり昔のことや」

「狭山とはかなり親しいようだな」

「親しい？当たり前や。私はあの子の親や」

「え？」

「まあ血は繋がってへんけどな」

「義理って事ですか？」

「そんな大層なもんちやうで。ただの育ての親や。」

「あの子…孤児やねん」

「孤児……」

「生まれてすぐ両親が死んでもうてな：せやからウチが育てたんや」

「そうか……道理でな」

「ん？」

「実はあいつは撃たれた時『葵』って店に行けと行つたんだ：」

「それが：なんなん？」

「人は何か急な時に継るのは大体親です。」

「それが急に出ないって事は何か別の理由があるって事ですよね？」

「ああ、そういう事だ」

「へえー：そういうもんなん？何でアンタら分かるん？」

「俺も竜也も孤児だからな……」

「そうか：まあ薫からしたらウチはホンマのオカンちやうしな」

「そんな事無いっすよ」

「？何でや？」

「本物とか、偽物とか関係なく何時だって心の底から頼れる場所があるってのはそこに居る人を心から信用しないと出来ないです。」

「そういう場所が1箇所あるだけで人は救われるんですよ」

「アンタ……ありがとな」

「いや！そんな感謝される事じゃ無いですよ」

「謙遜すんなや……それよりもアンタら薫と同業？」

「それとも：探偵さんか何か？」

「いや、竜也はともかく俺はそんな大したもんじゃねえ」

「え？じゃあなんなん？」

「まあ……警察の敵つてとこだ」

「ママ、喋りすぎやで」

それまで寝ていた薫が目を覚まし起き上がる。

「痛むか？」

「アンタに心配される筋合いじゃないわ」

「あ？」

「よせ、竜也」

「ちよつとアンタ！ここまで運んでくれはったのに礼の1つくらい言わんかい」

「ヤクザ風情に礼言うほど、落ちちやいないわ」

「それだけ口が聞ければ上等だ。それより郷田龍司だ。ここまで手回しが良いとは思わなかった」

「これは郷田龍司の仕業じゃないわ」

薫が自分に当たった弾薬を見ながら言う。

「郷龍会は力で相手をとことん追い詰めてトドメを刺す……それが奴等のやり方……プロの殺し屋を雇うなんて真似はしないわ」
「プロの殺し屋……？」

「あの距離からライフルを扱えるものはそうは居ないわ。それにこの弾丸……通常のライフルよりも口径が小さい……。」

「つまり相手は……俺を脅そうと？」

「直接犯人から聞かないとそれは分からないわね」

カラン

桐生がグラスを置くと同時に竜也も立ち上がる。

「どこ行くの？」

「雇い主を探す……このままじゃ……俺は誰と闘えばいいか分からないからな」

「それなら……コレを持って招福町の雀荘へ行きなさい」

「情報屋か……」

「三人卓で打っているチャンチャンコを着た男あなたが……レートは？」

「と聞くと……いつもどのくらいで打ってる？……と聞き返す。」

「そしたらアナタは……アンタに任せる」と言う」

「……アンタに任せる……か」

「したら相手はデタラメなレートを言うわ。とにかくそれを受けて」
「分かった。行くぞ竜也」

「了解す」

「一応言っておくけどあなたは府警の監視下にあるのよ。逃げる様な真似しないでね。」

「私の電話一本で即座に逮捕できるんだから」

「ああ」

薫の忠告を聞き外に出る桐生と竜也。

「ここだな。招福町の雀荘は」

「早いとこ聞いただけ聞いて出ましようか」

「そうだな」

「ああ！何やお前ら！」

雀荘に入ろうとした桐生と竜也を入口にいた男が止める。

「今日は招待のみなんや。招待状無いやつ入れる訳にはいかんのや」

「そうか。済まなかつたな」

「……どうします？」

「そうだな…一旦狭山の奴に聞きに戻るか」

「なあ、アンタら」

「ん？」

「あんたも雀荘門前払いされたんやろ？招待状寄越せなんてえらい気取りやがって。」

「やっぱ『雀歌』ぐらいの雀士やないと入れへんのかいな……」

「？その話詳しく聞かせてもらっていいですか？」

この後、桐生と竜也は麻雀好きな男に『雀歌』についての話を聞き、ゲーセンに入り浸っているという『雀歌』の元で更にその男の娘がヤクザ連中に攫われてしまったのを聞いた2人は、その娘を取り返

す事を交換条件として招待状を貰うことにしたのだ。

「毘沙門橋のコインロッカー奥で立ってる男達…アイツらですね」

「無駄な時間だ…：すぐに終わらせるぞ」

「OKです。なあ！アンタら」

「ああ！なんやお前ら!？」

「雪子って女の子取り返しに来ました」

ガンツ!!

竜也が話終えると同時に目の前の男の顎を蹴りあげ気絶させる。

反撃させる隙を与えず2人目の横に周り肘打ちを喰らわせ、かかと落として終わらせる。

「桐生さん！こっち終わりました」

「俺も今終わった。おい…雪子は何処だ？」

「す…：すみません…雪子は川のパラソルんところの下におる。赤い服着た男」に攫われて預けてます！。」

「ヒ、ヒイイイ!!!」

「あ、おい！逃げんじや…：はあ、早いとこ行きましょう」

「ああ…：…」

川のパラソル下の男のもとに向かった2人は『雪子』と名のついた猫を取り返し、ゲーセンで待っている雀歌に招待状代わりの「桜の牌」を受け取り、ようやく雀荘に入れたのだった。

「チャンチャンコを着た三人卓の男…：アイツですね」

「俺が話を聞いてこよう」

「じゃあ俺は近くの席座ってますね」

そう言い竜也は隣の卓へ行き、桐生はチャンチャンコを着た情報屋

へ話を聞き出した。

情報屋の値段条件は10万だったが背に腹はかえらない桐生は何食わぬ顔で払った。

・この弾丸は近江高島会であること。

・高島が他の組に流してゐる線は無いということ。

・警察が動かない理由は分からない。

「話すのはここまでや。これ以上は喋れんわ」

「何故、高島が……。」

「まだ教えて貰いたいことがある」

「なんや？」

「さっきの続き……高島の裏を教えてください」

「別料金や……それにちつとばかり値が張るで」

「幾らだ？」

「30万や……」

払うのをやめた桐生は黒川に情報屋江崎について聞いた結果☒アーモンドのレート☒を聞きたがっていた事を聞き、バー ステイルで☒アーモンドのレート☒を聞くことが出来、再び江崎の所に戻ってきた。

「アーモンドのレートを知りたいそうだな」

「お前……それを何処で……交換条件や」

「(流石桐生さん、たった数十分で30万の条件がただの1つの情報に変わっちゃうんだから)」

・高島は官僚と繋がっているらしい

・近江での若くしての出世で有名

プルルル

「えっ?…ホンマでつか?分かりました」

「世話になったな」

「待てや。桐生一馬さん」

「どうして俺の名前を…?」

「アンタ…1億円になってしもたわ」

「なんだと…?」

「懸賞金や…悪う思わんといてな」

江崎の卓に居た人の他に別の卓に居た奴らも立ち上がる。

「その首に1億がかかつとりや誰でも目が血走るわな…」

「1億とは…随分安くみられたもんだなあ…竜也」

「そつすね…桐生さんなら少なくとも100億くらい積み重ね
と」

「ワシらにしたら十分な大金や…死んでもらうで!」

「おい…てめえらはこつちだよ」

ガシャン!!

桐生の後ろにいたチンピラ4人を自分の座っていた卓を蹴り飛ばし、2人直撃し、避けた2人にはダブルリアットを繰り出す竜也。当たってよろめいている2人を殴り終わらせる。

「そんなんじや桐生さん狩りなんてまだまだだな」

「オラア!」

ドガア!!

「ヒッ!!」

桐生が江崎を殴り飛ばしゆつくりと近付く。

「俺の首に懸賞金をかけたのは誰だ！」

「し、知るか！」

桐生が江崎を蹴り飛ばそうとする。

「や、止めろ！せ、千石組やつ……！」

「(千石……あの『格』がどうか言ってたやつか……)」

「あの千石のことか……？」

「そ、そうやつ……！」

「郷田、高島、千石に狙われて……アンタ……八方塞がりやで！」

「どうして俺の首を……？」

「アンタは……跡目争いのゴールなんや」

「俺が……行くぞ」

「はい」

「とりあえずスナック葵に戻ろう」

「了解です」

「このままやったら体が持たへんよ！」

スナック葵に戻ってきた桐生と竜也に民代の声が聞こえる。

「放つといて！」

「何でそうやってアンタは無茶すんの！」

「ママが何も話してくれへんからやないか！」

「何遍も言うてるやんか。アンタの両親とヤクザは何も関係ないって
！」

「だったら教えてよ！私の本当の親は誰なの？」

民代は顔を俯く。

「もうこの話はええわ……とにかく私は桐生一馬を追い掛ける」

「何でや？」

「あの男が東城会の人間だからよ」

「東城会!？」

「彼の身辺保護をすれば、東城会に近付ける。」

「そうすれば、過去に何があつたか調べることが出来るわ」

「薫……アンタ……」

ガチャ

「まだ痛むか？」

「もう何ともないわ」

「水を一杯くれ」

「俺も願います」

「狭山、紹介するのが遅れた。俺と一緒に大阪に来た竜也だ」

「黒瀬竜也です。よろしく願います」

「府警4課、狭山薫よ」

プルルル

「狭山です……あ、はい。」

「ちよつと怪我をしまして……はい……はい、一緒です。」

「……え？あ、はい。分かりました」

そこまでで桐生に携帯を渡す薫。

「ウチの課長から」

「え？……桐生だ。」

「ああ…だが俺に何の用だ?。」

「何だと?。」

「郷龍会か?。」

「いや…………。」

「神室町に…?だがこのまま…………大吾と会長をほつとく訳にも行かない。」

「何!?。」

「分かった。恩に着る」

「…………分かった」

「竜也。神室町へ帰るぞ」

「えっ!?」

「府警の管轄外だ。お前は残っても良いんだぞ」

「あなたの身辺保護を頼まれた以上、管轄なんて無いわ。私も行くわ」

「勝手にしろ…………竜也、大吾と郷田会長が攫われた」

「!?堂島がやられたって事ですか?」

「かもしれない。とにかく2人の身が危険だ。早く向かおう」

「ですね。いきましよう」

31話

東京帰還そして

「うっ……」

「どうした？」

「大丈夫よ……ちよつと目眩がしただけ」

「失礼……熱ありますね」

桐生が抑えてる薫の額を触る竜也。

「大丈夫だってばー！」

お姫様抱っこをする桐生

「ちよつとー！やめてよ！恥ずかしいじゃない……!!」

「うるさい……ちよつとそこまで行くだけだ」

セレナの裏門を開け、ソファーに寝かせる桐生。

「ここは……何処……？」

「俺の馴染みの店だったとこだ……」

「そう……」

「無理してついて来るからこうなるんだ」

「休めばすぐによくなるわ」

パチン

「営業してなかったですけど、電気は使えるみたいですね」

「すまない。ありがとう」

「別にいいですよ」

プルルルル

「柏木さんこそ無事で何よりでした。」

「神室町に戻ってきたところですよ。」

「郷田会長と大吾が、何者かに連れ去られたんです。詳しい事は東城会本部で……」

「東城会に向かうんですか？」

「ああ、今までの報告がてらな。その間竜也はどうする？」

「1回家に帰ります。色々着替えたいし」

「分かった……こつちが終わったらまた連絡する」

「分かりました」

「(とりあえず家に帰ったら風呂かなあ……てかスーツの上着ひでえな……)」

「……！」

スっ！

ドンッ!!!

竜也が紙一重で避けた所にはデカイ2本の斧が突き刺さっていた。

「ほう……コレを避けるとは……やるじゃないか……」

「まあ意味分かんねえのが現れやがったな。何だてめえ」

「俺は亜門一族三兄弟、長男『亜門一也』！お前を殺す」

「(亜門……って事はアイツの知り合いかよ！ッ!!!)」

ブンッ！ブンッ！ブンッ！

常人なら1本を両手で持っても振れない程のスピードで攻撃を繰り返す一也。

「どうした！逃げるだけか！」

「うつせーんだよ！」

ドゴツ!!

一瞬の隙をついて殴る竜也。
しかし

「そんなものか」

「やべえ!!」

全くきいていない様子でまた振りだす一也。

「頭おかしいのは亜門丈譲りって事ね。……………まあいいや」
「ふざけているのか」

突如一也の前で無防備な状態になる竜也。

「いいから来いよ…無駄口叩いてんならこつちからやんど？」
「ふん！」

「(小牧流奥義……受け流し!)」

物凄いスピードで振り下ろされた斧を受け流しながら背中を肘で腹を膝で殴る小牧流最大の奥義。

「さて、今度はこつちの番だよなっ！オラア!!!」

マシンガンスタイルに変化し自信が出来る最大のラッシュを叩き込む。

「グツ！調子に乗るなあ!!!」

「ウツ!!」

「死ねえ!!」

気を痛みにとられた瞬間に斧が首めがけて振られる。

「(死っ!!つぎけんな!!!)」

ドンツ!!

自分の太ももを全力で殴り、痛みでしやがんで何とか回避する。

そのままロケットの要領で頭突きを繰り返す。

痛みで一也が斧を手放す。

「おー痛で、危ねえのはこの斧だよな。フンっ!」

額を擦りながら、両方の斧をコンクリートで全力で叩きつけ斧を折る。

「さて…真剣勝負と行こうか?」

「良くもやってくれたな……」

「うっせえ!先にやべえの出したのそっちだろうが!」

「今日はここまでだ…」

「あん?勝手な事……パアアアン!!!」

キイイイン!!!

ツ!!」

物凄い至近距離で何も対策無しで閃光手榴弾を喰らってしまい周りが見えなくなる竜也。

「つくソが!!何処行きやがった!!」

ようやく目が慣れ、周りを見渡したがそこに一也の姿は無かった。

「……………家帰ろ…」

「何をどんな話し合いしたらあんなスーツボロボロになるのよ」
「返す言葉が見つかりません」

家に帰った竜也がした事はまず心愛への謝罪から始まった。

「折角高いスーツ買ったのに…」

「悪いとは思ってる。でもしやあ「無くないよ」……………つす」

心愛の庄により全く反論出来ない竜也。

「ねえ」

「ん？」

「わざわざ今回着いていく必要あったの？」

「どうして？」

「だって桐生さんが近江連合の本部に話し合いに行くだけだったんでしょ。まあ結果そうじゃなくなったけど。」

「わざわざ竜也君が怪我するなら私は行かないで欲しい」

「そうだな……………確かに俺が行く必要無かったかもな」

ちよつと笑いながら上を見上げる竜也。

「でもさあ、俺はどんなに自分が傷つこうがどんだけ絶望したとしても俺自身が後悔したくねえんだ。」

「あの人の周りにいれば少なくとも俺は後悔しねえからな。それで死んでも後悔0ってわけ」

「そうだったんだ……」

「そつ！だから俺も今回の騒動に首突っ込む事にしたから！また多分すぐに大阪行く事になると思うけど……」

「別にいいよ。大体竜也君がそこまで思ってるのに止めるなんておかしいもん」

「悪いな。あ、そだ！もしあれだったらさ！今遥ちゃんヒマワリに戻ってるんだけど……良かったら心愛もそっち行って手伝いとか……どうかなあつて……」

「うん！良いかも!!私も明日ヒマワリに行くね」

「！そつか！園長には俺から言つとくからよろしくな」

――――
シャワーを浴び、リビングでくつろぐ竜也。

プルルル！

「はい、黒瀬です」

『竜也か、桐生だ』

「東城会での報告終わったんですか？」

『ああ。それで今から「賽の河原」へ来れるか？』

『『賽の河原』ですか？行けますけど……』

『詳しい事情はそっちで話す。入口前の公園で待っていてくれ』

「分かりました。失礼します」

「桐生さんから？」

「ああ、神室町行ってくる」

「分かった。行ってらっしゃい」

「行ってくる…あ、一個聞いていい？」

「何？」

「自分の限界って勝手にきめるもん？」

「何その質問？意味わかんないけど」

心愛が呆れながら聞き返す。

「いいから。心愛自身の結果で別にいいし」

「…………私含め大体の人は決めちゃうんじゃない？仮に頭の中で『まだこれからだ！』って思っても本能が『無理』ってなったら限界の線引きだろうし。でも…………」

「でも？」

「私的には桐生さんとか、竜也君みたいな人は頭の中がどんなに折れてても、きつと本能が“負け”を認めない人達だろうから、そういう人達は限界なんて関係ないんじゃない？」

「…………そっか……ありがとな！行ってくる!!」

「(そうだよな…俺いつの間にか全部にビビってたんだ。 亜門^{あん時}も、錦山^{あん時}も全部桐生さんや真島さんがやってくれるから…俺は最低限でいいとか…………バカかよ…………)」

「(そもでもって1回ボロクソに負けただけで簡単に限界貼ろうとしてんだからよ…………)」

「(負けが怖くて喧嘩が出来るかよっ!!)」

—————

「(寒いな…………それなりに厚着したけど…まあ冬だからしやあねえか)」

「すまない。待たせたな」

ベンチに寒がりながら座る竜也に話しかける桐生。

「あ、大丈夫ツスよ。俺も数分前に着いたとこなんで。薫さんも来たんすね」

「ええ。この人の身边保護をしている以上勝手な事をしないか見ているの」

「なるほど…………」

「もう良いだろう。早く河原に入ろう」

そう言っ普通に男子トイレにむかう桐生と竜也。

「ちよつとここ男子トイレ！」

「黙って着いてこい」

「ホントにここなの？」

「俺も初めは信じられなかった」

ガチャ

河原への入口を開け、桐生達の目に入ったのは昔のような公園ではなく、ただの工事現場だった。

「へー、だいぶ変わりましたね」

「ああ、1年前と今じゃえらい違いだ」

「前はどんな感じだったの？」

「ホームレスのたまり場ですよ」

ガガガガ!!

至る所から工事の音が聞こえてくる。

「何かの工事をしているようね」

「ああ。竜也は何か知ってるか？」

「いや、俺も河原は出入りしなかったんで全然わからないです」

「久しぶりですネ。桐生さん、黒瀬。」

「ボスは地下の1番奥でお待ちしてます。……どうぞ」

ゲイリーに案内されるまま地下鉄への入口を降りていく三人。
地下に降りた薫の目が開く。

その景色は上とは正反対の騒がしい景色だった。

「地下にこんな街があるなんて…」

「このボスの変な趣味ですよ」

「驚くのはまだ早い」

奥の屋敷へと足を踏み入れる三人。

「桐生だ！誰かいるのか？いるのは分かっているんだ…出てきてくれ」

そう言つて真島のドスを下に落とす桐生。

「!?そのドスって!」

「ヒツヒツヒ待ってたで…桐生チャン、黒チャン。」

「桐生チャンが堅気になってしもうてこの1年、メツチャ淋しかったわ〜。」

「せやけど桐生チャンなら絶対この街に帰ってくると思つとつたでエ。」

「もちろん、黒チャンも久しぶりやなア。あん時以来やな」

高い笑い声をあげながら桐生の因縁の相手、真島吾朗が現れた。

「何?この人」

「元東城会島野組の若頭…俺の兄貴分だった人だ。1年前の事件にも絡んでる。」

「久しぶりですね。真島の兄さん」

「なんや桐生チャン。もう女作つたんかいこのスケコマシが」

「誤解すんな」

「なんや?じゃあ黒チャンの女つちゆうんか?」

「久しぶりですがそれも違いますよ。真島さん」

「府警第4課主任、狭山薫です…よろしく」

「府警?4課?...姉ちゃんデカなんか?。」

「桐生チャン、どないなつとんねん?」

「それより、どうしてアンタここに居るんだ？」

「ここの前の親分が居なくなつたからや」

「花屋が消えたんですか？」

「花屋…？」

「ここが出来てからずっと伝説の情報屋として健在してた奴の名前で
す」

「せや…通称 “サイの花屋” 元警官のオツサンや。なんや情報渡す時
に花束使うてたらそないな名前なつたらしいわ」

「花屋はどうしてるんだ？」

「今は表の人間や」

「表？」

「なんや警察の下請けで、神室町のモニター映像から情報提供しとる
らしいわ。」

「ま、ある意味花屋にとっちゃ元のサヤに戻つたつてだけのことなん
やがな」

「つまり警察関係者になつたつて事か？」

「そうや…それで河原が機能しなくなつたんや。」

「そこで俺は真島建設を立ち上げて神室町ヒルズの建設事業を請け
負つた」

「神室町ヒルズ？」

「上に建つとつたやろが。バカでつかいビルの鉄骨が…あれが神
室町ヒルズや。」

「ま、俺のほんまの狙いはそれに乗じてこの地下街丸ごと乗っ取る事
やったがなあ」

「アンタも意外と頭が回るんだな」

「せやろ…で、なんの用や？」

「東城会に戻つてくれ」

「かしこまつて…何アホな事言うてんねん!？」

「桐生チャンに冗談は似合わんで」

「本気だ…今の東城会にはアンタが必要なんだ。戻つてくれ」
「お断りや」

「頼む……兄さん……」

「やめろや桐生チャン！俺は桐生チャンのそないな姿見とうないんや」

「東城会を救うには真島組の力が必要なんだ……頼む！」

「……しゃあないなあ……それなら1つ条件や」

「何だ……？」

「桐生チャンにしか出来へん仕事や」

「まさか……」

「せや、トーナメントや。どや？引き受けるか？」

「それ、俺がやってもいいですか？」

「あん？」

途中から黙って話を聞いていた竜也が口を開く。

「竜也!?!」

「トーナメントなら俺も何回もやってますし……真島さんを退屈させる事ないと思いますけど……」

「……黒チャンなら別にええで」

「ありがとうございます。それで良かったらなんですが1つ願い聞いてくれませんか？」

「何や？」

「トーナメントは3回勝ち残ったら勝ち……」

3回戦目俺はアンタに出て欲しいです」

竜也の言葉を聞き終えた真島がうつすらと笑う

32話

トーナメント

「正気か！竜也！」

竜也の意見を聞いた桐生が焦りながら聞き返す。

「本気じゃなかったらこんな事言わないですよ」

「ええんやな。それで負けたら俺は東城会戻らんで」

「俺が勝ったらいいんですよ」

「ええで……それに元々俺が今のチャンピオンやし、あんま変わらんからな」

「(そりやそうだよな……この人がおもちゃ見つけて遊ばねえ訳もねえし……)」

「んじゃ先行ってます。……ああそうだ。真島さん……」

「ん？何や？」

「……すぐ行くから待ってろよ。それじゃ」

真島に殺気を送りながら挑発をして部屋の外に出ていく竜也。
桐生も竜也の後に続くように真島に頭を下げて出ていく。

「あなた達ちよつと待ちなさいよ！」

詳しい事情を知らない狭山が声を荒らげながらも後に続く。

くく真島視点くく

「(ほお……なんやえらいやる気みたいやな……)」

「オモロそうやんけ……」

そうして真島はドスを抜きながら甲高い笑い声を部屋に響かせた。

くく黒瀬視点くく

「(ふう……あそこまで真島さんに喧嘩売っちゃった以上もう引けねえな。まあ引く気なんかさらさら無いけど)」

試合開始までの時間の間にテーピングを巻きながら色々と考え事をする竜也。

ガチャ

「狭山は先にセレナに向かわせた……竜也、俺が言いたいことは分かるな……?」

「……なんとなくは」

ドアを開けて竜也に問いかける桐生に背を向けながら答える竜也。

「……勝てる気なのか?あの人に」

「先にこれだけは言っときます……もし負けたらすいません」

話す前に振り返り、頭を下げる。

「あの人東城会戻すには勝つしかないのはわかってるんですけど……正直言って勝てるイメージはないです」

包み隠さず自身の本音を伝える。

「もし、今の話聞いて桐生さんが出るって言うならそれもそれでそれなりに対応しなきゃツスけど……。」

「でもだからってすぐ桐生さんにあげたら俺が変われねえんすわ。」

「俺がやりたいようにやる。そんならいじやなきやアイツに挑むなんて啖呵きれないっすから」

「(もちろん1番挑みてえ人にも……)」

「……俺が勝手にお前を連れて来て、その上でたまたま兄さんと接触する機会が出来ただけだ。この事が竜也にとつてのメリットだとしても俺には全く関係ない」

竜也の話聞き終えた桐生が話します。

「ツーでもっ!」……悪いが今回はお前に譲るつもりは無い。さて、俺にも準備があるから行かせてもらおうぞ。

……久しぶりだからな…『ゆつくり』準備するか」

部屋を出ていく桐生。

「(不器用だなあ……あの人も……
……さて、行くか」

「レディース&ジェントルメーン!!」

また!あの“竜”がここに戻ってきた!戻ってきた最速の竜はいかなる闘いを我々に見せてくれるのか!?黒瀬く竜也く!!」

ナレーションを聞きながらステージへ向かう。

既にステージには対戦相手であろう男が待っていた。

「対するは、このトーナメントで今1番旬な男!

勢いに乗るブラジルの超新星!!ロブソン・カエタノ・ダ・シウバく
!!」

「さあ、戦いの女神はどちらに微笑むのでしょうか!?今、ゴングです
!!」

「(普通に斧持ってんじゃねえーか……別に関係ねえけどさ)」

シウバは斧を肩に置きながらニヤついている。
対して特に構えも何もしない竜也。

「ブラジルつつたか? ご苦労なこつたな……俺の踏み台になるためにきてもらって」

ドスツ!

話終えると同時に懐に入り込みブローを入れる竜也。
瞬間的に蹲るシウバ。

「ん? 入りすぎたか? 悪いな」

横に立ち話しかける竜也。

ブンっ!!

キレたシウバが立ち上がり豪快に斧を振り下ろす。

しかし平然とした態度で斧の柄を掴む竜也。
それがおかしいのか一気に狼狽える。

「バカが……そんなモン使うなら亜門^ア一也^{イチ}レベルになってからもつかい
来てみる」

飛び跳ね顔を蹴飛ばし終わらせる。

「終わりだろ?」

「流石、黒瀬竜也!! 竜^{リウ}の前では超新星ですら有象無象!

「(ん？桐生さんと真島さん一緒の所で見てんじゃん)」

右から拍手の音が聞こえてみると真島が拍手をし、隣で桐生が静かに見ていた。

「さあ……………次の対戦相手はこちらも帰ってきた伝説の男です！」

「1年前までこのリングに君臨した絶対王者！ゲイリー・バスター・ホームズ!!」

「奇遇ですね、黒瀬。即死と安楽死……………好みは？」

「それは見る方であって意味だよな？てめえに合うのは安楽だろ」

「竜 VS 伝説の元王者！」

注目の一戦……………今、ゴングです!!」

ゴングのなる瞬間にきたストレートを避ける竜也、それを読んでいたように左足で綱まで蹴るゲイリー。

飛ばしたことを確認すると、針が付いたグローブをはめるゲイリー。

「(こいつもかよ……………まあいいや。そうすつと、とりあえずヤバいのは……………ツ!)」

ゆっくり考える時間もさせないようにグローブで殴り続けるゲイリー。それを全て数cm単位で避けていく。

ガシャ!

勿論ただ避けるだけではいずれ檻の端に着く。

「(っクソ!……………一か八か!!)」

ブンっ！パキッ

風を切る程の音がする拳を避け、同時に下から関節を押し上げる。肘を腕で支えるゲイリーの頭を掴み膝蹴りを繰り出す。

「どんなもんよ？咄嗟にしちや結構効くだろ？」

「……………」

「無視かい。別に構いやしねえけどよ……………さっきのバカがシウバそんなに大したこと無かったからよ。お前はもつとマシだろ？」

青色のヒートを纏いながら第1試合、そしてさっきまで構えることをしなかった竜也が初めて構え出す。

「行くぜ…」

竜也が動く前に先手必勝と言わんばかりに殴り掛かるゲイリーだがしやがんで回避しながら猫騙しをする。

「ちよつと前に本場もん喰らったかな。イメージしやすかったわ。今のでめえが聞こえてるかどうかは知らねえけどな」

至近距離でかなりの爆音を聞いたゲイリーは耳を抑えながらこちらを睨みつけている。

「辞めるなら今のうちだぜ……………ってよくよく考えりや聞こえてるはずねえか」

戦車スタイルに変化させ竜也より少しデカイゲイリーの頭を叩き付ける。

「ついでに言うと安楽でもなかったな」

「伝説の元王者も進化した竜には勝てず!! またもや異例の速度で2人目をもねじ伏せる! 最速の名は伊達じゃない!!」

「(さて……ウオーミングアップにしちやまだあめえけど……とりあえず十分だろ)」

「さあ! 間もなく決勝戦……そろそろ『あの男』がやってくるはずですよ。」

「現 地下闘技場チャンピオン! 真島く吾郎!!」

真島らしい独特のパフォーマンスを繰り広げながらゆっくりとこちらに近づく真島。

「半年前、突如このリングに現れた『嶋野の狂犬』は今も尚、負けを知らず! 圧倒的なパフォーマンス! 圧倒的な強さ! 彼を倒す事が出来るのは果たして黒瀬なのでしょうか!」

「流石やなあ黒チャン! ゆっくり見てよう思ったらそんな時間無かったわ!」

「いや、すぐ行くって言ったじゃないですか」

「ケヒツ、あん時亜門戦より更にゴツなってるのも分かるで…」

軽く語り掛ける真島に対して警戒心をあげてどんな時にも対応できるようにする竜也。

「でもアカンわ。自分」

「は?」

「俺がやりたいのは今の黒チャンじゃないねん。俺と殺りあつた時に出てきた『あの』黒チャンとやりたいねん」

「何言ってるのか全くわかんない事言うのやめてもって良いですか?」

真島の真意が分からず困惑する竜也。

「強さがあるのは知っとる。でもまだあの時とちゃうねん。」
「あん時の黒チャンやったらもつと楽しくやれる筈やねん」

うすら笑みを浮かべながら淡々と言葉を繋げる真島。

「俺はあんた程、腹読むの得意じゃないんですよ。まあいいや……それ以上言いたい事あるんだったら……」
「せやな」

全く構える事無かった真島が殺気を纏わせながらドスを抜く。

「今ゴングです！」

「あんま簡単に死ぬんやないで……黒チャン!!!」

33話

修羅

「ツシヤアー！」

ゴングの音がなると同時に、ドスを起点とした絶え間ない攻撃を出し続ける真島とそれを捌き続ける竜也。

「！甘えよ！」

「どっちがや!!」

下からのアッパー気味の拳をクロスして受け止めるが、そのクロスした腕と拳を起点として体を浮上させて蹴り下ろしを繰り返す真島。

この衝撃で後退した事により距離が空いた。

「(つぶな…… 逃がせなかつたら”結構いつてな今の)”

周りからは直撃したように見える真島の攻撃だが実際にはこれを喰らう事によって起きる衝撃を使いながら”いなす”様にして回避する竜也

「……相変わらず俺の速さにちゃんと着いてこれるんのは黒ちゃんだけやな。」

「桐生ちゃんとかは読みや直感込みや。黒ちゃんの反応だけは感心するでホント」

「そりや…どうもっ!!」

真島の言葉を聞き流すようにし、感謝を述べながらも攻守を交代するように今度は竜也が攻める。

スピードのみだと分が悪いと感じ、ハンドガンへとスタイルを切り替え改めて向かい合ってゆく。

切り替えた瞬間こそ反撃が起こり、攻撃が何回も掠めたが段々と慣れてきたのか避けるのと同時に竜也も少しずつ攻撃を絡めていく。

「でもってそれがアカンねん。黒ちゃん」

竜也の拳を這うように躲すと一気に竜也の背に寄りかかる。

そのままドスの柄で背中を突きまた距離が離れる。

「初めて殺りあった時の事覚えとるか？」

「は？いきなりなんすか？」

「ただの質問や……あん時から随分ゴツイ思ってたけど今はもつと

ゴツくなつたのう…。」

唐突に1年前の事を語り出す真島。

「(マジでいきなり過ぎだろ…んでもって隙だらけに見えて全然隙なんてねえし)」

「でもあん時の殺気はこんなモンちゃうかつたで」

「ホントに訳わかんないすよ…喋る余り」あん時の黒ちゃんは桐生ちゃんに近付くもんがあった。」

「あんだだけ啖呵切つた今の黒ちゃんがこんなモンな訳ないやろ」

一時収まっていた真島の殺気がまた溢れ出す。

その殺気に当てられた皆が真島から隠れようとする。 // 2人を除いて=

「…前の俺にあつて今の俺にないもんがあるって事すか？」

「せや」

「教えてくださいつつて教えてくれるタチじゃ無いですよね」

「分かつてるやないか」

「じゃあ無理矢理聞きます」

右フックを繰り出しそれを止められる。そこまで分かっているかのように右脚を真島の顎に全力で蹴り上げる。

しかし右腕を掴んだままの真島は竜也を引き込み右に握つたままのドスを突き刺す。

それを空いている左手で止めお互い両腕が塞がったことで一瞬の膠着が生まれる。

「(やつぱこの人尋常じゃねえ!)」

竜也の思考のうちに自身がしゃがみこむように身体を捻らせた反動で竜也を浮かせ、そのまま蹴りを入れる真島。

「ガハッ!」

金網に強く叩き付けられた竜也は肺から空気が漏れ出す。

「…流石やな黒ちゃんこの短期間でさっきよりマシになつたで」

「……………褒め言葉どーも…でも、さっきよりって事はまだ違うって事すよね」

「ああ、まだ足りんで。」

「あん時とはまだまだや」

「何が違うってんだよ……こちとらあの時なんか死にかけた思い出しかねえよ」

真島の意図が未だに分からず困惑する竜也。

「！考える暇くらいくれっての！」

止まった竜也をそのまま放置せず攻撃をしてくる真島

竜也の呼び掛けには応えずそのまま攻撃を続ける。

「（ツチ！考えるのは一旦後だ！）」

拳を滑らせ横に立ちそのまま脇腹を蹴りまた距離を取ろうとするが、蹴る寸前に裏拳が飛んできたことにより後ろに仰け反ってしまつた為になんかダメージを与えられない。

「（あん時：真島さんに呼ばれて……最初は確かに遊ばれてるだけだった……途中で桐生さんが入ってきて……）」

ドゴオ！

竜也が考えてる間にも真島は止まらずアッパーからの脇腹にドスを刺し、刺したまま反対方向へと蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされ金網にぶつかつたまま動かない竜也

「……何や黒ちゃんもう終わりかいな」

「……そうゆうことかよ」

「？何ゆーてるか聞こえんで」

「ようやくアンタの言つてた事が分かつたつってんすよ」

その一言を皮切りに竜也の雰囲気が変わる。

それを感じた真島は動きを止める。

「（桐生さんが割り込もうとした時俺は何を考えた……？ “邪魔” 間違はなく俺は桐生さんにそう感じた。）」

「（だからもし今の俺や亜門ん時んで違うモノがあるとするとするなら……）」
座り込んだままの竜也がハンドガンスタイルの青いヒートを纏いながらようやく立ち上がる。

「どんな奴でも喰う覚悟」

「ソレやねん、黒ちゃん。ワシが求めてたんはその目やア……!!」

くく桐生視点くく

「(変わった……さつきまでの竜也とは明らかに違う)」

観客席に座る桐生も竜也の変化に気付く。

「(兄さんの言ってた通りになったな)」

まだ竜也がゲイリー戦を迎える前の事を思い出す。

「なア桐生ちゃん、桐生ちゃんから見ると今の黒ちゃんはどや?」

「今の竜也だど?それはもちろん強いと思うが」

「それには俺も同意や。けどな、黒ちゃんはもつと強い筈やねん」

「どうゆう事だ?」

「言葉通りの意味や。黒ちゃんにはまだ先があるはずや。」

「それこそあのホテルで殺りおうた時の黒ちゃんとかな」

「あの時の竜也か……」

「今の黒ちゃんは殻を少し破った程度。そんなんじやワシは満足出来ん。」

「せやから次の試合で殻を本格的に破らせたるわ」

「もし破れなかったら?」

「お前やったら言わんでも分かるやろ」

先程までの少しふざけ交じりではなく本気の声色になる真島。

「(変われなかったら竜也が死ぬか……)」

「(あの梅澤という男は近江の中でもトップクラスの人間だろう……なら俺に出来ることは……)」

「兄さんに任せる。俺は竜也を信じる事にする」

「ヒツヒツヒツ決まりやな」

「(まさかここまでとは思わなかったが)」

脇腹に刺さったままになっているドスを抜き、真島に向かって全力で投げ、自分自身も向かっていく竜也。身体全体を使い回避し勢いが全く衰えてないドスを掴んでそのまま攻撃を開始しようとする真島。

先に拳が当たった竜也がそのまま振り抜く。金網に全力でぶつかって倒れ込む。

真島が先程、竜也を使う事で行った身体を浮かせる技を、拳を振り切った反動で行いかかと落としを入れる。横に転がることで回避する真島。空を蹴った蹴りは反動でコロシム全体にヒビが入る。

「相手が兄さんじゃなかったらもう今の攻防でケリがついていたな。」

「(さて、またあの人と本気でやり合う訳だが：勝てるか？竜也)」

くく竜也視点くく

「ええで…ええやないか黒ちゃん！」

「…ホント…つくづくアンタってタフだなって思いますよ」

「(亜門や安堂と殺った時ほどじゃねえけど身体自体はボロボロなのは間違いねえんだけど…：頭がいつも以上に冴えてるのが分かる。)

」

「何止まっとなるんや？」

ヒュッ！ガッ！ドゴッ！

竜也の考える瞬間にも真島は止まらず竜也に向かって突撃していく。

ドスを空中に放し空いた四肢をフル稼働させ、肉弾戦を開始する。

右腕、左脚、回転しながら右脚掠めるだけに留まらず直撃する。

最後のストレートを喰らうが吹っ飛ばされず下半身だけで耐える

竜也。

そのまま真島にハグするかのように寄りかかる要領で頭を掴み、膝蹴りを顔に入れる。

少し浮いた身体をライフルスタイルの怪力でベアハッグを繰り返す。ミシミシという音が鈍い音がなり続ける。

ドゴッ！ガスッ！！

技を止め、砲丸投げの要領で金網まで投げ飛ばす。

「……これはどうよ…もう常人なら無理だろ」

「………なんで途中で技止めたんや…あのままやっとならばワシの身体壊して終了やろうが」

「俺は別にアンタを壊してえ訳じゃないですし、ただ勝てればそれで充分。」

「桐生さんが言ってた以上、アンタは東城会に必要なんだ。だから認めてもらおう為にきちんと倒す」

「……やっぱり甘いのう……まだまだワシはいけるで……」

「(やっぱ無理か……ツチ……！俺の方も身体が重くなってきてる……でも真島さんの動きもさつき迄とは全然違う！押すなら今だ!!」

真島の疲弊を感じてる竜也が素早くマシンガンスタイルに変わり、真島のラッシュよりも遥かに速いラッシュを頭、みぞおち、もも、頭と至る箇所叩き込む。

「グッ！ゴフツ!!」

「(勝機!!)」

吐血しながら膝をついた所を見逃さずアツパーからのミドルによりまた金網に当たるが反動で戻ってくる所に回転によつて威力を上げたストレートを鼻頭に叩き込む。

ガシャアン!!

今までとは違い身体を仰け反らせながら吹っ飛んでいく真島。

「やっぱ……ちやうのう……黒ちゃんは……」

「決まりつすね……東城会に戻ってもらいます」

「まあ……桐生ちゃん交えてゆっくり話そうや」

ボロボロになった真島がゆっくりと立ち上がりながらリングを降りて行く。

それを見て後から進んでいく竜也。桐生も確認を終えて会場から出ていく。

しかしこの時3人とも気づいていなかった。竜也のヒートの節々に“淡い白金色”が煌めいていることに

36話

過去と2人目

場所を奥へと変えた3人は集まって話していた。

「いやあホントに良かったでえ黒ちゃん。また殺ろな！」

「……………まあお眼鏡にかなったのなら良かったですよ……」

「（こりやそのうちもつかいだな……………とゆうか勝ったの俺だよ……………？あの人のがピンピンしてんのおかしいだろ……………）」

「兄さん……」

「分かつとるわ……約束やからな。……東城会に戻ればええんか？」

「いや……………無理に戻らなくてもいいんだ……」

「はあ？何やさつきと話がちやうやんか」

「アンタが東城会に収まる器じやないのは知ってる。今は組に戻るよりも組を助けてやって欲しいんだ」

「つまり……手助けせえっちゆう事か……………ま、ええやろ。黒ちゃんには思う存分楽しませてもらった事やし何より桐生ちゃんの頼みやからな。」

「せやけど、そないに東城会はピンチなんか」

「実は、新藤率いる錦山組が抜けるかもしれないんだ……………」

「なるほど……………半減やろな」

「……………半減？そこまで錦山組は力あるんですか？」

「今1番力持つてるのは錦山組や」

「ああその上、郷龍会が何時攻めてきてもおかしくない状況だ」

「そうか……………しかしまあ、スツキリせんなあ」

「何がですか？」

「俺は、何か作為的なモンを感じるんや」

「どうゆう事だ？」

「寺田は近江連合に殺されたんやったな？」

「ああ……………俺ら目の前で襲われた」

「それがまずおかしいねん」

「何故です？」

「寺田が東城会の五代目になってから、近江とはそないに敵対したら

んかったからや」

「本当か？」

「仮に襲ったのが『郷龍会』ならやりかねんが…それでも殺される程にはならんやろな」

「それじゃあ、寺田はどうして…」

「今の東城会がどうかは知らんが…俺は寺田の事は好かんかった」
「どうしてだ？」

「平和、和睦、共存、理想ばかりや…結局東城会はその辺の組織からも舐められるようになってしまった。」

「結果的とはいえアイツは東城会を混乱させた…」

　　〳〳桐生視点〳〳

「アンタは寺田を信用していなかったのか？」

「せや…周りで言うほど立派な極道ではなかったわ。それにそれは黒ちゃんも知つとるはずや。なあ黒ちゃん？」

「……………」

「（無言か…なるほどな…だからあの時寺田に会った竜也は不機嫌になったという訳か…）」

「奴は自分の言う事に従う『イエスマン』しか置いとらんかった。」

「俺や柏木さんのオッサンなんか真っ先に除け者や」

「柏木さんも？」

「せや…若頭代行なんて付いとるが実際はただの飾り。」

「いつくらミレニアムタワーにデカイ事務所作っても寺田の命令無しじゃなーんも出来ん」

「だから離れたってことですか？」

「よく分かつとるやないか。黒ちゃん」

「寺田がそんな男だったとは…」

「（結局…俺には何も見えていなかったという事か…）」

「他人の腹までは探れんちゆう訳や。」

「桐生ちゃん…人信じるんはええけど、気いつけなアカンで……………」

水槽の中にいた小さい金魚を大きい深海魚が、飲み込む

　　〳〳竜也視点〳〳

真島との話を終えた2人はまた情報を整理するため、薫と合流するためセレナへと戻った。

カウンター席に灰皿とライターだけを置いて座る桐生

その1つ席を空けて銃の手入れをする薫

カウンターへは座らずテーブルにあるソファに1人ゆったりと腰掛けながらいつの間にかけていたのか、野球ボールを上に向けて取るを繰り返してる竜也。三者の間には会話は無く、ボールの投げる音と取る音のみが店内に響いていた。

「12時を過ぎたわよ」

薫のその言葉を合図に腕時計や店の時計を見る2人

「堂島大吾が1時にあなたを迎えを待ってるんじゃないの？」

動かず少し急ぎめに煙草に火をつける桐生

「何のんびりしてるの？行かなくていいの？」

「なあ…お前は怖くないのか？」

「何が？」

「隠された自分の過去を調べる事だ」

「どうしてそんな事を聞くの？」

「実はな…俺の両親は東城会に殺された…」

「え……？」

桐生の告白に驚きを隠せない薫

「知ったのは1年前だ…両親を手にかけてしたのは俺をこの道に導いてくれた…風間新太郎という親っさんだった」

「それがさつき言ってたあなたの過去なのね」

「俺は風間の親っさんを本当の親と思って育ってきたから、許すことが出来た。」

「アンタはどうだ…？」

桐生の問い掛けに言葉を詰まらせる薫

「私だったら…両親を殺した人間を知ったらそれが例え誰であっても許すことは出来ないと思う。」

「正直怖いわ。過去を知るのって……でもそれが私の選んだ道」

「………なら俺達を利用すればいい。俺達に張り付いて東城会を探

れ」

「まあそれが一番速いでしょうね。俺はともかく桐生さんは東城会に何度か接触するでしょうし」

「ちよ…ちよつと待ちなさいよ。あなた、東城会の人間だったんじゃないの？そんな事言ってるいいいの？」

「俺は極道だった自分を誇りになんか思っちゃいない」

「もし…あなたが関係してたら…:…:…:」

「したら…迷わず俺に向かって引き金を引けばいい」

煙草の煙をゆつくりと吐きながら答える桐生。

「アンタはその相手を許すつもりは無いんだろ？」

「そうね…そうするわ」

顔を上げた薫は急ぎ足で立ち上がり外へ向かう。

「何処へ行くんだ？」

「仕事よ」

「仕事…:…:？」

「決まってるじゃない…:あなたの身辺保護よ」

そう言い放ちまた外へ出る。

「だ、そうだ。もし俺が関わってたら後は頼んだぞ」

「桐生さんが関わってる訳無いって思ってますけど、仮に『もしも』が起きたらそんな次第って事で」

「フツ…:それで良い。俺らも行くか」

「リョーカイです」

「遅いわよ。それで『天野ビル』っていうのは何処にあるのかしら」

「俺は分からないが竜也は知ってるか？」

「申し訳無いですが俺も知らないですわ」

「そうか…:なら田村に聞きに行くのが一番だな」

「彼、いつも劇場前にいるって言ってたわね」

「なら、早速向かいましょうか」

「あ、桐生さん!!それに竜也くんまで!」

「ユウヤか。久しぶりだな」

「お久しぶりです」

セレナの裏口から表の通りに出ると、スターダストのユウヤが店の前に立っていた。

「ええ、こちらこそ！クソっ、でもこんな時に会うなんて」

「どうかしたんですか？」

「ええ、ちよつとオーナーが…」

「一輝に何かあったのか!？」

「いや、それがワケ分かんないですよ。」

「1年ぶりに伊達さんが店に顔出してくれたんですが……そしたらオーナーが店から出て行って…」

「伊達さんが急に来るってのも変な話ですね…」

「俺も何があったのか分かりませんが、伊達さんは警察の方と一緒にした」

「それで今伊達さんは？」

「走って店を出て行きました。多分オーナーを追い掛けて出ていったと思います」

「様子としてはかなりおかしいですね」

「気になるのは分かるけど、今は天野ビルに行くのが先決なんじゃない?。」

「……そうだな。ユウヤ、また時間ができたらゆっくり話をしよう。」

「何か分かったらまた連絡くれ」

「はい、分かりました!」

ユウヤと別れた3人は無事劇場前通りにて田村の仲間という森田から天野ビルの居場所を聞き、児童公園の前にある天野ビルへと辿り着いた。

「天野ビルはここのようだが……」

「鍵掛かってますね」

「オイ!オマエここのビルに居るヤツらの仲間だな!」

「あ?んだよ急に」

「しらばっくれんな!やっちまえ!」

1歩前に出ていたリーダー格の男が後ろの2人に声を掛ける。
バットを持った男が頭目掛けてフルスイングしてくる。

「はあ……こんなんばっか。遅えんだよ」

バットの到着地点から数m移動して左手で地面へ叩き付け右肩を無理矢理外す。

外された痛みでのたうち回る。

「はい、終わり。2人も……もう終わるな」

桐生の方はもう終わっており相手は既に気絶している。

薫の方ももう相手の動きは鈍くなっていた。

「(流石府警四課のエース。体術もバツチリだな……柔道や空手とかもやってんのかな? まあエースなのはしらねえけど)」

「さて、何がなんだかキツチリ分かるように話してもらおうか」
のたうち回っていた男の髪を掴み竜也が話を聞き出す。

「このビル……天野ビルはオレらのアジトだったんだ……そしたら変な言葉喋り出すヤツらが現れ始めて……」

「ふーん、じゃあ鍵は?」

「ここには無い……リーダーなら……合鍵を……持ってる……」

「何処にいる?」

「薬局の……裏です……」

「はいよ、じゃあ寝て良いぜ」

顎を殴り脳を揺らして気絶させる。

「つていう事なんで早速薬局行きましょうか」

「そうね。急ぎましょう」

素早く薬局の裏に来た3人はゲーム機を触ってる緑のフード付きパーカーを深々と被った男に話し掛ける。

「なんだあ?今ラスボスん所なんだ、邪魔しないでくれ!」

「お前『16ビット』のリーダーを知らないか?この辺に居るはずなんだが」

「しまった!クソ、コンテニューだ!」

「ちよつと！聞いてるの！このクソガキ！ゲームばっかしてたら頭悪くなるわよー！」

「ああん!?聞こえてるよ！邪魔すんなよな！」

「天野ビルの鍵をくれないか？」

「……ああ？楽しくゲームしてんだから話し掛けんなって言うてんだろ」

『話し掛けんな』じゃなくて『邪魔すんな』な?』

「……もしもし、兄貴?なんか今めんどくせえヤツら来ててさ……」

パーカーを被った男はゲームを触るのを止め兄貴と呼ばれる男に電話を掛ける。

「あつー来た!!兄貴!こつちこつち!!」

電話を掛けた数分後にダウンジャケットを着た太った男がゆつくりとやってきた。

「俺と桐生さんでやるんで薫さんは見といてもらって良いですよ」

「え?ちよつと!?!」

竜也が話終わると同時に無野兄弟が向かってくるが、桐生は兄貴の方に「虎落とし」、竜也は相手の腕を手刀で骨を砕き空いてる腹を蹴り飛ばす。

たった一瞬の出来事で薫や無野兄弟はもちろん、集まってきた「16ビット」らしきメンバーも固まっていた。

「ん?やはりグループらしく結構な数いるな」

「別に俺らは全然やってやっても良いけど……悪いけど今急いでるかこれ以上は手加減出来ねえぞ?」

フードの男を持ち上げながらメンバー全体を脅す竜也。

ポケットから鍵を取り出す。

「ま、やっぱりパーカーのポケットに入れるわな。」

「さっさと行きましようか。堂島のヤツを早く助けに行かねえと」

「さて、2人で行きますか?」

「いや、呼ばれてるのは俺一人だ…罠の可能性もあるが変な事で2人

を傷付ける訳にはいかない」

「なるほど……分かりました。じゃあ狭山さんと一緒に待ってますよ」

「ああ。すぐに済ませてくる」

話し合いを終え竜也が桐生に天野ビルの鍵を渡し、桐生が中へと入っていく。

「(とは言っても……いきなりこの人と2人きりはキツイな……)」

桐生が居なくなった途端2人の空気が重くなる。

「貴方……」

「あ、はい」

「随分と腕が経つようだけど何かしてたの？」

「いや……俺はホントに独学すね……まあ人に教わった部分もありますけど基本は売られたもん買ってたらこうなっただけで感じですよ」

「そう……」

「(お、重え……)」

「後は……随分と信頼されてるのね。彼に。」

「彼言ってたわ……俺はアイツ程頼もしい奴と会ったことは無い。もし俺に何か会ったとしてもアイツならやってくれる』ってね」

「……そうですか。なら、俺は期待に応えるよう頑張るだけなんです。

あ、そだ喉乾いてないですか？飲み物買ってきますよ。」

「どうせ流石にそうすぐは戻ってこないと思うんで」

「そう？じゃあお願いしようかしら」

狭山を置いてMストアへと向かう竜也。

「(あの人に着いて行くので精一杯だったけど……まあそう言ってもらえてるなら少しは成長してるって事なのかなあ)」

自分、桐生、狭山計3人分の飲み物を取り先程言われたことを考えながらレジへと進む。

「ありがとーございましてー」

「(とりあえず3人のだけで良いよな…………)」

店を出て天野ビルに行こうとした瞬間殺気を感じその場から離れる竜也。

「それに気付くとは……師匠が言っただけはあるな」

「んだテメエ……つて言いたいとこだけどその姿見れば分かるわ。まーた亜門絡みか」

亜門や一也の様に黒のロングコートにサングラスを掛けた男が腕を組みながらこちらを睨んでいた。

「亜門三兄弟次男……『亜門二郎』」

「こちとら今忙しいんだよ。テメエらみてえなのと関わってる余裕はねえから……やるならさっさとやろうぜ……!!」

買った飲み物を地面に置きゆつたりと構える。

それに応じて二郎も構える。先程までザワついていたはずのホテル通りの道は人氣が全く無くなっていた。

バツティングセンターの奥で鳴ったヒツティング音を皮切りに竜也が攻め込む。

顔面に一発、そのまま右腕を持ち上げ空いた腹を全力で殴る。

「(!?……クソ!!)」

殴られ屈んだ二郎だったがその全てがフェイクで急に起き上がり空いてる左手で右目を狙う。辛うじて直撃は避けるが瞼が切られてしまい、瞼の上から出血する

それを見た二郎がニヤける。

「(落ち着け……別に潰れた訳じゃねえ……だけど暫くは見えねえな……しょうがねえ片目のハンデくらいくれてやるか……)」

その考えを嘲笑うかのように二郎は腰に手を回し短機関銃を取り出す。

「(!?……前言撤回……ソレは逆にこつちがハンデ貰いてえくらいだわ……!)」

すぐさま右側に回り込み短機関銃を発砲する二郎。ローリングで回避し近付こうとするが宙返りで距離を離す二郎。

「ハッ!逃げてそんなモン出さなきゃ勝てねえてか? 亜門三兄弟だかなんだか知らねえけど、とんだヘタレもいたもんだな!」

「挑発させて俺にコレを捨てさせるって魂胆が見え見えだぞ黒瀬。そんなものにはかかりはしない」

「…意外と冴えてんだな。それならそれでいいや！」

回避しながら手に入れていた石を顔向かって投げそれを回避される間に二郎の膝裏に竜也の膝裏をかけながら自身が倒れ込む事で膝カックンをかけながら短機関銃を持って腕を二郎自身の首に持つていきロックする様にしてエビ固めを固める。その腕を極める事で更に首を絞める。

「堕ちろ!!ゴラァー！」

「……!!」

声にならない苦悶を上げながら抵抗する二郎。しかし竜也は離さない。

その刹那、二郎が空いてる手で何かを投げる。

「(なん……)」

竜也の考える隙もなく数秒後近くにある吉野家のドアが爆発し、竜也も二郎自身も巻き込まれる。

「……そりゃ…持つてるよ…な…クソが……！」

二郎の投げた手榴弾が爆発したことにより全身吹き飛ばされ吐血しながらも起き上がろうとするがまた倒れ込む。

気合いで起き上がった時にはもう二郎の姿は居なかった。

「………どこいつもこいつも勝手すぎだろ…また服ボロボロなったし…目はまだ開けられんねえし…戻ろ」

既にここに用が無くなった為、壁に寄りかかりながらゆっくりと天野ビルへと向かう。

「黒瀬くん！今の爆発音って!!」

「あ…ちようど良かった…良かったら肩貸して欲しいです…」

「…!?大丈夫なの?」

「まあだいたい見た目通りって感じですよ」

爆発音に気づいた見た目通り狭山が竜也に肩を貸しながら現場から離れる。

「何があったの?」

「面倒なストーリーですよ。偶にいるでしょこっちがどんだけ離れる様に言っても聞かないメンヘラ彼女みたいなの?。」

「どんだけ辞めろ言っても辞めないから喧嘩する。そんな感じですよ」

よ」

「……言いたい事は分かったわ」

天野ビルの前のガードレールに寄りかかる様に下ろしてもらおう。その時上から二発の銃声がサイレンの中で重く響いた。

「今のは？」

「どう考えてもこの上からですね。行きましようか」

寄りかかったばかりだが直ぐに立ち上がろうとする竜也。しかし先程の二郎戦のせいで身体に上手く力が入らない。

「黒瀬くんはここに居なさい。今度は私が行ってくるわ」

「！俺もいきます！」

「ダメよ…貴方が強くて頼りになるのは知ってる。でも私も怪我人に同行してもらおう程弱くないわ」

そう言つてビルの中へ入ってしまう狭山。

「狭山さん！……まあ桐生さんもいるしあの人も強いし何とかなるか……」

そして数分後、また新たな銃声が一発鳴り響いた。

「（これは狭山さんかな？さっき二発つて事は間違いなく桐生さんともう1人居るな。桐生さんが撃つたとは考えにくいし……）」

「ま、考えても分かるもんじゃねえし待つか…もうすぐ終わるだろ」

そして銃声に呼応するかのようにサイレンが鳴る。

「銃声3発と少し離れた所で爆発。そりゃ通報もされるわな」

「竜也！」

「桐生さん！堂島のY「悪いが話は後だ！逃げるぞ！」」

桐生が一輝を抱えて、その次に狭山、伊達が伊達と同じくらいの年代の灰色のスーツを着た男性を抱えたビルからぞろぞろと出てくる。

皆、額に汗を滲ませながら急いでいる。

竜也も伊達の後を続く様に傷だらけの身体にムチを打ちながら走る。

37話

身代わり

「一刻も早く2人を診てもわないと……どこか診てくれる所は無いかな？」

「知り合いに医者がいる。とにかく担いで連れて行こう」

「警察が張り込んでるのよ。堂々とは出て行けないわ」

「そんな事気にしてる状況じゃない。事が収まるまで待っていたら2人が死んじゃうぞ！」

伊達が灰色スーツの男性を担ぎながら騒ぎ立てる。

「……桐生さんと伊達さんはその2人を連れてその医者の方へ。狭山さんは近付いてくる警察と合流して屋上来てください」

「竜也……？」

「ようは警察が2人の方まで網広げなきゃ良いんですね、俺が残って振り切ります。全部撒いたらこっちから桐生さんに連絡します」
身体を少し伸ばしながら早口で説明する。

「それは無茶だ！サイレンの音からしてかなりの数が来てるぞ！」

伊達の言う通りサイレンは何重にも聞こえてくる。

「……分かった。こっちは任せたぞ」

「桐生！」

「どうせここに至って状況が変わる訳じゃない。なら竜也に任せて俺らは早く向かうべきだ」

「だが……！」

「伊達さん時間が無いです！早く行ってください！」

「クソ！捕まったら承知しないぞ！」

竜也と桐生の力説によりスーツの男性を担ぎ直し天野ビルから離れていく伊達。それに続いて桐生も続く。

「私が合流して説明する時間もあると思うから少しは時間あると思うけど……本気でその作戦が行けると思ってるの？」

「まず全員振り切って、この服捨てます。そしてこうすりや顔バレないはずですよ」

フードを深く被るようにして薫の方をむく。口元は見えてしまっ

ているが目元や鼻筋等は覗き込むようにしないと見えなくなっている。また声のトーンも普段より低くすることを心掛けて喋る。

「……その身体で出来るの?」

中に入ろうとする直前に薫が最後の確認をとる。時間が経っているとはいえ、先程の戦闘によるダメージが抜けきついているとは言えず身体の節々から痛みが伴う。

それでも何も言わずに手を上げ無事をアピールしながら階段を上がっていく。

屋上にて一輝の偽物らしき人物が持ってた銃を死体に触れないようにして手に取り隣のビルを見つめる。

「(フード付きので丁度良かったな……んで無いとは思うけど桐生さんや伊達さんの指紋付いてたらヤダから持って……来たか)」

「警察だ!動くな!」

薫とスーツの男を先頭にゾロゾロと現れあつとゆう間に囲まれてしまう。出口の方からまだ足音がすることからまだまだ居るらしい。

「この付近の通報2件ともお前さんだな?ふざけた事しやがって」

「……」

当然竜也は答えず沈黙を貫く。その沈黙の間にも周りの警官たちは竜也を中心として扇形に広がりすぐ捕まえられる距離まで近付く。

近付いた後はスーツの男の指示を待ちながらも竜也から意識を離す事はしない。

「……そんなもんでいいのか?もつと近付けさせた方がいいぜ」

「何が言いてえんだ?」

「(こゆうことだよ)」

後ろを振り向き素早くビルから飛び降りる竜也。警官たちは驚き戸惑うがスーツの男だけは警官たちを押しつけすぐに下に降りた竜也の様子を見る。

そこには隣のビルの飛び出ているふち部分を片手だけで掴み空いている手でガラスを破り中に入っていく竜也の姿が見える。

「…………隣のビルだ！早く追え!!」

スーツの男の怒声が響きまた騒々しい足音が鳴り響く。

「無人なのはラッキーだな」

すぐさまその階の非常口から駆け足で下へと降りる。

「居たぞ！非常階段だ！」

既に警官たちは下で待機していて降りてきた竜也を捕まえようと登ってくる。仕方なく上へと上り直すが通常の出入口から入ってきた警官たちで溢れ返っていた。

「(…！あんま警察相手じゃやりたくねえんだけど……)」

腕を顔の前で交差させ頭から飛び降りる形で警官たちが待機する下へと進む。体勢が倒れたまま顔の前に置いていた腕2本で身体を支え逆立ちの体勢で蹴りを放ち続ける事で、警官が近寄れないようにする。

距離を取り回転力が落ちるまで待機する警官。わずか1m程しか離れていないであろう距離だがまだ回転している事を確認したら少し気を緩めたその一瞬の隙を竜也は見逃さなかった。

まだ回り続けている自分の身体に対して、反対方向に回転をかけるようにして遠心力で起き上がる。フードをすぐに被り直し慌てふためく警官の肩を踏み越えて包囲網を突破する。

「(腰痛った！でもとりあえず抜けた！このまま振り切る!!)」

後ろから警官の声が響くが無視して走り続ける。

「(つくソ建設現場まで行ければ勝ちだったのに!)」

細道や大胆な人混みに紛れるなどして七福通り西まで逃げていた竜也だったがヒルズ建設現場前の公園前に警官が居て入ることかできな。

「…………なあアンタ」

「あ?」

青いジャンパーを着てその下に緩くネクタイを締めている若い男性に声を掛けられる。

「服…ボロボロだけどどうしたんだい？」

「…ちよつと色々あつて」

「さつき向こうの方でも“色々”あつたみたいだけど？」

「…らしいな」

自分の正体を知っているのか不安になる竜也。フードは被ったままなので顔を見られてはいないと思うが安心はできない。

「あの公園に行きたいのか？」

「…ちよつとトイレに行きたくてね」

「なら行けばいい。それとも警官が居ると入れないのか？」

「(…やるしかねえか)」

拳を握り目の前の男性を見つめる。

「沈黙って事はそうゆうことか。なら俺が退かしてきてやるよ。報酬は諭吉2枚な」

「は？どうゆう…おい！」

竜也の疑問を無視して公園前の警官へと向かっていく男性。すると警官はすぐに走り出して何処かに向かつてしまった。

「ほらよ。退かしてきてやったぜ」

「アンタ…何もん？」

「さあねえ。それより早く俺に渡すもん渡してトイレ行ったら？早くしないと戻ってくるぜ」

これ以上何を聞いても無駄だと思った竜也は2万円を渡しすぐに公園へと入っていった。

〜??視点〜

「どうも」

無造作に渡された2万円を受け取り公園前のガードレールに寄りかかり煙草に火をつけ一服する。

「(さてと…後は適当に歩いて本部戻るか)」

吸い終わった煙草を捨て来た道に戻ろうとする男性。すると目の前に先程まで竜也を追い掛けていたスーツの男が現れる。

「お疲れ様です杉内さん。さつき通報があつた事件の犯人もう捕まえたんですか？」

「さっきまで追いかけてた。間違いなくこの近辺に居るはずだ。何か知ってるんじゃないかねえのか？」

「さあ。全く分かんないですね」

「とぼけんじやねえ。この公園前にも配置してた奴は何処行つた？」

「居たんですか？ならどつか行つちやつたみたいですね」

「……公園のトイレ全部調べろ！閉まつてる個室だろうが女子トイレだろうが全部だ!!」

その男の命を皮切りに後ろにいた警官たちがなだれ込むが既に竜也は建設現場に入っており中に入るドアも閉じているためもう見つける事は出来ない。

「じゃあ自分は『警ら』を続けてくるので市民の平和を乱す犯人探しはよろしくお願いしますね」

「おい谷村！」

雑に頭を下げて後ろを振り返ることなく道を戻っていく。

「(さっきのアイツ……ただの犯人にしては服や身体全てボロボロだった。汚したにしてもあそこまでは行かないはず……一課としてはホシとなる人物をあげたいってことだろうけど……)」

「俺は巻き込まれた市民を捕まえる気は無いかな」

……竜也視点……

「ほれ、ただのジャージやけど無いよりはマシやろ」

「ありがとうございます。真島さん」

建設現場に入るとすぐさまビリーに声を掛けて地下にいる真島へと話を通してもらい奥の部屋まで進んでいく。

「それで何があったらそんなボロボロになんねん」

「話すと長いすつけど……」

真島と別れたあとに起きた出来事を簡潔に伝える

「なるほどのう……ただでさえ近江だけでもしんどいつちゆうのにまた別の組織かいな」

「まあ俺はあんま関わってないんで詳しい事は知らないですけどね」

「ほんであの亜門ってヤツにも狙われるとは黒ちゃんも大変やな」

「俺より真島さんのが狙われるべきだと思いますけど……まあ狙って

くるってならそれはそれでいいですけどね」

「ほお…なんでや?」

「おかげさまで最近ちよつとずつ分かるようになってきたもんで…真島さんが桐生さんとかに固執する理由」

「ほお…したら聞こか。なんでやと思う?」

「強いヤツに狙われたり、強いヤツと殺り合う…それではか味わえない一瞬…最高つす…!」

服を着替えながら竜也自身気付いていないが口元に軽い笑みを浮かべながら返事をする。

「ま、及第点やな…とりあえず今はそれでええやろ。それより…近江の動きには目エ凝らしとき。今回の件、ただの東城会と近江の戦争じゃ終わらんで」

「…肝に銘じときます」

真島に感謝を伝えながら最後の言葉を染み込ませながら地上へと戻って行った。

「(危うくトリハダもんやったで…今はまだ大したもんでもないと思つとったけど…意外ともうすぐかもしれんな)」

竜也が居なくなり1人となった地下の奥にて真島の笑い声が地下に響き渡った。

「桐生さん、お疲れ様です。こっち全部終わりました」

河原を出て周りを警戒しながら桐生へと電話をかける。

『竜也か。今どこだ?』

「河原の方まで逃げてきて今は少し下行った駐車場の所です」

『成程…都合がいいな』

「何がですか?」

『まだ一輝達の治療も始まったばかりで病院にいてもすることも無いから【バンナム】で少し整理する事にしたんだ。そこで合流したい。1年前まで【バツカス】だった所だ。俺と伊達さんでもう話してるところもあるから合流でき次第、情報をまた共有しようと思う』

「了解です。なるべく急いでそっち向かいますね」
「(今もう向かってるだろうからさっさと向かうか)」